



Oracle® Business Intelligence Infrastructure インストレーション および構成ガイド

リリース 10.1.3.2.1
2007 年 6 月

Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド, リリース 10.1.3.2.1

部品番号 : E05414-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Infrastructure Installation and Configuration Guide, Version 10.1.3.2.1

原本部品番号 : B31765-03

Copyright © 2007, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとし、著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

第 1 章： このリリースの新機能

第 2 章： Oracle BI Infrastructure のインストールおよび構成に関する章

- Oracle BI のインストールおよび構成に関する章で扱う内容 16
- インストールおよび構成に関する章の編成 17
- ファイル・パスとコマンドの表記規則 18
 - パスの表記規則 18
 - パス・ナビゲーションの表記規則 19
 - コマンド実行の表記規則 19
- Oracle Business Intelligence のドキュメントへのアクセス 20

第 3 章： Oracle BI Infrastructure のインストール・オプション

- Oracle BI のコンポーネントのインストール・オプション 22
- 他の Oracle BI コンポーネント 25
- Oracle BI のコンポーネントの再インストールについて 26
- Oracle BI のインストール・タイプ：「Basic」と「Advanced」 26
- Web アプリケーション・サーバーへのデプロイメント 27
 - Oracle Application Server への Oracle BI のデプロイ 27
 - その他の Web サーバーへの Oracle BI のデプロイ 28

第 4 章： Oracle Business Intelligence のインストールの準備

- インストール計画のプロセス 30
- Oracle BI Infrastructure のコンポーネントをインストールするためのロードマップ 31
- Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ 31
 - Oracle BI Infrastructure デプロイメントのダイアグラム 31
- Oracle BI のインストール要件 34
- 適切な権限の取得 34
- サード・パーティ製品のインストール 35
- 「Basic」インストール・タイプでのインストール要件 36
 - Java プラットフォームのバージョンについて 37

UNIX 環境での Java SDK の検出	37
Java プラットフォームのインストールを書込み可能にする	37
「Advanced」インストール・タイプでのインストール要件	38
Oracle Application Server のバージョンについて	38
Oracle Application Server のコンポーネントについて	38
Oracle Application Server のインストールを書込み可能にする	38
Windows でのインストール要件	39
Windows での Microsoft Data Access Components のインストール	39
すべての UNIX プラットフォームでのインストール要件	41
Oracle BI を UNIX にインストールする際の制限	42
UnixChk.sh スクリプトの実行	43
UNIX でサポートされる Oracle Business Intelligence コンポーネント	44
64 ビットの UNIX システムへの Oracle Business Intelligence のデプロイ	44
Solaris でのインストール要件	45
HP-UX でのインストール要件	45
IBM AIX 用の Oracle BI Server の環境変数	46
Linux でのインストール要件	47
UNIX でのインストール・ファイルのダウンロード	48
UNIX でのリポジトリの構成	48

第 5 章： Oracle BI EE Infrastructure のインストール

Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス	50
Oracle BI インストーラの設定タイプの選択	50
Windows での Oracle BI インストーラの実行	51
Oracle BI グラフィック・モードでのインストーラの画面とプロンプト (Windows)	52
Oracle BI 全体をコンソール・モードでインストールする場合に表示されるプロンプト (Windows)	56
UNIX での Oracle BI インストーラの実行	57
Oracle BI 全体をグラフィック・モードでインストールする場合に表示される画面とプロンプト (UNIX)	58
Oracle BI 全体をコンソール・モードでインストール場合に表示されるプロンプト (UNIX)	61
複数のマシンへの Oracle BI コンポーネントのインストール	61
Oracle Business Intelligence インストールの初期化	62
Windows での Oracle BI の初期化	62
UNIX での Oracle BI の起動	62

Oracle BI Client と Oracle BI Server のインストール後のテスト	63
Oracle BI Server インストール後のテスト	63
Oracle BI Client インストール後のテスト	64
無人（サイレント）モードでの Oracle BI のインストール	65
Oracle BI のサイレント・モードでのインストール（Windows）	65
レスポンス・テキスト・ファイルの作成	65
複数のマシンへの Oracle BI のサイレント・インストール	66
Oracle BI のサイレント・モードでのインストール（UNIX）	68

第 6 章： Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール

他の Oracle BI コンポーネントのインストール	70
Disconnected Client のインストールと構成	70
Disconnected Client に関する Oracle BI Server の追加要件	71
Disconnected Client のインストール	71
Disconnected Client をサイレント・モードで実行するように設定	74
Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール	74
Briefing Book Reader のインストール	75
Briefing Books での権限のリストア	76
Oracle BI Office Plug-In のインストール	77
Oracle BI Open Intelligence Interface のインストール	78
Open Intelligence Interface インストーラの画面とプロンプト	79
Oracle BI の補助サーバー・プログラムのインストール	80
Oracle BI Publisher Desktop のインストール	81
Oracle BI Publisher Desktop の起動	82
Oracle BI のコンポーネントのアンインストール	82
Business Intelligence のフォルダおよびファイルのバックアップ	82
Windows での Oracle BI のアンインストール	84
UNIX での Oracle BI のアンインストール	84

第 7 章： Oracle BI プロセスの構成

Oracle BI のサービスおよびプロセスでの作業	86
Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動	86
Windows での Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動	87
UNIX での Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動	88
UNIX での JavaHost サービスの起動と停止	92
JavaHost サービスの構成	93

OC4J プロセスの起動と停止	97
OC4J プロセスの起動	97
OC4J プロセスの停止	98
OC4J プロセスの再起動	98
サーバー構成設定の更新	98
Oracle BI Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルの更新	99
Oracle BI Server の NQSCONFIG.INI ファイルの更新	100
Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新	100
Oracle Application Server Control を使用した構成ファイルの変更	101
JConsole を使用した構成ファイルの変更	102
Oracle BI Server のローカライズについて	104
Oracle BI のデモ・リポジトリのセキュリティについて	104

第 8 章： Oracle Business Intelligence 用データソースの構成

Oracle BI データベース設定の変更のプロセス	106
UNIX でのデータベース設定スクリプトの検出	107
Oracle BI のデータベース・タイプの変更	109
データソースとしてのネイティブ・データベースの構成	110
Oracle BI のデータベース接続プール設定の変更	111
UNIX でのデータベース接続プール設定の変更について	111
初期化ブロックの構成について	111
UNIX での Oracle BI の ODBC データソースの構成	112
UNIX における Oracle BI Server での Oracle データベースの構成	114
Solaris 用の ORACLE_HOME 変数の設定	114
Oracle クライアントでの HP-UX の構成	115
Windows での Oracle BI Server 用の Oracle データベースの構成	115
UNIX での DB2 Connect の構成	117
UNIX での Oracle BI 用 Teradata データソースの構成	118
ネイティブ・データベースでの行数の更新について	120

第 9 章： Oracle BI Presentation Services の構成

異なるマシン上での Oracle BI Presentation Services および Oracle BI Server の構成	122
HTTP Web サーバーの構成	123
web.xml ファイルの編集	123

Oracle BI Presentation Services 用の WAR ファイルの作成	124
WAR ファイルのデプロイ	125
ISAPI プラグインの構成	126
Oracle BI Presentation Services のテスト	127
複数のリポジトリにアクセスするように Oracle BI Presentation Services を構成	128
4000 を超えるユーザー用の Presentation Catalog の構成	128
Oracle BI Presentation Services 用の BI Publisher の構成	129

第 10 章：Oracle Business Intelligence Scheduler の構成

Oracle BI Scheduler のコンポーネントと機能	132
Oracle BI Scheduler テーブルについて	133
Oracle BI Scheduler の構成のプロセス	133
Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成	134
特定のデータベース用 Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成	134
Oracle BI Scheduler 用データベースの構成	135
Oracle BI Scheduler テーブルの名前の変更	137
Oracle BI Scheduler 構成オプションの設定	137
Oracle BI Scheduler 管理者について	138
Oracle BI Scheduler の構成	138
Windows での Oracle BI Scheduler の構成	139
UNIX での Oracle BI Scheduler の構成	139
Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成	140
Presentation Services 構成ファイルにおける Scheduler ホストとポートの指定	140
Oracle BI Presentation Services 資格証明ストアへの Scheduler 管理者資格証明の追加	142
資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成	145

第 11 章：BI Publisher レポート・ツールの構成

BI Publisher を構成するためのロードマップ	148
BI Publisher の要件	149
BI Publisher のコンポーネント	150
Oracle BI Publisher Desktop	150
OC4J のメモリー割当て	151
他の J2EE アプリケーション・サーバーによる BI Publisher のデプロイ	151
BI Publisher の起動と停止	152
XMLP サーバー用の BI Publisher の構成	152

Oracle BI における BI Publisher の組み込み	154
Presentation Services の構成ファイルにおける BI Publisher 設定の構成	155
Oracle BI Presentation Services 資格証明ストアへの Publisher 管理者資格証明の追加	157
資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成	159
スケジューラ用の BI Publisher の構成	160
BI Publisher デモ・レポートの実行	162
デモ・ファイルの構成	162
デモ・データソースの構成	162

付録 A: NQSCONFIG.INI ファイルの参照

Oracle BI Server の構成初期化ファイルの場所	166
Oracle BI 構成ファイルのパラメータのルール	166
Oracle BI 構成ファイル・パラメータのエントリの変更	166
Oracle BI 構成ファイルのパラメータと構文	167
構成ファイルの Repository セクションのパラメータ	168
構成ファイルの Query Result Cache セクションのパラメータ	168
構成ファイルの General セクションのパラメータ	173
Oracle Business Intelligence のパフォーマンスへの SIZE パラメータの影響	178
構成ファイルの Security セクションのパラメータ	180
構成ファイルの Server セクションのパラメータ	183
構成ファイルの Dynamic Library セクションのパラメータ	191
構成ファイルの User Log セクションのパラメータ	192
構成ファイルの Usage Tracking セクションのパラメータ	192
構成ファイルの Optimization Flags セクションのパラメータ	197
構成ファイルの Cube Views セクションのパラメータ	197
構成ファイルの MDX Member Name Cache セクションのパラメータ	199
構成ファイルの Oracle Dimension Export セクションのパラメータ	200

付録 B: Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ

Oracle BI Server コンポーネントのローカライズ	204
Oracle BI チャート用 Unicode サポートの構成	205
チャート・フォントの変換	205
チャート・イメージ・サーバーへの変換済フォントの追加	206
チャート・テンプレート・ファイルへのフォントの追加	206

チャート・イメージ・サーバーへの変換済追加フォントの追加	207
Oracle BI 用ローカライゼーション変数の変更	209
UNIX でのロケール・パラメータの設定	209
同一言語の表示のための Oracle BI と業務系アプリケーションの構成について	211
AIX で日本語ローカライゼーションを行うための構成ファイル設定の変更	212
Oracle BI 用翻訳テーブルのメンテナンスのプロセス	213
ローカライゼーション用 Externalize Strings ユーティリティの使用	213
Web Catalog 文字列の翻訳について	214
WEBLANGUAGE セッション変数について	214

索引

1

このリリースの新機能

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition は、以前 Siebel Systems 社が Siebel Business Analytics Platform として販売していたコンポーネントで構成されており、そこに大幅な機能拡張がいくつか実施されています。

『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』は、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のドキュメント・セットの一部です。

注意：このマニュアルでは、Oracle Business Intelligence *Enterprise Edition* の略称として、Oracle Business Intelligence EE、Oracle Business Intelligence および Oracle BI を使用します。

このマニュアルでは、実証済のオペレーティング・システム・プラットフォームおよびデプロイメントへの、Oracle Business Intelligence のインフラストラクチャ・コンポーネントまたはプラットフォーム・コンポーネントのインストールおよび構成について説明しています。またこのマニュアルには、新しい記述と、以前は『Siebel Analytics Platform Installation and Configuration Guide』というタイトルで公開されていた記述が含まれます。

Oracle BI Infrastructure をインストール、使用またはアップグレードする前に、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のリリース・ノートに目を通すことをお勧めします。Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のリリース・ノートは、次の場所にあります。

- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の CD-ROM
- Oracle Technology Network (http://www.oracle.com/technology/documentation/bi_ee.html)
(Oracle Technology Network の無料アカウントを登録するには、<http://www.oracle.com/technology/about/index.html> にアクセスしてください)

『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』に記述された新機能

表 1 に、Oracle Application Server 10g リリース 3 をサポートするために、このリリースのドキュメントに記述された変更内容を一覧表示します。

表 1. 『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』に記述された製品の新機能

項	説明
<ul style="list-style-type: none"> ■ 「すべての UNIX プラットフォームでのインストール要件」 (41 ページ) ■ 「HP-UX でのインストール要件」 (45 ページ) ■ 「IBM AIX 用の Oracle BI Server の環境変数」 (46 ページ) ■ 「Linux でのインストール要件」 (47 ページ) ■ 「UNIX での Oracle BI インストーラの実行」 (57 ページ) ■ 「Oracle BI 全体をグラフィック・モードでインストールする場合に表示される画面とプロンプト (UNIX)」 (58 ページ) ■ 「Oracle BI 全体をコンソール・モードでインストール場合に表示されるプロンプト (UNIX)」 (61 ページ) 	Oracle Business Intelligence を UNIX プラットフォームにインストールできます。
<ul style="list-style-type: none"> ■ 「Windows での Oracle BI インストーラの実行」 (51 ページ) ■ 「Oracle BI Publisher Desktop のインストール」 (81 ページ) ■ 第 11 章「BI Publisher レポート・ツールの構成」 	Oracle Business Intelligence インストーラによって、Oracle Business Intelligence のレポート機能を拡張した Oracle BI Publisher がインストールされます。
「Oracle BI のインストール・タイプ: 「Basic」と「Advanced」」 (26 ページ)	Oracle Business Intelligence Suite EE インストーラが、次のインストール・タイプを実行できるようになりました。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Basic ■ Advanced

表 1. 『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』に記述された製品の新機能

項	説明
<p>NQSConfig.INI ファイルの新しい構成パラメータは次のとおりです。</p> <p>USE_ADVANCED_HIT_DETECTION</p> <p>MAX_SUBEXPR_SEARCH_DEPTH</p> <p>GLOBAL_CACHE_STORAGE_PATH</p> <p>MAX_GLOBAL_CACHE_ENTRIES</p> <p>CACHE_POLL_SECONDS</p> <p>CLUSTER_AWARE_CACHE_LOGGING</p> <p>SSL</p> <p>SSL_CERTIFICATE_FILE</p> <p>SSL_PRIVATE_KEY_FILE</p> <p>SSL_PK_PASSPHRASE_FILE</p> <p>SSL_PK_PASSPHRASE_PROGRAM</p> <p>SSL_VERIFY_PEER</p> <p>SSL_CA_CERTIFICATE_DIR</p> <p>SSL_CA_CERTIFICATE_FILE</p> <p>SSL_TRUSTED_PEER_DNS</p> <p>SSL_CERT_VERIFICATION_DEPTH</p> <p>SSL_CIPHER_LIST</p>	<p>新しい構成パラメータは次の各セクションにあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Query Result Cache ■ Security
<p>「Oracle Business Intelligence のドキュメントへのアクセス」(20 ページ)</p>	<p>「Oracle Business Intelligence Enterprise Edition (10.1.3.2) へようこそ」という Web ページが追加されました。これはソフトウェアのインストール先と同じ場所にインストールされます。この Web ページには、Oracle Business Intelligence に関連する各種の Oracle ドキュメントへのリンクが用意されています。</p>

2

Oracle BI Infrastructure のインストールおよび構成に関する章

この章では、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』で扱う範囲について、次の各項で説明します。

このマニュアルで扱う範囲、およびこのマニュアルの使用に関する項は次のとおりです。

- 「Oracle BI のインストールおよび構成に関する章で扱う内容」(16 ページ)
- 「インストールおよび構成に関する章の編成」(17 ページ)
- 「ファイル・パスとコマンドの表記規則」(18 ページ)

Oracle Business Intelligence のドキュメントについての一般的な情報に関する項は次のとおりです。

- 「Oracle Business Intelligence のドキュメントへのアクセス」(20 ページ)

Oracle BI のインストールおよび構成に関する章で扱う内容

この項では、このマニュアルで扱う範囲について説明します。

このマニュアルで説明するプロセス

このマニュアルでは、次の全般的なプロセスについて説明しています。

- Oracle Business Intelligence をデプロイするためのオペレーティング・システムの設定。
「インストール計画のプロセス」、特に「Oracle BI のインストール要件」(34 ページ) を参照してください。
- Oracle Business Intelligence のインストール・ウィザードの実行。次の項を参照してください。
 - 「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントをインストールするためのロードマップ」(31 ページ)
 - 「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」(50 ページ)
- 具体的なデプロイメントに適した様々な Oracle Business Intelligence サーバーの構成。次の項または章を参照してください。
 - 「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」(31 ページ)
 - 「Oracle BI プロセスの構成」(85 ページ)
 - 「Oracle Business Intelligence 用データソースの構成」(105 ページ)
 - 「Oracle BI Presentation Services の構成」(121 ページ)
 - 「Oracle Business Intelligence Scheduler の構成」(131 ページ)
- 特殊なインストール、レポート、ローカライゼーションなど、プラットフォームのオプション構成に関するトピック。
次の章を参照してください。
 - 第 6 章「Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール」
 - 第 11 章「BI Publisher レポート・ツールの構成」
 - 付録 B「Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ」

このマニュアルで扱わない内容

このマニュアルでは、次の内容については説明していません。

- ファイアウォールを越えた、クラスタ化の使用によるネットワーク全体での Oracle Business Intelligence のデプロイ。
『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
- Oracle Business Intelligence のリポジトリの構成。
『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。
- Oracle Business Intelligence Presentation Services Web Catalog。
『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。
- データ・ウェアハウスの構成および管理（セキュリティ設定を含む）。
『Oracle Business Intelligence Applications Installation and Configuration Guide』を参照してください。

- Oracle Siebel Customer Relationship Management アプリケーションとともに動作できることを目的とした Oracle Business Intelligence の構成（セキュリティ設定を含む）。『Oracle Business Intelligence Applications Installation and Configuration Guide』を参照してください。
- Business Intelligence のプラットフォーム・コンポーネントのアップグレード。『Oracle Business Intelligence Infrastructure アップグレード・ガイド』を参照してください。

ヒント： Enterprise Edition の完全インストールに必要となるマニュアルはすべて、「Oracle Business Intelligence のドキュメントへのアクセス」（20 ページ）に一覧表示されています。

インストールおよび構成に関する章の編成

インストール・プロセスを進めるには、「... の準備」と「... のインストール」の各章にあるロードマップおよびプロセスに関する項を参照してください。これらの項には、インストールの実行に必要な手順を実際の順序どおりにまとめたチェックリストがあります。それぞれの手順には、その手順の実行方法を説明した項へのリンクが含まれています。『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』のその他の章は、インストールの主なコンポーネントごとにまとめられています。

各章の項の順序は次のとおりです。

- 章に含まれる主な項のリスト。
- **ロードマップに関する項。** ロードマップとは、プロセスに番号を付けたリストです。
たとえば、「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」は、Oracle Business Intelligence のインストールに必要なプロセスのリストで、各プロセスの実行順序に従って番号が付けられています。
- **プロセスに関する項。** プロセスに関する項は、いくつかのタスクと一般的な結果で構成されています。
たとえば、「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」には、Oracle Business Intelligence のインストールに必要なタスクが一覧表示されています。ただし、デプロイメントによっては不要なタスクもあります。これらの項の見出しは、（常にではありませんが）「... のプロセス」で終わるのが普通です。
- **タスクに関する項。** タスクに関する項では、インストールまたは構成のプロセスにおける各手順の実行方法について説明しており、通常はさらに具体的な手順も記載しています。
- **概要に関する項。** インストールの各部分の機能概要および背景情報については、概要に関する項を参照してください。
これらの項の見出しは、「... について」で終わるのが普通です。たとえば、「Oracle BI シェル・スクリプト」のようになります。概要に関する項の見出しは、「... のプロセス」や「... するためのロードマップ」では終わりません。

注意： 各章の項は、インストール中に実行する順序どおりになっていない場合があります。

ファイル・パスとコマンドの表記規則

『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストールおよび構成ガイド』全体を通じて、ファイル・パスには、環境変数とパスのプレースホルダを使用します。この項では、このマニュアルで使用するパス、ナビゲーションおよびコマンド実行の表記規則を示します。

- 「パスの表記規則」(18 ページ)
- 「パス・ナビゲーションの表記規則」(19 ページ)
- 「コマンド実行の表記規則」(19 ページ)

パスの表記規則

次に示すパス名の表記規則は、Windows および UNIX (Linux を含む) オペレーティング・システム上の Oracle Business Intelligence Server によって使用されます。

- Oracle BI のインストール・ディレクトリの絶対パスは **OracleBI_HOME** です。
- Oracle BI のデータ・ディレクトリ・ファイルの絶対パスは **OracleBIData_HOME** です。

Oracle Business Intelligence をインストールすると、インストール・スクリプトによって、ドライブおよびインストール・ディレクトリへのパスが問い合わせられます。次に、そのドライブおよびパスに Oracle BI がインストールされます。

Windows システムの例

インストール・ディレクトリにドライブ D: を指定した場合、パスは次のようになります。

- OracleBI_HOME は D:¥OracleBI
- OracleBIData_HOME は D:¥OracleBIData

UNIX システムの例

インストール・ディレクトリに /usr/local を指定した場合、パスは次のようになります。

- OracleBI_HOME は /usr/local/OracleBI
- OracleBIData_HOME は /usr/local/OracleBIData

注意: UNIX システムでは、Oracle BI インストールに必要なこの環境変数、および他の環境変数がファイル sa-init.sh に定義されています。Oracle BI の設定スクリプトにより、このシェル・スクリプトの環境変数の定義が設定されます。このファイルは編集または削除しないでください。

ヒント: UNIX オペレーティング・システムのすべてのバージョンでは、大文字と小文字が区別されます。UNIX 上で Oracle Business Intelligence を実行している場合は、製品内で別の方法を指示されている場合を除き、ファイル名、ディレクトリ名、パス名、パラメータ、フラグおよびコマンドライン・コマンドをすべて小文字で処理してください。現在 Windows でデプロイメントを実行しているけれども、今後 UNIX 環境に切り替えるか UNIX サーバーをデプロイする可能性がある場合は、この同じ操作方法に従って、名前を後から変更する必要がないようにしてください。

パス・ナビゲーションの表記規則

指定したディレクトリへの移動に要求される手順を次に示します。

Windows オペレーティング・システム

- 1 コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
- 2 ディレクトリ変更コマンドの `cd` を使用して、指定したディレクトリを現在のディレクトリに変更します。

注意：ディレクトリに移動する際には、Windows のエクスプローラは使用しないでください。

`cd` コマンドのヘルプを表示するには、コマンド・プロンプト・ウィンドウで「help」と入力して [Enter] キーを押します。

UNIX オペレーティング・システム

- シェル・ウィンドウで、指定したディレクトリを現在のディレクトリにします。

コマンド実行の表記規則

コマンドの実行に要求される手順を次に示します（別の方法を指示されている場合を除く）。

Windows オペレーティング・システム

- 1 コマンド・プロンプト・ウィンドウで、現在のディレクトリに間違いがないことを確認します。
- 2 コマンドを入力します。

注意：コマンドを実行する際には、「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」ウィンドウでは入力しないでください。

UNIX オペレーティング・システム

- 1 Oracle BI の実行可能ファイルを、Korn、Bourne または bash シェルで実行します。

注意：コマンドラインの手順を実行する前に、まず `sa.sh` をソースにします。これにより、Oracle BI 実行可能プログラムの実行に必要な環境変数が設定されます。
- 2 シェル・ウィンドウで次の手順を実行します。
 - 現在のディレクトリに間違いがないことを確認します。
 - `sa.sh` スクリプトをソースにします。
 - コマンドを入力します。

Oracle Business Intelligence のドキュメントへのアクセス

この項では、相互参照されるマニュアルを一覧表示します。Oracle エンタープライズ・アプリケーションのインストール、構成および使用に全般的に該当するマニュアルは、Oracle Technology Network に一覧表示されています。

このソフトウェアの使用に関する概要、リンクおよびチュートリアルは、ソフトウェアをインストールしたドライブにある「Oracle Business Intelligence Enterprise Edition (10.1.3.2) へようこそ」という Web ページにアクセスしてください。ファイル名は `OracleBI_HOME/index_bi_ee.html` です。

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の関連マニュアルのタイトルは次のとおりです。

- 『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』
- 『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』
- 『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』
- 『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』

Oracle Business Intelligence のドキュメントへのアクセス

これらのマニュアルは、Oracle Technology Network にある Oracle Business Intelligence アプリケーションのオンライン・ドキュメント・ライブラリから入手できます。次の手順では、Oracle ドキュメントにアクセスする方法について説明します。

Oracle Business Intelligence のドキュメントにアクセスするには

- 1 Technology Network にログオンします (URL は次のとおり)。
`http://www.oracle.com/technology/index.html`
- 2 「Documentation」タブをクリックします。
- 3 見出し「Middleware」の下に小見出し「Data Warehousing and Business Intelligence」があります。
この小見出しで、リンク「Oracle Business Intelligence」をクリックします。
- 4 「Oracle Business Intelligence Documentation」ページの「Part Number」列または「Description」列で、目的のマニュアルを見つけ、対応する PDF または HTML のリンクをクリックします。

さらに、Informatica などのサード・パーティのドキュメントが、(このリリースの CD-ROM に付属している) Oracle Siebel Enterprise ファミリー・アプリケーションの Third-Party Bookshelf の CD-ROM に用意されています。

3

Oracle BI Infrastructure の インストール・オプション

Oracle Business Intelligence を実際にどうデプロイするかは、製品のデプロイメントに関連するいくつかの考慮事項によって異なります。これらのデプロイメント・オプションは次の各項で説明します。

- 「Oracle BI のコンポーネントのインストール・オプション」 (22 ページ)
- 「他の Oracle BI コンポーネント」 (25 ページ)
- 「Oracle BI のコンポーネントの再インストールについて」 (26 ページ)
- 「Oracle BI のインストール・タイプ: 「Basic」と「Advanced」」 (26 ページ)
- 「Web アプリケーション・サーバーへのデプロイメント」 (27 ページ)
 - 「Oracle Application Server への Oracle BI のデプロイ」 (27 ページ)
 - 「その他の Web サーバーへの Oracle BI のデプロイ」 (28 ページ)

ヒント: デプロイメントに会社全体のセキュリティ機能、クラスタ化およびロード・バランシングがある場合は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』も参照してください。

Oracle BI のコンポーネントのインストール・オプション

Oracle Business Intelligence Infrastructure は、Oracle Business Intelligence アプリケーションの構築に使用される各種のサーバー、プログラムおよびツールで構成されています。

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 製品に付属するインストーラ・プログラムでは、Oracle BI スイート全体、または Oracle BI 製品の 1 つ以上のコンポーネントをインストールできます。

注意：このマニュアルは、Oracle Business Intelligence Infrastructure のコンポーネントのみのインストールを対象としています。Oracle Business Intelligence Applications のコンポーネントをインストールするには、『Oracle Business Intelligence Applications Installation and Administration Guide』を参照してください。

25 ページの表 3 に、Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを示します。ここには、それらをインストールするインストーラ・ウィザードのオプションも記載しています。

注意：インストール・オプションは、インストーラでは「Setup Type」と呼びます。

インストールを開始する前に、インストール・オプションそれぞれの構成設定を決定する必要があります。構成設定は、CD の中で、次に示すインストール設定フォルダにあります。

- %Server%\Oracle_Business_Intelligence\Config\OracleBI_HOME
- %Server%\Oracle_Business_Intelligence\Config\OracleBIData_HOME

次に示す具体的なインストール・タイプについては、このマニュアルに追加の項が用意されています。

- リモート接続されているラップトップ・コンピュータのみに ODBC クライアントをインストール
次の項も参照してください。

- 「Oracle BI Open Intelligence Interface のインストール」(78 ページ)

- 英語以外の言語でのデプロイメント

付録 B 「Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ」も参照してください。

- Oracle BI Publisher レポート・ツール

Oracle BI Publisher は、インストーラで選択した内容に応じて、スタンドアロンの OC4J または Oracle Application Server にデプロイされます。ただし、BI Publisher は、Tomcat や Websphere など、他の J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイすることもできます。Oracle BI EE インストーラの CD-ROM またはネットワークに、ファイル xmlpserver.ear および xmlpserver.war があります。格納されている場所は次のとおりです。

Server_Ancillary\Oracle_Business_Intelligence_Publisher\generic\xmlpserver.war

Server_Ancillary\Oracle_Business_Intelligence_Publisher\oc4j\xmlpserver.ear

第 11 章 「BI Publisher レポート・ツールの構成」も参照してください。

最後に、ネットワーク全体または会社全体でデプロイする場合は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

表 2. Oracle BI Infrastructure の設定タイプおよびそのコンポーネント

設定タイプ	インストールする Oracle BI コンポーネント	注意
Complete	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Business Intelligence Server ■ Oracle Business Intelligence Presentation Services ■ Oracle Business Intelligence Presentation Services Plug-in ■ Oracle Business Intelligence Scheduler ■ Oracle Business Intelligence Administration Tool* ■ Oracle Business Intelligence Cluster Controller ■ Oracle Business Intelligence Client ■ Oracle Business Intelligence ODBC Driver* ■ Oracle Business Intelligence JDBC Driver ■ Oracle Business Intelligence Systems Management ■ Oracle Business Intelligence Catalog Manager* ■ Oracle Business Intelligence Job Manager* ■ Oracle Business Intelligence Publisher 	*Windows オペレーティング・システムでのみ使用可能
Oracle Business Intelligence Server	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Business Intelligence Server ■ Oracle Business Intelligence Scheduler ■ Oracle Business Intelligence Administration Tool* ■ Oracle Business Intelligence Cluster Controller ■ Oracle Business Intelligence Job Manager* ■ Oracle Business Intelligence Systems Management ■ Oracle Business Intelligence ODBC Driver* ■ Oracle Business Intelligence JDBC Driver ■ Oracle Business Intelligence Client 	*Windows オペレーティング・システムでのみ使用可能 この表の下に記載されている、DAC に関する注意も参照してください。

表 2. Oracle BI Infrastructure の設定タイプおよびそのコンポーネント

設定タイプ	インストールする Oracle BI コンポーネント	注意
Oracle Business Intelligence Presentation Services	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Business Intelligence Catalog Manager* ■ Oracle Business Intelligence Presentation Services ■ Oracle Business Intelligence Presentation Services Plug-in ■ Oracle Business Intelligence ODBC Driver* ■ Oracle Business Intelligence Systems Management ■ Oracle Business Intelligence Client 	*Windows オペレーティング・システムでのみ使用可能
Oracle Business Intelligence Client Tools 注意： ODBC Driver は単体でインストールできます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Business Intelligence Administration Tool* ■ Oracle Business Intelligence Client ■ Oracle Business Intelligence Job Manager* ■ Oracle Business Intelligence Catalog Manager* ■ Oracle Business Intelligence ODBC Driver* ■ Oracle Business Intelligence JDBC Driver 	*Windows オペレーティング・システムでのみ使用可能
Oracle Business Intelligence Disconnected Client	Oracle Business Intelligence Disconnected Client	この設定タイプは Windows オペレーティング・システムでのみ使用可能
Oracle Business Intelligence Publisher	Oracle Business Intelligence Publisher	
Custom	前述のコンポーネントすべてを個別に選択できます。	

注意： DAC（データ・ウェアハウス管理コンソール）のサーバーおよびクライアントは、Oracle BI インストーラからは削除されています。これらのコンポーネントは、Oracle Business Intelligence Applications をインストールする場合にのみインストールできます。

他の Oracle BI コンポーネント

表 3 に一覧表示した、前述以外のコンポーネントは、メインのインストーラ・ウィザードには入っていません。これらのコンポーネントは、「[Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール](#)」(74 ページ) で説明します。

注意: すべてのプラットフォームにすべてのコンポーネントをデプロイできるわけではありません。プラットフォーム固有のサポート情報については、Oracle Technology Network にある『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』をダウンロードするには、「[Oracle Business Intelligence のドキュメントへのアクセス](#)」(20 ページ) を参照してください。

表 3. ウィザードではインストールされない他の Oracle BI コンポーネント

コンポーネント	インストールに際しての注意
Oracle BI Publisher Desktop	Windows ベースの設計ツールで、Oracle BI Publisher のレイアウトを作成できます。
Oracle BI Open Intelligence Interface	Oracle BI ODBC インタフェースのみ。メイン・インストーラでインストールされる Oracle BI ODBC インタフェースに似ていますが、フットプリントはこちらのほうが小さくなっています。
Oracle BI Office Plug-In	Oracle BI Office Plug-In は、Oracle BI Presentation Services の下位にある Windows アプリケーションです。これには専用のインストーラが必要です。 「Oracle BI Office Plug-In のインストール」 (77 ページ) を参照してください。
Oracle BI Briefing Book Reader	Windows アプリケーションで、オフラインでのレビューに備えて、静的およびリンクされたダッシュボード・コンテンツを保存する手段になります。
Oracle BI Disconnected Client	Oracle BI Disconnected Client をインストールする場合は、Oracle Business Intelligence Server をインストールしたマシンとは別のマシンにインストールする必要があります。Oracle BI Disconnected Client の設定については、『Oracle Business Intelligence Disconnected Administration and Configuration Guide』を参照してください。

Oracle BI のコンポーネントの再インストールについて

Oracle Business Intelligence がすでにインストールされている場合は、インストール・ウィザードで、次のオプションのいずれかを選択するように要求されます。

- Keep User Modified Configurations
 - Oracle Business Intelligence の再インストールまたはアップグレード時に構成ファイルの内容を保存するには、オプション「Keep User Modified Configurations」を選択します。
- Reset Configurations
 - 構成ファイルの内容をデフォルト値に戻すには、オプション「Reset Configurations」を選択します。

Oracle BI のインストール・タイプ: 「Basic」と「Advanced」

インストール時にインストール・タイプを選択するように要求されます。インストーラの「Installation Type」画面で、Oracle BI をデプロイする Web サーバーのタイプに基づいて選択します。

注意: Oracle BI のコンポーネント (Oracle BI Server など) とともにインストールされる Systems Management コンポーネントをデプロイする場合は、アプリケーション・サーバーも必要になります。「[Web アプリケーション・サーバーへのデプロイメント](#)」(27 ページ) を参照してください。

「Basic」インストール・タイプ

- 次のいずれかに該当する場合は、「Basic」インストール・タイプを選択します。
 - Oracle Business Intelligence 製品を評価している。
 - Web サーバーが Oracle Application Server 以外の J2EE アプリケーション・サーバーである。
- 「Basic」インストール・タイプの要件と動作を次に示します。
 - Oracle BI インストーラを実行する前に、Java 2 Platform, Standard Edition 5.0 (J2SE 5.0) 以上をインストールする必要があります。
 - デフォルトでは、パスワード・セキュリティは有効になっていません。つまり、NQSCONFIG.INI ファイルの MINIMUM_PASSWORD_LENGTH パラメータは 0 に設定されています。
 - Microsoft IIS がインストールされている場合は、Presentation Services および Presentation Services Plug-in をスタンドアロンの Oracle Containers for J2EE (OC4J) または Microsoft IIS のいずれかにデプロイする選択肢が提供されます。
 - Systems Management、Presentation Services、Presentation Services Plug-in および BI Publisher は、Oracle Containers for J2EE (OC4J) にデプロイされます。「[その他の Web サーバーへの Oracle BI のデプロイ](#)」(28 ページ) を参照してください。
 - リポジトリ (paint.rpd)、プレゼンテーション・カタログおよび XML データソースが格納された、デモ用のアプリケーションがインストールされます。

「Advanced」インストール・タイプ

- Oracle Application Server に Oracle BI をデプロイする場合は、「Advanced」インストール・タイプを選択します。

注意：リリース 10.1.3.1.0 以上の Oracle Application Server を使用する必要があります。

- 「Advanced」インストール・タイプの要件と動作を次に示します。
 - Oracle Business Intelligence を Oracle Single Sign-On とリンクするように計画します。
 - より高いレベルでセキュリティ設定が適用されます。つまり、NQSSConfig.INI ファイルの MINIMUM_PASSWORD_LENGTH パラメータが 8 に設定されています。
 - Microsoft IIS がインストールされている場合は、Presentation Services および Presentation Services Plug-in を Oracle Application Server または Microsoft IIS のいずれかにデプロイする選択肢が提供されます。
 - Systems Management、Presentation Services、Presentation Services Plug-in および BI Publisher は、Oracle Application Server にデプロイされます。[「Oracle Application Server への Oracle BI のデプロイ」\(27 ページ\)](#) を参照してください。
 - リポジトリ (paint.rpd)、プレゼンテーション・カタログおよび XML データソースが格納された、デモ用のアプリケーションがインストールされます。

Web アプリケーション・サーバーへのデプロイメント

[「Oracle BI のインストール・タイプ：「Basic」と「Advanced」\(26 ページ\)](#) も参照してください。

Oracle Application Server への Oracle BI のデプロイ

「Advanced」インストールを実行する場合は、Oracle Business Intelligence インストーラを実行する前に、Oracle Application Server (リリース 10.1.3.1.0 以上) をインストールしておく必要があります。

- 「Advanced」インストール・タイプを選択します。
- インストールするコンポーネントを選択したら、Oracle Application Server の場所 (ORACLE_HOME) を入力するように要求されます。

Oracle Application Server の次のコンポーネントが必要です。

- Oracle HTTP Server
- Oracle Containers for J2EE (OC4J)
- Oracle Process Manager and Notification Server

注意：Oracle Business Intelligence Enterprise Edition をインストールした後で Oracle HTTP Server を使用しないことにした場合は、インストール後に Oracle Application Server の Oracle HTTP Server を無効にします。

その他の Web サーバーへの Oracle BI のデプロイ

Oracle Application Server を Web サーバーとして使用しない場合は、この項を使用してください。

- Microsoft Internet Information Services (IIS) の場合は、「[Oracle BI Presentation Services および Plug-in を Microsoft IIS にデプロイするには](#)」(28 ページ) に示す手順に従ってください。
- J2EE アプリケーション・サーバーの場合は、「[Oracle BI を J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイするには](#)」(28 ページ) に示す手順に従ってください。

Oracle BI Presentation Services および Plug-in を Microsoft IIS にデプロイするには

- 1 「Advanced」または「Basic」インストール・タイプを選択します。
- 2 インストールするコンポーネントを選択し、その選択に Presentation Services または Presentation Services Plug-in が含まれている場合は、アプリケーション・サーバーを選択するように要求されます。
 - 「Microsoft IIS」を選択します。
ISAPI プラグインが IIS にインストールされます。
- 3 「Basic」インストール・タイプを選択すると、インストーラによってスタンドアロン・バージョンの OC4J がインストールされ、Oracle BI Systems Management および Oracle BI Publisher がこのコンテナにデプロイされます。

Oracle BI を J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイするには

- 1 「Advanced」または「Basic」インストール・タイプを選択します。
- 2 アプリケーション・サーバーを選択するように要求されたら、次を選択します。
 - 「Basic」インストール・タイプでは、Oracle Containers for J2EE を選択します。
 - 「Advanced」インストール・タイプでは、Oracle Application Server を選択します。
- 3 インストーラによって、OC4J がインストールされ、該当するコンポーネントがこのコンテナにデプロイされます。

選択した J2EE アプリケーション・サーバーに Oracle BI Presentation Services Plug-in (Java サーブレット) をデプロイするために、ファイル analytics.war および analytics.ear が使用されます。.war ファイルと .ear ファイルは次の場所にあります。

- Windows プラットフォーム : OracleBI_HOME\web
- UNIX プラットフォーム : OracleBI_HOME/web

第 9 章「[Oracle BI Presentation Services の構成](#)」も参照してください。

4

Oracle Business Intelligence のインストールの準備

この章では、Oracle Business Intelligence Infrastructure インストーラを実行できるように、Microsoft Windows、Linux、および様々な UNIX 環境を準備する手順について説明します。さらに、背景情報に関する項では、インストーラを実行する前に知っておく必要のある情報について説明します。この章は次の項で構成されています。

- 「インストール計画のプロセス」 (30 ページ)
- 「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントをインストールするためのロードマップ」 (31 ページ)
- 「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」 (31 ページ)
 - 「Oracle BI Infrastructure デプロイメントのダイアグラム」 (31 ページ)
- 「適切な権限の取得」 (34 ページ)
- 「サード・パーティ製品のインストール」 (35 ページ)
- 「Oracle BI のインストール要件」 (34 ページ)
 - 「Windows でのインストール要件」 (39 ページ)
 - 「すべての UNIX プラットフォームでのインストール要件」 (41 ページ)
 - 「UNIX でサポートされる Oracle Business Intelligence コンポーネント」 (44 ページ)
 - 「Linux でのインストール要件」 (47 ページ)

ヒント： 前述の各項をプリントアウトして、チェックリストとしてお役立てください。

インストール計画のプロセス

インストール計画は、次のタスクで構成されています。

- 1 Oracle BI のコンポーネントのインストール・オプションの決定。
- 2 Oracle BI のインストール要件
 - 適切な権限の取得
 - サード・パーティ製品のインストール
 - Web アプリケーション・サーバーへのデプロイメント
 - Windows でのインストール要件
 - すべての UNIX プラットフォームでのインストール要件
- 3 以前のバージョンの Siebel Analytics プラットフォームがインストールされている場合は、必ずアンインストールしてから Oracle Business Intelligence プラットフォームのインストールに進んでください。以前のバージョンの Siebel Analytics のアンインストールについては、『Oracle Business Intelligence Infrastructure アップグレード・ガイド』を参照してください。
- 4 構成ファイルをバックアップします。「[Business Intelligence のフォルダおよびファイルのバックアップ](#)」(82 ページ)を参照してください。
- 5 UNIX 管理者は、一部の Oracle Business Intelligence コンポーネントを Windows システムにインストールする必要があります。たとえば、サード・パーティのインストーラは Windows でのみ使用可能です。また UNIX システムにも、次の表に示すように、一部の Windows ベースのコンポーネントをインストールする必要があります。

コンポーネント機能	必要な Windows ベース・コンポーネント
Repository Manager	Oracle Business Intelligence Administration Tool
Oracle BI Delivers	Scheduler Job Manager
Oracle BI Scheduler	注意: Job Manager は Windows ベースですが、Oracle Business Intelligence Scheduler は UNIX コマンドラインで構成できます。
Oracle BI Presentation Services Web Catalog	Oracle BI Catalog Manager

Oracle BI Infrastructure のコンポーネントをインストールするためのロードマップ

これはロードマップです。次の順序で、Oracle Business Intelligence をインストールするプロセスを実行します。

- 1 Oracle BI のインストール要件
- 2 Oracle Business Intelligence のコンポーネントのアップグレード
『Oracle Business Intelligence Infrastructure アップグレード・ガイド』を参照してください。
- 3 Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス
- 4 Oracle Business Intelligence インストレーションの初期化
- 5 Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール

インストール完了後に、構成作業が必要になる場合があります。「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」を参照してください。

Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ

これはロードマップです。Oracle Business Intelligence のインストール後に、次の順序で、Oracle Business Intelligence を構成するプロセスを実行します。

- 1 Oracle BI プロセスの構成
- 2 Oracle Business Intelligence 用データソースの構成
- 3 Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成
- 4 Oracle Business Intelligence Scheduler の構成
- 5 Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ
- 6 XMLP サーバー用の BI Publisher の構成

ヒント：必要に応じて、33 ページの図 1 を参照してください。

Oracle BI Infrastructure デプロイメントのダイアグラム

33 ページの図 1 では、Oracle Business Intelligence 製品のコンポーネント、および、Web やデータのコンポーネントなど、Oracle Business Intelligence Infrastructure のデプロイに必要な接続要素を示します。このダイアグラムは、事前定義済みのデプロイメントに基づいており、一般的でない構成要件は想定していません。

注意：実際のデプロイメントは、ダイアグラムに示されているデプロイメントとは異なる場合があります。

このダイアグラムで使用している色、線および書体の意味は、表 4 に示します。

表 4. Oracle BI Infrastructure デプロイメントのダイアグラムを読み解く鍵

オブジェクト	意味
白いボックス（枠が緑の実線）	Oracle Business Intelligence Infrastructure のコンポーネント。
白いボックス（枠が緑の破線）	Oracle Business Intelligence 製品の一部としてライセンスされたサード・パーティ製品。
灰色のボックス	サード・パーティによる、または汎用的な、ネットワークまたは Web コンポーネント。
ピンクの領域	データソース・コンポーネント。
黒い線	コンポーネント間の接続。線が矢印で終わっていなければ、この接続は双方向です（「黒い矢印」を参照）。
黒い矢印	一方向の接続。
オレンジ色の線	基本的なクラスタ構成。詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
青いイタリック名	接続に使用されるプロトコルの名前。
青いイタリック番号	接続に使用されるポート番号（定義されている場合）。

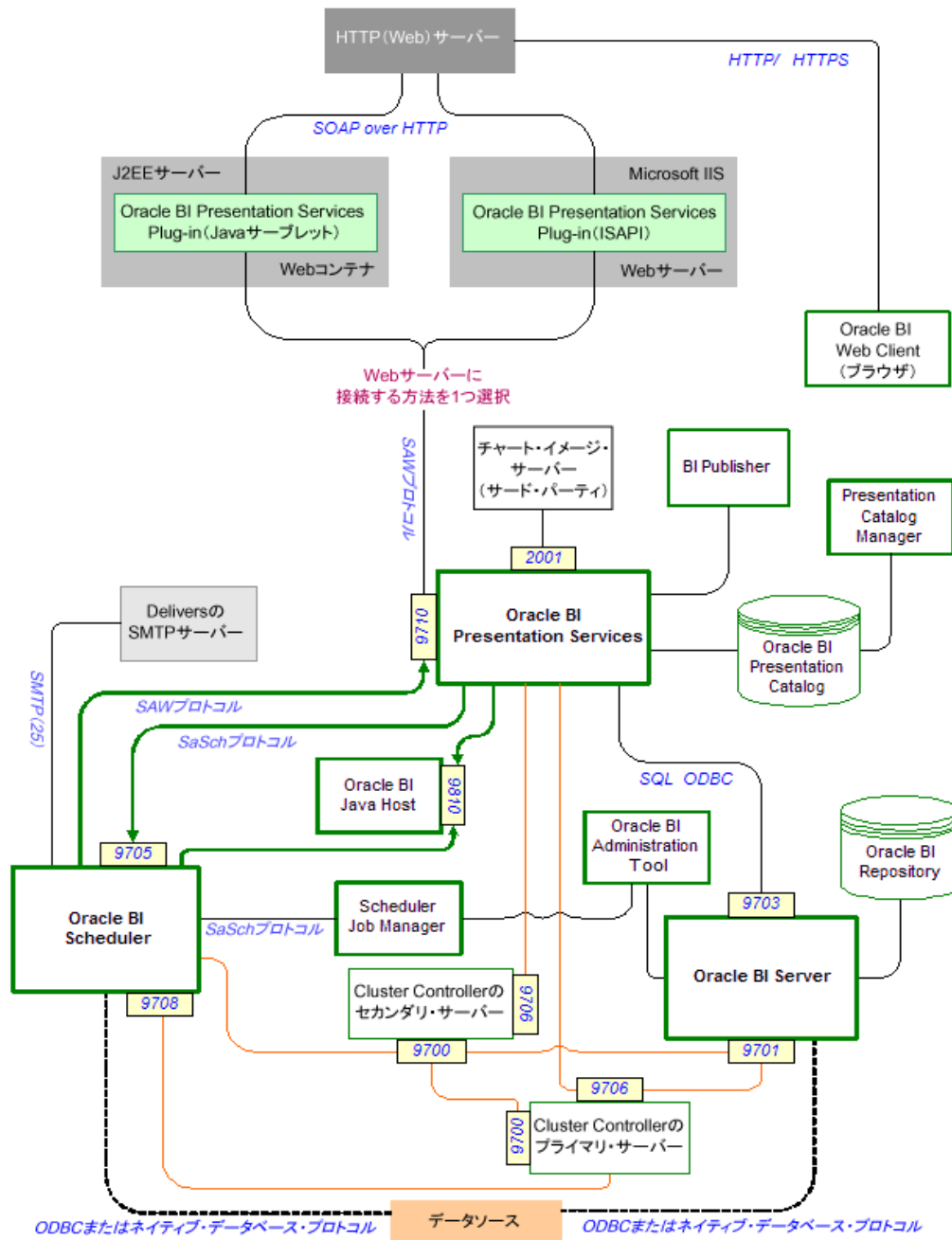


図 1. Oracle BI Infrastructure コンポーネント間の関係

Oracle BI のインストール要件

『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』に示すハードウェア要件とオペレーティング・システム要件以外にも、次の要件を満たしておく必要があります。

- 「適切な権限の取得」(34 ページ)
- 「サード・パーティ製品のインストール」(35 ページ)
- 「「Basic」インストール・タイプでのインストール要件」(36 ページ)
- 「「Advanced」インストール・タイプでのインストール要件」(38 ページ)
- 「Windows でのインストール要件」(39 ページ)
- 「すべての UNIX プラットフォームでのインストール要件」(41 ページ)
- 「UNIX でサポートされる Oracle Business Intelligence コンポーネント」(44 ページ)
- 「HP-UX でのインストール要件」(45 ページ)
- 「IBM AIX 用の Oracle BI Server の環境変数」(46 ページ)
- 「Linux でのインストール要件」(47 ページ)
- 「UNIX でのインストール・ファイルのダウンロード」(48 ページ)

適切な権限の取得

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、表 5 に示すように、企業システムにおけるインストールと構成に必要な権限が付与されている必要があります。インストーラで指定するインストール・ディレクトリに対して書き込み権限があることを確認してください。

表 5. Oracle Business Intelligence のインストールに必要なシステム・コンポーネント権限

システム・コンポーネント	権限タイプ
ネットワーク	ネットワーク管理者
Windows	個々のマシンの管理者
UNIX	システム管理者または root 権限
データベース	DBMS 管理者

サード・パーティ製品のインストール

Oracle Business Intelligence インストーラを実行する前に、表 6 に示すサード・パーティ・ソフトウェアがすべてインストールされている必要があります。インストールまたは構成が必要なサード・パーティ・コンポーネントの数は、対象となるデプロイメントの詳細に応じて異なります。サード・パーティ・ソフトウェアのドキュメントは、サード・パーティ・ベンダーから入手できません（Java は Sun 社から、MDAC は Microsoft 社から入手可能）。Oracle Application Server 10g やアプリケーション・サーバー・コンポーネントなどの場合は、次の Oracle Technology Network でドキュメントが入手可能です。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html>

表 6. Oracle Business Intelligence のインストールに必要なサード・パーティ・インストール

コンポーネント・インストール	注意
Java SDK 1.5.0 以上 警告: Java SDK は、「Basic」インストール・タイプを使用して Oracle Business Intelligence インストーラを実行する前にインストールする必要があります。そうでない場合は、大事なコンポーネントが機能しなくなります。	注意: すべてのオペレーティング・システム上の、「Basic」インストール・タイプを使用してインストールされたすべての Oracle BI のデプロイメントが対象になります。 Java は、Oracle Business Intelligence のインストール先マシンにインストールする必要があります。 ヒント: Java のインストール先ディレクトリはインストール時に必要となるため、この情報をメモしておいてください。たとえば、/usr/j2sdk1.5.0_04 などです。
Oracle Application Server 10.1.3.1.0 以上 警告: 「Advanced」インストール・タイプを使用して Oracle Business Intelligence インストーラを実行する前に、Oracle Application Server をインストールする必要があります。そうでない場合は、大事なコンポーネントが機能しなくなります。	注意: すべてのオペレーティング・システム上の、「Advanced」インストール・タイプを使用してインストールされたすべての Oracle BI のデプロイメントが対象になります。 Oracle Application Server は、Oracle Business Intelligence のインストール先マシンにインストールする必要があります。Oracle Application Server の次のコンポーネントが必要です。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle HTTP Server ■ Oracle Containers for J2EE (OC4J) ■ Oracle Process Manager and Notification Server 注意: Oracle Business Intelligence Enterprise Edition をインストールした後で Oracle HTTP Server を使用しないことにした場合は、インストール後に Oracle Application Server の Oracle HTTP Server を無効にします。 ヒント: Oracle Application Server のインストール先ディレクトリはインストール時に必要となるため、この情報をメモしておいてください。たとえば、/usr/product/10.1.3.1/OracleAS_1 などです。

表 6. Oracle Business Intelligence のインストールに必要なサード・パーティ・インストール

コンポーネント・インストール	注意
Oracle BI Server がデータベースへの接続に使用するデータベース接続ソフトウェア	<p>要件は、デプロイしている特定の DBMS によって異なります。サポートされているデータベース接続ソフトウェアについては、『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。</p> <p>たとえば、Oracle BI Server が Oracle Database にアクセスする場合は、Oracle 10g クライアントをインストールします。Oracle BI Server が MS SQL Server データベースにアクセスする場合は、Microsoft Data Access Components (MDAC) をインストールします。システムに MDAC がない場合は、「MDAC のインストール」(40 ページ) に示す手順に従ってインストールしてください。</p>
Oracle クライアント・ソフトウェア	<p>Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition および Oracle クライアント・ソフトウェアを同じマシンにインストールするには、最初に Oracle クライアント・ソフトウェアをインストールする必要があります。</p> <p>Oracle BI をインストールしてから Oracle クライアント・ソフトウェアをインストールすると、Oracle BI の Java SDK バージョンが変更され、ランタイム・エラーが発生することがあります。</p>
Oracle BI Presentation Services の統合 Web サーバー	<p>要件によっては、Oracle BI Presentation Services をインストールする前に、統合 Web サーバーのインストールが必要になる場合があります。</p> <p>IIS にデプロイする場合は、Oracle BI インストーラを実行する前に IIS をインストールします。</p>

「Basic」インストール・タイプでのインストール要件

次の各項で、「Basic」インストール・タイプを使用したインストールのシステム要件を説明します。

- 「[Java プラットフォームのバージョンについて](#)」(37 ページ)
- 「[UNIX 環境での Java SDK の検出](#)」(37 ページ)
- 「[Java プラットフォームのインストールを書込み可能にする](#)」(37 ページ)

Java プラットフォームのバージョンについて

Oracle Business Intelligence には、Java 2 Platform, Standard Edition 5.0 (J2SE 5.0) 以上が必要です。

注意: このバージョンは、Java 2 Platform, Standard Edition 1.5.0 (J2SE Development Kit 1.5.0) とも呼ばれます。

「Basic」インストール・タイプを使用してインストールする場合は、Oracle BI インストーラを実行する前に JDK 1.5.0 以上をインストールする必要があります。

UNIX 環境での Java SDK の検出

オペレーティング・システム: UNIX のみ

JDK がすでにマシンにインストールされており、環境に構成されているかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
$which java
```

インストールされている Java バージョンを検出するには、`-version` オプションを使用して Java コマンドを実行します。

```
$java -version
```

Java プラットフォームのインストールを書込み可能にする

「Basic」インストール・タイプを使用してインストールする場合は、Oracle Business Intelligence をインストールするユーザーのユーザー権限またはユーザー・グループ権限を、すべての JDK 1.5.0 インストール・ディレクトリ、サブディレクトリおよびファイルに対して書込み可能にします。

使用しているデプロイメントに応じて、次のいずれかの手順を使用します。

UNIX で Java プラットフォームを書込み可能にするには

- システム管理者が、ユーザーまたはユーザー・グループに書込み権限を付与します。
- あるいは、`chmod` コマンドを実行します。次に例を示します。

```
chmod -R a+rwx /usr/j2sdk1.5.0_04
```

Windows で Java プラットフォームを書込み可能にするには

- システム管理者が、ユーザーまたはユーザー・グループに書込み権限を付与します。
- あるいは、`cacls` コマンドを実行します。次に例を示します。

```
echo Y | cacls.exe D:\j2sdk1.5.0_04 /C /G "CREATOR OWNER":F  
%USERDOMAIN%\%USERNAME%:F SYSTEM:F ADMINISTRATORS:F Users:F >nul 2>&1
```

```
echo Y | cacls.exe D:\j2sdk1.5.0_04\* /T /C /G "CREATOR OWNER":F  
%USERDOMAIN%\%USERNAME%:F SYSTEM:F ADMINISTRATORS:F Users:F >nul 2>&1
```

「Advanced」インストール・タイプでのインストール要件

次の各項で、「Advanced」インストール・タイプを使用したインストールのシステム要件を説明します。

- 「Oracle Application Server のバージョンについて」 (38 ページ)
- 「Oracle Application Server のコンポーネントについて」 (38 ページ)
- 「Oracle Application Server のインストールを書込み可能にする」 (38 ページ)

Oracle Application Server のバージョンについて

Oracle Business Intelligence には、Oracle Application Server 10.1.3.1.0 以上が必要です。

「Advanced」インストール・タイプを使用してインストールする場合は、Oracle BI インストーラを実行する前に、Oracle Application Server 10.1.3.1.0 以上をインストールする必要があります。

Oracle Application Server のコンポーネントについて

Oracle Business Intelligence には、Oracle Application Server の次のコンポーネントが必要です。

- Oracle HTTP Server
- Oracle Containers for J2EE (OC4J)
- Oracle Process Manager and Notification Server

注意: Oracle Business Intelligence Enterprise Edition をインストールした後で Oracle HTTP Server を使用しないことにした場合は、インストール後に Oracle Application Server の Oracle HTTP Server を無効にします。

Oracle Application Server のインストールを書込み可能にする

「Advanced」インストール・タイプを使用してインストールする場合は、Oracle Business Intelligence をインストールするユーザーのユーザー権限またはユーザー・グループ権限を、すべての Oracle Application Server インストール・ディレクトリ、サブディレクトリおよびファイルに対して書込み可能にします。

使用しているデプロイメントに応じて、次のいずれかの手順を使用します。

UNIX で Oracle Application Server プラットフォームを書込み可能にするには

- システム管理者が、ユーザーまたはユーザー・グループに書込み権限を付与します。
- あるいは、chmod コマンドを実行します。次に例を示します。

```
chmod -R a+rwx /usr/product/10.1.3.1/OracleAS_1
```

Windows で Oracle Application Server プラットフォームを書込み可能にするには

- システム管理者が、ユーザーまたはユーザー・グループに書き込み権限を付与します。
- あるいは、`cacls` コマンドを実行します。次に例を示します。

```
echo Y | cacls.exe D:¥product¥10.1.3.1¥oracleAS_1 /C /G "CREATOR OWNER":F
%USERDOMAIN%¥%USERNAME%:F SYSTEM:F ADMINISTRATORS:F Users:F >nul 2>&1
```

```
echo Y | cacls.exe D:¥product¥10.1.3.1¥oracleAS_1¥* /T /C /G "CREATOR OWNER":F
%USERDOMAIN%¥%USERNAME%:F SYSTEM:F ADMINISTRATORS:F Users:F >nul 2>&1
```

Windows でのインストール要件

オペレーティング・システム: Windows のみ

次の項では、Oracle Business Intelligence をインストールするための Windows オペレーティング・システムの要件を説明します。

Windows での Microsoft Data Access Components のインストール

オペレーティング・システム: Windows のみ

DBMS が Microsoft SQL Server で、かつそのバージョンが MS SQL 2005 より古い場合、この項の説明が該当します。それ以外の場合は、この項の内容は必要ありません。

ヒント: MDAC のインストールが必要ない場合は、「[Oracle BI Presentation Services の構成](#)」(121 ページ)に進みます。

古いバージョンの SQL Server では、接続ソフトウェアを使用していませんでした。そのかわり、ODBC データソースを構成する必要がありました。ODBC ドライバは、Oracle BI Server のインストール先マシンにインストールする必要がありました。Oracle BI Server コンポーネントをインストールする前に、Microsoft Data Access Components (MDAC) を、SQL Server データベースに接続するマシンにインストールしておく必要があります。

MDAC は、Windows システム・コンポーネントとして多くのアプリケーションに組み込まれているため、すでにインストールされている可能性があります。Oracle Business Intelligence Cluster Controller 機能をインストールしている場合は、Cluster Controller のみをホストするマシンには MDAC が不要です。

MDAC の既存インストールの確認

オペレーティング・システム：Windows のみ

次の手順に従って、適切なバージョンの MDAC がインストール済かどうかを判断します。インストールされていない場合は、Oracle BI ソフトウェアのインストールを開始する前に、MDAC のインストールを完了してください。どのバージョンを使用するかについては、Oracle Technology Network の『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。

注意： Oracle BI Server のコンポーネントは、「Oracle BI のコンポーネントのインストール・オプション」(22 ページ) で説明します。

Microsoft Data Access Components の既存インストールを確認するには

- 1 msdadc.dll ファイルおよび oledb32.dll ファイル (オプション) を検索します。
通常、これらのファイルは C:\Program Files\Common Files\System\OLE DB フォルダにあります。
- 2 見つかったファイルを右クリックし、状況依存メニューから「プロパティ」を選択します。
バージョン情報は、「バージョン情報」タブに表示されます。

『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』で指定されているバージョンでない場合は、次の手順に従って MDAC をインストールする必要があります。手順の詳細およびインストール中に発生した障害については、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

MDAC のインストール

オペレーティング・システム：Windows のみ

MDAC がインストールされていない場合は、次の手順に従ってインストールしてください。

Microsoft Data Access Components をインストールするには

- 1 ブラウザで、Microsoft 社の Web サイトにナビゲートします。
検索ボックスに「MDAC download」と入力し、[Enter] を押します。
- 2 『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』で指定されているタイプに一致する MDAC タイプにナビゲートし選択します。
「Download」をクリックします。
- 3 ダウンロードが終わったら、ファイル mdac_typ.exe を見つけてクリックします。
MDAC インストーラが起動します。
- 4 プロンプトに従って、MDAC のインストールを実行します。

すべての UNIX プラットフォームでのインストール要件

オペレーティング・システム：UNIX のみ

この項で説明するタスクは、Oracle Business Intelligence Infrastructure コンポーネントを UNIX システムにインストールする前に完了する必要があります。

さらに、UNIX の特定の種類または実装では、Oracle BI をインストールする前に追加の準備が必要になることがあります。該当する場合は、次の項も参照してください。

- 「UNIX 環境での Java SDK の検出」(37 ページ)
- 「Oracle BI を UNIX にインストールする際の制限」(42 ページ)
- 「UnixChk.sh スクリプトの実行」(43 ページ)
- 「UNIX でサポートされる Oracle Business Intelligence コンポーネント」(44 ページ)
- 「64 ビットの UNIX システムへの Oracle Business Intelligence のデプロイ」(44 ページ)
- 「Solaris でのインストール要件」(45 ページ)
- 「HP-UX でのインストール要件」(45 ページ)
- 「IBM AIX 用の Oracle BI Server の環境変数」(46 ページ)
- 「Linux でのインストール要件」(47 ページ)
- 「UNIX でのインストール・ファイルのダウンロード」(48 ページ)

すべての UNIX システムでは、Oracle BI をインストールするために次の準備が必要です。

■ インストール・ディレクトリを作成します。

インストール・スクリプトのデフォルトのインストール・ディレクトリは /usr/local/OracleBI です。このインストール・ディレクトリは、使用する環境によって異なります。

注意：UNIX 管理者に問い合せて、このディレクトリを作成し、書込み権限を付与してもらう必要があります。

■ ユーザー ID を作成します。

すべての Oracle Business Intelligence プロセスを実行できるユーザー ID を選択します。UNIX 管理者に問い合せて、このユーザー ID を作成してもらう必要があります。

警告：ルート・ユーザーとして Oracle Business Intelligence をインストールすることはできません。

■ 以前のバージョンの Analytics ソフトウェアをアンインストールします。

以前のバージョンの Siebel Analytics プラットフォームがインストールされている場合は、それをアンインストールしてから Oracle Business Intelligence Infrastructure をインストールします。以前のバージョンの Oracle Business Intelligence のアンインストールについては、『Oracle Business Intelligence Infrastructure アップグレード・ガイド』を参照してください。

注意：インストール・スクリプトによって必要な環境設定が作成されます。

- **/dev/random および /dev/urandom が使用可能であることを確認します。**

Oracle BI Presentation Services は、擬似乱数を生成するこれらのデバイスを必要とします。

- **ファイル操作の制限パラメータを設定します。**

Oracle BI プロセスを実行するには、ファイル操作の制限を 10240 以上、または無制限にする必要があります。次に例を示します。

```
ulimit -n 10240
ulimit -n unlimited
```

- **X Window ソフトウェアをインストールします。**

Oracle BI インストーラには、UNIX プラットフォーム用のグラフィックベースのオプションがあります。グラフィカルな UNIX インストーラをリモートで実行する場合、または PC ベースのマシンから実行する場合は、サード・パーティの X Window ソフトウェアをインストールする必要があります。そうでない場合は、X Window システムを必要としないコンソール・モードでインストーラを実行できます。

- PC ベースのワークステーションからインストールするには、その PC に X Window プログラムをインストールする必要があります。
- 別の UNIX マシンからリモートでインストールするには、インストーラのワークステーションで、リモートの UNIX マシンに対して X Window マネージャを実行します。
- **メモリーの割当てをチェックします。**

Oracle BI Publisher を実行する場合は、十分なメモリーを割り当ててください。[「OC4」のメモリー割当て](#) (151 ページ) を参照してください。

Oracle BI を UNIX にインストールする際の制限

- インストール・タイプに「Custom」を選択した場合、UNIX では次のコンポーネントしか使用できません。
 - Oracle Business Intelligence JDBC Driver
 - Oracle Business Intelligence Systems Management
 - Oracle Business Intelligence Server
 - Oracle Business Intelligence Cluster Controller
 - Oracle Business Intelligence Scheduler
 - Oracle Business Intelligence Client
 - Oracle Business Intelligence Presentation Services
 - Oracle Business Intelligence Presentation Services Plug-in
 - Oracle Business Intelligence Publisher

- Oracle Business Intelligence Administration Tool を使用しないと、リポジトリ (.rpd) ファイルの作成と変更はできませんが、この Oracle Business Intelligence Administration Tool は、Windows オペレーティング・システムでしか使用できません。「UNIX でのリポジトリの構成」(48 ページ) を参照してください。
- Linux システムで Oracle BI のスクリプトを実行しているときは、bash (Bourne-Again Shell) を使用します。

UnixChk.sh スクリプトの実行

UnixChk.sh は、UNIX ベースのインストール用のスクリプトです (Linux を含む)。インストールを正常に実行するために必要なすべての要件をインストール・マシンが満たしていることを確認するには、この UNIX チェック・スクリプトを実行して前提条件をチェックします。軽量で使いやすいこのスクリプトでは、次の条件がチェックされます。

- サポートされるオペレーティング・システム
- 必要なパッチおよびファイルセット (該当するものがある場合)
- サポートされる構成
- 適切なディスク領域
- ユーザーがルートでないかどうか

UnixChk.sh スクリプトは、次の 2 つの場所にインストールされています。

- setup.sh および setup.jar を含むインストーラ・ディレクトリ。ここから、インストーラを実行する前 (つまり、setup.sh を実行する前) に UnixChk.sh を実行できます。
- ディレクトリ OracleBI/setup/UnixChk.sh。ここから、Oracle BI をインストールした後に UnixChk.sh を実行できます。

使用方法:

```
UnixChk.sh [Oracle_BI_install_dir]
```

Oracle_BI_install_dir は、Oracle BI をインストールするディレクトリです。Oracle BI をデフォルトのインストール・ディレクトリ (/usr/local/OracleBI) にインストールする場合は、この引数を省略します。

例 1

```
$ ./UnixChk.sh
CHECK FAILED - ulimit -n should be at least 10240 or unlimited
FAILURE!!- This machine is NOT configured for Oracle BI 10.1.3.2.1
```

例 2

```
$ ./UnixChk.sh
SUCCESS!!- This machine is configured for Oracle BI 10.1.3.2.1
```

UNIX でサポートされる Oracle Business Intelligence コンポーネント

オペレーティング・システム: UNIX のみ

UNIX プラットフォームでは、次の Oracle BI コンポーネントがサポートされます。

- Oracle Business Intelligence Server
- Oracle Business Intelligence Cluster Controller
- Oracle Business Intelligence Presentation Services:
 - Oracle Business Intelligence Dashboard
 - Oracle Business Intelligence Answers
 - Oracle Business Intelligence Delivers
- Oracle Business Intelligence Presentation Services Plug-in
- Oracle Business Intelligence Publisher
- Oracle Business Intelligence Systems Management
- Oracle Business Intelligence JDBC Driver
- Oracle Business Intelligence Scheduler

注意: iBot のスクリプトおよび Scheduler Job Manager に定義されたスクリプトは、Windows オペレーティング・システムでのみサポートされます。これらは UNIX システムではサポートされません。UNIX システムでサポートされるのは、Delivers で作成された iBot のみです。

- Oracle Business Intelligence Client

注意: Oracle BI Client には、Oracle BI ODBC ドライバも構成されています。このドライバにより、任意のアプリケーションから Oracle BI Server への接続が可能になります。Oracle BI Presentation Services も、このドライバを使用して Oracle BI Server に接続します。

サポートされるコンポーネントの関連情報については、「他の Oracle BI コンポーネント」(25 ページ) も参照してください。

64 ビットの UNIX システムへの Oracle Business Intelligence のデプロイ

オペレーティング・システム: UNIX のみ

64 ビットの UNIX システムにデプロイする場合は、次のコマンドを使用して、user.sh で正しい変数が取得されるようにします。

```
./run-sa.sh start64
```

64 ビット・サーバーを実行するか、32 ビット・サーバーを実行するかを選択できます。適切なクライアント DLL ファイルが存在し、user.sh で正しく設定されていることを確認します。使用しない設定はコメント・アウトして、使用する設定のコメントを解除します。

Solaris でのインストール要件

オペレーティング・システム：Solaris のみ

Solaris では、JavaHost プロセスを実行するために Java 2 Runtime Environment, Standard Edition (1.5.0_08 以上) が必要です。

- JRE の正しいバージョンがインストールされていることを確認します。
- この JRE バージョンを指すように instanceconfig.xml ファイルを変更します。
 - instanceconfig.xml ファイルは、ディレクトリ OracleBIData_HOME/web/config にあります。
 - タグ <JavaHome> を変更します。

注意： instanceconfig.xml の変更手順は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』の「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」を参照してください。

HP-UX でのインストール要件

オペレーティング・システム：HP-UX のみ

HP-UX オペレーティング・システムで Oracle BI Server が正常に動作するようにするには、次の要因をチェックします。

- カーネル・パラメータを表示します。
- 次のカーネル・パラメータを調整します。
 - max_thread_proc = 1024
 - maxdsiz = 0xC0000000
 - maxssiz = 16777216
 - maxtsiz = 0x40000000
 - shmseg = 120
 - swapmem_on = 1
 - maxfiles = 2048
 - maxfiles_lim = 2048
 - dbc_max_pct = 50

ヒント： これらのパラメータとその対応する値は例であり、おおよそのガイドラインとしてのみ使用してください。パラメータの値は、実際のシステム負荷、同時ユーザー数やセッション数などの使用パターン、問合せの種類や頻度、データベース・サイズなどに基づいて調整できます。

- 必要な場合はカーネル・パラメータを調整します。
- HP オペレーティング・システムに必要なパッチをインストールします。これらのパッチのインストールに失敗すると、Oracle BI Server の起動に極端に時間がかかることがあります。これらのパッチのリストについては、Oracle Technology Network の『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。

IBM AIX 用の Oracle BI Server の環境変数

オペレーティング・システム：IBM AIX のみ

sa.sh スクリプト、およびサーバーやクライアントの環境変数を設定するその他のスクリプトには、UNIX の特別なデプロイメント用の変数が含まれています。スクリプト .variant.sh には、IBM AIX 用の重要な設定が含まれています。

.variant.sh スクリプトは、ディレクトリ ¥Server¥Oracle_Business_Intelligence¥script¥setup¥ にあります。64 ビットの Oracle BI をデプロイするかどうかによって、サーバーの環境変数を調整する必要があります。次の項のうち、該当するものを参照してください。

- 「IBM AIX での 32 ビット版 Oracle BI のデプロイ」
- 「IBM AIX での 64 ビット版 Oracle BI のデプロイ」

IBM AIX での 32 ビット版 Oracle BI のデプロイ

オペレーティング・システム：IBM AIX のみ

AIX で 32 ビット版 Oracle BI のデプロイメントを設定するには、次のコマンドを実行します。

```
export AIXTHREAD_COND_DEBUG = OFF
export AIXTHREAD_MNRATIO = 1:1
export AIXTHREAD_MUTEX_DEBUG = OFF
export AIXTHREAD_RWLOCK_DEBUG = OFF
export AIXTHREAD_SCOPE = S
export LDR_CNTRL = IGNOREUNLOAD@LOADPUBLIC@PREREAD_SHLIB@MAXDATA=0X60000000
export MALLOCMULTIHEAP = considersize,heaps:4
export MALLOCTYPE = buckets
export SPINLOOPTIME = 1000
export YIELDLOOPTIME = 4
unset RT_GRQ
```

IBM AIX に 64 ビットのランタイム環境をデプロイする場合は、「IBM AIX での 64 ビット版 Oracle BI のデプロイ」(47 ページ) も参照してください。

注意: AIX のデプロイメントを日本語にローカライズする場合は、「AIX で日本語ローカライゼーションを行うための構成ファイル設定の変更」(212 ページ) も参照してください。

IBM AIX での 64 ビット版 Oracle BI のデプロイ

オペレーティング・システム: IBM AIX のみ

Oracle Business Intelligence の 64 ビット・インストールをデプロイする場合は、それを 64 ビットの IBM AIX カーネルで実行する必要があります。Oracle Business Intelligence の 32 ビット・インストールは、32 ビットまたは 64 ビットの IBM AIX カーネルで実行できます。

IBM AIX に 64 ビットのランタイム環境をデプロイする場合は、.variant.sh ファイルの次の設定を変更します。

- コマンドの実行

```
export LDR_CNTRL=IGNOREUNLOAD@LOADPUBLIC@PREREAD_SHLIB@MAXDATA=0x80000000
```

export コマンドは、64 ビットの AIX nqsserver が実行されているシェルで、次のいずれかの方法を使用して実行する必要があります。

- 64 ビットの AIX nqsserver が実行されているシェルから export コマンドを実行する。

または

- .variant.sh の対応する行を変更する。

- CORE_NAMING を 1 に設定

Linux でのインストール要件

オペレーティング・システム: Linux のみ

Linux オペレーティング・システムで Oracle Business Intelligence が正常に動作するようにするには、次の要因をチェックします。

- Oracle Business Intelligence をインストールする前に、GNU Compiler Collection (GCC) C++ ランタイム・バージョン 3.4.3 以上のライブラリをインストールします。

インストールされている場合、GCC C++ ランタイム・バージョン 3.4.3 ライブラリは次のいずれかの場所にあります。

- /usr/lib/libstdc++.so.6
- /lib/libstdc++.so.6

- 64 ビットの Linux システム・インストールでは、Oracle Database Client の 32 ビット・ライブラリを使用する必要があります。

UNIX でのインストール・ファイルのダウンロード

次の手順は、UNIX 管理者、または適切な権限を持つ Oracle BI 管理者が実行する必要があります。

UNIX に Oracle BI インストール・ファイルをダウンロードするには

- 1 Oracle BI プロセスを実行するユーザーとしてログインします。
- 2 Oracle Business Intelligence Infrastructure のインストール DVD を挿入します。
- 3 インストール DVD がマウントされているディレクトリ（またはソフトウェアがダウンロードされたディレクトリ）に変更します。
- 4 FTP を使用して Oracle BI ファイルをダウンロードし、それらを目的のサーバーやディレクトリにコピーします。

注意：FTP でダウンロードするファイルは、license.xml を含め、すべてバイナリ・モードであることを確認します。

- 5 ファイルをダウンロードしたら、setup.sh などの最上位ディレクトリのファイルに実行アクセス権があることを確認します。

■ コマンド `ls -la` を実行します。

ファイルに、次の例のような権限があることを確認します（Solaris の場合）。

```
-rwxr-xr-x  1 dcebuild odq          6395 Aug  9 22:11 license.xml
-rwxr-xr-x  1 dcebuild odq       657328 Aug  9 22:10 solaris.bin
-rw-r--r--  1 dcebuild odq           12 Aug  9 22:04 media.inf
drwxr-xr-x  3 dcebuild odq         4096 Aug  9 22:11 script
-rw-r--r--  1 dcebuild odq    501194022 Aug  9 22:10 setup.jar
-r-xr-xr-x  1 dcebuild odq         1311 Aug  9 22:11 setup.sh
-rw-r--r--  1 dcebuild odq          104 Aug  9 22:04 version.txt
```

UNIX でのリポジトリの構成

オペレーティング・システム：UNIX のみ

Oracle Business Intelligence のリポジトリや Web カタログは UNIX システムに転送可能ですが、最初に Oracle Business Intelligence Administration Tool をインストールして、Windows システムでリポジトリ・ファイル（.rpd ファイル）を構成する必要があります。その後、FTP を使用してリポジトリ・ファイルをバイナリ・モードで UNIX マシンに転送します。Administration Tool は、現在 Windows オペレーティング・システムでのみサポートされています。

5

Oracle BI EE Infrastructure のインストール

この章は Oracle BI Infrastructure のコンポーネントをインストールするためのロードマップの一部であり、Oracle Business Intelligence インストーラを実行するプロセスについて説明しています。この章のメインとなる項は「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」です。

ヒント: このプロセスに進む前に、次の章に目を通しておいてください。

- 第3章「Oracle BI Infrastructure のインストール・オプション」
- 第4章「Oracle Business Intelligence のインストールの準備」

Oracle BI Infrastructure 全体のインストール のプロセス

この項では、Oracle Business Intelligence Infrastructure 全体をインストールする全体的なプロセスについて概説します。

標準的なインストール・プログラムが使用されます。この章に記述されているタスクを終了すると、[25 ページの表 3](#)に一覧表示されている Oracle BI のコンポーネントがインストールされます。

Oracle BI ソフトウェアをインストールするプロセスは、次のタスクで構成されています。

- 1 デプロイ要件の決定。
 - 「Oracle BI インストーラの設定タイプの選択」(50 ページ) を参照してください。
- 2 設定コマンド・ファイルの実行。次の項のいずれか 1 つ以上を参照してください。
 - 「Windows での Oracle BI インストーラの実行」(51 ページ)
 - 「UNIX での Oracle BI インストーラの実行」(57 ページ)
 - 「複数のマシンへの Oracle BI コンポーネントのインストール」(61 ページ)
- 3 インストール・ウィザードのプロンプトへの応答。
- 4 インストーラが完了したら、インストール後に必要な Oracle Business Intelligence の構成を実行します。次の項を参照してください。
 - 「Oracle Business Intelligence インストレーションの初期化」(62 ページ)
 - 「Oracle BI Client と Oracle BI Server のインストール後のテスト」(63 ページ)
 - 「無人 (サイレント) モードでの Oracle BI のインストール」(65 ページ)

Oracle Business Intelligence の各コンポーネントの構成に関する章も参照してください。

Oracle BI インストーラの設定タイプの選択

このタスクは、「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」の一部です。Oracle Business Intelligence インストーラは、Oracle BI の複数のタイプのコンポーネントのインストールに使用できます。インストール・タイプは、インストールするコンポーネントによって異なります。

- [23 ページの表 2](#) に、設定タイプごとにインストールされる Oracle BI のコンポーネントを示しています。
- 「他の Oracle BI コンポーネント」(25 ページ) は、Oracle Business Intelligence のデプロイメントに役立つ補助プログラムについて説明しています。

注意：このマニュアルでは、Oracle BI のコンポーネントのスイート全体をインストールすると想定しています。

この章は、「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」で構成されています。「Complete」設定タイプでは、Oracle Business Intelligence のすべてのコンポーネントがインストールされます。

スイート全体をインストールしないで、個々のコンポーネントを 1 つ以上インストールすることもできます。たとえば、クラスタ化されたサーバーにデプロイする場合、特定のサーバーまたはサーバー・ツールのみをそのマシンにインストールしたり、Oracle BI ODBC クライアント・インストレーションのみをインストールできます。

第 6 章「Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール」では、コンポーネントの部分インストールまたは増分インストールについて説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 「無人（サイレント）モードでの Oracle BI のインストール」（65 ページ）
- 「Disconnected Client のインストールと構成」（70 ページ）
- 「Oracle BI Open Intelligence Interface のインストール」（78 ページ）では、リモート・クライアントへのクライアント接続の分散を対象としています。分散しておかないと、リモート・クライアントは Oracle BI にアクセスできません。
- 「Briefing Book Reader のインストール」（75 ページ）
- 「Oracle BI Office Plug-In のインストール」（77 ページ）
- 「Oracle BI Publisher Desktop のインストール」（81 ページ）

注意：『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』は、クラスタ化されたマシンへのコンポーネントのインストールを対象としています。

Windows での Oracle BI インストーラの実行

このタスクは、「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」の一部です。

グラフィックベースのインストールで表示されるインストーラのプロンプトについては、「Oracle BI グラフィック・モードでのインストーラの画面とプロンプト（Windows）」（52 ページ）を参照してください。

コンソールベースのインストールで表示されるインストーラのプロンプトについては、「Oracle BI 全体をコンソール・モードでインストールする場合に表示されるプロンプト（Windows）」（56 ページ）を参照してください。

Windows OS で Oracle BI インストーラを実行するには

- 1 現在のディレクトリからインストール・ディレクトリに移動します。
- 2 起動プログラムを実行します。

インストーラをグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して実行するかコンソール・モードで実行するかによって、次のいずれかの手順を実行します。

- グラフィカル・ユーザー・インターフェースの場合：
 - setup.exe をダブルクリックします。InstallShield のウィンドウが表示されます。
 - 各画面で要求された情報を入力します。
 - 次の画面に進むには、「次へ」をクリックします。前の画面に戻るには、「戻る」をクリックします。
 - インストーラを終了するには、「取消」をクリックします。
 - 各画面でヘルプ・ページを表示するには、「ヘルプ」をクリックします。
 - インストーラの各画面の意味とデフォルトは、52 ページの表 7 に一覧表示されています。

- コンソール・モードの場合：
 - DOS ウィンドウで、コマンド `setup.exe -console` を入力します。
 - インストール・スクリプトのプロンプトに従います。
 - コンソール・モードでは、各プロンプトの最後に次の選択肢と、大カッコで囲まれたデフォルト値が表示されます。次に例を示します。


```
Press 1 for Next, 2 for Previous, 3 to Cancel or 4 to Redisplay [1]
```
 - インストーラの各プロンプトの意味とデフォルトは、52 ページの表 7 に一覧表示されています。

注意：表示される特定の画面やプロンプトは、選択する Oracle BI インストールの設定タイプによって異なります。

3 「Oracle Business Intelligence インストールの初期化」(62 ページ) に進みます。

Oracle BI グラフィック・モードでのインストーラの画面とプロンプト (Windows)

この項は、「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」の一部です。

Windows で Oracle Business Intelligence Infrastructure 全体をインストールする場合に表示される画面を、52 ページの表 7 に一覧表示します。各画面の指示に従って、「次へ」をクリックします。

表 7. Windows で Oracle BI をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
Oracle Business Intelligence Installation	<ul style="list-style-type: none"> ■ インストール・ディレクトリおよびデータ・ディレクトリのパスを参照または入力するか、デフォルトのインストール先である C:¥ ドライブを受け入れます。デフォルトは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleBI ■ OracleBIData ■ インストール・タイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Basic ■ Advanced デフォルトは「Basic」です。 	<p>ヒント：デフォルトのインストール・ディレクトリおよびデータ・ディレクトリを変更するには、「参照」をクリックしてインストール先へのパスを確定し、「次へ」をクリックします。</p> <p>「Installation Type」は、Oracle Business Intelligence が実行されるアプリケーション・サーバー・インスタンスを表します。「Oracle BI のインストール・タイプ：「Basic」と「Advanced」」(26 ページ) を参照してください。</p> <p>注意：「Advanced」では、Oracle Application Server 10.1.3.1 以上をインストールしてから Oracle BI インストーラを実行する必要があります。</p>

表 7. Windows で Oracle BI をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
Setup Type	<p>「Custom」オプションを選択すると、インストールするコンポーネントを個別に選択できます。インストールする Oracle BI のコンポーネントを選択します。</p> <p>デフォルトは「Complete」です。</p>	<p>ここで選択する設定タイプによって、以後表示される画面の数とタイプが異なってきます。 23 ページの表 2 の「Complete」の行を参照してください。</p> <p>注意：この手順では、「Complete」スイートを選択したと想定しています。</p> <p>第 6 章「Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール」も参照してください。</p>
Application Server Selection [Basic] ヒント：「Basic」 インストール・タイプを選択した場合は、この画面が表示されます。	<p>Oracle BI Presentation Services と Oracle BI Presentation Services Plug-in を実行するアプリケーション・サーバー・インスタンス。次の選択肢があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Containers for J2EE (OC4J) version 10.1.3.1 ■ Microsoft IIS 	<p>「OC4J」を選択した場合は、Oracle BI Presentation Services と Oracle BI Presentation Services Plug-in の実行に使用するアプリケーション・サーバーが OC4J になります。</p> <p>「Microsoft IIS」を選択した場合は、Oracle BI Presentation Services の実行に IIS が使用され、ISAPI プラグインがインストールされます。Systems Management のコンポーネントのデプロイには OC4J が使用されます。</p> <p>注意：Microsoft IIS は、このインストーラの実行前にインストールしておく必要があります。インストールしていないと、この画面が表示されません。</p>
Application Server Selection [Advanced] ヒント：「Advanced」 インストール・タイプを選択した場合は、この画面が表示されます。	<p>Oracle BI Presentation Services と Oracle BI Presentation Services Plug-in を実行するアプリケーション・サーバー・インスタンス。次の選択肢があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Application Server ■ Microsoft IIS 	<p>「Oracle Application Server」を選択した場合は、Oracle BI Presentation Services と Oracle BI Presentation Services Plug-in の実行に使用するアプリケーション・サーバーが Oracle Application Server になります。</p> <p>「Microsoft IIS」を選択した場合は、Oracle BI Presentation Services の実行に IIS が使用され、ISAPI プラグインがインストールされます。Systems Management のコンポーネントのデプロイには Oracle Application Server が使用されます。</p> <p>注意：Microsoft IIS は、このインストーラの実行前にインストールしておく必要があります。インストールしていないと、この画面が表示されません。</p>

表 7. Windows で Oracle BI をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
<p>Java Development Kit (JDK) Location</p> <p>ヒント: 「Basic」 インストール・タイプを選択した場合は、この画面が表示されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ Java のインストール先ディレクトリのパスを参照または入力します。 ■ ここで Administrator のパスワードが要求されますが、これは OC4J コンポーネントの管理者ユーザーに割り当てられた OC4J パスワードです。 ■ Administrator のパスワードは 6 ~ 30 文字で、数字が 1 つ以上含まれている必要があります。 	<p>インストール先マシンに Java SDK 1.5 以上が事前にインストールされている必要があります。インストールされていないと、インストール処理が先に進みません。</p> <p>ヒント: この製品のリリース名は、Java 2 Platform, Standard Edition 1.5.0 (J2SE Development Kit 1.5.0) でしたが、番号システムの変更によって、現在では 5.0 (J2SE 5.0) と呼ばれています。そのため、1.5.0 と 5.0 は同じ Java プラットフォームおよび製品を表します。</p>
<p>Oracle Application Server Location</p> <p>ヒント: 「Advanced」 インストール・タイプを選択した場合は、この画面が表示されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Application Server のインストール先ディレクトリのパスを参照または入力します。 ■ ユーザー名 Administrator は、ロール oc4j-administrators に割り当てられている必要があります。 ■ ユーザー名 Administrator に関連付けられているパスワードを入力します。 	<p>インストール先マシンに Oracle Application Server 10.1.3.1.0 以上が事前にインストールされている必要があります。インストールされていないと、インストール処理が先に進みません。</p>

表 7. Windows で Oracle BI をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
Oracle BI Services	<ul style="list-style-type: none"> ■ Windows サーバーのアカウント名とパスワードを入力します。デフォルト：LocalSystem このデプロイメントにおいて、クラスタ環境で Oracle BI を実行しない場合は、アカウントとユーザー名はデフォルトのままにします。 ■ 次のサービスの「Startup Type」を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle BI Server ■ Oracle BI Scheduler ■ Oracle BI Cluster ■ Oracle BI Presentation Server ■ Oracle BI JavaHost 	<p>一覧表示された Oracle BI サービスそれぞれの実行に使用する Windows サーバーのアカウント名を指定します。このアカウント名は、クラスタ化されたすべての Oracle BI サーバーで同じです。</p> <p>デフォルトを受け入れるか、アカウント名（ドメイン¥ユーザーの形式）とパスワードを指定します。</p> <p>「Services Startup Type」を「Automatic」に設定するということは、コンピュータの再起動時に Oracle BI サービスが自動的に起動されることを意味します。</p> <p>注意：これによって、システム全体のパフォーマンスが影響を受ける場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle BI Server のデフォルト：Automatic ■ Oracle BI Scheduler のデフォルト：Manual ■ Oracle BI Cluster Controller のデフォルト：Manual ■ Oracle BI Presentation Server のデフォルト：Automatic ■ Oracle BI JavaHost のデフォルト：Automatic
Error Message Language Selection	デフォルトは英語です。	Oracle BI Server のエラー・メッセージは 1 つの言語で表示されます。通常は、サーバー側のメッセージのみです。これらのメッセージを表示する言語を選択します。
Please Wait		この画面は、ユーザーが行ったすべての選択をインストーラが受け入れて設定したときに表示されます。
Pre-Installation Summary Information	ヒント： この情報には 23 ページの表 2 と同じコンポーネントが表示されます。	これは、ユーザーが選択したすべてのコンポーネントと、それぞれのインストール先ディレクトリの一覧です。
Installing	「次へ」ボタンがグレイアウトされなくなったらクリックします。	これは、選択した機能がインストールされたときに表示されるプレースホルダです。

表 7. Windows で Oracle BI をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
Post-Installation Summary Information	サマリー情報を確認して「次へ」をクリックします。	この画面は、Oracle BI のインストールが正常に終了したことを示します。「ようこそ」ページへのリンクと、Oracle Containers for J2EE (OC4J) に関する情報も提供されます。
Restart Computer	コンピュータをすぐに再起動するかどうかを選択します。 注意: コンピュータを再起動せずに Oracle BI を実行すると、一部のサービスが正常に機能しない場合があります。 「終了」をクリックします。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「はい」をクリックすると、コンピュータがシャットダウンして再起動します。 ■ 「いいえ」をクリックすると、Oracle BI を使用する前にコンピュータを再起動する必要があります。

Oracle BI 全体をコンソール・モードでインストールする場合に表示されるプロンプト (Windows)

Oracle Business Intelligence Infrastructure 全体をコンソール（またはテキスト）モードでインストールする場合は、次の手順を実行します。52 ページの表 7 の「注意」列も参照してください。

Windows で Oracle BI インストーラをコンソール・モードで実行するには

- 1 インストール・ファイルにアクセスします。
- 2 DOS ウィンドウで次のコマンドを実行します。

```
setup.exe -console
```

注意: コンソール（テキスト）モードでインストールする場合は、ダイアログ画面は表示されません。かわりに、プロンプトが表示されたら、端末ウィンドウでテキストを入力します。

- 3 次の手順を実行します。
 - 各プロンプトで要求された情報を入力します。
 - 次の画面に進むには、「1」を入力します。
 - 前の画面に戻るには、「2」を入力します。
 - インストーラを終了するには、「3」を入力します。

UNIX での Oracle BI インストーラの実行

オペレーティング・システム：UNIX のみ

このタスクは、「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」の一部です。

グラフィックベースのインストールで表示されるインストーラのプロンプトについては、「Oracle BI 全体をグラフィック・モードでインストールする場合に表示される画面とプロンプト (UNIX)」(58 ページ) を参照してください。

コンソール (テキスト) インストールで表示されるインストーラのプロンプトについては、次の手順 3 で説明しています。

警告： Oracle BI インストーラを実行する前に、Java SDK が実行されている必要があります。実行されていない場合、重要なコンポーネントが機能しなくなります。

UNIX で Oracle BI のインストール・ウィザードを実行するには

- 1 現在のディレクトリからインストール・ディレクトリに移動します。
- 2 インストーラをグラフィック・モードでリモートから実行する場合は、DISPLAY 環境変数に、インストーラを表示する UNIX マシンの IP アドレスと画面アドレスが設定されていることを確認します (たとえば、100.1.10.100:0.0)。

DISPLAY 環境変数が設定されているかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
echo $DISPLAY
```

値が返されない場合は、UNIX 管理者に問い合せて DISPLAY 環境変数の設定内容を確認してください。

- 3 起動スクリプトを実行します。

インストーラをグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して実行するかコンソール・モードで実行するかによって、次のいずれかの手順を実行します。

注意： コンソール (またはテキスト) モードでインストールする場合は、プロンプトが表示されたら、端末ウィンドウでテキストを入力します。ダイアログ画面は表示されません。

- インストーラをグラフィック・モードで実行するには、次のコマンドを使用します。

```
./setup.sh
```

InstallShield インストーラが表示されます。各画面で要求された情報を入力します。

- 次の画面に進むには、「次へ」をクリックします。
- 前の画面に戻るには、「戻る」をクリックします。
- インストーラを終了するには、「取消」をクリックします。
- 各画面でヘルプ・ページを表示するには、「ヘルプ」をクリックします。

各画面の意味とデフォルトは、52 ページの表 7 に一覧表示されています。

- インストーラをコンソール（またはテキスト）モードで実行するには、次のコマンドを入力します。

```
./setup.sh -console
```

インストーラのテキストが表示されます。

- インストール・スクリプトのプロンプトに従います。
- コンソール・モードでは、各プロンプトの最後に次の選択肢と、大カッコで囲まれたデフォルト値が表示されます。次に例を示します。

```
Press 1 for Next, 2 for Previous, 3 to Cancel or 4 to Redisplay [1]
```

注意：表示される特定の画面やプロンプトは、選択する Oracle BI インストールのオプションによって異なります。

- 4 第 7 章「Oracle BI プロセスの構成」に進みます。

注意：UNIX では、Oracle BI のインストールを初期化する必要はありません。

Oracle BI 全体をグラフィック・モードでインストールする場合に表示される画面とプロンプト (UNIX)

オペレーティング・システム：UNIX のみ

すべての UNIX システムにおいて Oracle Business Intelligence をグラフィック・モードでインストールする場合に表示される画面のプロンプトとその意味を、59 ページの表 8 に一覧表示します。

ヒント：ほとんどの UNIX システムにある X Window モードのアプリケーションを実行できるかどうかをテストするには、次の手順を実行します。

グラフィック・モードが動作するかどうかをテストするには

- 1 現在のディレクトリからインストール・ディレクトリに移動します。
- 2 次のいずれかのコマンドを入力します。

```
xterm
```

```
xclock
```

ウィンドウ・アプリケーションが表示されない場合は、\$PATH 変数が正しく設定されていません。プログラム xterm または xclock が存在するディレクトリを探して、このディレクトリの場所を PATH 変数に追加します。

コンソール（テキスト）モードでインストールする場合の手順は、「Oracle BI 全体をコンソール・モードでインストールする場合に表示されるプロンプト (UNIX)」(61 ページ) で説明します。

UNIX オペレーティング・システムで Oracle Business Intelligence Infrastructure 全体をインストールする場合に表示される画面は、59 ページの表 8 に一覧表示されています。

表 8. UNIX で Oracle BI をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト（グラフィック・モード）

画面	ユーザーの操作	注意
Oracle Business Intelligence Installation	<p>インストール・ディレクトリおよびデータ・ディレクトリのパスを参照または入力するか、デフォルトを受け入れます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デフォルトは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleBI ■ OracleBIData ■ インストール・タイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Basic ■ Advanced <p>デフォルトは「Basic」です。</p>	<p>ヒント： デフォルトのインストール・ディレクトリおよびデータ・ディレクトリを変更するには、「参照」をクリックしてインストール先へのパスを確定し、「次へ」をクリックします。</p> <p>「Installation Type」は、Oracle Business Intelligence が実行されるアプリケーション・サーバー・インスタンスを表します。 「Oracle BI のインストール・タイプ：「Basic」と「Advanced」（26 ページ）を参照してください。</p> <p>「Advanced」インストール・タイプを選択するためには、Oracle Application Server 10.1.3.1 以上をインストールしてから Oracle BI インストーラを実行する必要があります。</p>
Setup Type	<p>「Custom」オプションを選択すると、インストールするコンポーネントを個別に選択できます。インストールする Oracle BI のコンポーネントを選択します。</p> <p>デフォルトは「Complete」です。</p>	<p>ここで選択する設定タイプによって、以後表示される画面の数とタイプが異なってきます。 23 ページの表 2 の「Complete」の行を参照してください。</p> <p>注意： この手順では、「Complete」スイートを選択したと想定しています。</p> <p>第 6 章「Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール」も参照してください。</p>
Java Development Kit (JDK) Location	<ul style="list-style-type: none"> ■ Java のインストール先ディレクトリのパスを参照または入力します。 ■ ここで Administrator のパスワードが要求されますが、これは OC4J コンポーネントの管理者ユーザーに割り当てられた OC4J パスワードです。パスワードは 6 ~ 30 文字で、数字が 1 つ以上含まれている必要があります。 	<p>インストール先マシンに Java SDK 1.5 以上が事前にインストールされている必要があります。インストールされていないと、インストール処理が先に進みません。</p> <p>ヒント： この製品のリリース名は、Java 2 Platform, Standard Edition 1.5.0 (J2SE Development Kit 1.5.0) でしたが、番号システムの変更によって、現在では 5.0 (J2SE 5.0) と呼ばれています。そのため、1.5.0 と 5.0 は同じプラットフォームおよび製品を表します。</p>

表 8. UNIX で Oracle BI をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト（グラフィック・モード）

画面	ユーザーの操作	注意
Oracle Application Server Location ヒント: 「Advanced」インストール・タイプを選択した場合は、この画面が表示されます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Application Server のインストール先ディレクトリのパスを参照または入力します。 ■ ユーザー名 Administrator は、ロール oc4j-administrators に割り当てられている必要があります。 ■ ユーザー名 Administrator に関連付けられているパスワードを入力します。 	インストール先マシンに Oracle Application Server 10.1.3.1.0 以上が事前にインストールされている必要があります。インストールされていないと、インストール処理が先に進みません。
Error Message Language Selection	デフォルトは英語です。	Oracle BI Server のエラー・メッセージは 1 つの言語で表示されます。通常は、サーバー側のメッセージのみです。これらのメッセージを表示する言語を選択します。
Please Wait		この画面は、ユーザーが行ったすべての選択をインストーラが受け入れて設定したときに表示されます。
Pre-Install Summary Information		これは、インストール対象としてユーザーが選択したすべてのコンポーネントと、それぞれのインストール先ディレクトリの一覧です。 ヒント: この情報には 25 ページの表 3 と同じコンポーネントが表示されます。
Installing	「次へ」ボタンがグレイアウトされなくなったらクリックします。	これは、選択した機能がインストールされたときに表示されるプレースホルダです。 インストールには 20 ~ 30 分かかる場合があります。
Post-Install Summary Information	Oracle BI のインストール後、「次へ」をクリックしてインストーラを終了します。	この画面は、Oracle BI のインストールが正常に終了したことを示します。

Oracle BI 全体をコンソール・モードでインストールする場合に表示されるプロンプト (UNIX)

オペレーティング・システム: UNIX のみ

UNIX システムにおいて Oracle Business Intelligence Infrastructure 全体をコンソール・モードでインストールする場合は、次の手順を実行します。52 ページの表 7 と 59 ページの表 8 の「注意」列も参照してください。

UNIX で Oracle BI インストーラをコンソール・モードで実行するには

- 1 現在のディレクトリからインストール・ディレクトリに移動します。
- 2 インストーラをコンソール（またはテキスト）モードで実行するには、次のコマンドを使用します。

```
./setup.sh -console
```

注意: コンソール（またはテキスト）モードでインストールする場合は、プロンプトが表示されたら、端末ウィンドウでテキストを入力します。ダイアログ画面が表示されないため、DISPLAY 変数を設定する必要はありません。

- 3 次の手順を実行します。
 - 各プロンプトで要求された情報を入力します。
 - 次の画面に進むには、「1」を入力します。
 - 前の画面に戻るには、「2」を入力します。
 - インストーラを終了するには、「3」を入力します。

複数のマシンへの Oracle BI コンポーネントのインストール

この項は、「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」の一部です。

Oracle Business Intelligence Presentation Services、Oracle Business Intelligence Client Tools および Oracle Business Intelligence Server の各コンポーネントは、別々のマシンで実行するようにインストールできます。Oracle BI Presentation Services と Oracle BI Server を別々のマシンにインストールする場合は、各マシンにインストールするために必要な回数だけ、インストーラを実行します。次に例を示します。

- Oracle BI Presentation Services をインストールするマシンでは、次の手順を実行します。

インストール・オプションとして「Oracle Business Intelligence Presentation Services」を選択します。ODBC ドライバ、ODBC Client、Answers および Delivers の各コンポーネントがインストールされます。

Oracle BI Presentation Services が、Oracle BI Server とは別のマシンにインストールされている場合、「Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成」(140 ページ) で示す Oracle BI Presentation Services マシンを構成します。

- Oracle BI Server をインストールするマシンでは、次の手順を実行します。
インストール・オプションとして「Oracle Business Intelligence Server」を選択します。

注意: 「Custom」設定タイプを選択すると、インストールするコンポーネントを個別に選択できます。

Oracle Business Intelligence インストールの初期化

この項は、「Oracle BI Infrastructure 全体のインストールのプロセス」の一部です。

Oracle BI インストーラがインストールを完了した後、ビジネス・インテリジェンス・ソフトウェアを初期化するために、追加のタスクが発生する場合があります。次のタスクのうち、1つ以上が実際のデプロイメントに該当する場合があります。

- 「Windows での Oracle BI の初期化」(62 ページ)
- 「UNIX での Oracle BI の起動」(62 ページ)
- 「Oracle BI Client と Oracle BI Server のインストール後のテスト」(63 ページ)

Windows での Oracle BI の初期化

インストール・ウィザードが終了したら、インストールを有効にするため、Oracle Business Intelligence ソフトウェアを使用する前に、コンピュータを再起動する必要があります。インストール・プロンプトで「はい」を選択しなかった場合は、コンピュータをただちに再起動する必要があります。

注意: コンピュータを再起動せずに Oracle Business Intelligence を実行すると、一部のサービスが正常に機能しない場合があります。

コンピュータが再起動したら、データ・コンポーネントの構成に進みます。「Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動」(86 ページ)を参照してください。

UNIX での Oracle BI の起動

UNIX では、初期化プロセスが不要です。

「Oracle BI シェル・スクリプト」(89 ページ)に一覧表示されているシェル・スクリプトを使用して、Oracle BI のプロセスを起動します。

Oracle BI のプロセスをいったん停止してから再起動する順序が重要です。この順序は次のとおりです。

- Oracle Business Intelligence Server のプロセス
- Oracle Business Intelligence Presentation Services のプロセス
- Oracle Business Intelligence JavaHost のプロセス
- Oracle Business Intelligence Scheduler のプロセス

Oracle BI Client と Oracle BI Server のインストール後のテスト

この項は、「[Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ](#)」の一部です。

Oracle BI をインストールしたら、Oracle BI Server および Oracle BI Client のインストレーションをテストする必要があります。詳細は、次の項を参照してください。

■ 「[Oracle BI Server インストレーションのテスト](#)」 (63 ページ)

■ 「[Oracle BI Client インストレーションのテスト](#)」 (64 ページ)

Oracle Business Intelligence Server インストレーションをテストするには、Oracle Business Intelligence のアプリケーション・バージョンにバンドルされた複数のリポジトリにあわせて、データベースの名前、ユーザー ID とパスワード、その他の設定などの接続プール設定を変更することが必要になる場合もあります。「[Oracle BI のデータベース・タイプの変更](#)」 (109 ページ) を参照してください。

インストール時に「Basic」インストール・タイプを選択した場合は、paint.rpd リポジトリを使用するように Oracle BI Server を変更する必要はありません。

Oracle BI Server インストレーションのテスト

このタスクは、「[Oracle BI Client と Oracle BI Server のインストール後のテスト](#)」プロセスの一部です。

Oracle BI Server の設定をテストするオペレーティング・システムに対応する手順を使用します。

Windows での Oracle BI Server インストレーションのテスト

オペレーティング・システム: Windows のみ

デフォルトでは、Oracle BI Server は、インストールされたマシンが再起動したときに、自動的に起動します。インストール時に起動タイプとして「Manual」を選択した場合は、Oracle BI Server インストレーションが、次の手順でテストされます。

Windows で Oracle BI Server インストレーションをテストするには

- 1 「スタート」メニューから、「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」にナビゲートします。
- 2 サービスとして「Oracle BI Server」を選択します。
- 3 このサービスを起動します。

UNIX での Oracle BI Server インストレーションのテスト

オペレーティング・システム: UNIX のみ

次の手順では、UNIX マシンにインストールした Oracle BI Server がテストされます。

UNIX で Oracle BI Server インストールをテストするには

- 1 OracleBI_HOME/setup ディレクトリに移動します。
- 2 次のシェル・コマンドを実行します。

```
./run-sa.sh start
```

Oracle BI Client インストールのテスト

この項は、「Oracle BI Client と Oracle BI Server のインストール後のテスト」プロセスの一部です。

Oracle BI Client の設定をテストするオペレーティング・システムに対応する手順を使用します。

注意：64 ビットの Windows オペレーティング・システムでは、Oracle BI Server の ODBC ドライバは 32 ビット・アプリケーションです。C:\Windows\SysWOW64\odbcad32.exe にある、32 ビットの ODBC データ ソース アドミニストレータを使用します。

64 ビットの ODBC データ ソース アドミニストレータ (C:\Windows\system32\odbcad32.exe にある) では、Oracle BI ODBC ドライバが表示されません。

Windows での Oracle BI Client インストールのテスト

次の手順では、Windows マシンにインストールした Oracle Business Intelligence Client がテストされます。

Windows で Oracle BI Client をテストするには

- 1 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」にナビゲートします。
- 2 「ODBC Client」を選択します。

UNIX での Oracle BI Client インストールのテスト

次の手順では、UNIX マシンにインストールした Oracle Business Intelligence Client がテストされます。

UNIX で Oracle BI Client をテストするには

- 1 別のセッションを開いて、Oracle BI Client を実行します。
OracleBI_HOME/setup ディレクトリから、次のシェル・コマンドを実行します。

```
. sa-cli.sh
```


クライアントとサーバーの接続性をテストするには、次のコマンドを実行します。nqcmd
- 2 このテストが正常に終了した場合は、[Enter] キーを何度か押して nqcmd を終了します。
テストが正常に終了しなかった場合は、この手順の [手順 3](#) に進みます。
- 3 すべてのクライアントが、Oracle Business Intelligence Server からの接続が切断されていることを確認してから、次のシェル・コマンドを実行してこのサーバーを停止します。

```
./run-sa.sh stop
```


無人（サイレント）モードでの Oracle BI のインストール

いわゆる無人（サイレント）モードでは、Oracle Business Intelligence はネットワーク全体にインストールされます。管理者は、次の一般的な手順を実行します。

- 1 管理者のマシンで、デフォルトの設定で Oracle BI をインストールします。

このインストール時に、選択したインストール・オプションと作成した設定項目がすべて、response.txt というテキスト・ファイルに書き込まれます。

- 2 response.txt ファイルを使用するバッチ・プログラムまたはシェル・プログラムを実行して、前に選択したオプションと設定項目の内容で、Oracle BI の同じコンポーネントが、他のサーバーおよびクライアント・ワークステーションにインストールされます。

注意：何も変更しない場合、response.txt ファイルの移植先は、（論理ドライブを含む）ディレクトリ構造が最初にインストールしたコンピュータと同一のインストール先コンピュータのみになります。

無人モードで Oracle BI をインストールするための具体的な手順は、使用しているオペレーティング・システムに基づいています。次の項のうち、該当するものを参照してください。

- 「Oracle BI のサイレント・モードでのインストール（Windows）」（65 ページ）
- 「Oracle BI のサイレント・モードでのインストール（UNIX）」（68 ページ）

Oracle BI のサイレント・モードでのインストール（Windows）

Windows ベースのシステムにおいてインストールを無人モードで実行するには、Oracle BI インストール・ディレクトリにある次の 2 つのバッチ・ファイルを実行します。

- createResponseFile.bat

createResponseFile.bat ファイルを実行すると、管理者のマシンに、デフォルトの設定でインストールが実行されます。「レスポンス・テキスト・ファイルの作成」（65 ページ）を参照してください。

警告：インストールの設定タイプが「Custom」の場合は、createResponseFile.bat ファイルを使用してインストールすることはできません。

- installWithResponseFile.bat

installWithResponseFile.bat ファイルを実行すると、response.txt ファイルを使用して、Oracle BI の同じコンポーネントが、他のサーバーおよびクライアント・ワークステーションにインストールされます。「複数のマシンへの Oracle BI のサイレント・インストール」（66 ページ）を参照してください。

レスポンス・テキスト・ファイルの作成

この手順では、インストールが開始され、インストール時のすべてのユーザー入力が含まれる注釈付き response.txt ファイルが作成されます。

response.txt ファイルを作成するには

- 1 次のコマンドを実行します。

```
setup.exe -options-record <RESPONSE_FILE_LOCATION>/response.txt
```

- 2 ファイル response.txt は、指定されたディレクトリ <RESPONSE_FILE_LOCATION> に作成されます。response.txt には、インストール時に記録された必須の InstallShield のレスポンスがすべて含まれています。

ヒント： ファイル createResponseFile.bat では、ここまでの手順が実行されます。これにより、インストールが開始され、インストール時のすべての入力を含む注釈付き C:¥response.txt ファイルが作成されます。

- 3 「複数のマシンへの Oracle BI のサイレント・インストール」(66 ページ) に進みます。

複数のマシンへの Oracle BI のサイレント・インストール

次の手順では、ファイル <RESPONSE_FILE_LOCATION>¥response.txt に作成されたレスポンスを使用して、Oracle BI が他のマシンにサイレントにインストールされます。サイレント・インストールを他のコンピュータに分散するオプションは、次に示すように、デプロイする移植オプションによって 2 つあります。

- ターゲット・コンピュータ（複数可）からのサイレントによる Oracle BI のインストール
「ターゲット・コンピュータからのインストール」(66 ページ) に記載された手順を使用します。
- ネットワーク経由でアクセスできるコンピュータからのサイレントによる Oracle BI のインストール
「ネットワーク経由でアクセスできるコンピュータからのインストール」(67 ページ) に記載された手順を使用します。

response.txt ファイルを使用して他のマシンに Oracle BI をサイレントにインストールするには

- ターゲット・マシンで次のコマンドを実行します。

```
setup.exe -options <RESPONSE_FILE_LOCATION> -silent
```

ヒント： ファイル installWithResponseFile.bat では、この手順が実行されます。

ターゲット・コンピュータからのインストール

Oracle BI 全体のインストール・イメージは、ターゲット・コンピュータに存在している必要があります。

ターゲット・コンピュータから Oracle BI をサイレントにインストールするには

- 1 マスターのインストールから作成された response.txt ファイルを、C:¥ドライブにコピーします。
- 2 ターゲット・コンピュータにある Oracle BI のインストール・ディレクトリと Oracle BI のインストール・イメージが、最初にインストールしたコンピュータとまったく同じ場所に構成されている場合は、この手順の手順 4 に進みます。

- Oracle BI インストールのターゲット・ディレクトリ・パスが、デフォルトのインストールのディレクトリ・パスと異なる場合は、response.txt の次のパラメータを変更して、ターゲット・ディレクトリ・パスを反映するようにします。

```
-w TempPanelBean.Destination="<論理ドライブ>:\<ターゲット・パス>\OracleBI"  
-w TempPanelBean.TempDir="<論理ドライブ>:\<ターゲット・パス>\OracleBIData"
```

- installWithResponseFile を使用して、Oracle BI をインストールします。

コマンド・プロンプトが返されたら、インストールは終了です。

注意： installWithResponseFile ファイルによって、コンピュータの再起動が強制されることはありません。インストールの完了後に、手動で再起動する必要があります。

ネットワーク経由でアクセスできるコンピュータからのインストール

Oracle BI 全体のインストール・イメージは、ネットワーク・コンピュータの中で、Oracle BI のインストールを実行できるコンピュータすべてにアクセスできるドライブに存在している必要があります。

ネットワーク経由でアクセスできるコンピュータから Oracle BI をサイレントにインストールするには

- マスターのインストールから作成された response.txt ファイルを、C:\ ドライブにコピーします。
 - インストールのターゲット・コンピュータごとに、論理ドライブを、ネットワーク・コンピュータの Oracle BI のインストール・イメージのルート・ディレクトリにマップします。
- 注意：** このマップでは、ドライブ名は、インストールのターゲット・コンピュータすべてのドライブ名と一致している必要があります。
- ネットワーク・コンピュータで、response.txt の次のパラメータを、インストールのターゲット・コンピュータすべてに共通する Oracle BI インストール・ディレクトリ・パスを使用するように変更します。

```
-w TempPanelBean.Destination="<論理ドライブ>:\<ターゲット・パス>\OracleBI"
```

例：d:\OracleBI

```
-w TempPanelBean.TempDir="<論理ドライブ>:\<ターゲット・パス>\OracleBIData"
```

例：d:\OracleBIData

- インストールのターゲット・コンピュータでコマンドラインを開き、ネットワーク・コンピュータの Oracle BI のインストール・イメージ・ディレクトリを指すマップ済論理ドライブにディレクトリを変更します。
 - コマンドラインからファイル installWithResponseFile を実行します。
- コマンド・プロンプトが返されたら、インストールは終了です。

注意： installWithResponseFile ファイルによって、コンピュータの再起動が強制されることはありません。インストールの完了後に、手動で再起動する必要があります。

Oracle BI のサイレント・モードでのインストール（UNIX）

UNIX ベースのシステムにおいて無人モードでインストールを実行するには、シェル・スクリプトを実行してテキスト・ファイルを作成します。レスポンス・ファイルを作成するには、次の手順に従ってください。

UNIX システムでレスポンス・ファイルを作成するには

- 1 次のコマンドを実行します。

```
./setup.sh -options-record <RESPONSE_FILE_LOCATION>/response.txt
```

- 2 ファイル response.txt は、指定されたディレクトリ <RESPONSE_FILE_LOCATION> に作成されます。response.txt には、インストール時に記録された必須の InstallShield のレスポンスがすべて含まれています。

他のマシンに Oracle BI をサイレントにインストールするには、次の手順に示すファイル response.txt を使用します。

response.txt ファイルを使用して他のマシンに Oracle BI をサイレントにインストールするには

- ターゲット・マシンで次のコマンドを実行します。

```
./setup.sh -options <RESPONSE_FILE_LOCATION> -silent
```

ヒント： コマンド書式を除いて、UNIX マシンに Oracle BI をサイレントにインストールする手順は、「複数のマシンへの Oracle BI のサイレント・インストール」（66 ページ）で説明している手順と同じです。

6

Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール

第5章「Oracle BI EE Infrastructure のインストール」で説明したコンポーネントの「Complete」インストールのほかに、スイート全体をインストールせずに、個々のコンポーネントを1つ以上インストールすることもできます。たとえば、Oracle BI Server だけをインストールすることも可能ですが、さらに様々なコンポーネントを別々のマシンにインストールすることもできます（「複数のマシンへの Oracle BI コンポーネントのインストール」(61 ページ) も参照）。

- 23 ページの表 2 に、インストール・オプションごとにインストールされる Oracle Business Intelligence のコンポーネントを示します。
- 「他の Oracle BI コンポーネント」は、Oracle Business Intelligence のデプロイメントに役立つ補助プログラムについて説明しています。

この章では、コンポーネントの部分インストールまたは増分インストールについて説明します。この章の内容は次のとおりです。

- リモート・クライアントへのクライアント接続の分散。分散しておかないと、リモート・クライアントは Oracle Business Intelligence にアクセスできません（「Oracle BI Open Intelligence Interface のインストール」(78 ページ) を参照）。
スプレッドシートやデータベースなど、サード・パーティの分析ツールを使用する場合は、Oracle BI Open Intelligence Interface をインストールして、Oracle BI Server への接続を可能にする必要があります。
- 複数のラップトップ・マシンへの Oracle BI Disconnected Client の追加（「Disconnected Client のインストールと構成」(70 ページ) を参照）。
- Windows ベースのヘルパー・プログラムのインストール（「Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール」(74 ページ) を参照）。
 - 「Briefing Book Reader のインストール」(75 ページ)
 - 「Oracle BI Office Plug-In のインストール」(77 ページ)
 - 「Oracle BI Open Intelligence Interface のインストール」(78 ページ)
- 「Oracle BI の補助サーバー・プログラムのインストール」(80 ページ)
 - 「Oracle BI Publisher Desktop のインストール」(81 ページ)

他の Oracle BI コンポーネントのインストール

追加のコンポーネントをインストールするためにインストーラを再度実行すると、次の追加のプロンプトまたは画面が表示されます。次の 2 つのオプションのいずれかを選択するように要求されます。

- Keep User Modified Configurations

「Keep User Modified Configurations」オプションを選択すると、「[Business Intelligence のフォルダおよびファイルのバックアップ](#)」(82 ページ) に一覧表示されている構成ファイルが参照されます。これらの構成は変更されません。

- Reset Configurations

「Reset Configurations」オプションを選択すると、構成ファイルが Oracle BI のデフォルト値に戻ります。

追加の Oracle BI コンポーネントのインストールについては、次の各項で説明します。

- 「[Disconnected Client のインストールと構成](#)」(70 ページ)
- 「[Briefing Book Reader のインストール](#)」(75 ページ)
- 「[Oracle BI Office Plug-In のインストール](#)」(77 ページ)
- 「[Oracle BI Open Intelligence Interface のインストール](#)」(78 ページ)
- 「[Oracle BI Publisher Desktop のインストール](#)」(81 ページ)

Disconnected Client のインストールと構成

オペレーティング・システム: Windows のみ

この項は、「[Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール](#)」の一部です。

Oracle BI Disconnected Client をラップトップ・コンピュータにインストールします。Disconnected Client を使用すると、ラップトップのユーザーは、ネットワークベースの Oracle Business Intelligence Server に接続していないときにデータやレポートにアクセスできます。

Disconnected Client をインストールすると、オンライン・ヘルプ・ファイル (Oracle Business Intelligence Disconnected オンライン・ヘルプ) が OracleBI_HOME¥server¥Document¥ フォルダに用意されます。ラップトップのユーザーによる Disconnected Client の通常の使用方法の詳細は、このオンライン・ヘルプを参照してください。

注意: Oracle BI Disconnected Client のインストールを、エンタープライズ (Oracle Business Intelligence Server) のインストールと混同しないでください。Disconnected Client の設定については、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』も参照してください。

Disconnected Analytics Client のインストールまたは構成のプロセスは、次の各項で説明します。

- 「[Disconnected Client に関する Oracle BI Server の追加要件](#)」(71 ページ)
- 「[Disconnected Client のインストール](#)」(71 ページ)
- 「[Disconnected Client をサイレント・モードで実行するように設定](#)」(74 ページ)

Disconnected Client のインストールの制限

Disconnected Client のインストールには次の制限があります。

- Disconnected Client は、Oracle Business Intelligence の他のコンポーネントをインストールする前または後にインストールします。
- Disconnected Client のアプリケーション・コンポーネントは、Oracle Business Intelligence Server を実行しているマシンとは別のマシンにインストールします。

Disconnected Client に関する Oracle BI Server の追加要件

この項は、「Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール」の一部です。

Oracle BI Disconnected Client を適切に機能させるには、次のように Web サーバーを追加で構成する必要があります。

- Disconnected Client に対応するように、標準の Oracle Business Intelligence Server をネットワーク・マシンにインストールします。
- Web サーバーが Sun ONE (旧称 iPlanet) であり、Solaris で実行される場合は、『Disconnected Configuration and Administration Guide』の Sun ONE Web サーバーの Disconnected Client 用の構成に関する項に従って、このサーバーを構成します。

Disconnected Client のインストール

オペレーティング・システム: Windows のみ

この項は、「Oracle BI の個々のコンポーネントのインストール」の一部です。

Disconnected Client をインストールするには

- 1 現在のディレクトリからインストール・ディレクトリに移動します。
- 2 起動プログラムを実行します。インストーラをグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して実行するかコンソール・モードで実行するかによって、次のいずれかの手順を実行します。
 - グラフィカル・ユーザー・インターフェースの場合：
 - setup.exe をダブルクリックします。InstallShield のウィンドウが表示されます。
 - 各画面で要求された情報を入力します。
 - 次の画面に進むには、「次へ」をクリックします。前の画面に戻るには、「戻る」をクリックします。
 - インストーラを終了するには、「取消」をクリックします。
 - 各画面でヘルプ・ページを表示するには、「ヘルプ」をクリックします。
 - Disconnected Client のコンポーネントをインストールする場合に表示される各画面の意味とデフォルトは、52 ページの表 7 に一覧表示されています。

- コンソール・モードの場合：
 - DOS ウィンドウで、コマンド `setup.exe -console` を入力します。
 - インストール・スクリプトのプロンプトに従います。
 - コンソール・モードでは、各プロンプトの最後に次の選択肢と、大カッコで囲まれたデフォルト値が表示されます。次に例を示します。
 Press 1 for Next, 2 for Previous, 3 to Cancel or 4 to Redisplay [1]
 - Disconnected Client のコンポーネントをインストールする場合に表示される各プロンプトの意味とデフォルトは、72 ページの表 9 に一覧表示されています。

注意：表示される特定の画面やプロンプトは、選択する Oracle BI インストールの設定タイプによって異なります。

3 「Oracle Business Intelligence インストールの初期化」(62 ページ) に進みます。

表 9. Disconnected Client をインストールする場合に表示される画面とプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
Oracle Business Intelligence Installation	<ul style="list-style-type: none"> ■ インストール・ディレクトリおよびデータ・ディレクトリのパスを参照または入力するか、デフォルトのインストール先である C:¥ ドライブを受け入れます。 デフォルトは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleBI ■ OracleBIData ■ インストール・タイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Basic デフォルトは「Basic」です。 	<p>ヒント： デフォルトのインストール・ディレクトリおよびデータ・ディレクトリを変更するには、「参照」をクリックしてインストール先へのパスを確定し、「次へ」をクリックします。</p> <p>注意： Disconnected Client には「Basic」インストール・タイプを選択する必要があります。Disconnected Client では、Oracle Application Server は使用しません。</p>
Setup Type	「Oracle Business Intelligence Disconnected Client」を選択します。	

表 9. Disconnected Client をインストールする場合に表示される画面とプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
Java Development Kit (JDK) Location	Java のインストール先ディレクトリのパスを参照または入力します。	<p>インストール先マシンに Java SDK 1.5 以上が事前にインストールされている必要があります。インストールされていないと、インストール処理が先に進みません。</p> <p>ヒント: この製品のリリース名は、Java 2 Platform, Standard Edition 1.5.0 (J2SE Development Kit 1.5.0) でしたが、番号システムの変更によって、現在では 5.0 (J2SE 5.0) と呼ばれています。そのため、1.5.0 と 5.0 は同じプラットフォームおよび製品を表します。</p>
Error Message Language Selection	デフォルトは英語です。	
Pre-Installation Summary	サマリー情報を確認して「次へ」をクリックします。	<p>サマリーの内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle BI ODBC Driver ■ Oracle BI Server ■ Oracle BI Administration Tool ■ Oracle BI Client ■ Oracle BI Presentation Services
Installing	「次へ」ボタンがグレイアウトされなくなったらクリックします。	これは、選択した機能がインストールされたときに表示されるプレースホルダです。
Post-Installation Summary Information	サマリー情報を確認して「次へ」をクリックします。	この画面は、Oracle BI のインストールが正常に終了したことを示します。
Restart Computer	コンピュータをすぐに再起動するかどうかを選択します。「終了」をクリックします。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「はい」をクリックすると、コンピュータがシャットダウンして再起動します。 ■ 「いいえ」をクリックすると、Oracle BI を使用する前にコンピュータを再起動する必要があります。 <p>注意: コンピュータを再起動せずに Oracle BI を実行すると、一部のサービスが正常に機能しない場合があります。</p>

Disconnected Client をサイレント・モードで実行するように設定

この項は、「[Disconnected Client のインストール](#)」プロセスの一部です。

Oracle BI Disconnected Client は、インストール後に、サイレント・モードで（バックグラウンドで）自動的に実行するように設定できます。Disconnected Client をサイレント・モードで簡単に実行できるようにするには、次の手順に従って、「スタート」メニューのショートカットを新規に作成します。

Disconnected Client をサイレント・モードで実行できるように「スタート」メニューのショートカットを作成するには

- 1 「スタート」を右クリックして「エクスプローラ - All Users」を選択します。
ディレクトリ・ツリーで「スタート メニュー」ディレクトリが選択されています。
- 2 左側のペインで、「プログラム」をダブルクリックします。
- 3 右側のペインで、「Oracle Business Intelligence」をダブルクリックします。
- 4 「Disconnected」を右クリックして「ショートカットの作成」を選択します。
- 5 新しいショートカットの名前を「Disconnected Silent Mode」に変更します。
- 6 「Disconnected Silent Mode」を右クリックして「プロパティ」を選択します。
 - 「ショートカット」タブの「リンク先」フィールドで、既存のコマンドの最後にスペースを追加し、次のように入力します。スラッシュの前には必ずスペースを入れてください。
/s
 - 「適用」をクリックして「OK」をクリックします。

ショートカットを作成したら、これを使用して、次の手順のとおり Disconnected Client を起動します。

Disconnected Client をサイレント・モードで起動するには

- 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「Disconnected Silent Mode」にナビゲートします。

Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール

補助プログラムは Windows 専用のアプリケーションであり、Oracle Business Intelligence の CD-ROM のフォルダ¥Client_Ancillary に入っています。これらのプログラムは、通常の Oracle Business Intelligence インストーラには含まれていません。

注意：これらのプログラムは、Oracle Business Intelligence インストーラではインストールされません。この項で説明するインストール手順を使用する必要があります。

補助クライアント・プログラムには次のものがあります。

■ Oracle Business Intelligence Open Intelligence Interface

このクライアント・プログラムのインストール・ファイルは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM のフォルダ Oracle_Business_Intelligence_Open_Intelligence_Interface に入っています。Open Intelligence Interface は、Oracle BI インストーラの「Setup Type」でオプションの 1 つとしてインストールすることもできます（「[Oracle BI Open Intelligence Interface のインストール](#)」（78 ページ）を参照）。

■ Oracle Business Intelligence Briefing Book Reader

この補助クライアント・プログラムのインストール・ファイルは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM のフォルダ Oracle_Business_Intelligence_Briefing_Book_Reader に入っています。「[Briefing Book Reader のインストール](#)」（75 ページ）を参照してください。

■ Oracle Business Intelligence Office Plug-In

この補助クライアント・プログラム（Oracle BI Office Plug-In、Office Plug-In、Plug-In）のインストール・ファイルは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM のフォルダ Oracle_Business_Intelligence_Office_Plug-In に入っています。「[Oracle BI Office Plug-In のインストール](#)」（77 ページ）を参照してください。

Briefing Book Reader のインストール

オペレーティング・システム: Windows のみ

この項は、「[Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール](#)」プロセスの一部です。

Oracle Business Intelligence Briefing Book Reader は、ラップトップ・コンピュータにインストールできます。これは Windows アプリケーションで、オフラインでの表示に備えて、静的およびリンクされたダッシュボード・コンテンツを保存する手段になります。ダッシュボード・ページを即時にダウンロードするか、スケジュールしてダウンロードするかをユーザーが指定します。重要なレポートやダッシュボードは、ネットワークに接続していなくとも確認および評価できます。

Briefing Book Reader のインストール・プログラムは、Oracle Business Intelligence の Windows 版インストール CD-ROM に入っています。

Oracle BI Briefing Book Reader を Windows にインストールするには

1 インストール CD-ROM のフォルダ

Client_Ancillary¥Oracle_Business_Intelligence_Briefing_Book_Reader から、またはネットワーク上で Briefing Book Reader のファイルが配置されている場所から、プログラム setup.exe を実行します。

- 2 インストール・ウィザードのウィンドウが表示され、各画面に指示が示されます。

次の画面に進むには、「次へ」をクリックします。前の画面に戻る必要がある場合は、「戻る」をクリックします。

画面	ユーザーの操作
Oracle Business Intelligence Briefing Book Reader Installation	デフォルトのインストール先（C:\Program Files\Oracle Business Intelligence\SABBRReader）を受け入れるには、「次へ」をクリックします。
Summary Information	デフォルト（推奨）を変更するには、「参照」をクリックしてインストール先へのパスを確定し、「次へ」をクリックします。
Installing	Briefing Book Reader のインストール先ディレクトリと、インストールのサイズに関する情報を表示します。「次へ」をクリックします。
	ユーザーが選択した機能をインストーラがインストールするときに表示されるプレースホルダ画面。
	インストーラの処理が完了したら、「終了」をクリックしてインストール・ウィザードを終了します。

Briefing Books での権限のリストア

「Manage Catalog」→「My Folder」の「Permissions」アイコンは、管理者以外のユーザーには表示されない場合があります。「Permissions」アイコンにアクセスできるのは管理者のみです。

次の手順によってこの動作を解決できます。

Briefing Books で管理者以外のユーザーが「Permissions」アイコンを表示できるようにするには

- 1 Administrator として Oracle Business Intelligence にログオンします。
- 2 「Settings」をクリックして「Administration」→「Manage Privileges」を選択します。
- 3 「Admin: Catalog」行の「Change Permissions」で、該当するグループのリンクをクリックします。
グループに「Everyone」を追加します。
- 4 「Finished」をクリックして、「Logout」をクリックします。
- 5 管理者以外のユーザーとしてログオンし、Delivers の「Manage Catalog」に「Permissions」アイコンが表示されるかどうかを確認します。

Briefing Books の作成方法および使用方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

Oracle BI Office Plug-In のインストール

オペレーティング・システム：Windows のみ

この項は、「Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール」プロセスの一部です。

Oracle Business Intelligence Office Plug-In は、Windows アプリケーションであり、Oracle Business Intelligence Presentation Services のオプション機能です。Plug-In を使用すると、Analytics カタログを参照し、レポートを選択して、そのレポートを Microsoft Word または Microsoft Excel で表示できます。このドキュメントを保存して、必要に応じてデータを更新できます。Office Plug-In 機能の使用の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Office Plug-In のインストール・プログラムは、Oracle Business Intelligence の Windows 版インストール CD-ROM に入っています。

この機能をインストールする前に、Office Plug-In を実行するクライアント・マシンに次のプログラムをインストールしておく必要があります。

- .NET Framework (ランタイムのインストールが必要)
- Microsoft Word および Microsoft Excel を含む、適切なバージョンの Microsoft Office (『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照)

Oracle BI Office Plug-In を Windows にインストールするには

- 1 インストール CD-ROM のフォルダ Oracle_Business_Intelligence_Office_Plug-In から、またはネットワーク上で Office Plug-In のファイルが配置されている場所から、プログラム setup.exe を実行します。
- 2 インストール・ウィザードのウィンドウが表示され、各画面に指示が示されます。

次の画面に進むには、「次へ」をクリックします。前の画面に戻る必要がある場合は、「戻る」をクリックします。

画面	ユーザーの操作
ようこそ	「次へ」をクリックします。
Oracle Business Intelligence Office Plug-In Installation	<ul style="list-style-type: none"> ■ デフォルトのインストール先(C:\Program Files\Oracle Business Intelligence\OracleBI Office Plug-In)を受け入れるには、「次へ」をクリックします。 ■ デフォルト(推奨)を変更するには、「参照」をクリックしてインストール先へのパスを確定し、「次へ」をクリックします。
Oracle BI Presentation Services URL	Oracle BI Office Plug-In には、データの取得元となる Oracle BI Presentation Services の URL (Web 上の場所) が必要です。URL の形式の例は次のとおりです。 http://localhost:9704/analytics
Summary Information	Office Plug-In のインストール先ディレクトリと、インストールのサイズが表示されます。 「次へ」をクリックします。

画面	ユーザーの操作
Installing	Office Plug-In をインストーラがインストールするときに表示されるブレースホルダ画面。完了したら、「次へ」をクリックします。
Summary Information	コンピュータをすぐに再起動するかどうかを選択して、「終了」をクリックします。 <ul style="list-style-type: none">■ 「はい」をクリックすると、コンピュータがシャットダウンして再起動します。■ 「いいえ」をクリックすると、Oracle Business Intelligence を使用する前にコンピュータを再起動する必要があります。

Oracle BI Open Intelligence Interface のインストール

オペレーティング・システム：Windows のみ

この項は、「Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール」プロセスの一部です。

この項は、現在のデプロイメントに、ネットワーク経由での Oracle BI Server へのリモート・マシン接続が含まれている場合に該当することがあります。

このクライアント・プログラムは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM のフォルダ Oracle_Business_Intelligence_Open_Intelligence_Interface に入っています。

一部のサイトでは、スプレッドシートやデータベースなど、Oracle BI Server への接続が必要なサード・パーティの分析ツールが使用されています。そのうち一部のサイトは、モデムを使用して企業ネットワークにクライアント接続しています。Oracle BI Open Intelligence Interface (ODBC および JDBC) のクライアント接続と、クライアント接続ツール NQCMD.exe および NQClient.exe を使用すると、他の方法では Oracle BI にアクセスできないリモート・クライアントへのクライアント接続が分散されます。

Oracle Business Intelligence インストーラを使用すると、Open Intelligence Interface ODBC、JDBC 接続クライアントおよび NQClient.exe ユーティリティと NQCMD.exe ユーティリティのみがインストールされます。後者の 2 つのユーティリティは、デバッグおよびテクニカル・サポートでの問題の識別に必要です。インストーラには、Open Intelligence Interface ODBC クライアントをリモート・マシンに自動的にインストールするサイレント・モード・オプションが含まれています。

Open Intelligence Interface インストーラによって、リモート・クライアント・マシンにインストールされるコンポーネントは次のとおりです。

- OracleBI ディレクトリ
 - jdbc
 - server¥Bin
 - server¥Document
 - server¥Locale
 - server¥Log

- uninstall¥_jvm¥bin¥client
- OracleBIData ディレクトリ
 - tmp (フォルダは空)

Oracle Business Intelligence Open Intelligence Interface Ancillary Client をインストールするには

- 1 フォルダ Client_Ancillary¥Oracle_Business_Intelligence_Open_Intelligence_Interface で、setup.exe をクリックします。
- 2 Windowsで Oracle Business Intelligence Open Intelligence Interface をインストールするときに表示される各画面および各プロンプトの意味とデフォルトは、79 ページの表 10 に一覧表示されています。
- 3 各画面で要求された情報を入力します。次の画面に進むには、「次へ」をクリックします。前の画面に戻るには、「戻る」をクリックします。

Open Intelligence Interface インストーラの画面とプロンプト

Open Intelligence Interface ODBC クライアントをインストールするときに表示される画面は表 10 に一覧表示されています。

表 10. Oracle BI Client と ODBC Driver をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
Oracle Business Intelligence Installation	インストール・ディレクトリのパスを入力するか、デフォルトのままにします。デフォルトは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ C:¥OracleBI ■ C:¥OracleBIData 	デフォルトのインストール・ディレクトリおよびデータ・ディレクトリを変更するには、「参照」をクリックしてインストールおよびデータの位置を示すパスを確定し、「次へ」をクリックします。
Java Development Kit (JDK) Location	インストール先マシンに Java SDK 1.5 以上が事前にインストールされている必要があります。インストールされていないと、インストール処理が先に進みません。 Java のインストール先ディレクトリのパスを参照または入力します。	ヒント: この製品のリリース名は、Java 2 Platform, Standard Edition 1.5.0 (J2SE Development Kit 1.5.0) でしたが、番号システムの変更によって、現在では 5.0 (J2SE 5.0) と呼ばれています。そのため、1.5.0 と 5.0 は同じ Java プラットフォームおよび製品を表します。
Error Message Language Selection	デフォルトは英語です。	英語以外の言語を指定する場合はドロップダウン・リストから別の言語を選択します。

表 10. Oracle BI Client と ODBC Driver をインストールする場合に表示される画面またはプロンプト

画面	ユーザーの操作	注意
Preinstallation Summary Information	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle BI ODBC Driver ■ Oracle BI JDBC Driver ■ Oracle BI Client 	
Installing	「次へ」ボタンがグレイアウトされなくなったらクリックします。	インストールには 20 ～ 30 分かかる場合があります。
Postinstallation Summary Information	インストール後のサマリー情報を確認して「次へ」をクリックします。	この画面は、Oracle BI のインストールが正常に終了したことを示します。
終了	<p>コンピュータをすぐに再起動するかどうかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「はい」をクリックすると、コンピュータがシャットダウンして再起動します。 ■ 「いいえ」をクリックすると、Oracle Business Intelligence を使用する前にコンピュータを再起動する必要があります。 <p>「終了」をクリックします。</p>	<p>注意：コンピュータを再起動せずに Oracle BI を実行すると、一部のサービスが正常に機能しない場合があります。</p>

Oracle BI の補助サーバー・プログラムのインストール

オペレーティング・システム：Windows のみ

Oracle Business Intelligence のインストール CD-ROM には、Server_Ancillary というフォルダが入っています。このフォルダには、Oracle BI のデプロイに必要な次のプログラムが含まれています。

■ IBM GSKit

GSKit ユーティリティの IkeyMan では、キー・データベース・ファイルを作成し、Oracle BI の構成ディレクトリに格納します。GSKit をどんな場合にどのように使用するかについては、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

注意：GSKit は、ADSI 認証には不要です。

GSKit のインストール・ファイルは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM のフォルダ Server_Ancillary¥IBM_GSK に入っています。

■ Oracle Business Intelligence Publisher Desktop

Oracle Business Intelligence Publisher Desktop は Windows のアプリケーションであり、Oracle BI Publisher のレイアウトを作成できる設計ツールです。BI Publisher Desktop のインストール・ファイルは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM のフォルダ Server_Ancillary¥Oracle_Business_Intelligence_Publisher¥BI_Publisher_Desktop に入っています。

注意： Oracle BI Publisher Desktop は、Oracle BI Publisher サーバー用にはインストール不要です。また、Oracle BI Publisher Desktop 用に Oracle BI Publisher サーバーをインストールする必要もありません。この 2 つのプログラムはそれぞれ独立しています。

このマニュアルでは主に、BI Publisher を、OC4J や Oracle Application Server などのアプリケーション・サーバーにインストールする方法について説明しています。ただし、BI Publisher は、Tomcat や Websphere など、他の J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイすることもできます。BI Publisher を他の J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイするには、ファイルに同梱された Install.pdf ファイルに記載された手順に従ってください。「他の J2EE アプリケーション・サーバーによる BI Publisher のデプロイ」(151 ページ) も参照してください。

BI Publisher Desktop をインストールするには、「Oracle BI Publisher Desktop のインストール」(81 ページ) を参照してください。

Oracle BI Publisher Desktop のインストール

この項は、「Oracle BI の補助クライアント・プログラムのインストール」プロセスの一部であり、このプログラムのインストール方法について説明します。

Oracle BI Publisher Desktop をクライアント・コンピュータにインストールするには

- 1 インストール CD-ROM のフォルダ Server_Ancillary¥Oracle_Business_Intelligence_Publisher¥BI_Publisher_Desktop から、またはネットワーク上で BI_Publisher_Desktop の設定ファイルが配置されている場所から、プログラム BIPublisherDesktop.exe を実行します。
- 2 インストール・ウィザードの「ようこそ」ウィンドウが表示され、各画面に指示が示されます。次の画面に進むには、「次へ」をクリックします。前の画面に戻る必要がある場合は、「戻る」をクリックします。インストールするときに表示される各画面および各プロンプトの意味とデフォルトは、表 11 に一覧表示されています。

表 11. Oracle BI Publisher Desktop の画面とプロンプト

画面	ユーザーの操作
Choose Setup Language	リストから言語を選択して、「次へ」をクリックします。
Preparing Setup	この機能のインストールをインストーラが準備するときに表示されるプレースホルダ画面。

表 11. Oracle BI Publisher Desktop の画面とプロンプト

画面	ユーザーの操作
Welcome to the InstallShield Wizard for Oracle BI Publisher Desktop	「次へ」をクリックします。
Choose Destination Location	デフォルトのインストール先 (C:\Program Files\Oracle\BI Publisher\BI Publisher Desktop) を受け入れるには、「次へ」をクリックします。 場所を変更するには、「参照」をクリックします。
Setup Status	ユーザーが選択した機能をインストーラがインストールするときに表示されるプレースホルダ画面。 インストーラの処理が完了したら、「終了」をクリックしてインストール・ウィザードを終了します。

Oracle BI Publisher Desktop の起動

Oracle BI Publisher Desktop プログラムを起動するには、Windows の「スタート」→「プログラム」→「Oracle BI Publisher Desktop」→「Template Builder for Word」を選択します。

Oracle BI のコンポーネントのアンインストール

アップグレード関連以外の理由で Oracle BI のコンポーネントを削除する必要がある場合は、次の手順を使用します。

Business Intelligence のフォルダおよびファイルのバックアップ

Oracle Business Intelligence のソフトウェアをアンインストールまたはアップグレードする前に、重要な構成ファイルのバックアップを作成し、ファイルを一時的な場所に移動することをお勧めします。構成ファイルは、インストーラによって表 12 に示す場所に自動的にバックアップされます。

- Windows システムでは、バックアップ・ファイルは OracleBI_HOME\Install_Backup\< インストール日 > ディレクトリに保存されます (D:\OracleBI\Install_Backup\12.14.2006_15.55.20 など)。
- UNIX システムでは、バックアップ・ファイルは OracleBI_HOME/Install_Backup/< インストール日 > ディレクトリに保存されます (/usr/local/OracleBI/Install_Backup/08.13.2006_16.40.20 など)。

警告: Oracle Business Intelligence をアンインストールすると、OracleBIData フォルダ内のすべてのファイルが削除されます (Catalog を含む)。Oracle BI をアンインストールする前に、Catalog ファイルを別の場所にコピーします。

表 12. インストーラでバックアップされる構成ファイルの場所

ファイルまたはフォルダ	場所
DBFeatures.INI ファイル	Windows: OracleBI_HOME¥server¥Config
NQSConfig.INI ファイル	UNIX: OracleBI_HOME/server/Config
NQClusterConfig.INI ファイル	
Instanceconfig.xml ファイル	OracleBIData_HOME¥web¥config (Windows) OracleBIData_HOME/web/config (UNIX)
リポジトリ (.rpd) ファイル	OracleBI_HOME¥server¥Repository (Windows) OracleBI_HOME/server/Repository (UNIX)
user.sh ファイル (UNIX のみ)	OracleBI_HOME/setup
odbc.ini ファイル (UNIX のみ)	
Presentation Services 構成ファイル	Oracle BI Presentation Services がインストールされたマシンの次の場所 <ul style="list-style-type: none"> ■ Presentation Services で IIS を使用する場合 : OracleBI_HOME/web/app/WEB-INF/web.xml ■ Presentation Services でスタンドアロンの OC4J を使用する場合 : ORACLE_HOME/j2ee/home/applications/analytics/ analytics/WEB-INF/web.xml ■ Presentation Services で Oracle Application Server を使用する 場合 : ORACLE_HOME/j2ee/bianalytics/applications/analytics/ analytics/WEB-INF/web.xml ■ OracleBI_HOME/web/javahost/config/config.xml
Deliveries フォルダ	Oracle BI Presentation Services がインストールされたマシンの次の場所 <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleBIData_HOME/web/catalog/deliveries <p>注意 : このフォルダには一時ファイルが含まれます。</p>
バックアップされるディレクトリ	<ul style="list-style-type: none"> ■ OracleBIData_HOME/web/config ■ OracleBIData_HOME/web/res ■ OracleBIData_HOME/disconnected ■ OracleBIData_HOME/sync ■ OracleBIData_HOME/scheduler

Windows での Oracle BI のアンインストール

Oracle BI のコンポーネントを 1 つ以上アンインストールするには、次の手順に従ってください。

Windows オペレーティング・システムで Oracle BI をアンインストールするには

- 1 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロール パネル」→「プログラムの追加と削除」にナビゲートします。
- 2 「プログラムの追加と削除」で、Oracle Business Intelligence を選択して「削除」をクリックします。
- 3 「OC4J Administrator User Information」ウィンドウで、パスワードを入力して「次へ」をクリックします。
- 4 アンインストール・プログラムのプロンプトに従います。

UNIX での Oracle BI のアンインストール

UNIX ベースのシステムから Oracle BI のコンポーネントを 1 つ以上アンインストールするには、次の手順に従ってください。

UNIX オペレーティング・システムで Oracle BI をアンインストールするには

- 1 ディレクトリ OracleBI_HOME¥uninstall に移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
./setup.bin
```
- 3 要求されたら、OC4J の Administrator パスワードを入力します。
- 4 アンインストール・プログラムのプロンプトに従います。

7

Oracle BI プロセスの構成

「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」(31 ページ) には、Oracle Business Intelligence コンポーネントのインストール直後に Oracle Business Intelligence を構成するためのプロセスが一覧表示されています。追加の構成が必要となるコンポーネントを次にまとめます。

- Oracle BI Server
この章で説明しています
- Oracle BI データソース
第 8 章「Oracle Business Intelligence 用データソースの構成」で説明しています。
- Oracle BI Presentation Services
第 9 章「Oracle BI Presentation Services の構成」で説明しています。
- Oracle BI Scheduler
第 10 章「Oracle Business Intelligence Scheduler の構成」で説明しています。
- Oracle BI Publisher
第 11 章「BI Publisher レポート・ツールの構成」で説明しています。

この章の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI のサービスおよびプロセスでの作業」(86 ページ)
- 「サーバー構成設定の更新」(98 ページ)
- 「Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新」(100 ページ)
- 「Oracle BI Server のローカライズについて」(104 ページ)
- 「Oracle BI のデモ・リポジトリのセキュリティについて」(104 ページ)

注意： Oracle Business Intelligence Server の構成は、ほとんどすべて、Oracle Business Intelligence Administration Tool を使用して行います。Server Administration Tool の使用方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

インストール後に必要な構成タスクの数は、次の要因によって決まります。

- 使用しているオペレーティング・システムの数とタイプ
- ネットワーク設定の複雑さ
- 選択したインストール・オプションのタイプ
- デプロイメントがローカライズされているかどうか

注意： このロードマップでは、インストール時に設定タイプとして「Complete」を選択していると想定しています。

Oracle BI のサービスおよびプロセスでの作業

サーバー・プロセスとして実行される Oracle BI コンポーネントは次のとおりです。

- Oracle Business Intelligence Server
- Oracle Business Intelligence Presentation Services
- Oracle Business Intelligence JavaHost
- Oracle Business Intelligence Scheduler
- Oracle Business Intelligence Cluster Controller

Oracle BI のサーバー・コンポーネントを構成するときは、次のタスクを行います。

- 「Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動」(86 ページ)
- 「Oracle BI シェル・スクリプト」(89 ページ)
- 「OC4J プロセスの起動と停止」(97 ページ)
- 「サーバー構成設定の更新」(98 ページ)
- 「Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新」(100 ページ)
- 「Oracle BI Server のローカライズについて」(104 ページ)

Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動

構成 (NQSSConfig.INI) ファイル、Web Catalog のファイル、リポジトリ (.rpd) ファイルおよびその他のファイルを変更する場合は、まず Oracle Business Intelligence のプロセスを停止してから再起動して、変更を有効にする必要があります。

注意：プロセスをいったん停止してから再起動する順序が重要です。
この順序は次のとおりです。

プロセスを停止して再起動する順序

- 1 Oracle Business Intelligence Server
- 2 Oracle Business Intelligence Presentation Services
- 3 Oracle Business Intelligence JavaHost
- 4 Oracle Business Intelligence Scheduler
- 5 Oracle Business Intelligence Cluster Controller

Oracle Business Intelligence のプロセスを停止および起動するには、次の項を参照してください。

- 「Windows での Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動」(87 ページ)
- 「UNIX での Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動」(88 ページ)

Windows での Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動

オペレーティング・システム：Windows のみ

Windows では、Oracle BI コンポーネントのプロセスは Windows サービスとして実行されます。Windows サービスを表示および管理するには、次の方法を使用します。

- コマンド C:\%WINDIR%\system32\services.msc を実行します。
- 「スタート」メニューから、「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」にナビゲートします。

Windows での Oracle BI プロセスの停止

次に示す手順では、Windows で実行中のサービスを停止する方法について説明します。

Windows で Oracle BI プロセスを停止するには

- 1 「サービス」ウィンドウで、「プロセスを停止して再起動する順序」(86 ページ) に示す Oracle BI サービスを探します。
- 2 Microsoft IIS を実行している場合は、World Wide Web Publishing サービスも停止します。
- 3 Oracle BI サービスを停止します。

注意：この処理は数分かかる場合があります。

Windows での Oracle BI プロセスの起動または再起動

Windows で Oracle BI サービスを起動するには、「プロセスを停止して再起動する順序」(86 ページ) に示した順番で Windows サービスを起動する必要があります。

注意：Oracle Business Intelligence では、同じマシンで同時に複数のサーバー・インスタンスはサポートされません。

Windows で Oracle BI プロセスを起動するには

- 1 「サービス」ウィンドウで、Oracle BI サービスを探して Oracle BI Server を起動します。

Oracle BI Server の起動には最長で 1 分かかります。

注意：Microsoft Windows 環境では、Services Manager から、サーバーを起動できないという誤ったエラーが返されます。この Microsoft Services Manager の問題により、Services Manager は 5 分後にタイムアウトします。ただし、「サービス」ウィンドウを更新すると、Oracle BI Server が引き続き起動していることが示されます。

Oracle BI Server サービスの起動が失敗すると、Log ディレクトリの nqServer.log ファイルにエラーが記録されます。

- 2 Microsoft IIS を実行している場合は、World Wide Web Publishing サービスを開始します。

- 3 ODBC Driver Manager で、AnalyticsWeb という DSN (タイプは Oracle BI Server) が Oracle BI Server に接続していることをテストします。

ユーザー名 Administrator とパスワード Administrator を使用します (大文字と小文字を区別)。これは、デモンストレーション・リポジトリ paint.rpd のデフォルトの管理者用資格証明です。

注意: 本番環境に移行する前に、デフォルトのパスワードを必ず変更してください。

- 4 Oracle BI Presentation Services を起動します。この処理は数分かかる場合があります。

UNIX での Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動

オペレーティング・システム: UNIX のみ

UNIX では、Oracle BI コンポーネントはシェル・スクリプトによって制御するプロセスとして実行されます。

「Oracle BI の設定スクリプトの使用」(88 ページ) では、Oracle BI の設定スクリプトの使用について説明します。UNIX のシェル・スクリプト名およびコマンドライン・パラメータを 89 ページの表 13 に示します。

Oracle BI の設定スクリプトの使用

Oracle BI では、シェル・スクリプトを使用して環境変数が設定され、特定コンポーネントのシェル・コマンドが実行されます。これらのスクリプトにより、UNIX システムの基本設定が行われます。これらのスクリプトはディレクトリ OracleBI_HOME/setup にあります。詳細は、「Oracle BI シェル・スクリプト」(89 ページ) を参照してください。

Oracle BI のシェル・スクリプトの使用について、推奨事項を次に示します。

- common.sh および .variant.sh は直接実行しないでください。これらのスクリプトは別のスクリプトから呼び出されます (run-sa.sh スクリプトの実行時など)。Presentation Services では、これらのシェル・スクリプトが設定スクリプト run-saw.sh から呼び出されます。
- 環境変数の設定や特定コンポーネントのシェル・コマンドの実行には、次のスクリプトが使用されます。
 - run-sa.sh
 - run-saw.sh
 - run-sch.sh
 - run-ccs.sh

前述のスクリプトは、Oracle BI プロセスの起動に適しています。たとえば、run-sa.sh を実行することは、次の順序でコマンドを実行することと同じです。

```
sa-init.sh
user.sh
cd OracleBI/server/Bin
nqsserver
```


- 前述のスクリプトを実行せずに環境変数を設定する（たとえば、schconfig を実行する）場合は、かわりに次のいずれかのコマンドを使用します。

```
sa-init.sh
または
sa-init64.sh
```

Oracle BI シェル・スクリプト

Oracle BI のサーバー・プロセスを UNIX で制御するための基本的なスクリプトが用意されています。これらのスクリプトは、ディレクトリ OracleBI_HOME/setup にあります。Oracle BI のスクリプト名および使用法を表 13 に示します。

表 13. Oracle BI のシェル・スクリプト

サーバー	オペレーティング・システム	使用方法
Oracle BI Server	Linux	run-sa.sh { start stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	Solaris	run-sa.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	AIX	run-sa.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	HP-UX Itanium	run-sa.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	HP-UX PA-RISC	run-sa.sh { start stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }

表 13. Oracle BI のシェル・スクリプト

サーバー	オペレーティング・システム	使用方法
Oracle BI Scheduler	Linux	run-sch.sh { start stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	Solaris	run-sch.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	AIX	run-sch.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	HP-UX Itanium	run-sch.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	HP-UX PA-RISC	run-sch.sh { start stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
Oracle BI Presentation Services	Linux	run-saw.sh { start stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	Solaris	run-saw.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	AIX	run-saw.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	HP-UX Itanium	run-saw.sh { start start64 stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	HP-UX PA-RISC	run-saw.sh { start stop forcestop autorestart [ポーリング間隔 (n 秒) > < 停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }

注意: これらのスクリプトでは、Presentation Services プロセスと JavaHost プロセスが一緒に実行されます。JavaHost プロセスを別個に制御するには、「UNIX での JavaHost サービスの起動と停止」(92 ページ)を参照してください。

表 13. Oracle BI のシェル・スクリプト

サーバー	オペレーティング・システム	使用方法
Oracle BI Cluster Controller	Linux	run-ccs.sh { start stop forcestop autorestart [<ポーリング間隔 (n 秒) > <停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	Solaris	run-ccs.sh { start start64 stop forcestop autorestart [<ポーリング間隔 (n 秒) > <停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [<ポーリング間隔 (n 秒) > <停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	AIX	run-ccs.sh { start start64 stop forcestop autorestart [<ポーリング間隔 (n 秒) > <停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [<ポーリング間隔 (n 秒) > <停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	HP-UX Itanium	run-ccs.sh { start start64 stop forcestop autorestart [<ポーリング間隔 (n 秒) > <停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] autorestart64 [<ポーリング間隔 (n 秒) > <停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }
	HP-UX PA-RISC	run-ccs.sh { start stop forcestop autorestart [<ポーリング間隔 (n 秒) > <停止から再起動までの待機時間 (n 秒) >] }

UNIX での Oracle BI のサーバー・プロセスの起動

UNIX で Oracle BI プロセスを実行するには、シェル・スクリプトを実行する必要があります。これらのシェル・スクリプトはフォルダ OracleBI_HOME/OracleBI/setup にあります。

特定の UNIX プラットフォームで Oracle BI プロセスを実行するスクリプトの名前およびパラメータについては、[89 ページの表 13](#) を参照してください。

UNIX で Oracle BI プロセスを起動または停止するには

■ [表 13](#) に示す stop または start パラメータを指定して、次のスクリプトを実行します。

- ./run-sa.sh
- ./run-saw.sh
- ./run-sch.sh
- ./run-ccs.sh

UNIX での JavaHost サービスの起動と停止

オペレーティング・システム：UNIX のみ

この項では、Oracle BI JavaHost サービスを停止および起動するための UNIX コマンドとオプションについて説明します。このスクリプトは、ディレクトリ OracleBI_HOME/web/javahost/bin にあります。

- UNIX では、次のコマンドラインを使用して JavaHost サービスを起動します。

```
./run.sh [-h] [-service] [-SawConfigRoot configrootdir] [-DefaultCordaRoot configrootdir] [-Config instanceconfig]
```

- UNIX では、次のコマンドラインを使用して JavaHost サービスを停止します。

```
./shutdown.sh [-h] [-Config instanceconfig] [-SawConfigRoot configrootdir] [-Port port] [-Host host]
```

92 ページの表 14 に、JavaHost サービスを起動および停止するためのコマンドライン・オプションを示します。「JavaHost サービスの構成」(93 ページ) も参照してください。

表 14. JavaHost サービスのコマンドライン・オプション

オプション	オペレーティング・システム	説明
-regserver	Windows	Oracle BI JavaHost サービスを手動の起動モードで登録します。
-regserverauto	Windows	Oracle BI JavaHost サービスを自動の起動モードで登録します。
-unregserver	Windows	Oracle BI JavaHost サービスを登録解除します。
-service	UNIX、Windows	JavaHost をサービス・モードで実行します。Windows では、このパラメータを明示的に使用しないでください。かわりに、「コントロール パネル」の「サービス」アプレットを使用して Oracle BI JavaHost サービスを起動および停止します。
-V	Windows	バージョン情報を表示します。
-SawConfigRoot configrootdir	UNIX、Windows	config ディレクトリの場所を指定します。デフォルトの場所は {SiebelAnalyticsData}/web/config です。
-DefaultCordaRoot configrootdir	UNIX、Windows	Corda インストールのルート・ディレクトリの場所を指定します。instanceconfig.xml に構成キー JavaHost/Charts/CordaRoot が設定されていない場合のみ、このパラメータが JavaHost サービスによって使用されます。
-Config instanceconfig	UNIX、Windows	instanceconfig.xml のパスを指定します。デフォルトのパスは {SiebelAnalyticsData}/web/config/instanceconfig.xml です。

表 14. JavaHost サービスのコマンドライン・オプション

オプション	オペレーティング・システム	説明
-Port port	UNIX	JavaHost のリスニング・ポートを識別します。
-Host hostname	UNIX	JavaHost サービスを実行しているコンピュータを識別します。

Oracle BI JavaHost サービスのパラメータについて

UNIX システムでは、shutdown.sh の各パラメータは、ホストおよびポートの接続情報を渡して JavaHost サービスに停止信号を送信する役割を果たします。これらのパラメータの相互作用について、次のルールで説明します。

- パラメータが何も指定されていない場合は、ホストに *localhost*、ポートに *9810* が使用されます。
- -Host または -Port のいずれかのパラメータが指定されている場合、-Config パラメータと -SawConfigRoot パラメータは無視されます。
- -Host が指定されていて -Port が指定されていない場合は、ポート番号に *9810* が使用されます。
- -Config パラメータが設定されている場合は、-SawConfigRoot パラメータが無視され、かわりに instanceconfig.xml ファイルを使用して JavaHost のリスニング・ポートが検出されます。このとき、JavaHost サービスはローカル・コンピュータで稼動していると仮定されます (Host = localhost)。
- その他すべてのパラメータがない場合は、-SawConfigRoot パラメータを使用して instanceconfig.xml ファイルの場所が検出されます。

JavaHost サービスの構成

JavaHost サービスを構成するには、instanceconfig.xml ファイルにある JavaHost サービスの構成パラメータを編集します。93 ページの表 15 に、JavaHost パラメータの一覧とその説明を示します。各パラメータは、/WebConfig/ServerInstance ノードから始まる相対パスによって識別されます。

表 15. JavaHost サービスの構成パラメータ

JavaHost サブ・コンポーネント	パラメータ	パラメータ・タイプ	説明
Batik	JavaHost/Batik/ InputStreamLimitInKB	Integer、 正の値のみ	Batik レンダリング・リクエストの最大入力サイズ。値にゼロを指定するとこの制限は無効になります。デフォルトは 1024 です。

表 15. JavaHost サービスの構成パラメータ

JavaHost サブ・コンポーネント	パラメータ	パラメータ・タイプ	説明
Corda	JavaHost/Charts/ChartRoot	String	チャート・サーバーのルート・ディレクトリのパス。デフォルトは {CordaRoot}/chart_root です。
	JavaHost/Charts/CordaRoot	String	Corda インストールのパス。デフォルトは、コマンドラインで渡される値です。
	JavaHost/Charts/EnableConsoleOutput	Yes/No	Corda コンソールの診断メッセージを有効または無効にします。デフォルトは No です。
	JavaHost/Charts/InputStreamLimitInKB	Integer、 正の値のみ	チャート・リクエストの最大入力サイズ。値にゼロを指定するとこの制限は無効になります。デフォルト値でチャートを生成できない場合は、最適な値が見つかるまでこの設定を徐々に上げていきます。デフォルトは 1024 です。
FOP processor	JavaHost/PDF/InputStreamLimitInKB	Integer、 正の値のみ	PDF リクエストの最大入力サイズ。値にゼロを指定するとこの制限は無効になります。デフォルトは 1024 です。
	JavaHost/PDF/UserConfigFile	String	FOP 構成ファイル。デフォルトは {SADATADIR}/web/config/userconfig.xml です。
Socket	JavaHost/Listener/PermittedClientList	String	JavaHost が着信接続を受け入れる、IP アドレスおよびホスト名のカンマ区切りリスト。すべてのクライアント接続を受け入れるには、このパラメータにアスタリスク (*) を設定します。デフォルトは 127.0.0.1 です。
	JavaHost/Listener/Port	Integer、 正の値のみ	TCP/IP リスニング・ポート。デフォルトは 9810 です。

表 15. JavaHost サービスの構成パラメータ

JavaHost サブ・コンポーネント	パラメータ	パラメータ・タイプ	説明
Tuning	JavaHost/JobManager/IdleThreadTimeoutMIs	Integer、 正の値のみ	スレッド・プール内のスレッドのアイドル・タイムアウト（秒単位）。タイムアウト時間が経過すると、スレッドは停止します。デフォルトは 30000 秒（5 分）です。
	JavaHost/JobManager/MaxPendingJobs	Integer、 正の値のみ	保留中の処理リクエストの最大数。これを超えると、JavaHost は処理リクエストを拒否します。デフォルトは 100 です。
	JavaHost/JobManager/MaxThreads	Integer、 正の値のみ	内部スレッド・プールの最大スレッド数。デフォルトは 100 です。
	JavaHost/JobManager/MinThreads	Integer、 正の値のみ	内部スレッド・プールの最小スレッド数。デフォルトは 1 です。
	JavaHost/MessageProcessor/SocketTimeout	Integer、 正の値のみ	ソケットのアイドル・タイムアウト（ミリ秒単位）。これを超えると、ソケットはアイドル・ソケット・プールに戻されます。JavaHost は、ソケット・ポーリング・メカニズムを使用して、単ースレッドのアイドル・ソケット全体に対する新しいデータを待機します。デフォルトは 5000 ミリ秒（5 秒）です。
UNIX JVM	JVM パラメータ（UNIX）	N/A	UNIX では、{SAROOT}/web/sawjvahost/setup/saw.sh スクリプトにある JAVAOPTIONS 変数の値を変更して、Java のコマンドライン・パラメータを修正できます。

表 15. JavaHost サービスの構成パラメータ

JavaHost サブ・コンポーネント	パラメータ	パラメータ・タイプ	説明
Windows JVM	JavaHome	String	JDK または JRE インストールのルート・ディレクトリのパス。デフォルトは、JAVA_HOME 環境変数の値です。
	JavaHost/InitLoggerDir	String	sawjavahostsvc.exe が Java をロードする前にログ情報を書き込むディレクトリの絶対パス。このパラメータの値が空の場合、ロギングは無効になります。デフォルトは {SADATADIR}/web/log/javahost です ({SADATADIR} は、SiebelAnalyticsData ディレクトリのフルパス)。
	JavaHost/JniLibrary	String	jvm.dll の絶対パス。デフォルトは {JavaHome}/jre/bin/server/jvm.dll です。このファイルが存在しない場合、デフォルトは {JavaHome}/bin/server/jvm.dll になります ({JavaHome} は、JDK または JRE インストールのパス)。
	JavaHost/JVMOptions	String	Java のコマンドライン・パラメータ。デフォルトは、-Xms128m -Xmx256m -Xrs "-Djava.class.path={CLASSPATH}" "-Djava.awt.headless=true" "-Djava.util.logging.config.file={SADATADIR}/web/config/logconfig.txt" です ({CLASSPATH} はセミコロンで区切られた JavaHost の jar ファイルのリスト)。
	JavaHost/UseDefaultJVMOptions	Yes/No	No に設定されている場合、JavaHost/JVMOptions は Java に対する完全なコマンドラインを指定します。Yes に設定されている場合、JVMOptions パラメータの値はそのデフォルト値とマージされます。デフォルトは Yes です。

OC4J プロセスの起動と停止

「Basic」インストール・タイプを選択すると、Oracle Containers for Java コンポーネント（OC4J）がインストールされます。Oracle Containers for Java コンポーネント（OC4J）内の Java プロセスは、Windows ではコンピュータの再起動後、UNIX システムではインストールの完了後に、自動的に再起動します。ただし、OC4J コマンド・スクリプトを使用して OC4J プロセスを起動または再起動することもできます。

注意： OC4J コマンド・スクリプトは OracleBI_Home/oc4j_bi/bin にあります。

OC4J コマンド・スクリプトでは次のコマンドがサポートされています。

使用方法： oc4j [オプション]

オプション：

-start: OC4J を起動

-shutdown -port <ORMI ポート> -password <パスワード>: OC4J を停止

ヒント： このコマンドは、RMI ポート番号または OC4J パスワードが変更されている場合に実行します。

OC4J を停止および起動するその他の方法は、次の項で説明します。

- 「OC4J プロセスの起動」(97 ページ)
- 「OC4J プロセスの停止」(98 ページ)
- 「OC4J プロセスの再起動」(98 ページ)

注意： OC4J の起動方法および停止方法の詳細は、OracleBI_HOME\oc4j_bi にある Readme.txt ファイルを参照してください。

OC4J プロセスの起動

OC4J は、次の手順に従って起動します。

OC4J Java プロセスを手動で起動するには

OC4J コンポーネント・プロセスを起動するには、次のいずれかの方法を使用します。

- UNIX では、シェル・プロンプトを開きます。
 - ディレクトリを OracleBI_HOME/oc4j_bi/bin に変更します。
 - 次のコマンドを実行します。


```
./oc4j -start&
```

注意： 起動コマンドの最後に &（アンパサンド）を付加することで、プロセスがバックグラウンド・プロセスとして実行されます。これにより、端末のウィンドウが閉じられてもプロセスは継続して実行されません。

- Windows では、DOS プロンプトを起動します。
 - ディレクトリを OracleBI_HOME\oc4j_bi\bin に変更します。
 - 次のコマンドを実行します。

```
oc4j -start
```
- Windows の「スタート」メニューで、「すべてのプログラム」 → 「Oracle Business Intelligence」 → 「Start OC4J」を選択します。

OC4J プロセスの停止

OC4J コンポーネント・プロセスを停止するには、次のいずれかの方法を使用します。

- Windows の「スタート」メニューで、「すべてのプログラム」 → 「Oracle Business Intelligence」 → 「Stop OC4J」を選択します。
- 使用しているオペレーティング・システム用のプロセス停止コマンドを使用します（UNIX の場合は kill）。コンソール・ウィンドウに、停止シグナル受信時に OC4J が停止していることが表示されます。
- OC4J プロセスを起動した MS-DOS ウィンドウで、[Ctrl] キーを押しながら [C] キーを押します。
- コマンド・プロンプトで次のコマンドを実行します。

```
java -jar OracleBI_HOME/oc4j_bi/j2ee/home/admin.jar ormi://localhost:23791  
oc4jadmin <oc4jadmin のパスワード> -shutdown force
```

<oc4jadmin のパスワード> は、oc4jadmin ユーザーのパスワードです。

OC4J プロセスの再起動

OC4J プロセスを手動で再起動する方法は、起動方法と同じです。「[OC4J プロセスの起動](#)」(97 ページ) を参照してください。

注意： Oracle Containers for Java を使用している場合は、コンピュータの再起動後、OC4J コンポーネントの Java プロセスは自動的に再起動できません。Oracle BI を実行しているコンピュータを再起動した場合は、OC4J プロセスを手動で再起動する必要があります。

サーバー構成設定の更新

初期化を行うと、インストール後の、デフォルトの事前定義済みの構成のコンポーネント構成ファイルが、自動的に更新されます。Oracle Business Intelligence では、起動時に初期化ファイルを使用してパラメータが設定されます。この初期化ファイルは NQConfig.INI ファイルです。このファイルは、インストール・フォルダである OracleBI_HOME\server\Config (Windows オペレーティング・システム) または OracleBI_HOME/server/Config (UNIX オペレーティング・システム) にあります。

NQSConfig.INI を編集するには、「Oracle BI 構成ファイル・パラメータのエントリの変更」(166 ページ) を参照してください。

注意： Oracle Application Server を使用している組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお勧めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用している組織では、JConsole を使用することをお勧めします。詳細は、「Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新」(100 ページ) を参照してください。

新規のインストールを構成する場合や、設定を変更して再構成する場合は、この項の汎用的な手順が役に立ちます。たとえば、Oracle BI Presentation Services サーバーの構成設定を変更して、Scheduler 管理者資格証明を含む資格証明ストアを特定できるようにする場合があります。

構成設定の一般的な更新手順は次のとおりです。

- 1 「資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成」(145 ページ) を参照して、Oracle BI Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルで設定が必要なパラメータを理解します。
- 2 「Oracle BI Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルの更新」の手順を使用して、ファイルを適切に編集します。

注意： サーバーの実行中に、NQSConfig.INI ファイル、instanceconfig.xml ファイル、Web Catalog のファイルまたはリポジトリ・ファイルを変更する場合は、サーバーをいったん停止してから再起動して変更を有効にする必要があります。「Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動」(86 ページ) を参照してください。

Oracle BI Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルの更新

Oracle BI Presentation Services の構成設定は、ディレクトリ OracleBIData_HOME¥web¥config にあるファイル instanceconfig.xml で行います。

instanceconfig.xml 内のエントリを変更し、内部デフォルト設定を上書きする新しいエントリを追加することによって、Presentation Server をカスタマイズできます。

instanceconfig.xml の変更が必要なのは、Presentation Server Catalog の名前など、デフォルトのパラメータを変更する場合や、クライアント接続の時間制限など、内部デフォルト設定を上書きする場合のみです。

Oracle Business Intelligence Presentation Services をカスタマイズするためのエントリの詳細、および instanceconfig.xml ファイルのカスタマイズに関する一般的な情報は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

注意： 構成ファイルを編集する前に、必ずバックアップ・コピーを作成してください。

Oracle BI Presentation Services の instanceconfig.xml の設定を更新するには

- 1 必要に応じて、サーバーを停止します。「Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動」(86 ページ) を参照してください。

- 2 サーバー・マシンで、該当する instanceconfig.xml ファイルを探します。

注意： Oracle Business Intelligence Presentation Services サーバーと Oracle Business Intelligence Scheduler サーバーでは、それぞれ独自の instanceconfig.xml ファイルが構成用に使用されています。必ず、該当するサーバーに関連付けられているファイルを使用してください。

- 3 XML エディタを使用してファイルを開きます。
- 4 instanceconfig.xml ファイルを変更します。
- 5 instanceconfig.xml ファイルへの変更を保存します。
- 6 サーバーを再起動します。

Oracle BI Server の NQConfig.INI ファイルの更新

Oracle Business Intelligence Server ソフトウェアでは、NQConfig.INI という初期化ファイルを使用して起動時にパラメータが設定されます。このファイルには、各インストールの要件に基づいて動作をカスタマイズするパラメータが含まれています。NQConfig.INI ファイルの変更の詳細は、「[Oracle BI 構成ファイル・パラメータのエントリの変更](#)」(166 ページ) を参照してください。

Oracle BI Server の構成設定を更新するには

- 1 サーバーを停止します。「[Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動](#)」(86 ページ) を参照してください。
- 2 instanceconfig.xml ファイルまたは NQConfig.INI ファイルを変更します。

注意： Oracle Application Server を使用している組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお勧めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用している組織では、JConsole を使用することをお勧めします。詳細は、「[Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新](#)」(100 ページ) を参照してください。

- 3 サーバーを再起動します。

Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新

アプリケーション： Oracle Application Server のみ

この項では、Oracle BI のデプロイメントを既存の Oracle Applications インストールにインストールした場合の、Oracle BI 構成ファイルの変更方法について説明します。Oracle BI のインストール時、Oracle Application Server の次のファイルが変更されます。

- ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml
- ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf
- ORACLE_HOME/j2ee/home/config/server.xml

注意： 中間層インストールが複数のマシン間でクラスタ化されている場合は、Oracle AS Control または JConsole を実行して、各マシンの構成ファイルごとに同じ変更を行う必要があります。

次のタスクでは、Oracle Application Server ツールを使用して Oracle BI の構成設定を変更する方法について説明します。

- 「Oracle Application Server Control を使用した構成ファイルの変更」(101 ページ)
- 「JConsole を使用した構成ファイルの変更」(102 ページ)

Oracle Application Server Control を使用した構成ファイルの変更

ここでは、Oracle Application Server Control を使用して Oracle BI の構成設定を変更する方法について説明します。

Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更するには

- 1 Web ブラウザを起動し、Application Server Control の URL を入力して、Oracle Application Server Control を表示します。

URL には、構成する Oracle BI OC4J インスタンスの完全修飾されたホスト名およびドメインを含める必要があります。例：http://<host.domain>:8888/em

ヒント： 使用している Oracle Application Server Control の URL を確認するには、管理者に問い合せてください。

Oracle Application Server Control OC4J インスタンスが実行されていない場合は、次の手順を実行します。

- Windows インストールの場合は、MS-DOS ウィンドウを表示して、OC4J を実行するコマンドを入力します。

Oracle Application Server Control OC4J コマンド・ファイルのパスが該当するマシン用に設定されていない場合は、OracleBI_HOME¥oc4j-bi¥bin ディレクトリ内の場所のフルパスをコマンドに含める必要があります。たとえば、次のコマンドを入力できます。

```
D:¥OracleBI_HOME¥oc4j-bi¥bin¥oc4j -start
```

これで Oracle Application Server Control OC4J インスタンスが起動します。

- この手順の**手順 1**に戻ります。
- 2 要求されたら、Application Server Control のユーザー名とパスワードを入力します。
 - 3 「OK」をクリックして Oracle Application Server Control OC4J のホーム・ページを表示します。
 - 4 「アプリケーション」タブをクリックして、J2EE アプリケーションと、OC4J インスタンスにデプロイされているアプリケーション・コンポーネントを表示します。
 - 5 「Oracle BI Management」行の「アプリケーション定義の MBeans」列にあるアイコンをクリックして「アプリケーション MBean」ページを表示します。

- 6 左側の列のプラス (+) 記号をクリックしてナビゲーション・ツリーを開きます。

ナビゲーション・ツリーが展開してリンクが表示されるので、構成の属性値を表示または更新します。ナビゲーション・ツリーの中の各ノードは、次の表に示す構成ファイルを表しています。

ノード名	コンポーネント名	構成ファイル
Analytics configuration	Oracle BI Server	NQSConfig.INI
Cluster configuration	Oracle BI Cluster	NQClusterConfig.INI
Isapi configuration	ISAPI	IsapiConfig.INI
Presentation Server Configuration	Oracle BI Presentation Services	instanceconfig.xml

- 7 ナビゲーション・ツリーのリンクをクリックして、構成ファイル属性のグループの詳細を表示します。

たとえば、Oracle BI 構成ノードの「キャッシュ」リンクをクリックして、キャッシュに関連する属性と、各属性の説明および現在の値を表示します。

- 8 次のいずれかの方法で属性値を更新します。

- 現在のページを使用する
 - 該当する行の「値」フィールドに、新しい属性値を入力します。
 - 「適用」をクリックして変更を適用します。
- 設定を表示または更新するページを表示する
 - 「名前」列のリンクをクリックして新しいページを表示します。
 - 「値」フィールドに、新しい属性値を入力します。
 - 「適用」をクリックして変更を適用します。
 - 「戻る」をクリックしてページを閉じ、ナビゲーション・ツリーを表示します。

- 9 ここまでの手順を繰り返して、別の構成属性値を表示または更新します。

JConsole を使用した構成ファイルの変更

ここでは、JConsole を使用して Oracle BI の構成設定を変更する方法について説明します。

JConsole を使用して構成ファイルを変更するには

- 1 MS-DOS ウィンドウを表示して、JConsole を実行するコマンドを入力します。

JConsole 実行可能ファイルのパスが該当するマシン用に設定されていない場合は、JDK 1.5 ホーム内の場所のフルパスをコマンドに含める必要があります。

たとえば、次のコマンドを入力できます。

```
D:¥jdk1.5.0.6¥bin¥jconsole
```

JConsole の「JConsole: Connect to Agent」ウィンドウに「Local」タブが表示されます。

注意: オラクル社では、JConsole への接続に関しては「Local」タブのみをサポートしています。

- 2 「JConsole: Connect to Agent」ウィンドウが表示されない場合は、次の手順を実行します。
 - 新しい MS-DOS ウィンドウを起動します。
 - Oracle Business Intelligence がインストールされているディレクトリに移動します。
たとえば、Oracle BI が D: ドライブにインストールされている場合は、次のコマンドを入力してディレクトリを変更します。

```
D:¥>cd D:¥OracleBI_HOME¥systemmanagement
```
 - JConsole の実行を可能にするエージェントを起動するコマンドを入力します。
たとえば、次のコマンドを入力します。

```
D:¥OracleBI_HOME¥systemmanagement¥>runagent
```
- 3 新しい MS-DOS ウィンドウを表示して、JConsole を実行するコマンドを入力します。
- 4 「JConsole: Connect to Agent」ウィンドウの「Local」タブで、「Class and Argument」に oracle.bi.analytics.management.StandardConsoleAgent を選択し、「Connect」をクリックして JConsole を表示します。
- 5 「MBeans」ページの「Attributes」タブを表示します。
- 6 ナビゲーション・ツリーで「Oracle BI Management」ノードを開きます。
- 7 左側の列の「Configuration」ノードをクリックしてナビゲーション・ツリーを開きます。
ナビゲーション・ツリーが展開してリンクが表示されるので、構成の属性値を表示または更新します。ナビゲーション・ツリーの中の各ノードは、次の表に示す構成ファイルを表しています。

ノード名	コンポーネント名	構成ファイル
Analytics configuration	Oracle BI Server	NQConfig.INI
Cluster configuration	Oracle BI Cluster	NQClusterConfig.INI
Isapi configuration	ISAPI	IsapiConfig.INI
Presentation Server Configuration	Oracle BI Presentation Services	instanceconfig.xml

- 8 ナビゲーション・ツリーで任意のノードをクリックし、任意の項目をクリックして、構成ファイル属性のグループの詳細を「Attributes」タブに表示します。
たとえば、「Analytics configuration」ノードの「Cache」項目をクリックして、キャッシュに関連する属性と、各属性の説明および現在の値を表示します。
- 9 「Attributes」タブから次のように属性値を更新します。
 - 該当する行の「Value」フィールドに、新しい属性値を入力します。
 - 「Refresh」をクリックして変更を適用します。
- 10 ここまでの手順を繰り返して、別の構成ファイルの属性値を表示または更新します。

Oracle BI Server のローカライズについて

Oracle BI Server の現在のデプロイメントをローカライズする場合は、付録 B 「Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ」の次の項も参照してください。

- 「Oracle BI 用ローライゼーション変数の変更」(209 ページ)
- 「UNIX でのロケール・パラメータの設定」(209 ページ)
 - 注意:** UNIX システムのデプロイメントの場合は、「UNIX でのロケール・パラメータの設定」(209 ページ)も参照してください。
- 「Oracle BI 用翻訳テーブルのメンテナンスのプロセス」(213 ページ)

Oracle BI のデモ・リポジトリのセキュリティについて

Windows では、Oracle Business Intelligence Infrastructure のデフォルトのリポジトリは paint.rpd です。paint.rpd デモ・リポジトリは、「Basic」インストールを実行した場合にのみ提供されます。「Advanced」インストールを実行した場合は、このデモ・リポジトリはインストールされません。

旧バージョンの Oracle Business Intelligence からアップグレードする場合は、Oracle Business Intelligence をインストールする前に『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

開発環境から本番環境へ移行する場合は、104 ページの表 16 に示すユーザー、ロール、パスワードで Oracle BI のアカウントが作成されていることに注意してください。

注意: 「Basic」インストールでインストールされた paint.rpd のユーザーは、パスワードの有効期限が 90 日に設定されています。90 日の期間は、Oracle BI Server のインストール実行日から始まります。Administrator ユーザーのパスワードには有効期限は設定されません。

本番環境にデプロイする前に、ユーザー名やパスワードを変更または削除して、セキュリティ侵害を防止してください。

表 16. Oracle BI で作成されるデフォルトのリポジトリ・アカウント

ユーザー・タイプ	ロール	ユーザー名	パスワード
管理者	管理者	Administrator	Administrator
管理者、Oracle BI デモ・リポジトリ paint.rpd	管理者	Administrator	Administrator
	管理者	Administrator	Administrator
管理者以外、Oracle BI デモ・リポジトリ paint.rpd	管理者のメンバー	paint	paint
	エグゼクティブのメンバー	exec	exec
	地域統括マネージャのメンバー	mgr	mgr

8

Oracle Business Intelligence 用 データソースの構成

このプロセスは、「[Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ](#)」の一部です。

Oracle Business Intelligence インストーラによるインストールが終了した後、Oracle BI Server コンポーネントを適切に構成するためには、さらに必要なタスクがあります。インストール後に必要なデータソース構成タスクの数は、デプロイメントの特性によって異なります。

統合されたデータ・アプリケーションを使用する Oracle Business Intelligence のデプロイメントでは、すべてのデータベース接続を環境に応じて再構成する必要があります。再構成には次の手順が含まれます。

- データベース・タイプの変更
- データベース接続の変更
- ユーザー名とパスワードの更新

次の各項では、データソースを Oracle Business Intelligence で使用できるように構成する方法を示します。

- [「Oracle BI データベース設定の変更のプロセス」](#) (106 ページ)
- [「UNIX でのデータベース設定スクリプトの検出」](#) (107 ページ)
- [「Oracle BI のデータベース・タイプの変更」](#) (109 ページ)
- [「データソースとしてのネイティブ・データベースの構成」](#) (110 ページ)
- [「Oracle BI のデータベース接続プール設定の変更」](#) (111 ページ)
- [「初期化ブロックの構成について」](#) (111 ページ)
- [「UNIX での Oracle BI の ODBC データソースの構成」](#) (112 ページ)
- [「Solaris 用の ORACLE_HOME 変数の設定」](#) (114 ページ)
- [「UNIX における Oracle BI Server での Oracle データベースの構成」](#) (114 ページ)
- [「Windows での Oracle BI Server 用の Oracle データベースの構成」](#) (115 ページ)
- [「Oracle クライアントでの HP-UX の構成」](#) (115 ページ)
- [「UNIX での DB2 Connect の構成」](#) (117 ページ)
- [「UNIX での Oracle BI 用 Teradata データソースの構成」](#) (118 ページ)
- [「ネイティブ・データベースでの行数の更新について」](#) (120 ページ)

Oracle BI データベース設定の変更のプロセス

Oracle Business Intelligence で使用するデータベースでは、Oracle BI のデータベース・タイプまたはデータベース接続設定の変更が必要な場合があります。これが該当するデプロイメントでは、次のタスクを実行してください。

- データベース・タイプと接続のプロパティを確認します。
 - 「UNIX でのデータベース設定スクリプトの検出」(107 ページ) を参照してください。
 - **物理的データベース・タイプ**
「Oracle BI のデータベース・タイプの変更」(109 ページ) を参照してください。詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』のデータベース・オブジェクトの設定に関する項を参照してください。
 - **データベース接続のプロパティ**
業務系アプリケーションのリポジトリには、事前に構成済のデータベース接続が含まれています。実際の環境に適合するようにデータベース接続を再構成する必要があります。次の項を参照してください。
 - 「Oracle BI のデータベース接続プール設定の変更」(111 ページ)
 - 「UNIX でのデータベース接続プール設定の変更について」(111 ページ)詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』の接続プールの設定および管理に関する項を参照してください。
- データベースの再構成後、次のタスクが必要な場合があります。
 - **UNIX マシンへのリポジトリ・ファイルのコピー**
AIX、HP-UX または Solaris を使用している場合は、リポジトリ・ファイルをその UNIX マシンにコピーします。
- 現在のデプロイメントで仮想プライベート・データベース (VPD) を利用している場合は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』の VPD に関する項を参照してください。
- 行数の更新機能を使用しており、異機種環境 (UNIX 上でサーバー、Windows 上で Oracle Business Intelligence Administration Tool) を実行している場合は、「ネイティブ・データベースでの行数の更新について」(120 ページ) を参照してください。
- Oracle DBMS を使用する場合は、次のタスクが必要な場合があります。
 - **初期化ブロックの構成**
通常、Oracle など、サポートされているデータベース・プラットフォームのいずれかを使用する場合は、初期化ブロックを再構成する必要はありません。
 - 「Solaris 用の ORACLE_HOME 変数の設定」(114 ページ)
 - 「UNIX における Oracle BI Server での Oracle データベースの構成」(114 ページ)
 - 「Windows での Oracle BI Server 用の Oracle データベースの構成」(115 ページ)
 - 「Oracle クライアントでの HP-UX の構成」(115 ページ)
- IBM DB2 DBMS を使用する場合は、次のタスクが必要な場合があります。
 - 「UNIX での DB2 Connect の構成」(117 ページ)

- ODBC を使用する場合は、次のタスクが必要です。
 - Oracle BI の ODBC データソースの構成
「Oracle BI Client インストールのテスト」(64 ページ) を参照してください。
 - Windows では、Oracle Business Intelligence の ODBC データソース名は、Server Administration Tool で構成します。『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』の ODBC データソース名の構成に関する項を参照してください。
- 注意：**このリリースでは、ODBC 3.5 インタフェースがサポートされています。以前の ODBC ドライバの名前は nqsodbc20 に変更されています。

UNIX でのデータベース設定スクリプトの検出

オペレーティング・システム：UNIX のみ

データベース：すべてのデータベース

データベース設定スクリプトの妥当性を検証する必要があります。これは、Oracle Business Intelligence の起動スクリプトからコールされるためです。ファイルを編集して、選択したデータベース・クライアントの環境設定を含めます。データベース関連の設定スクリプトを、次のファイルに含めてください。

OracleBI_HOME/setup/user.sh

「データソースとしてのネイティブ・データベースの構成」(110 ページ) も参照してください。

注意：64 ビット・サーバーを実行するか、32 ビット・サーバーを実行するかを選択できます。適切なクライアント DLL ファイルが存在し、user.sh で正しく設定されていることを確認します。使用しない設定はコメントアウトして、使用する設定のコメントを解除します。

user.sh から抜粋した、有効なデータベース設定スクリプトの例を次に示します。ほとんどの場合、いくつかの行のコメントを解除するだけで済みます。

```
# 32 bit Oracle BI

#####
# Solairs Platform
#####
#set +u

# Oracle Parameters
#-----
#ORACLE_HOME=/export/home/oracle/10g
#export ORACLE_HOME
#TNS_ADMIN=$ORACLE_HOME/network/admin
#export TNS_ADMIN
#PATH=$ORACLE_HOME/bin:/opt/bin:$PATH
#export PATH
#LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$LD_LIBRARY_PATH:/opt/j2se/jre/lib/sparc
#export LD_LIBRARY_PATH
#-----
```

```
# DB2 Parameters
#-----
#make sure the /DB2INSTANCE/sql1lib/lib points to 32 lib file
#. /DB2INSTANCE/sql1lib/db2profile
#-----

#####
# Linux Platform
#####
#set +u

# Oracle Parameters
#-----
#ORACLE_HOME=/export/home/oracle/10g
#export ORACLE_HOME
#TNS_ADMIN=$ORACLE_HOME/network/admin
#export TNS_ADMIN
#PATH=$ORACLE_HOME/bin:/opt/bin:$PATH
#export PATH
#LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$LD_LIBRARY_PATH
#export LD_LIBRARY_PATH
#-----

# DB2 Parameters
#-----
#make sure the /DB2INSTANCE/sql1lib/lib points to 32 lib file
#. /DB2INSTANCE/sql1lib/db2profile
#-----

#####
# HPUX Platform
#####
#set +u

# Oracle Parameters
#-----
#ORACLE_HOME=/export/home/oracle/10g
#export ORACLE_HOME
#TNS_ADMIN=$ORACLE_HOME/network/admin
#export TNS_ADMIN
#PATH=$ORACLE_HOME/bin:/opt/bin:$PATH
#export PATH
#SHLIB_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$SHLIB_PATH:/opt/j2se/jre/lib/hp700
#export SHLIB_PATH
#-----

# DB2 Parameters
#-----
#make sure the /DB2INSTANCE/sql1lib/lib points to 32 lib file
#. /DB2INSTANCE/sql1lib/db2profile
#-----

#####
# AIX Platform
```

```
#####
#set +u

# Oracle Parameters
#-----
#ORACLE_HOME=/export/home/oracle/10g
#export ORACLE_HOME
#TNS_ADMIN=$ORACLE_HOME/network/admin
#export TNS_ADMIN
#PATH=$ORACLE_HOME/bin:/opt/bin:$PATH
#export PATH
#LIBPATH=$ORACLE_HOME/lib32:$LIBPATH:/opt/j2se/jre/lib/sparc
#export LIBPATH

#-----

# DB2 Parameters
#-----
#make sure the /DB2INSTANCE/sql1lib/lib points to 32 lib file
#. /DB2INSTANCE/sql1lib/db2profile
#-----
```

注意：このシェル・スクリプトの抜粋は単なる例であり、特定のソフトウェア・プラットフォームに対してお薦めするものではありません。『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。

Oracle BI のデータベース・タイプの変更

この項は、「[Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ](#)」の一部です。

Oracle Business Intelligence に同梱されているデフォルトのタイプ以外のデータベース・タイプを使用している場合は、次の手順に従ってデータベース・タイプを変更します。

データベース・タイプを変更するには

- 1 Windows コンピュータで、Server Administration Tool をオフライン・モードで起動します。

注意：デフォルトでは、リポジトリのユーザー名は Administrator、リポジトリのパスワードも Administrator です。ただし、管理者がデフォルトのパスワードを変更している場合があります。Server Administration Tool の使用方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

- 2 「Physical」レイヤーで、データベース接続をダブルクリックして「Properties」ウィンドウを開きます。
- 3 「Data Source Definition」ドロップダウン・リストを使用してデータベース・タイプを選択します。
データベース・タイプを変更したら、「OK」をクリックします。

警告：本番環境に移行する前に、デフォルトのパスワードを必ず変更してください。

データソースとしてのネイティブ・データベースの構成

オペレーティング・システム：UNIX のみ

データベース：すべてのデータベース

Oracle BI を UNIX オペレーティング・システム・プラットフォームにインストールする場合は、user.sh ファイルを正しいデータベース情報に更新する必要があります。

ネイティブ・データベースをデータソースとして構成するには

- 1 別の telnet セッションとしてログオンします。
- 2 OracleBI_HOME/setup ディレクトリに移動します。
- 3 vi または別のテキスト・エディタを使用して、odbc.ini ファイルを開きます。

odbc.ini に次のセクションを追加します。

```
[Name of the DSN]

Driver=<DB ODBC ドライバ・パス >/drivers/tdata.so
Description=<DB を実行しているマシン + バージョン >
DBCName=< データベース・サーバーの IP アドレス >
LastUser=
Username=
Password=
Database=
DefaultDatabase=< ターゲット・データベースまたはユーザーの名前 >
```

注意：OCI 接続を使用する Oracle データベースでは、tnsnames エントリを入力する前に Web クライアントを構築します。

- 4 さらに、odbc.ini ファイルの [ODBC Data Sources] セクションに次のエントリを追加します。

```
[database DSN]=tdata.so
```

- 5 同じディレクトリにある user.sh スクリプトを開き、ライブラリ・パス行を追加して、オペレーティング・システムおよびシェルに基づいた Oracle BI データソースを構成します。

注意：user.sh ファイルを検出して該当するコマンドのコメントを解除する方法は、「UNIX でのデータベース設定スクリプトの検出」(107 ページ) に示しています。

- 6 Server Administration Tool を使用してリポジトリを開き、適切な物理データベースの接続プール・データソース名として作成した新しい DSN を追加します。
- 7 Oracle BI サーバーを起動します。実行中の場合は、停止してから再起動します。

Oracle BI のデータベース接続プール設定の変更

この項は、「[Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ](#)」の一部です。

Oracle Business Intelligence で使用するデータベースでは、Oracle Business Intelligence のデータベース接続プール設定の変更が必要な場合があります。Oracle Business Intelligence Server インストールをテストするには、1 つ以上のリポジトリにあわせて、データベースの名前、ユーザー ID とパスワード、その他の設定などの接続プール設定を変更することが必要になる場合もあります。

データベース接続は Server Administration Tool で管理します。適切な手順は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

注意： Server Administration Tool は Windows システムでのみ使用できます。UNIX システムにデプロイする場合は、Windows マシンで変更してから、FTP を使用して、バイナリ・モードでリポジトリ・ファイルを UNIX マシンにコピーしてください。

UNIX でのデータベース接続プール設定の変更について

オペレーティング・システム： UNIX のみ

データベース： すべてのデータベース

この項は、「[Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ](#)」の一部です。

統合されたデータ・アプリケーションを使用する Oracle BI のデプロイメントでは、すべてのデータベース接続を環境に応じて再構成する必要があります。再構成には次の手順が含まれます。

- データベース・タイプの変更
- データベース接続の変更
- ユーザー名とパスワードの更新

データベース接続を再構成するには、「[Oracle BI のデータベース・タイプの変更](#)」(109 ページ) に示す手順に従います。

注意： 接続プール設定は、Server Administration Tool でのみ変更できます (Windows プラットフォームでのみ使用可能)。Windows プラットフォームでリポジトリを編集してから、FTP を使用して UNIX に転送します。

初期化ブロックの構成について

通常、サポートされているデータベース・プラットフォームのいずれかを使用する場合は、初期化ブロックを再構成する必要はありません。アプリケーションのリポジトリ初期化ブロックおよび選択されているすべてのテーブルの SQL は、次の DBMS のうち、Oracle Business Intelligence でサポートされているデータベース・バージョン用に設定されています。

- Oracle
- IBM DB2
- Microsoft SQL Server

リポジトリ (.rpd) ファイルでは、動的セッションおよびリポジトリ変数を設定する初期化ブロックを使用します。Oracle データベース実行時のログオン障害を防ぐために、Siebel の業務系アプリケーションに適切なログオンを使用するように、すべての初期化ブロックが構成されていることを確認してください。

変数、初期化ブロック、および初期化ブロックにカスタム SQL を追加する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

注意：現在のインストールをテストするには、データベースの名前、ユーザー ID、パスワードなどの項目に関して接続プール設定の変更が必要な場合があります。

UNIX での Oracle BI の ODBC データソースの構成

オペレーティング・システム：UNIX のみ

データベース：NQSODBC のみ

Oracle BI Server のデータソースが ODBC のみである場合、次のタスクが必要です。このタスクは「[Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ](#)」の一部です。

注意：Oracle BI Server の ODBC ドライバは 32 ビット・アプリケーションです。

C:\Windows\System32\odbcad32.exe にある、32 ビットの ODBC データ ソース アドミニストレータを使用します。

64 ビットの ODBC データ ソース アドミニストレータ (C:\Windows\System32\odbcad32.exe にある) では、Oracle BI の ODBC ドライバが表示されません。

UNIX では、ファイル odbc.ini に、Presentation Services および nqcmd プロセスで使用される Oracle BI の標準またはクラスタ化された ODBC 接続の詳細が含まれています。

ODBC を Oracle BI Server の単一のデータソースとして構成するには

- 1 別の telnet セッションとしてログオンします。
- 2 Oracle Business Intelligence のインストール・ディレクトリである OracleBI_HOME/setup に移動します。
- 3 odbc.ini ファイルを開きます。
- 4 「標準の Oracle BI 値」または「クラスタ化された Oracle BI 値」に示すように、odbc.ini のセクション [Oracle BI Web] で名前の値を編集します。

注意：標準の Oracle Business Intelligence 構成およびクラスタ化された Oracle Business Intelligence 構成の ODBC データソース値を次に示します。

文字列 [\$libsuffix] は、使用している特定の UNIX オペレーティング・システムに適切なライブラリ接尾辞を示します。たとえば、Solaris または AIX では libnqsodbc.so を使用します。HP-UX では、libnqsodbc.sl を使用します。

標準の Oracle BI 値

Data Source Name=ODBC Data Source

AnalyticsWeb=Oracle BI Presentation Services

Driver=[client OracleBI_HOME/Bin/< コール・インタフェース >.<\$libsuffix>

■ ODBC35 コール・インタフェースを使用する場合：nqsodbc.so

■ ODBC20 コール・インタフェースを使用する場合：nqsodbc20.so

Description=Oracle BI Server

ServerMachine=local

Port=9703

クラスタ化された Oracle BI 値

Data Source Name=ODBC Data Source

AnalyticsWeb=Oracle BI Presentation Services

Driver=[client OracleBI_HOME/Bin/< コール・インタフェース >.<\$libsuffix>

■ ODBC35 コール・インタフェースを使用する場合：nqsodbc.so

■ ODBC20 コール・インタフェースを使用する場合：nqsodbc20.so

Description=Oracle BI Server

ServerMachine=local

Port=9703

FinalTimeOutForContactingCCS=7

InitialTimeOutForContacting

PrimaryCCS=1

IsClusteredDSN=Yes

PrimaryCCS=< プライマリ Cluster Controller 名 >

PrimaryCCSPort=9706

SecondaryCCS=< セカンダリ Cluster Controller 名 >

注意：プライマリ CCS とセカンダリ CCS を同じマシン上に配置することはできません。

SecondaryCCSPort=9706

Regional=No

UNIX における Oracle BI Server での Oracle データベースの構成

オペレーティング・システム：UNIX のみ

データベース：Oracle のみ

この項は、「[Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ](#)」の一部です。

ネイティブ・データベースが Oracle である場合は、次の条件に該当する必要があります。

- Oracle Business Intelligence Server を実行しているマシンは、Oracle Call Interface (OCI) を使用してデータベースに接続する。
- tnsnames.ora ファイルで、Oracle データベース・エイリアス（定義済のエントリ名）が、すべての Oracle 物理データベースのリポジトリ接続プールで使用されているデータソース名と一致している。
- リポジトリ・ファイルで、接続プールで使用されている Oracle データベース・エイリアスもデータソース名と同じである。

Oracle の tnsnames.ora の設定に対してリポジトリ接続プールの設定を確認するには、「[Oracle BI のデータベース・タイプの変更](#)」（109 ページ）の手順を参照してください。

Solaris 用の ORACLE_HOME 変数の設定

オペレーティング・システム：Solaris のみ

データベース：Oracle のみ

この項は、「[Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ](#)」の一部です。

Solaris で Oracle クライアントを使用している場合は、32 ビットの Oracle OCI ライブラリを指定するように ORACLE_HOME 変数を設定してください。Oracle 9i クライアント・インストールの lib ディレクトリには、64 ビット・ライブラリが含まれています。

ORACLE_HOME 変数を Oracle 9i クライアント用に設定するには

- 1 LD_LIBRARY_PATH に、lib ディレクトリではなく lib32 ディレクトリのパスを指定します。

```
setenv ORACLE_HOME /export/home/oracle/9202
setenv TNS_ADMIN /export/home
setenv PATH ${ORACLE_HOME}/bin:/opt/bin:${PATH}
setenv LD_LIBRARY_PATH ${ORACLE_HOME}/lib:${LD_LIBRARY_PATH}:/opt/j2se/jre/lib/
sparc
```

- 2 次のコマンドを実行します。

```
setenv LD_LIBRARY_PATH export/home/oracle/9202/lib32:$LD_LIBRARY_PATH
```

- 3 OracleBI_HOME/Bin で、次のコマンドを実行します。

```
ln -s /export/home/oracle/9202/lib32/libclntsh.so libclntsh.so.8.0
```

注意： サポートされるのは特定バージョンの Oracle クライアントのみです。『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。

Oracle クライアントでの HP-UX の構成

オペレーティング・システム：HP-UX のみ

データベース：Oracle のみ

この項は、「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」の一部です。

この変更は、Oracle クライアントを使用して HP-UX プラットフォームに対してのみ行います。

Oracle 10g クライアントを使用して HP-UX プラットフォームを構成するには

- 1 SHLIB_PATH に、lib ディレクトリではなく lib32 ディレクトリのパスを指定します。

Oracle 9i クライアント・インストールの lib ディレクトリには、64 ビット・ライブラリが含まれています。

変更の例（デプロイメントによっては該当しない場合もあります）：

Oracle 9i の例：

```
SHLIB_PATH=/export/home/oracle/9.2.0.2/lib32:$SHLIB_PATH
```

Oracle 10g の例：

```
SHLIB_PATH=/export/home/oracle/10.2.0.2_client/lib32:/vol1/hpbuild1/  
OracleBI_HOME/Bin:$SHLIB_PATH
```

- 2 user.sh ファイルで SHLIB_PATH の設定を変更して、lib32 ディレクトリのパスが先頭に表示されるようにします。

```
SHLIB_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$SHLIB_PATH:/opt/j2se/jre/libhp700
```

Windows での Oracle BI Server 用の Oracle データベースの構成

オペレーティング・システム：Windows のみ

データベース：Oracle のみ

この項は、「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」の一部です。

ネイティブ・データベースが Oracle である場合は、次の条件に該当する必要があります。

- Oracle BI Server を実行しているマシンは、Oracle Call Interface (OCI) を使用してデータベースに接続する。
- tnsnames.ora ファイルで、Oracle データベース・エイリアス（定義済のエントリ名）が、すべての Oracle 物理データベースのリポジトリ接続プールで使用されているデータソース名と一致している。

- リポジトリ・ファイルで、接続プールで使用されている Oracle データベース・エイリアスもデータソース名と同じである。

たとえば、次の tnsnames.ora エントリの例では、対応する Oracle Business Intelligence リポジトリ接続プールのデータソース名は ITQA2 です。

```
ITQA2 =
  (DESCRIPTION =
    (ADDRESS_LIST =
      (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = ITQALAB2)(PORT = 1521))
    )
    (CONNECT_DATA =
      (SERVICE_NAME = ITQALAB2.corp)
    )
  )
```

次に示す手順では、Oracle の tnsnames.ora の設定に対してリポジトリ接続プールの設定を確認する方法について説明します。

Oracle データベースの参照先が Oracle BI Server マシンであることを確認するには

- 1 Server Administration Tool にログオンします。
 - 2 リポジトリの「Physical」レイヤーで、該当するデータベースのシリンダ型アイコンをダブルクリックします。「general」タブの「Data source definition Database」フィールドで、データソースに適した Oracle データベースのバージョンをドロップダウン・リストから選択します。
 - 3 「Physical」レイヤーに接続プールが表示されない場合は、該当するデータベースのシリンダ型アイコンの左側にあるナビゲーション・コントロール (+) をクリックして開きます。
 - 4 該当する接続プールをダブルクリックして「Connection Pool」ウィンドウを開きます。
 - 5 「Connection Pool」ウィンドウで、次のことを確認します。
 - 「Call Interface」フィールドに、使用している Oracle データベースのリリースに対応した値が表示されている。
 - 「Data Source Name」に、tnsnames.ora エントリで定義した Oracle データベースのエイリアスが表示されている。
- 注意：**このデータソース名 (DSN) は、「設定」→「コントロール パネル」→「データ ソース (ODBC)」で定義されている DSN 名ではありません。
- 6 Oracle フォルダで、tnsnames.ora ファイルを開きます。
 - 7 次の特徴を持つ有効なエントリ名が存在することを確認します。
 - データソース名の Oracle BI リポジトリの接続プール設定に一致する
 - ターゲットの Oracle 物理データベースを指定する

UNIX での DB2 Connect の構成

オペレーティング・システム: z/OS または s/390 のみ

データベース: IBM DB2 のみ

この項は、「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」の一部です。

IBM DB2 Connect は、その接続を使用しているアプリケーションが割込みリクエストを受け取った場合の自動切断オプションをサポートしていません。ネイティブ・データベースが DB2 Connect ワークステーションを使用している場合、パラメータ INTERRUPT_ENABLED の設定を変更する必要があります。データベースまたは任意のデータソースが z/OS または s/390 プラットフォームを実行しているメインフレーム上の IBM DB2 に存在する場合は、このパラメータをすべての Oracle Business Intelligence Server マシンで変更する必要があります。

注意: IBM DB2 を使用する場合は、DB2 Connect を Oracle BI Server マシンにインストールする必要があります。使用する DB2 Connect のバージョンは、データソースとして構成される最新の DB2 インスタンスと一致する必要があります。

INTERRUPT_ENABLED パラメータを構成するには

- 1 ネイティブ CLI データソース名として使用されるデータベースの別名を構成します。たとえば、DB2 構成アシスタントを使用して新しいデータベース・エントリを作成します。
- 2 作成されたデータベースの別名と実際のターゲット DB2 データベースの名前を使用して、次の構文で INTERRUPT_ENABLED パラメータを設定します。

```
uncatalog dcs db local_dcsname
catalog dcs db local_dcsname as target_dbname parms "\",,INTERRUPT_ENABLED\""
```

変数の説明

- *local_dcsname* はホストまたはデータベースのローカル名（データベースの別名）を表します。
- *target_dbname* はホストまたはデータベース・システム上のデータベースの名前を表します。

注意: 文字列の一部として引用符を渡す場合は、バックスラッシュを使用してください。

次の例では、OS390 DB2 インスタンスを使用します。

```
uncatalog dcs db DB2_390
catalog dcs db DB2_390 as Q10B parms "\",,INTERRUPT_ENABLED,,,,\"
catalog database DB2_390 as DB2_390 at node NDE1EF20 authentication dcs
```

リポジトリの Unicode パラメータについて

NCHAR など明示的な Unicode データ型の列がある Unicode データベースで作業している場合は、リポジトリの「Writeback」タブで、エントリ「Unicode Database Type」のチェック・ボックスを選択します。

異なるデータベース・ベンダーでは、提供される文字データ型および Unicode サポート・レベルも異なります。このチェック・ボックスを選択するかどうかを判断するには、次のガイドラインを使用します。

Unicode がサポートされるデータ型	チェック・ボックスでの選択
CHAR (別の NCHAR データ型はなし)	選択しない
NCHAR が使用可能	選択する
CHAR および NCHAR	選択はオプション

注意: 単一の非 Unicode データベース環境での混合モード (CHAR および NCHAR データ型の混合) はサポートされていません。

UNIX での Oracle BI 用 Teradata データソースの構成

オペレーティング・システム: UNIX のみ

データベース: Teradata のみ

この項は、「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」の一部です。

Teradata を業務系アプリケーション・サーバーの唯一のデータソースとして構成する場合は、このタスクが必要です。

次の手順を開始する前に、次の情報を確認してください。

- UNIX 上の Teradata のデフォルトのインストール・ディレクトリ・パス。次の表に、UNIX での Teradata インストールのデフォルト・パスを示します。

プラットフォーム	デフォルトのインストール・パス
Solaris、HP/UX	/usr/odbc
AIX	/usr/lpp/tdodbc

- Teradata サーバーの IP アドレス。

Teradata をアプリケーション・サーバーのデータソースとして構成するには

- 1 別の telnet セッションとしてログオンします。
- 2 ディレクトリ OracleBI_HOME/setup に移動します。

- 3 vi または別のテキスト・エディタを使用して odbc.ini ファイルを開き、odbc.ini に次のセクションを追加します。

```
Data Source Name=<DSN 名 >
Driver=<Teradata ODBC ドライバのパス >/drivers/tdata.[${libsuffix}]
Description=NCR 3600 running Teradata V2R5.2r
DBCName=<Teradata サーバーの IP アドレス >
LastUser=
Username=
Password=
Database=
DefaultDatabase=< ターゲット・データベースまたはユーザーの名前 >
```

注意：文字列 [\${libsuffix}] は、使用している特定の UNIX オペレーティング・システムに適切なライブラリ接尾辞を示します。たとえば、Solaris または AIX では libnqsodbc.so、HP-UX では libnqsodbc.sl を使用します。

例 1： 次の場合を考えます。

- Teradata サーバーは IP 172.20.129.42 で実行されている
- Teradata ODBC ドライバは /usr/odbc にインストールされている

したがって、例 1 では次のセクションを odbc.ini に追加します。

```
[Terav502]
Driver=/usr/odbc/drivers/tdata.sl
Description=NCR 3600 running Teradata V2R5.2
DBCName=172.20.129.42
LastUser=
Username=
Password=
Database=
DefaultDatabase=< ターゲット・データベースまたはユーザーの名前 >
```

例 2： 次の場合を考えます。

- Teradata サーバーは IP 172.20.129.42 で実行されている
- Teradata ODBC ドライバは /usr/lpp/tdodbc にインストールされている

したがって、例 2 では次のセクションを odbc.ini に追加します。

```
[Terav502]
Driver=usr/lpp/tdodbc/odbc/drivers/tdata.so
Description=NCR 3600 running Teradata V2R5.2
DBCName=172.20.129.42
LastUser=
Username=
Password=
Database=
DefaultDatabase=< ターゲット・データベースまたはユーザーの名前 >
```

注意：このデータソースのリポジトリ接続プールで「Require fully qualified table names」エントリを選択している場合のみ、DefaultDatabase パラメータが空のままになることがあります。

- 4 同じファイルのセクション [ODBC Data Sources] に、次のエントリを追加します。

```
Terav502=tdata.[${libsuffix}]
Example: The new Teradata DSN is Terav502. Therefore, add the DSN entry to
odbc.ini:
[ODBC Data Sources]
Analyticsweb=Oracle Business Intelligence Presentation Services
SnowFlake=Oracle Business Intelligence Server
AutoSnowFlake=Oracle Business Intelligence Server
DimSnowFlake=Oracle Business Intelligence Server
DimSnowFlake=Oracle Business Intelligence Server
Star=Oracle Business Intelligence Server
Terav502=tdata.[${libsuffix}]
```

注意：文字列 [\${libsuffix}] は、使用している特定の UNIX オペレーティング・システムに適切なライブラリ接尾辞を示します。たとえば、Solaris または AIX では libnqsodbc.so、HP-UX では libnqsodbc.sl を使用します。

- 5 同じディレクトリにある user.sh スクリプトを開き、ライブラリ・パス行を追加して、オペレーティング・システムおよびシェルに基づいた Oracle BI データソースを構成します。user.sh の更新の詳細は、「[UNIX でのデータベース設定スクリプトの検出](#)」(107 ページ) を参照してください。

注意：これらのライブラリ・パスは、Korn、Bourne および bash シェルに適用されます。

- 6 Oracle Business Intelligence Administration Tool を使用してリポジトリを開き、適切な物理データベースの接続プール・データソース名として作成した新しい DSN を追加します。

この例では、Terav502 を追加します。

- 7 Oracle BI Server を起動します。実行中の場合は、停止してから再起動します。

ネイティブ・データベースでの行数の更新について

オペレーティング・システム：UNIX のみ

この項の内容は、行数の更新機能を使用しており、異機種環境を実行（たとえば、UNIX で Oracle BI Server およびデータベースを実行し、Windows マシンでリモートの管理者ユーザーが Server Administration Tool を実行）している場合に該当します。

行数の更新機能を使用する場合、Server Administration Tool では、サーバーのデータソースではなく、クライアント・マシンのローカル・データソースが使用されます。そのため、Oracle または DB2 のデータソースは、Server Administration Tool を実行している Windows マシン上で次の条件を満たすように構成する必要があります。

- データソースが、UNIX サーバー上の Oracle BI user.sh ファイルで特定されている同じ DBMS を指し示す。
- ローカル・データソース名も、Oracle BI リポジトリ (.rpd) ファイルの物理レイヤーにある接続プール・オブジェクトに定義されたデータソース名と一致する必要がある。

これらの条件に該当せず、サーバーおよびクライアントのデータソースが異なるデータベースを指し示している場合は、誤った更新済行数や正しくない結果が表示されます。

9

Oracle BI Presentation Services の構成

このプロセスは「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」の一部であり、Oracle BI Presentation Services の実行に必要なコンポーネントの構成について説明します。Oracle Business Intelligence Infrastructure のインストール時に Oracle BI Presentation Services のコンポーネントを含めた場合は、この章の手順を使用する必要があります。

この章の内容は次のとおりです。

- 「HTTP Web サーバーの構成」(123 ページ)
- 「web.xml ファイルの編集」(123 ページ)
- 「Oracle BI Presentation Services 用の WAR ファイルの作成」(124 ページ)
- 「WAR ファイルのデプロイ」(125 ページ)
- 「ISAPI プラグインの構成」(126 ページ)
- 「複数のリポジトリにアクセスするように Oracle BI Presentation Services を構成」(128 ページ)
- 「4000 を超えるユーザー用の Presentation Catalog の構成」(128 ページ)
- 「Oracle BI Presentation Services のテスト」(127 ページ)

Oracle BI Presentation Services の機能

Oracle BI Presentation Services は、Oracle Business Intelligence のユーザーと Oracle Business Intelligence Server のプロセスの間の接続の役割を果たします。インストーラを使用した Oracle BI Infrastructure のインストールが終了した後、デプロイメントによっては、Oracle BI Presentation Services のコンポーネントを適切に構成するために、追加のタスクがいくつか必要になる場合があります。

Oracle BI Presentation Services は、インストーラによって特定のデフォルト設定に構成されます。HTTP サーバーを使用した Web サーバーの一般的なデフォルト構成は次のとおりです。

- 1 サード・パーティの Web 統合サーバーが構成されます。

「HTTP Web サーバーの構成」(123 ページ) を参照してください。

- UNIX システムに Web サーバーをデプロイする場合は、WAR ファイルをデプロイする必要があります (「WAR ファイルのデプロイ」(125 ページ) を参照)。

注意: このデフォルトの構成に変更が必要なのは、WAR ファイルを代替のサード・パーティの Web サーバーにデプロイすることを計画している場合のみです。この場合は、次の設定を変更します。

sawserver.Port

sawserver.Host

- Windows システムに Web サーバーをデプロイする場合は、ISAPI 拡張機能をデプロイする必要があります (「ISAPI プラグインの構成」(126 ページ) を参照)。

- 「Oracle BI Presentation Services のテスト」 (127 ページ)

2 サード・パーティの Web サーバーから Oracle BI Presentation Services へのリンクが作成されます。

- Oracle BI Presentation Services が、Oracle Business Intelligence Server とは別のマシンにインストールされている場合、「Oracle BI Presentation Services のテスト」 (127 ページ) で示す Oracle BI Presentation Services マシンを構成します。
- Microsoft ISAPI プラグインを使用する予定で、Microsoft IIS サービスと Oracle BI Presentation Services を別々のマシンで実行する場合は、「複数のマシンへの Oracle BI コンポーネントのインストール」 (61 ページ) を参照してください。

Oracle BI Presentation Services のコンポーネント

Oracle Business Intelligence Web コンポーネントは、Web (または HTTP) 統合サーバーで実行されている Oracle BI Presentation Services と Oracle BI Presentation Services Plug-in で構成されています。Presentation Services と Plug-in は、別々のプロセスとして実行されます。

注意: Oracle BI Presentation Services、Oracle BI Client および Oracle BI Server の各コンポーネントは、別々のマシンで実行するようにインストールできます。

- Oracle BI Presentation Services プロセスは、Web サーバーのほとんどのビジネス・ロジックに対応し、すべての機能を実行します。
 - Windows の場合、このプロセスは *sawserver.exe* です。
 - UNIX の場合、このプロセスは *sawserver* です。
- Oracle BI Presentation Services Plug-in は、Microsoft IIS Web Server 用の ISAPI プラグインと、J2EE アプリケーション・サーバー用の Java Servlet で構成されています。HTTP リクエストは Oracle BI Presentation Services にリダイレクトされます。サーブレットは Java Servlet 2.2 の仕様に準拠しているため、追加で構成する場合は、このサーブレットを考慮に入れる必要があります。

Oracle BI Presentation Services Plug-in と Oracle BI Presentation Services の通信には、TCP/IP ベースの専用プロトコルが使用されます。このプロトコルで、HTTP サーバーはクライアントの役割を果たし、新規の接続を開始します。一方で Oracle BI Presentation Services は、受信されるリクエストをリスニングします。

注意: この特殊な TCP/IP プロトコルが、使用しているすべてのファイアウォールまたはプロキシ・サーバーで許可されていることを確認してください。

Oracle BI Presentation Services のデフォルトの TCP/IP リスニング・ポートは 9710 です。

異なるマシン上での Oracle BI Presentation Services および Oracle BI Server の構成

オペレーティング・システム: UNIX のみ

このタスクは、「Oracle BI Presentation Services の構成」プロセスの一部です。

Oracle BI Presentation Services が Oracle Business Intelligence Server とは別のマシンにインストールされている場合は、次に示す手順で Oracle BI Presentation Services マシンを構成します。

Oracle BI Server とは別のマシンにインストールされている Oracle BI Presentation Services を構成するには

- 1 Oracle BI Presentation Services がインストールされているマシンで、odbc.ini ファイル (OracleBI_HOME/setup フォルダにある) を次のように変更します。

```
[AnalyticsWeb]
```

```
Driver=[client OracleBI_HOME]/Bin/libnqsodbc.[${libsuffix}]
```

注意：文字列 [\${libsuffix}] は、使用している特定の UNIX オペレーティング・システムに適切なライブラリ接尾辞を示します。たとえば、Solaris または AIX では libnqsodbc.so、HP-UX では libnqsodbc.sl を使用します。

```
Description=Oracle Business Intelligence Server
```

```
ServerMachine=<Oracle BI Server マシンのホスト名 >
```

```
Port=<Oracle BI Server ポート >
```

- 2 ファイルを保存して閉じます。

HTTP Web サーバーの構成

このタスクは、「Oracle BI Presentation Services の構成」プロセスの一部です。

サード・パーティの Web 統合 (または HTTP) サーバーを Oracle BI Presentation Services に対応するように構成する基本的な方法は次のとおりです。

WebARchive (WAR) ファイルを使用。これは標準であり、すべての J2EE アプリケーション・サーバーでサポートされています。

- 「web.xml ファイルの編集」 (123 ページ)
- 「Oracle BI Presentation Services 用の WAR ファイルの作成」 (124 ページ)
- 「WAR ファイルのデプロイ」 (125 ページ)

UNIX システムに Web サーバーをデプロイする場合は、WAR ファイルをデプロイする必要があります

Windows システムに Web サーバーをデプロイする場合は、ISAPI 拡張機能または WAR ファイルをデプロイできます。OC4J で「Basic」インストール・タイプを使用している場合、WAR ファイルはインストーラによって自動的に OC4J にデプロイされます。

web.xml ファイルの編集

このタスクは、「Oracle BI Presentation Services の構成」プロセスの一部です。

サード・パーティの Web 統合 (または HTTP) サーバーを Oracle BI Presentation Services に対応するように構成する場合は、まずこのタスクを行ってください。これは、生成される analytics.war ファイルに編集後の web.xml ファイルが含まれるためです。

現在のデプロイメントが次のいずれかの条件に該当する場合は、web.xml ファイルを編集して Oracle BI Presentation Services の場所およびリスニング・ポートを再構成する必要があります。

- HTTP サーバーと Oracle BI Presentation Services が別々のマシンで実行されている
- Web サーバーが、デフォルト（9710）以外の TCP/IP ポートを使用するように構成されている

警告：このファイルを編集するときは、XML 構文に厳密に従ってください。XML 構文にエラーがあると、仮想サーバーの起動が失敗する場合があります。

web.xml ファイルで、Java サブレットを構成する XML 要素は次のとおりです。

```
<servlet>
  <servlet-name>SAWBridge</servlet-name>
  <servlet-class>com.siebel.analytics.web.SAWBridge</servlet-class>
  <init-param>
    <param-name>oracle.bi.presentation.sawserver.Host</param-name>
    <param-value>localhost</param-value>
  </init-param>
  <init-param>
    <param-name>oracle.bi.presentation.sawserver.Port</param-name>
    <param-value>9710</param-value>
  </init-param>
</servlet>
```

注意：web.xml ファイルは変更前にバックアップしてください。

web.xml ファイルを編集するには

- 1 OracleBI_HOME/web/app/WEB-INF ディレクトリで、web.xml ファイルを探します。
- 2 XML エディタを使用して、web.xml ファイルを開きます。
- 3 次の <param-name> パラメータの値を変更して、正しい設定を反映します。
 - oracle.bi.presentation.sawserver.Host
 - oracle.bi.presentation.sawserver.Port
- 4 web.xml ファイルを保存して閉じます。

Oracle BI Presentation Services 用の WAR ファイルの作成

注意：この手順の前に、「web.xml ファイルの編集」（123 ページ）の手順を実行してください。これは、生成される analytics.war ファイルに編集後の web.xml ファイルが含まれるためです。

このタスクは、「HTTP Web サーバーの構成」プロセスの一部です。

事前にパッケージされたデフォルトの WebARchive (WAR) ファイルである analytics.war は、Oracle BI Presentation Services のインストールに含まれています。ファイルの場所は次の表のとおりです。

注意： Oracle Business Intelligence には、事前にパッケージされた Enterprise ARchive (EAR) ファイルである analytics.ear も用意されています。

ただし、web.xml ファイルを変更した場合 (Web サーバーの場所やリスニング・ポートを再構成する場合など) は、analytics.war ファイルを再作成する必要があります。このタスクでは、Java JDK 1.5 パッケージに含まれている jar ユーティリティ (<JAVA_HOME>/bin ディレクトリ内) を使用します。

注意： WAR ファイルを作成するには、(JRE だけでなく) JDK へのアクセス権が必要になる場合もあります。JAVA_HOME の場所は、インストール中に入力した場所と同じです。

この手順では、次のファイルの場所およびコマンドを使用します。

オペレーティング・システム	analytics.war ファイルの場所
Windows	OracleBI_HOME\web
UNIX	/usr/local/OracleBI/web
jar コマンド	jar -cf analytics.war -C app .

WAR ファイルを作成または再作成するには

- 1 前の表に示した Oracle Business Intelligence インストール・ディレクトリに移動します。
- 2 WAR ファイルを作成するには、前の表に示した jar コマンドを実行します。

注意： コマンドの最後にピリオドを含める必要があります。

WAR ファイルのデプロイ

このタスクは、「HTTP Web サーバーの構成」(123 ページ) プロセスの一部です。

サード・パーティの Web 統合 (または HTTP) サーバーを Oracle BI Presentation Services に対応するように構成する場合、変更する WAR ファイルは、使用している Web アプリケーション・サーバーによって異なります。

注意： WebSphere 用に Oracle Business Intelligence Web ReportUI Portlet を構成するには、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

使用している Web サーバーのドキュメントで製品に固有の指示を確認して、次の一般的な手順に従ってください。

Oracle BI Presentation Services 用に WAR ファイルをデプロイするには

- 1 HTTP Web サーバーに固有のツールを使用して、analytics.war ファイルに含まれている Web アプリケーションをデプロイします。
- 2 URL `/analytics` を analytics.war ファイルに割り当てます。

注意：アプリケーション・サーバーとして OC4J を使用するように選択している場合は、この手順はインストーラで行われます。

サーブレット・コンテナ用の Web サーバーの一時ディレクトリについて (UNIX)

オペレーティング・システム：UNIX のみ

Oracle BI Presentation Services サーブレットのデフォルトのサーバー・ページは default.jsp です。Web サーバーは、Java サーバー・ページを処理する際、一時ディレクトリへのアクセスを試みます。一時ディレクトリが設定されていない場合は、Presentation Services のサーバー・ログに例外が表示されます。Web アプリケーション用の一時ディレクトリまたは作業ディレクトリの設定方法は、Web サーバーのドキュメントを参照してください。

ISAPI プラグインの構成

オペレーティング・システム：Windows のみ

このタスクは、「Oracle BI Presentation Services の構成」プロセスの一部です。

Oracle BI Presentation Services サーバーと Microsoft IIS サーバーを別々のマシンで実行して、HTTP Server のコンポーネントを Oracle BI Infrastructure のコンポーネントと分離する場合、この項は「HTTP Web サーバーの構成」プロセスでのタスクになります。

Web ISAPI プラグインと Web サービスを別々のマシンに分離できると、ネットワークとリソースの割当て、およびファイアウォール使用時のパーティション化を制御できます。Presentation Services の ISAPI プラグインによって、IIS Web サーバーが Oracle BI Presentation Services に結合されます。すべての設定は、OracleBIData_HOME/web/config/ にある isapiconfig.xml ファイルで構成できます。isapiconfig.xml ファイルには、次のデフォルトのエントリが含まれています。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<webConfig>
  <ServerInstance>
    <ServerConnectInfo address="localhost" port="9710"/>
  </ServerInstance>
</webConfig>
```

注意：ポート 9710 は、Oracle BI Presentation Services が 1 つ以上のプラグインからのリモート・プロセス・コールをリスニングする、デフォルトのポートです。

Oracle BI Presentation Services 用に ISAPI プラグインを構成するには

- 1 Oracle BI Presentation Services をホストしているマシンで、isapiconfig.xml ファイルを開きます。
- 2 次の表に示すとおりデフォルト値を置換します。

デフォルト値	置換後の値
ServerConnectInfo address	独自の IP アドレスでホストとして設定されている、Oracle BI Presentation Services の完全修飾ドメイン名
ServerConnectInfo port	Oracle BI Presentation Services のリスニング・ポート

次に例を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<webConfig>
  <ServerInstance>
    <ServerConnectInfo address="sastest" port="9710"/>
  </ServerInstance>
</webConfig>
```

注意： Oracle BI Presentation Services の完全修飾ドメイン名が、独自の IP アドレスでホストとして設定されていることを確認してください。

- 3 終了したら、ファイルを保存します。

Oracle BI Presentation Services のテスト

このタスクは、「Oracle BI Presentation Services の構成」プロセスの一部です。

HTTP 統合サーバーを構成したら、Oracle Business Intelligence の Web サーバーをテストします。

Web サーバーのインストールをテストするには

- 1 Oracle BI Presentation Services を起動します。
(「Oracle BI プロセスの起動、停止または再起動」(86 ページ) を参照)
- 2 Oracle BI Presentation Services 用に使用されている統合サーバー・プロセスを起動します。
- 3 Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「Presentation Services」にナビゲートします。

Web ブラウザが開き、`http://<サーバー名>:<ポート番号>/analytics/saw.dll?Dashboard` ページが表示されます。

ログイン・ページが表示されたら、Oracle BI Presentation Services は正常にインストールされています。

複数のリポジトリにアクセスするように Oracle BI Presentation Services を構成

1 台の Oracle BI Server マシンで複数のリポジトリをアクティブにしておくことはできますが、Oracle BI Presentation Services インスタンス 1 つにつきアクセスできるリポジトリは 1 つだけです。

次に示す手順では、複数のリポジトリにアクセスするように Oracle BI Presentation Services を構成する方法について説明します。

複数のリポジトリにアクセスするように Presentation Services を構成するには

- 1 Webサーバーの役割を果たすマシンごとに Oracle BI Presentation Services コンポーネントをインストールします。
- 2 適切なリポジトリを使用するように、Presentation Services マシン上に SAS NQSODBC ドライバを作成します。
 - Presentation Services マシンをポイントする NQSODBC システム DSN を構成します。
 - ODBC 構成内で、「Change the default repository to」チェック・ボックスを選択します。
 - この Presentation Services マシン用に使用するリポジトリを入力します（「NQSCONFIG.INI REPOSITORY」セクションの「Logical Repository Name」エントリから）。
- 3 Presentation Services マシン上の instanceconfig.xml ファイルで、<DSN> 要素を、この手順の [手順 2](#) で定義した ODBC ドライバの DSN の名前に変更します。
- 4 Oracle BI Presentation Services を起動します。
- 5 次の URL で、適切な Web サーバーのマシン名または IP アドレスに置き換えて、クライアントのブラウザからアクセスするリポジトリを制御します。

`http://<マシン名または IP アドレス>/analytics/saw.dll?`

4000 を超えるユーザー用の Presentation Catalog の構成

このタスクは、「[Oracle BI Presentation Services の構成](#)」プロセスの一部です。

Oracle BI Presentation Services のデプロイメントに 4000 を超える Presentation Catalog ユーザーが存在する場合や、Presentation Catalog ユーザーが今後 4000 を超える予定がある場合は、ファイル・システムの制限を処理できるようにユーザーのホーム・ディレクトリのハッシングをオンにする必要があります。

注意：この要素を有効にするには、Oracle BI Presentation Services のインストール直後に設定する必要があります。詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

Oracle BI Presentation Services 用の BI Publisher の構成

Oracle BI Publisher がデプロイに含まれている場合、これは「Oracle BI Answers」画面から構成できます。Oracle BI Publisher の構成手順の詳細は、[第 11 章「BI Publisher レポート・ツールの構成」](#)を参照してください。

10 Oracle Business Intelligence Scheduler の構成

この章の内容は「Oracle BI Infrastructure のコンポーネントを構成するためのロードマップ」の一部であり、次の各項で構成されています。

- 「Oracle BI Scheduler のコンポーネントと機能」 (132 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler テーブルについて」 (133 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler の構成のプロセス」 (133 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成」 (134 ページ)
 - 「特定のデータベース用 Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成」 (134 ページ)
 - 「Oracle BI Scheduler 用データベースの構成」 (135 ページ)
 - 「Oracle BI Scheduler テーブルの名前の変更」 (137 ページ)
 - 「Oracle BI Scheduler 管理者について」 (138 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler 構成オプションの設定」 (137 ページ)
 - 「Oracle BI Scheduler の構成」 (138 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成」 (140 ページ)
 - 「Presentation Services 構成ファイルにおける Scheduler ホストとポートの指定」 (140 ページ)
 - 「Oracle BI Presentation Services 資格証明ストアへの Scheduler 管理者資格証明の追加」 (142 ページ)
 - 「資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成」 (145 ページ)

Oracle Business Intelligence インストーラが終了した後、Oracle Business Intelligence Scheduler サーバー・コンポーネントを適切に構成するためには、さらに必要なタスクがあります。

Oracle BI Scheduler は、Oracle Business Intelligence を実行する前に構成する必要があります。構成されていない場合、Scheduler サービスの起動が失敗し、Delivers コンポーネントが動作しません。

ヒント： Oracle Business Intelligence 環境を新しいシステムに移行する場合、Oracle Business Intelligence Server リポジトリ・ファイルと Scheduler テーブルも必ず移行してください。Scheduler テーブルは Oracle Delivers iBots で必要です。

Oracle BI Scheduler のコンポーネントと機能

この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Scheduler Server のコンポーネント」 (132 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler Server の機能」 (132 ページ)
- 「Oracle BI Scheduler テーブルについて」 (133 ページ)

Oracle BI Scheduler Server のコンポーネント

Oracle Business Intelligence Scheduler は次のコンポーネントで構成されています。

- Scheduler Job Manager
- Oracle BI Scheduler Service プロセス：
 - Windows オペレーティング・システム：nqscheduler.exe
 - UNIX オペレーティング・システム：nqscheduler
- Scheduler 構成（コマンドライン）：
 - Windows オペレーティング・システム：schconfig.exe
 - UNIX オペレーティング・システム：schconfig
- iBot 用の Scheduler 起動プロセス（コマンドライン）：
 - Windows オペレーティング・システム：saschinvoke.exe
 - UNIX オペレーティング・システム：saschinvoke

Oracle BI Scheduler Server の機能

Scheduler では、単一の商用バックエンド・データベースを使用して、ジョブとそのインスタンスおよびパラメータに関する情報を格納します。Scheduler は、Oracle Business Intelligence をサポートするすべてのデータベースと連携できます。対応しているデータベースの一覧の詳細は、『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。

Scheduler サービスは、バックエンド・データベースが次の条件を満たしている場合にのみ起動します。

- **構成済である。**バックエンド・データベースと Oracle BI Scheduler との間には、1 対 1 の関係があります。複数の Oracle BI Scheduler アプリケーションで単一のバックエンド・データベースを使用するように構成しないでください。
- **運用状態にある。**Oracle BI Scheduler でサポートされている具体的なバックエンド・データベースの詳細は、OTN で『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。
- **混合認証モードで実行している。**たとえば、データベースが SQL Server である場合、ログオンにおいて SQL Server と Windows の認証が可能になるようにセキュリティ・モードが設定されている必要があります。

注意：バックエンド・データベースのログインではオペレーティング・システム認証を使用しないでください。使用すると、Scheduler サービスが起動しない場合があります。

Oracle BI Scheduler テーブルについて

この項は、「[Oracle BI Scheduler のコンポーネントと機能](#)」の一部です。

表 17 には、Oracle BI Scheduler で使用するデータベース・テーブルに関する簡単な説明が記載されています。これらのテーブルを作成するスクリプトは、ディレクトリ OracleBI_HOME¥server¥Schema にあります。「[Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成](#)」(134 ページ) のタスクを参照してください。

NQSConfig.INI で使用状況トラッキングが有効化されている場合は、Oracle BI Server によって、使用状況トラッキングのデータファイルが生成されます。使用状況トラッキング・ファイルから情報を抽出し、リレーショナル・データベースのテーブルにロードするサンプルの JavaScript が用意されています。S_NQ_ACCT テーブルには、会計データに関するすべての情報が格納されます（使用状況トラッキングについては、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照）。

表 17. Oracle Business Intelligence Scheduler によって使用されるテーブル

テーブルの名前	テーブルの説明
S_NQ_JOB	スケジュール済のジョブの情報の格納に使用されます。
S_NQ_INSTANCE	スケジュール済のジョブ・インスタンスに関する情報が格納されます。
S_NQ_ERR_MSG	正常に完了しなかった Scheduler ジョブ・インスタンスに関するエラー・メッセージが格納されます。
S_NQ_JOB_PARAM	スケジュール済のジョブの Scheduler ジョブ・パラメータに関する情報が格納されます。

Oracle BI Scheduler の構成のプロセス

この項は、「[Oracle Business Intelligence Scheduler の構成](#)」プロセスの一部です。

注意：Scheduler を使用しない場合、この項の情報は必要ありません。

デプロイメントによっては、Oracle BI Scheduler の構成に関する次の各項のいずれか 1 つ以上を参照する必要があります。

- 「[Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成](#)」(134 ページ)
- 「[特定のデータベース用 Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成](#)」(134 ページ)
- 「[Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成](#)」(140 ページ)

Job Manager やスクリプト処理が必要なその他の Scheduler Server 構成タスクの詳細は、『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows では OracleBI_HOME¥server¥Document ディレクトリにあります。

Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成

この項は、「Oracle Business Intelligence Scheduler の構成」プロセスの一部です。

テーブルを格納するために、既存のデータベースを使用するか新しいデータベースを作成できます。次に示す手順では、一般的なデータベースとテーブルを作成する方法について説明します。

Oracle BI Scheduler で使用するデータベースとテーブルを作成するには

- 1 データベースとテーブルを作成できる有効なデータベース管理者アカウントがあることを確認します。
- 2 データベースを作成するか、既存のデータベースを使用します。
- 3 SAJOBS.xxx.sql (xxx はデータベース・タイプを表す) を実行して、Scheduler テーブルを作成します。
「特定のデータベース用 Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成」(134 ページ) に示すとおり、使用するバックエンド・データベース用の適切な手順に従います。
- 4 使用状況統計を使用する場合、テーブルを SAACCT.xxx.sql で作成します。

特定のデータベース用 Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成

このタスクは、「Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成」プロセスの一部です。

次の各項では、特定のリレーショナル・データベース用にデータベースとテーブルを作成する方法について説明します。

- Oracle Database Server: 「Oracle Database Server 用の Scheduler データベースとテーブルの作成」(134 ページ) を参照
- Microsoft SQL Server: 「SQL Server 用の Scheduler データベースとテーブルの作成」(135 ページ) を参照

注意: Teradata は、このバージョンの Scheduler ではサポートされていません。

Oracle Database Server 用の Scheduler データベースとテーブルの作成

データベース: Oracle のみ

次の手順に従って、Oracle 用の Scheduler データベースとテーブルを作成します。

注意: 使用状況統計の場合、テーブルを SAACCT.Oracle.sql で作成します。

Oracle 用のデータベースとテーブルを作成するには

- 1 次の 2 つの方法のいずれかを実行します。
 - 新しいデータベースを S_NQ_SCHED の名前で作成し、ユーザーを S_NQ_SCHED の名前で作成します。
 - 既存のデータベースのいずれかにおいて、ユーザーを S_NQ_SCHED の名前で作成します。

- 2 S_NQ_SCHED のユーザーに対してパスワードを設定します。
- 3 Oracle Net 構成ツールを使用して、現行の S_NQ_SCHED データベースに対し、このユーザーID とパスワードで Oracle サービスを作成します。
- 4 SQL*Plus Worksheet または SQL*Plus ツールを使用して SAJOBS.Oracle.sql ファイルを開いてから、そのファイルを実行して Oracle Business Intelligence Scheduler テーブルを作成します。
- 5 SAACCT.Oracle.sql ファイルを開いてから、そのファイルを実行して会計テーブルを作成します。

SQL Server 用の Scheduler データベースとテーブルの作成

データベース：MS SQL Server のみ

次の手順に従って、Microsoft SQL Server 用の Scheduler データベースとテーブルを作成します。

注意： 使用状況統計の場合、テーブルを SAACCT.MSSQL.sql で作成します。

Microsoft SQL Server 用のデータベースとテーブルを作成するには

- 1 SQL Server Enterprise Manager を使用して、S_NQ_SCHED という名前のデータベースを作成します。
Oracle Business Intelligence Scheduler テーブルの格納に使用するディスク領域が十分であることを確認します（Oracle Business Intelligence アプリケーションでは 500MB 以上が必要）。
- 2 現行のデータベースとして S_NQ_SCHED を使用し、SQL Query Analyzer で SAJOBS.MSSQL.sql ファイルを開いてから、そのファイルを実行して Oracle Business Intelligence Scheduler テーブルを作成します。
- 3 SAACCT.MSSQL.sql ファイルを開いてから、そのファイルを実行して会計テーブルを作成します。

Oracle BI Scheduler 用データベースの構成

この項は、「[Oracle Business Intelligence Scheduler の構成](#)」プロセスの一部です。

次に示す手順では、バックエンド・データベースとテーブルを構成する方法について説明します。

■ Oracle Database Server

[「Oracle BI Scheduler 用の Oracle サーバー・データベースの構成」](#)（135 ページ）を参照してください。

■ Microsoft SQL Server

[「Oracle BI Scheduler 用の SQL Server データベースの構成」](#)（136 ページ）を参照してください。

Oracle BI Scheduler 用の Oracle サーバー・データベースの構成

Job Manager Scheduler 構成で使用するデータソース名は、「[Oracle Database Server 用の Scheduler データベースとテーブルの作成](#)」（134 ページ）の手順 3 で作成した Oracle データベース・サービスの別名と同じにする必要があります。

Job Manager を使用して Oracle データベースを構成するには

- 1 Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「Job Manager」を選択します。
- 2 Job Manager で、「File」→「Configuration Options」を選択します。
- 3 「Connection Pool」セクションの「Data Source Name」に、Oracle データベース・サービスの別名を入力します。
ドロップダウン・リストから適切なデータベース・タイプ（たとえば、「Oracle 10g R1」）を選択します。
- 4 「Oracle Database Server 用の Scheduler データベースとテーブルの作成」（134 ページ）で作成した S_NQ_SCHED ユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。
選択したデータベース・タイプに応じて、コール・インタフェースが自動的に更新されます。
- 5 Job Manager を終了します。
- 6 Windows の「スタート」メニューから、Oracle BI Scheduler Service を起動します。

Oracle BI Scheduler 用の SQL Server データベースの構成

Job Manager Scheduler 構成で使用するデータソース名は、「SQL Server 用の Scheduler データベースとテーブルの作成」（135 ページ）で使用した、SQL Server の S_NQ_SCHED データベースに対する既存の ODBC データソース名（DSN）と同じにする必要があります。

システム DSN のエントリがない場合、新しいエントリを次に示す手順で作成します。

SQL Server データベースを構成するには

- 1 Windows の「スタート」メニューから、「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「データソース (ODBC)」を選択します。
- 2 ODBC データ ソース アドミニストレータを起動します。
- 3 「システム DSN」タブを選択し、「追加」をクリックします。
- 4 ドライバで「SQL Server」を選択し、「完了」をクリックします。
- 5 「SQL Server に接続するための新規データ ソースを作成する」ウィザードで、次を実行します。
 - a データソースの名前と説明を入力します。
 - b 使用する SQL Server を「サーバー」ドロップダウン・リストから選択し、「次へ」をクリックします。
 - c ログイン ID の権限をサーバーで確認する方法では、「SQL Server 用の Scheduler データベースとテーブルの作成」（135 ページ）で作成した S_NQ_SCHED データベース用に適切な認証を選択します。「次へ」をクリックします。
- 6 「既定のデータベースを以下のものに変更する」チェック・ボックスを選択してから、S_NQ_SCHED データベースをドロップダウン・リストから選択します。「次へ」をクリックします。
- 7 言語やログ・ファイルの設定を必要に応じて更新し、「完了」をクリックします。
- 8 接続設定を確認するには、「データ ソースのテスト」ボタンをクリックし、「OK」をクリックします。
- 9 「OK」をクリックして、ODBC データ ソース アドミニストレータを終了します。

Oracle BI Scheduler テーブルの名前の変更

設定を Oracle BI Scheduler 構成ファイル (instanceconfig.xml) に追加すると、Oracle BI Scheduler が使用するテーブルの名前を変更できます。この構成ファイルは、OracleBIData_HOME¥scheduler¥config ディレクトリにあります。

注意： Oracle Application Server を使用している組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお勧めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用している組織では、JConsole を使用することをお勧めします。詳細は、「[Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新](#)」(100 ページ) を参照してください。

次に示す手順では、Oracle BI Scheduler テーブルの名前を変更する方法について説明します。この手順では、新しいタグの DB Column Names が、例として作成されます。

Oracle Business Intelligence Scheduler テーブルの名前を変更するには

- 1 XML エディタを使用して、instanceconfig.xml ファイルを開きます。
- 2 新しいタグを DB Column Names の名前で作成します。
- 3 DB Column Names タグの下にある各エントリに対して、次の表に示すパラメータと文字列値を追加します。データ文字列において作成した値は、Oracle BI Scheduler テーブルの名前で使用する値になります。

パラメータ名	型	文字列値
TABLE_JOBS	REG_SA	S_NQ_JOB
TABLE_INSTANCES	REG_SA	S_NQ_INSTANCE
TABLE_PARAMS	REG_SA	S_NQ_JOB_PARAM
TABLE_ERRMSGS	REG_SA	S_NQ_ERR_MSG

注意： 各列のデータ型は、スキーマの使用目的にとって真のままになります。たとえば、ジョブ ID が整数型として定義されている場合、VARCHAR 型に変更しないでください。ただし、VARCHAR 型の列で文字数を増やすことはできます。

- 4 Oracle BI Scheduler サーバーを再起動します。

Oracle BI Scheduler 構成オプションの設定

この項では、Scheduler 管理者のロールで実行する必要がある初期構成タスクについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 「[Oracle BI Scheduler 管理者について](#)」(138 ページ)
- 「[Oracle BI Scheduler の構成](#)」(138 ページ)
- 「[Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成](#)」(140 ページ)

Oracle BI Scheduler 管理者について

Oracle BI Scheduler 構成オプションを設定するプロセスの一部として、Scheduler 管理者用のユーザー名とパスワードを指定する必要があります。Scheduler 管理者は、Oracle BI リポジトリ (.rpd ファイル) のユーザーである必要があります。また、管理者グループのメンバーシップが割り当てられている必要があります。

Scheduler 用に新規に管理者を作成しない場合、Scheduler 管理者資格証明を Oracle BI ユーザー (Administrator) の管理者資格証明に設定できます。そのユーザーはリポジトリに存在します。

注意： これより後の項では、Scheduler 管理者を SchedulerAdmin と呼びます。

リポジトリの Administrator ユーザー、ユーザーの作成およびグループ・メンバーシップの付与の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Oracle BI Scheduler の構成

Oracle BI Scheduler を構成する方法は、使用するオペレーティング・システムによって異なります。

- 「Windows での Oracle BI Scheduler の構成」 (139 ページ)
- 「UNIX での Oracle BI Scheduler の構成」 (139 ページ)

使用するオペレーティング・システムに関係なく、Scheduler データベースの構成では、表 18 に示す設定が使用されます。

表 18. Scheduler データベース構成設定

セクションまたはタブ	フィールド	入力内容
Connection Pool	Database Type	ドロップダウン・リストから、S_NQ_SCHED データベース用の適切なデータベース・タイプを選択します。 選択したデータベース・タイプに応じて、コール・インタフェースが自動的に更新されます。
	Data Source Name	S_NQ_SCHED データベース用に作成した DSN。
	Username	S_NQ_SCHED データベース用のユーザー名。
	Password	S_NQ_SCHED データベースのパスワード。この S_NQ_SCHED データベースは、「特定のデータベース用 Oracle BI Scheduler データベースとテーブルの作成」 (134 ページ) で作成した Scheduler データベースです。

表 18. Scheduler データベース構成設定

セクションまたはタブ	フィールド	入力内容
General	Administrator Name	Scheduler 管理者のユーザー名。 Scheduler 管理者の詳細は、「 Oracle BI Scheduler 管理者について 」（138 ページ）を参照してください。
	Administrator Password	Scheduler 管理者のユーザー・パスワード。パスワード・エントリを確認します。
	(他のパラメータ)	他のパラメータはデフォルトに設定されます。 Scheduler サービスのデフォルト・ポートは 9705 です。 Scheduler のポートを変更するには、「Port Number」を選択して設定します。

Oracle BI Scheduler コンポーネントの機能を構成する方法（Scheduler を SMTP メール配信用に構成する方法など）の詳細は、『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』を参照してください。

Windows での Oracle BI Scheduler の構成

Job Manager（BI Scheduler コンポーネントとともに Windows にインストールされる）を使用して、Scheduler を構成します。

Windows で Oracle BI Scheduler を構成するには

- 1 Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「Job Manager」を選択します。
- 2 Job Manager で、「File」→「Configuration Options」を選択します。
- 3 「Scheduler」→「Scheduler Configuration」ウィンドウの「General」タブで、138 ページの表 18 に示すように各フィールドを設定します。
- 4 「Scheduler」→「Database」タブの「Connection Pool」ボックスで、138 ページの表 18 に示すように各フィールドを設定します。
- 5 Job Manager を終了します。

UNIX での Oracle BI Scheduler の構成

Scheduler 構成オプションが、schconfig（コンソールベースのアプリケーション）を使用して設定されます。

UNIX で Oracle BI Scheduler を構成するには

- 1 OracleBI_HOME/setup ディレクトリで、schconfig スクリプトを実行します。

```
. sa-init.sh  
schconfig
```

- 2 「Delivers Configuration」の選択肢が表示されたら、「1 - Configure Scheduler」を選択します。
- 3 「Scheduler Configuration」の選択肢から「1 - Database」を選択します。
- 4 138 ページの表 18 に示すパラメータを選択して設定します。
- 5 応答要求のメッセージが表示されたときに「0」を選択すると、「Database」構成に対する変更を保存して終了します。
- 6 「Scheduler Configuration」の選択肢から「2 - General」を選択します。
- 7 138 ページの表 18 に示すパラメータを選択して設定します。
- 8 応答要求のメッセージが表示されたときに「0」を選択すると、「General」構成に対する変更を保存して終了します。

Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成

この項は、「Oracle BI Scheduler 構成オプションの設定」プロセスの一部です。

33 ページの図 1 に示すように、Oracle BI Scheduler と Oracle BI Presentation Services のサーバーは連携して動作します。この項では、それらの構成について説明します。

Oracle Business Intelligence Scheduler と Oracle BI Presentation Services が同じマシンにインストールされていない場合、Oracle BI Presentation Services マシンが Scheduler マシンのアドレスを指し示すようにする必要があります。「Presentation Services 構成ファイルにおける Scheduler ホストとポートの指定」(140 ページ)を参照してください。

Scheduler との接続を確立するために使用する資格証明を、Oracle BI Presentation Services マシンに提供する必要があります。次の項を参照してください。

- 「Oracle BI Presentation Services 資格証明ストアへの Scheduler 管理者資格証明の追加」(142 ページ)
- 「資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成」(145 ページ)

Presentation Services 構成ファイルにおける Scheduler ホストとポートの指定

この項は、「Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成」のプロセスの一部です。

Scheduler ホストの名前とポートは、Oracle BI Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルで指定します。Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルは、OracleBIData_HOME¥web¥config ディレクトリ（Windows の場合）または OracleBIData_HOME/web/config ディレクトリ（UNIX の場合）にあります。

- Oracle BI Scheduler と Oracle BI Presentation Services のコンポーネントが同じマシンにインストールされている場合、インストーラにより instanceconfig.xml 設定がローカル・ホストとデフォルトの Scheduler ポート（9705）に設定されます。

Oracle BI Scheduler と Oracle BI Presentation Services が同じマシンにインストールされ、Scheduler でデフォルトのポート（9705）が使用される場合、「[Oracle BI Presentation Services 資格証明ストアへの Scheduler 管理者資格証明の追加](#)」（142 ページ）に進んでください。

- Oracle BI Scheduler と Oracle BI Presentation Services が同じマシンにインストールされていない場合や、Scheduler のポートをデフォルトのポート（9705）から別のポートに変更した場合、Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルを変更する必要があります。

注意： このファイルを編集する前に、ファイルのバックアップ・コピーを作成してください。

次の手順に従って、Oracle BI Presentation Services が Oracle BI Scheduler マシンとポート番号を指し示すエントリで instanceconfig.xml 構成ファイルを修正します。

注意： Oracle Application Server を使用している組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお勧めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用している組織では、JConsole を使用することをお勧めします。詳細は、「[Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新](#)」（100 ページ）を参照してください。

ScheduleServer 構成設定を変更するには

- 1 BI Presentation Services マシンで、次の表に示す場所にある Oracle BI データ・ディレクトリに移動します。

オペレーティング・システム	データ・ディレクトリの場所
Windows	OracleBIData_HOME¥Web¥config
UNIX	OracleBIData_HOME/web/config

instanceconfig.xml ファイルを探して、バックアップ・コピーを作成します。

- 2 instanceconfig.xml ファイルを開いて編集します。
- 3 <ServerInstance> タグと </ServerInstance> タグの間で、<Alerts> タグと </Alerts> タグのペアを探します（それらのタグが存在しない場合は作成します）。
- 4 Alerts タグの間に、<ScheduleServer> タグと </ScheduleServer> タグのペアを作成します。

- ScheduleServer タグの間に、Scheduler マシンの名前を挿入します。

次に例を示します。

```
<ServerInstance>
. . .
  <Alerts>
    <ScheduleServer>Schedulermachine</ScheduleServer>
  </Alerts>
```

- Scheduler ポートがデフォルト値の 9705 から変更されている場合、Scheduler ポート番号を指定します。

次に例を示します。

```
<ServerInstance>
. . .
  <Alerts>
    <ScheduleServer>Schedulermachine:Port</ScheduleServer>
  </Alerts>
```

- 終了したら、ファイルを保存します。

変更内容は Oracle BI Presentation Services サービスを再起動したときに有効になります。

Oracle BI Presentation Services 資格証明ストアへの Scheduler 管理者資格証明の追加

この項は、「[Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成](#)」のプロセスの一部です。

Oracle BI Presentation Services では、Scheduler 管理者を特定して資格証明を取得し、Scheduler との接続を確立する必要があります。Presentation Services では、使用する資格証明は、Presentation Services 資格証明ストアに格納されます。Scheduler 管理者資格証明は、資格証明ストアに admin の別名で追加されている必要があります。Scheduler 管理者資格証明を取得するために、Oracle BI Presentation Services では資格証明ストアにおいて資格証明（ユーザー名とパスワード）を admin の別名で検索します。Presentation Services 資格証明ストアの詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

次の手順に従って、Scheduler 管理者資格証明を Presentation Services 資格証明ストアに admin の別名で追加します。この手順により、Scheduler 管理者資格証明が専用の XML ファイル資格証明ストア (credentialstore.xml) に追加されます。このファイルのデフォルトの場所は、OracleBIData_HOME¥web¥config (Windows の場合) と OracleBIData_HOME/web/config (UNIX の場合) です。

Scheduler 管理者資格証明を資格証明ストアに追加するには

1 Oracle BI Presentation Services がインストールされているマシンで、コマンド・プロンプト・ウィンドウまたはコマンド・シェルを開きます。

2 次のコマンドを実行します（オペレーティング・システムに応じてスラッシュを調整します）。

```
$ . /OracleBI_HOME/setup/sysenvinit.sh
```

3 Windows の場合、ディレクトリ OracleBI_HOME¥web¥bin に移動します。UNIX の場合、OracleBI_HOME/web/bin に移動します。

4 次のように CryptoTools ユーティリティを実行して、Scheduler 管理者資格証明を Presentation Services 資格証明ストアに追加します。

```
cryptotools credstore -add -infile OracleBIData_HOME/web/config/credentialstore.xml
```

CryptoTools ユーティリティ、その構文およびサポートされているサブコマンドの詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

5 次の表に示すとおり、プロンプトでパラメータの値を指定します。

CryptoTools プロンプト	値または入力内容	説明
Credential Alias	admin	値 admin を指定します。Presentation Services ではこの別名を使用して、Scheduler 管理者資格証明（ユーザー名とパスワード）を特定します。
Username	（Scheduler 管理者のユーザー名）	Scheduler 管理者のユーザー名を入力します。たとえば、SchedulerAdmin と入力します。Scheduler 管理者の詳細は、「 Oracle BI Scheduler 管理者について 」（138 ページ）を参照してください。
Password	（Scheduler 管理者のパスワード）	Scheduler 管理者のパスワードを入力します。たとえば、SchedulerAdmin と入力します。
Do you want to encrypt the password?	y または n	Y を選択すると、前述のパスワードが暗号化されます。
Passphrase for encryption	（パスフレーズ）	パスワードの暗号化に使用するパスフレーズを入力します。たとえば、secret と入力します。
Do you want to write the passphrase to the xml?	y または n	Y を選択すると、xml ファイルのパスワードをデコードするために必要なパスフレーズが書き込まれます。セキュリティを強化するには、N を選択します。パスフレーズは xml ファイルに書き込まれません。そのかわりに、instanceconfig.xml ファイルでパスフレーズを指定する必要があります。

次の例は、Scheduler 管理者資格証明を Presentation Services 資格証明ストアに追加する手順の例です。

```
cryptotools credstore -add -infile OracleBIData_HOME/web/config/credentialstore.xml

>Credential Alias: admin
>Username: SchedulerAdmin
>Password: SchedulerAdmin
>Do you want to encrypt the password? y/n (y):
>Passphrase for encryption: secret
>Do you want to write the passphrase to the xml? y/n (n):
>File "OracleBIData_HOME/web/config/credentialstore.xml" exists. Do you want to
overwrite it? y/n (y):
```

CryptoTools ユーティリティにより、credentialstore.xml ファイルが更新されます。このファイルは、OracleBI_Data_HOME¥web¥config ディレクトリにあります（このディレクトリ構造は、UNIX システムでも同じです）。

CryptoTools ユーティリティを入力例で実行すると、credentialstore.xml ファイルには、次の例のようなエントリが格納されます。

```
<sawcs:credential type="usernamePassword" alias="admin">
<sawcs:username>SchedulerAdmin</sawcs:username>

  <sawcs:password passphrase="secret">
    <xenc:EncryptedData>
      <xenc:EncryptionMethod Algorithm="http://www.rsasecurity.com/rsalabs/pkcs/
schemas/pkcs-5#pbes2">
        <pkcs-5:PBES2-params Algorithm="http://www.rsasecurity.com/rsalabs/pkcs/
schemas/pkcs-5#pbkdf2">
          <pkcs-5:KeyDerivationFunc>

            <pkcs-5:Parameters>
              <pkcs-5:IterationCount>1024</pkcs-5:IterationCount>
            </pkcs-5:Parameters>
          </pkcs-5:KeyDerivationFunc>
          <pkcs-5:EncryptionScheme Algorithm="http://www.w3.org/2001/04/
xmlenc#tripleDES-cbc"/>
        </pkcs-5:PBES2-params>

      </xenc:EncryptionMethod>
      <xenc:CipherData>
        <xenc:CipherValue>jethdk8zk1nTlyKIat8Dkw</xenc:CipherValue>
      </xenc:CipherData>
    </xenc:EncryptedData>

  </sawcs:password>
</sawcs:credential>
```


資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成

この項は、「Oracle BI Scheduler との通信用の Oracle BI Presentation Services の構成」のプロセスの一部です。

Oracle BI Presentation Services では、Scheduler 管理者資格証明がある資格証明ストアの場所が既知である必要があります。Oracle BI Presentation Services 構成ファイル (instanceconfig.xml) でパラメータを設定することで、これが実現されます。さらに、パスフレーズを資格証明ストアに格納していない場合、パスワード資格証明を復号化するパスフレーズも指定する必要があります。前述の例では、パスフレーズを資格証明ストアに格納していないため、instanceconfig.xml ファイルでパスフレーズを指定する必要があります。

Oracle BI Presentation Services が使用する資格証明ストアを特定するには

- 1 instanceconfig.xml ファイルを開いて編集します。このファイルは、OracleBI_Data¥web¥config ディレクトリにあります。このディレクトリ構造は、UNIX プラットフォームでも同じです。
- 2 このファイル内で <CredentialStore> ノードを探します。
- 3 次の例に示すような属性値を指定します。<CredentialStore> ノードが存在しない場合、サブ要素と属性のあるこの要素を作成します。

```
<webConfig>
  <ServerInstance>
    <!-- other settings ... -->
    <CredentialStore>
      <CredentialStorage type="file" path="<path to credentialstore.xml>"
        passphrase="<passphrase>"/>
    <!-- other settings ... -->
    </CredentialStore>
    <!-- other settings ... -->
  </ServerInstance>
</webConfig>
```

- 4 Presentation Services を再起動して、構成変更を反映させます。

修正した後 instanceconfig.xml には、次の例に示すようなエントリが格納されます。

```
<?xml version="1.0"?>

<webConfig>
  <ServerInstance>
    <!-- other settings ... -->
    <CredentialStore>
      <CredentialStorage type="file" path=""OracleBIData_HOME/web/config/
        credentialstore.xml" passphrase="secret"/>
    <!-- other settings ... -->
    </CredentialStore>
    <!-- other settings ... -->
  </ServerInstance>
</webConfig>
```

警告 : credentialstore.xml ファイルと instanceconfig.xml ファイルの両方を保護する必要があります。それらを組み合わせると、特権ユーザーのパスワードが明らかになる場合があります。どちらか一方のファイルだけでは、パスワードが明らかになる情報は十分ではありません。

CredentialStore 要素とそのサブ要素の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

11 BI Publisher レポート・ツールの構成

この章では、Oracle Business Intelligence Publisher（オラクル社のアプリケーションで、高度にフォーマットされたレポートの作成を行う）を構成するタスクについて説明します。Oracle BI Publisher 環境は、Oracle BI Publisher Enterprise サーバーと Oracle BI Publisher アドイン（Word、Excel および Acrobat Professional のアドイン）で構成されています。

BI Publisher を構成するためのロードマップ

「Oracle BI インストーラと Oracle BI Publisher について」(149 ページ) で説明しているように、Oracle BI Publisher は、Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition のメイン・インストーラによりインストールされます。

BI Publisher の構成プロセスは、次の手順で構成されています。

注意：詳細は、この項の後に説明します。

- 1 データベース・ユーザー（たとえば、*bipuser*）を作成します。

注意：データベース構成では、レポートの送信またはスケジュールを実行する必要があります。この手順では、Oracle 10g データベースを例として使用します。スケジューラ・データベースは、Microsoft SQL Server または IBM DB2 にすることもできます。

- 2 データベース・ユーザーを作成したら、ユーザーに接続権限を付与します。

注意：Database コンポーネントのために参照されるスケジューラは、Oracle Business Intelligence Scheduler ではありません。これは、BI Publisher によってのみ使用されるスケジューラです。

- 3 BI Publisher の「Admin」画面の「System Maintenance」→「Scheduler Configuration」ページで、データベースと BI Publisher ディレクトリの場所を指し示すように設定を変更します。

- 4 BI Publisher の「Admin」画面の「Data Sources」→「JDBC Connection」ページで、Oracle BI ユーザーを BI Publisher に追加します。

- 5 デモ・データを構成します。

次に示す各項では、Oracle Business Intelligence と連動するように Oracle BI Publisher ソフトウェアを構成するプロセスについて説明します。

- 「BI Publisher の要件」(149 ページ)
- 「OC4J のメモリー割当て」(151 ページ)
- 「他の J2EE アプリケーション・サーバーによる BI Publisher のデプロイ」(151 ページ)
- 「BI Publisher の起動と停止」(152 ページ)
- 「XMLP サーバー用の BI Publisher の構成」(152 ページ)
- 「Oracle BI における BI Publisher の組み込み」(154 ページ)
- 「スケジューラ用の BI Publisher の構成」(160 ページ)
- 「BI Publisher デモ・レポートの実行」(162 ページ)

Oracle BI インストーラと Oracle BI Publisher について

- Oracle BI Publisher のインストールには、次のコンポーネントが含まれます。
 - BI Publisher Enterprise サーバーのアプリケーション
 - ドキュメント（ユーザズ・ガイド、Javadoc、デモおよびサンプル）
 - Oracle BI インストーラでは、次の処理が BI Publisher のために自動的に行われます。
 - Oracle Containers for J2EE (OC4J) リリース 10.1.3.1 を「Basic」インストール・タイプでのみインストールします。
 - OC4J コンテナに .ear ファイルをデプロイします（デフォルト値を設定し、ポートに関して設定を要求します）。
 - フォントを J2EE JRE ディレクトリ（/jdk/jre/lib/fonts）にコピーします。
 - BI Publisher Reports フォルダをインストールします。
 - 次の場所の BI Publisher フォルダを設定します。
 - **Windows の場合：**

```
OracleBI_HOME\xmlp\XMLP\Admin\Configuration\xmlp-server-config.xml
```
 - **UNIX の場合：**

```
OracleBI_HOME/oc4j_bi/j2ee/home/applications/xmlpserver/xmlpserver/WEB-INF/xmlp-server-config.xml
```
- 注意：** Oracle BI が Oracle Application Server でデプロイしている最中の場合、BI Publisher フォルダは、*OracleBI_HOME* ではなく *IAS_HOME* に設定されます。
- BI Server を JDBC データソースとして設定します。
BI Publisher インタフェースでは、BI Server セマンティック・レイヤーで定義された Subject Area に対して、クエリーを直接作成できます。
 - BI Presentation Services との統合を設定します。
Answers Requests は、BI Publisher レポートのデータソースとして使用できます。

BI Publisher の要件

Oracle Business Intelligence のインストールでは、OC4J を使用して BI Publisher Enterprise サーバーを実行します。

BI Publisher のコンポーネント

BI Publisher の実行に必要な追加コンポーネントを、[150 ページの表 19](#) に示します。

表 19. BI Publisher の実行に必要な追加コンポーネント

コンポーネント	バージョンまたは例
J2EE ベースのアプリケーション・サーバー	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle OC4J リリース 10.1.3.1 注意: このコンポーネントを使用する場合、「Basic」インストールを選択します。 ■ 別の J2EE アプリケーション・サーバー 注意: 独自の J2EE サーバーを使用する場合、「Advanced」インストールを選択します。
Web ブラウザ	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 ■ Mozilla Firefox 1.0 以上
データベース (オプションですが、スケジューラ・データベースでは必要)	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Database 10g ■ Microsoft SQL Server ■ IBM DB2 UDB ■ Sybase Adaptive Server ■ MySQL

Oracle BI Publisher Desktop

Oracle Business Intelligence Publisher Desktop は Windows ベースの設計ツールで、Oracle BI Publisher のレイアウトを作成できます。BI Publisher Desktop には、Template Builder for Word、Template Viewer、ドキュメント、デモおよびサンプルが含まれています。

- Template Builder for Word は Microsoft Word のアドインで、これによって RTF レイアウト・テンプレートの開発が容易になります。
- Template Viewer によって、テンプレートのタイプ (RTF、PDF および eText) のテストと表示が容易になります。
- Excel Analyzer のドキュメントがダウンロードされると、Excel Analyzer が必要に応じてインストールされます。

「[Oracle BI Publisher Desktop のインストール](#)」(81 ページ) を参照してください。

OC4J のメモリー割当て

Oracle BI Publisher の実行に十分なメモリーを Oracle Containers for Java (OC4J) に割り当てます。

OC4J 用にメモリーをさらに割り当てるには

- 1 「BI Publisher の起動と停止」(152 ページ) に示すコマンドを使用して、BI Publisher サーバーを停止します。
- 2 OracleBI_HOME/oc4j_bi/bin に移動します。
- 3 OC4J がさらに大容量のメモリーで起動できるように oc4j.cmd ファイルを編集します。

注意： 通常のヒープ・サイズに加えて Permanent 世代メモリーを 128MB に増やすことで、最小 256MB のメモリーを割り当てます。

- 次の行を検索します。

```
set JVMARGS=-Djava.library.path=D:\OracleBI\server\bin;D:\OracleBI\web\bin -
DSAROOTDIR=D:\OracleBI -DSADATADIR=D:\OracleBIData %OC4J_JVM_ARGS%
```

- この行で、-DSADATADIR=D:\OracleBIData と %OC4J_JVM_ARGS% の変数の間に、次の文字列を追加します。

```
-XX:MaxPermSize=128m -Xmx512m
```

- 4 oc4j.cmd を保存します。

他の J2EE アプリケーション・サーバーによる BI Publisher のデプロイ

このマニュアルでは主に、BI Publisher を、OC4J や Oracle Application Server などのアプリケーション・サーバーにインストールする方法について説明しています。ただし、BI Publisher は、Tomcat や Websphere など、他の J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイすることもできます。BI Publisher を他の J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイするには、Install.pdf ファイルに記載された手順 (Apache Tomcat 5.0 のデプロイに関する項) に従ってください。

- Install.pdf ファイルは、Oracle BI EE インストーラと同じネットワーク上か CD-ROM にあります (Server_Ancillary\Oracle_Business_Intelligence_Publisher サブフォルダ)。
- .war ファイルと .ear ファイルは次の場所にあります。
 - Server_Ancillary\Oracle_Business_Intelligence_Publisher\generic\xmlserver.war
 - Server_Ancillary\Oracle_Business_Intelligence_Publisher\oc4j\xmlserver.ear

BI Publisher の起動と停止

BI Publisher サーバーの起動や停止は、oc4j.cmd コマンドを使用して行います。OracleBI_HOME/oc4j_bi/bin フォルダに移動します。

BI Publisher サーバーを起動するには

- コマンドラインで次のように入力します。

```
oc4j -start
```

BI Publisher サーバーを停止するには

- コマンドラインで次のように入力します。

```
oc4j -stop
```

XMLP サーバー用の BI Publisher の構成

Oracle BI のインスタンスを管理者として実行しているときに、BI Publisher の「Admin」画面で BI Publisher を構成します。

注意：この項では、Oracle BI Publisher を参照する構成設定のみを記載しています。XMLP サーバー構成の詳細は、『Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド』を参照してください。データベースのデプロイメントの詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle BI Publisher で XMLP サーバーを構成するには

- 1 ブラウザを起動してログイン・ページを表示します。次に例を示します。

```
http://localhost:9704/xmlpserver
```

- 2 ユーザー名とパスワード Administrator を使用してログインします。
- 3 「Admin」タブで、次のセクションとリンクを確認し、次の表を参照しながら必要に応じて構成を行うか、構成を確認します。

「Admin」タブのセクション	構成画面へのリンク
Data Sources	■ JDBC Connection
	■ JNDI Connection
	■ File
Security Center	■ Security Configuration
	■ Roles and Permissions

注意：Oracle BI 管理者ユーザーを含めて、ここでユーザーを作成します。

「Admin」タブのセクション	構成画面へのリンク
Delivery	<ul style="list-style-type: none"> ■ Delivery Configuration ■ Printer ■ Fax ■ Email ■ WebDAV ■ FTP ■ CUPS Server
System Maintenance	<ul style="list-style-type: none"> ■ Server Configuration ■ Scheduler Configuration <p>注意： Database コンポーネントのために参照されるスケジューラは、Oracle Business Intelligence Scheduler ではありません。これは、BI Publisher によってのみ使用されるスケジューラです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Refresh Metadata
Runtime Configuration	<ul style="list-style-type: none"> ■ Properties ■ Font Mappings
Integration	<p>Oracle BI Presentation Services</p> <p>注意： この画面で入力した「Admin Username」と「Admin Password」は、Oracle Business Intelligence 用の管理者資格証明であり、BI Publisher 用ではありません。</p>

- 4 必要に応じて、データソースとして Oracle BI のデフォルト構成を変更します。
- Oracle BI Publisher 画面で、「Admin」タブをクリックします。
 - 「JDBC」 → 「Update Data Source」を選択します。

- 次の例に示すようにフィールドを変更します。

Data Source Name	Oracle BI EE
JDBC Connection String	<code>jdbc:oraclebi://BIServer_machine.domain:9703 ;</code>
	注意： デフォルトの接続文字列は、 <code>jdbc:oraclebi://host:port/</code> です。ポート番号は、NQSSConfig.INI ファイルの <code>RPC_SERVICE_OR_PORT</code> パラメータによって設定されます。JDBC データソース (Oracle BI EE) 用の接続文字列がターゲットの Oracle BI Server を指し示すように修正します。
「Username」と「Password」	注意： これは、Oracle BI の管理者資格証明です。
Database Driver Class	<code>oracle.bi.jdbc.AnaJdbcDriver</code>
Use Proxy Authentication	No
Allowed Roles	XMLP ユーザー

注意： JDBC 接続文字列の例は、クラスタ化や SSL を使用しないでデプロイされた Oracle BI を示しています。SSL を使用して Oracle BI をセキュアにデプロイする方法や、クラスタ化を使用してデプロイする方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

- BI Publisher 画面の「Admin」タブ → 「Integration」 → 「Oracle BI Presentation Services」セクションで変更を行います。
 - 「Admin Username」と「Admin Password」が、Oracle Business Intelligence 用の管理者資格証明であることを確認します。
 - 「Server」と「Port」のフィールドが、Oracle BI を指し示していることを確認します。
 - XMLP URL 接尾辞は、インストール時に `analytics/saw.dll` に設定されます。Single Sign-on を有効にした場合、定義するアプリケーションにこの URL を変更します。たとえば、`analyticsSOAP/saw.dll` にします。詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
- 「Apply」をクリックして変更を保存します。
- 「BI Publisher の起動と停止」(152 ページ) の説明に従って、BI Publisher サーバーを再起動します。

Oracle BI における BI Publisher の組み込み

Oracle BI Presentation Services と Oracle BI Publisher をデプロイするサイトでは、これらのコンポーネント間で一連の設定を構成する必要があります。この項では、高度なレポート処理機能を使用するために Oracle Business Intelligence に BI Publisher を組み込む方法について説明します。

- Publisher 管理者を特定して資格証明を取得するように、Oracle BI Presentation Services を構成する必要があります。
- 「Oracle BI Presentation Services 資格証明ストアへの Publisher 管理者資格証明の追加」(157 ページ) を参照してください。

- Publisher 管理者資格証明がある資格証明ストアにアクセスできるように、Oracle BI Presentation Services を構成する必要があります。

「資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成」(159 ページ) を参照してください。

注意: 高度にフォーマットされたレポートを作成して表示するためには、Oracle BI ユーザーは、「More Products」リンク→「BI Publisher」から BI Publisher にアクセスします。

Presentation Services の構成ファイルにおける BI Publisher 設定の構成

Publisher URL は、instanceconfig.xml ファイル (Oracle BI Presentation Services 用の構成ファイル) で指定します。BI Publisher と BI Presentation Services のコンポーネントが同じマシンにインストールされており、BI Publisher が OC4J コンテナにデプロイされている場合、インストーラでは instanceconfig.xml 設定が適切な Publisher URL に設定されます。

155 ページの表 20 に、BI Publisher のデプロイメントを行うための instanceconfig.xml ファイル設定を示します。instanceconfig.xml ファイルは、次のディレクトリにあります。

- OracleBIData_HOME¥web¥config
- OracleBIData_HOME/web/config

表 20. instanceconfig.xml ファイルにおける BI Publisher の <AdvancedReporting> タグ設定

キー	デフォルト値	注意
ReportingEngine	Xmlpl	BI Publisher をレポート・ツールとして指し示します。
Volume	Xmlpl	
ServerURL	http:// <MachineName>:9704/ xmlpservice/service	Web サービスの XMLP サーバーを指し示します。
WebURL	http:// <MachineName>:9704/ xmlpservice	XMLP フロントエンド用の URL です。iframe の XMLP コンテンツをダッシュボード・ページでレンダリングするために使用します。
AdminURL	http:// <MachineName>:9704/ xmlpservice/servlet/ admin	管理者が高度なレポート処理機能のユーザー、権限、ジョブ、ファイルおよびフォルダを管理できる URL です。
AdminCredentialAlias	bipublisheradmin	これは、BI Publisher 管理者資格証明の別名で、BI Presentation Services がその資格証明ストアを検索して BI Publisher 資格証明を取得するために使用します。

BI Publisher と BI Presentation Services が同じマシンにインストールされていない場合や、他の J2EE アプリケーション・サーバーに Publisher をデプロイした場合、Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルを変更する必要があります。

注意： Oracle Application Server を使用している組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお勧めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用している組織では、JConsole を使用することをお勧めします。詳細は、「Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新」(100 ページ) を参照してください。

次に示す手順では、Oracle BI Presentation Services の instanceconfig.xml ファイルで BI Publisher 設定を構成する方法について説明します。

注意： このファイルを編集する前に、ファイルのバックアップ・コピーを作成してください。

instanceconfig.xml ファイルで BI Publisher 設定を構成するには

- 1 BI Presentation Services マシンで、適切なディレクトリに移動し、instanceconfig.xml ファイルを開いて編集します。
- 2 このファイル内で <AdvancedReporting> ノードを探します。

次の例に示すような属性値を指定します。<AdvancedReporting> ノードが存在しない場合、<ServerInstance> タグと </ServerInstance> タグのペアの間にこの要素を作成し、次の例に示すような属性値のある属性を作成します。

```
<ServerInstance>

  <!-- Other Settings -->
  <AdvancedReporting>
    <ReportingEngine>XmLP</ReportingEngine>
    <Volume>XmLP</Volume>
    <ServerURL>http://<BI Publisher Host>:<Port>/xmlpserver/services/
XMLPService</ServerURL>
    <WebURL>http://<BI Publisher Host>:<Port>/xmlpserver</WebURL>
    <AdminURL>http://<BI Publisher Host>:<Port>/xmlpserver/servlet/admin</
AdminURL>
    <AdminCredentialAlias>bipublisheradmin</AdminCredentialAlias>
  </AdvancedReporting>

  <!-- Other Settings -->
</ServerInstance>
```

AdvancedReporting 属性の詳細は、155 ページの表 20 の「注意」列を参照してください。

注意： 追加属性は AuthIdExpiry です。これによって、XMLP サーバーからの認証資格証明の有効期間を分単位で設定します。この値は、XMLP タイムアウト値未満にする必要があります。デフォルト値は 5 です。デフォルト値の 5 で十分である場合、この属性を明示的に指定する必要はありません。

- 3 終了したら、ファイルを保存します。

変更内容は、Oracle Business Intelligence Presentation Services サービスを再起動したときに有効になります。

Oracle BI Presentation Services 資格証明ストアへの Publisher 管理者資格証明の追加

Oracle BI Presentation Services では、Publisher 管理者を特定して資格証明を取得し、BI Publisher において正常に認証できる必要があります。Presentation Services サーバーでは、使用する資格証明は、Presentation Services 資格証明ストア・ファイルに格納されます。Publisher 管理者資格証明は、資格証明ストアに追加されている必要があります。これらの資格証明は、bipublisheradmin という別名で格納されます。Publisher 管理者資格証明を取得するために、Presentation Services では資格証明ストアにおいて資格証明（ユーザー名とパスワード）を bipublisheradmin の別名で検索します。

Presentation Services 資格証明ストアの詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

次の手順に従って、Publisher 管理者資格証明を Presentation Services 資格証明ストアに bipublisheradmin の別名で追加します。この手順では、Publisher 管理者資格証明が Presentation Services の専用の XML ファイル資格証明ストア（credentialstore.xml）に追加されます。このファイルのデフォルトの場所は、次の場所です。

- **Windows** の場合 :OracleBIData_HOME\web¥config
- **UNIX** の場合 :OracleBIData_HOME/web/config

Publisher 管理者資格証明を資格証明ストアに追加するには

- 1 Presentation Services がインストールされているマシンで、コマンド・プロンプト・ウィンドウまたはコマンド・シェルを開きます。
- 2 CryptoTools ユーティリティがある適切なディレクトリに移動します。
- 3 次のように CryptoTools ユーティリティを実行します。

```
cryptotools credstore -add -infile OracleBIData_HOME/web/config/credentialstore.xml
```

CryptoTools ユーティリティ、その構文およびサポートされているサブコマンドの詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

- 4 157 ページの表 21 に示すとおり、プロンプトでパラメータの値を指定します。

表 21. Publisher 管理者資格証明ストアのパラメータ

パラメータまたはプロンプト	値または入力内容	説明
Credential Alias	bipublisheradmin	値 bipublisheradmin を指定します。Presentation Services ではこの別名を検索して、Publisher 管理者資格証明（ユーザー名とパスワード）を特定します。

表 21. Publisher 管理者資格証明ストアのパラメータ

パラメータまたはプロンプト	値または入力内容	説明
Username	Administrator	Publisher 管理者のユーザー名です。 インストール時のデフォルト値は、Administrator です。 Publisher 管理者の詳細は、「XMLP サーバー用の BI Publisher の構成」(152 ページ) を参照してください。
Password	Administrator	Publisher 管理者のパスワードです。インストール時のデフォルト値は、Administrator です。
Do you want to encrypt the password?	y または n	Y を選択すると、前述のパスワードが暗号化されます。
Passphrase for encryption	< パスフレーズ >	パスワードの暗号化に使用するパスフレーズを入力します。たとえば、secret と入力します。
Do you want to write the passphrase to the xml?	y または n	<ul style="list-style-type: none"> ■ Y を選択すると、xml ファイルのパスワードをデコードするために必要なパスフレーズが書き込まれます。 ■ セキュリティを強化するには、N を選択します。パスフレーズは xml ファイルに書き込まれません。そのかわりに、instanceconfig.xml ファイルでパスフレーズを指定します。

前述の手順の例を次に示します。

```
cryptotools credstore -add -infile OracleBIData_HOME/web/config/credentialstore.xml
>Credential Alias: bipublisheradmin
>Username: Administrator
>Password: Administrator
>Do you want to encrypt the password? y/n (y):
>Passphrase for encryption: secret
>Do you want to write the passphrase to the xml? y/n (n):
>File "OracleBIData_HOME/web/config/credentialstore.xml" exists. Do you want to
overwrite it? y/n (y):
```

CryptoTools ユーティリティでは、credentialstore.xml ファイルが更新されます。このファイルは、次のディレクトリにあります。

■ OracleBIData_HOME¥web¥config

注意: このディレクトリ構造は、UNIX プラットフォームでも同じです。

CryptoTools ユーティリティを前述で指定した入力で実行すると、credentialstore.xml ファイルには、次の例に示すようなエントリが格納されます。

```
<sawcs:credential type="usernamePassword" alias="bipublisheradmin">
  <sawcs:username>Administrator</sawcs:username>
  <sawcs:password passphrase="secret">
    <xenc:EncryptedData>
      <xenc:EncryptionMethod Algorithm="http://www.rsasecurity.com/rsalabs/pkcs/
schemas/pkcs-5#pbes2">
        <pkcs-5:PBES2-params Algorithm="http://www.rsasecurity.com/rsalabs/pkcs/
schemas/pkcs-5#pbkdf2">
          <pkcs-5:KeyDerivationFunc>
            <pkcs-5:Parameters>
              <pkcs-5:IterationCount>1024</pkcs-5:IterationCount>
            </pkcs-5:Parameters>
          </pkcs-5:KeyDerivationFunc>
          <pkcs-5:EncryptionScheme Algorithm="http://www.w3.org/2001/04/
xmlenc#tripleDES-cbc"/>
        </pkcs-5:PBES2-params>
      </xenc:EncryptionMethod>
      <xenc:CipherData>
        <xenc:CipherValue>jeThdk8Zk1nTlyKIat8Dkw</xenc:CipherValue>
      </xenc:CipherData>
    </xenc:EncryptedData>
  </sawcs:password>
</sawcs:credential>
```

資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成

Oracle BI Presentation Services では、Publisher 管理者資格証明がある資格証明ストアの場所が既知である必要があります。Presentation Services 構成ファイル (instanceconfig.xml) でパラメータを設定することで、これが実現されます。さらに、パスフレーズを資格証明ストアに格納していない場合、パスワード資格証明を復号化するパスフレーズも指定する必要があります。「[資格証明ストアを特定するための Oracle BI Presentation Services の構成](#)」(159 ページ) の例では、パスフレーズを資格証明ストアに格納していないため、instanceconfig.xml ファイルでパスフレーズを指定する必要があります。

Oracle BI Presentation Services の資格証明ストアを指定するには

- 1 OracleBI_Data¥web¥config ディレクトリで、instanceconfig.xml ファイルを開いて編集します。
- 2 このファイル内で <CredentialStore> ノードを探します。

次の例に示すような属性値を指定します。<CredentialStore> ノードが存在しない場合、サブ要素と属性のあるこの要素を、次の例に示すような属性値で作成します。

```
<webConfig>
  <ServerInstance>
    <!-- other settings ... -->
```

```

<CredentialStore>
  <CredentialStorage type="file" path="<path to credentialstore.xml>"
  passphrase="<passphrase>"/>
  <!-- other settings ... -->
</CredentialStore>
  <!-- other settings ... -->

</ServerInstance>

</WebConfig>

```

CredentialStore 要素とそのサブ要素の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

前述の手順で示した変更を行った後、instanceconfig.xml には、次の例に示すようなエントリが格納されます。

```

<?xml version="1.0"?>
<WebConfig>

  <ServerInstance>
    <!-- other settings ... -->

    <CredentialStore>

      <CredentialStorage type="file" path="OracleBIData_HOME/web/config/
      credentialstore.xml" passphrase="secret"/>

      <!-- other settings ... -->
    </CredentialStore>
    <!-- other settings ... -->
  </ServerInstance>

</WebConfig>

```

警告： credentialstore.xml ファイルと instanceconfig.xml ファイルの両方を保護する必要があります。それらを組み合わせると、特権ユーザーのパスワードが明らかになる場合があります。どちらか一方のファイルだけでは、パスワードが明らかになる情報は十分ではありません。

- 3 Presentation Services を再起動して、構成変更を反映させます。

スケジューラ用の BI Publisher の構成

この手順は、Oracle BI Publisher 画面の「Admin」タブで実行します。

注意：ここに記載されているスケジューラは、Oracle Business Intelligence Scheduler ではありません。これは、BI Publisher によってのみ使用されるスケジューラです。

スケジューラ用に BI Publisher を構成するには

- 1 スケジューラのスキーマを格納する場合、データベース・ユーザーを作成します。
ユーザーに権限を割り当ててセッションを開き、データベース・オブジェクトを作成します。

- 2 BI Publisher ページの「Admin」タブに移動して、「Scheduler Configuration」をクリックします。
- 3 次の例に示すように、データベースと作成済ユーザーの情報を入力します。

データベース・タイプ	Oracle 10g
接続文字列	jdbc:oracle:thin:@machine01.domain:1521:ora102
ユーザー名	XMLPSCH2
データベース・ドライバのクラス	oracle.jdbc.driver.OracleDriver

- 4 「Test Connection」をクリックして妥当性を検証します。
- 5 「Install Schema」ボタンをクリックして、結果を確認するまで待ちます。
- 6 複数のサーバーが同じリポジトリとスケジューラのスキーマに接続している場合は、「Clustering」チェック・ボックスを選択します。

図 2 に、Oracle BI Enterprise Edition と BI Publisher との間における関係を示します。

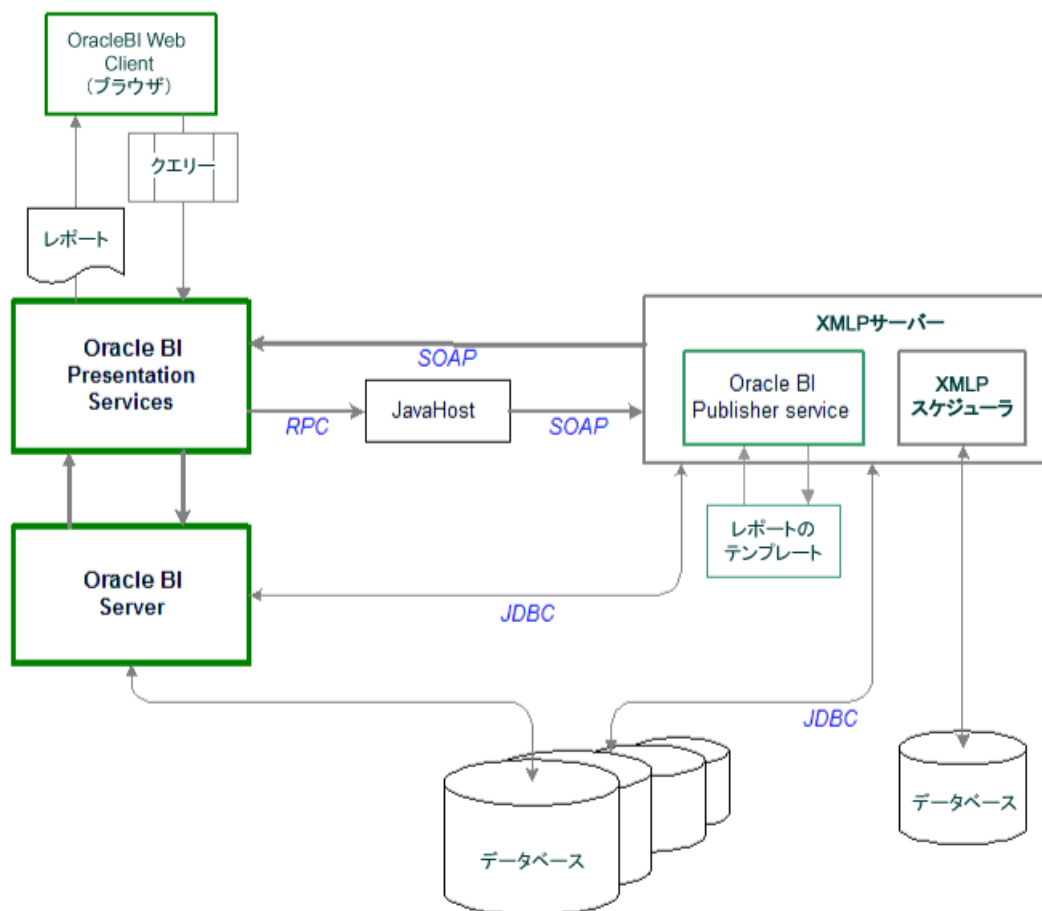


図 2. Oracle BI Enterprise Edition と BI Publisher の関係図

Windows で BI Publisher にアクセスするには

- 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「Oracle BI Publisher」にナビゲートします。

ブラウザが開き、<http://localhost:9704/xmlpserver> ページが表示されます。

BI Publisher デモ・レポートの実行

この項では、デモ・レポートを実行することで BI Publisher のインストールをテストする方法について説明します。

注意： データソースのデモでは、サンプルのスキーマとユーザー（HR と OE）がロックされていない状態で Oracle Database に接続する必要があります。

サンプルのレポートでは、次の一般的な構成手順を実行する必要があります。

- 1 「デモ・ファイルの構成」（162 ページ）
- 2 「デモ・データソースの構成」（162 ページ）
- 3 「Reports」タブに移動して、デモ・レポートを表示します。

デモ・ファイルの構成

この手順は、Oracle BI Publisher 画面の「Admin」タブで実行します。

デモ・ファイル・フォルダを設定するには

- 1 「Admin」タブをクリックします。
- 2 「Data Sources」セクションで「File」リンクをクリックします。
- 3 demo files という名前のデータソースをクリックします。
- 4 XMLP ディレクトリの DemoFiles フォルダにパスを変更します。
たとえば、C:\OracleBI\xmlp\XMLP\DemoFiles にします。
- 5 「Apply」をクリックして変更を保存します。

デモ・データソースの構成

この手順は、Oracle BI Publisher 画面の「Admin」タブで実行します。

デモ・データソースを構成するには

- 1 「Admin」タブをクリックします。
- 2 「Data Sources」セクションで「JDBC Connection」リンクをクリックします。

- 3 「Data Source Name」列で、「demo」をクリックします。
- 4 「Update Data Source」画面で、ロックされていない oe ユーザーの Oracle 10g データベースを指し示すように接続文字列を変更します。
- 5 「Test Connection」ボタンをクリックして、XML Publisher がデータベースにアクセスできることを確認します。
- 6 「Apply」をクリックして変更を保存します。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

A

NQSConfig.INI ファイルの参照

Oracle Business Intelligence Server ソフトウェアでは、初期化ファイルを使用して起動時にパラメータが設定されます。この初期化ファイル（NQSConfig.INI ファイル）には、各インストールの要件に基づいて動作をカスタマイズするパラメータが含まれています。この付録の次の各項では、初期化ファイルの使用時のルールを示し、各パラメータの定義および構文について説明します。

- 「Oracle BI Server の構成初期化ファイルの場所」 (166 ページ)
- 「Oracle BI 構成ファイルのパラメータのルール」 (166 ページ)
- 「Oracle BI 構成ファイル・パラメータのエントリの変更」 (166 ページ)
- 「Oracle BI 構成ファイルのパラメータと構文」 (167 ページ)

注意： クラスタ化の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

Oracle BI Server の構成初期化ファイルの場所

NQSConfig.INI ファイルは、Windows システムではサブディレクトリ OracleBI_HOME¥server¥Config にあります。

警告： このファイルの名前と場所は変更しないでください。

ユーザー独自の NQSConfig.INI ファイルを確認するには、Config サブディレクトリに移動してファイルを開きます。

パラメータの詳細な説明は、「Oracle BI 構成ファイルのパラメータと構文」(167 ページ) を参照してください。すべてのパラメータの説明は、Windows 環境を対象としています。

Oracle BI 構成ファイルのパラメータのルール

NQSConfig.INI ファイルのエントリは、次のルールに従ってください。

- NQSConfig.INI ファイルの各パラメータのエントリは、そのパラメータが所属するセクション内 (Repository、Cache、General など) に記述する必要があります。
- 各エントリの末尾にはセミコロン (;) を付ける必要があります。
- Oracle Business Intelligence Server は、起動するたびに初期化ファイルを読み取ります。

NQSConfig.INI ファイルのエラー

NQSConfig.INI ファイルの構文エラーについて、いくつかの注意事項があります。

- 構文エラーがある場合、Oracle Business Intelligence Server は起動しません。このエラーは、サブディレクトリ OracleBI_HOME¥server¥Log にある NQServer.log ファイルに記録されます。
システム・ログにも、このエラーに関連するサマリー・メッセージが記録されることがあります。
- エラーを修正して、Oracle Business Intelligence Server を再起動する必要があります。エラーのない状態でサーバーが起動するまで、この手順を繰り返します。

Oracle BI 構成ファイル・パラメータのエントリの変更

パラメータのエントリは、Oracle Business Intelligence Server の起動時に読み取られます。サーバーの稼動中にエントリを変更した場合、その変更を有効にするには、サーバーをシャットダウンして再起動する必要があります。

注意： Oracle Application Server を使用している組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお勧めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用している組織では、JConsole を使用することをお勧めします。詳細は、「Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新」(100 ページ) を参照してください。

NQSConfig.INI 初期化ファイルを編集するには

1 テキスト・エディタを使用してファイルを編集します。

注意：この付録の例では、Windows バージョンの初期化ファイルの編集を想定しています。UNIX については、ファイル・システム・パスおよび表記規則を必要に応じて変換してください。

2 NQSConfig.INI ファイルを保存して閉じます。

構成ファイルへのコメントの追加

NQSConfig.INI ファイルでは、任意の場所にコメントを追加できます。コメントの先頭には、次のいずれかの文字を使用する必要があります。

```
#  
//
```

これらのコメント文字に続く 1 行は、Oracle Business Intelligence Server で初期化ファイルが読み取られる際に無視されます。

Oracle BI 構成ファイルのパラメータと構文

この項では NQSConfig.INI ファイルのパラメータを示し、各パラメータの簡単な説明と必要な構文について紹介します。ここでは、一般的に構成ファイルに表示される順序でパラメータを示します。

パラメータは、次の各セクションに分けられます。

- 「構成ファイルの Repository セクションのパラメータ」(168 ページ)
- 「構成ファイルの Query Result Cache セクションのパラメータ」(168 ページ)
- 「構成ファイルの General セクションのパラメータ」(173 ページ)
- 「構成ファイルの Security セクションのパラメータ」(180 ページ)
- 「構成ファイルの Server セクションのパラメータ」(183 ページ)
- 「構成ファイルの Dynamic Library セクションのパラメータ」(191 ページ)
- 「構成ファイルの User Log セクションのパラメータ」(192 ページ)
- 「構成ファイルの Usage Tracking セクションのパラメータ」(192 ページ)
- 「構成ファイルの Optimization Flags セクションのパラメータ」(197 ページ)
- 「構成ファイルの Cube Views セクションのパラメータ」(197 ページ)

構成ファイルの Repository セクションのパラメータ

Repository セクションには、サーバーの起動時にロードされる各リポジトリの 1 つのエントリが含まれます。

構文: `<logical_name> = <repository_name.rpd> ;`

オプションの構文: `<logical_name> = <repository_name.rpd>, DEFAULT ;`

変数の説明

<code>logical_name</code>	リポジトリの論理名。クライアント・ツールは、この名前を使用して、リポジトリに接続する ODBC データソースを構成します。OCI7 または OCI8 などの予約されたキーワードを名前に使用する場合は、その単語を一重引用符で囲みます。
<code>repository_name.rpd</code>	リポジトリのファイル名。ファイル名には .rpd ファイル拡張子が必要です。また、このファイルは OracleBI_HOME の Repository サブディレクトリに存在する必要があります。
	デモのリポジトリ・ファイル (paint.rpd) は、「Basic」インストール・タイプでインストールされます。

リポジトリに DEFAULT を指定すると、DSN の論理リポジトリ名を指定しない接続がデフォルトのリポジトリに対して実行されます。

例: `Star = paint.rpd, DEFAULT ;`

構成ファイルの Query Result Cache セクションのパラメータ

Query Result Cache セクションのパラメータは、Oracle Business Intelligence Server のキャッシュに関する構成情報を提供します。クエリー・キャッシュはデフォルトで有効になっています。古くなったエントリのフラッシュ方法を決定したら、NQSSConfig.INI ファイルでキャッシュ領域のパラメータを構成する必要があります。

この項では、クエリー・キャッシュを制御するパラメータについてのみ説明します。Oracle BI でのキャッシュの使用の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』のクエリー・キャッシュに関する項を参照してください。Delivers を使用して Oracle BI Server のキャッシュを生成する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

注意: クエリー・キャッシュ機能は、主にランタイム・パフォーマンスを向上させます。システムが一定期間使用されると、以前実行したクエリに対してキャッシュ・ヒットが発生し、パフォーマンスが向上します。クエリー・パフォーマンスを最適化する最も効果的で一般的な方法は、Data Mart Automation (「Aggregate Persistence Wizard」) と集計ナビゲーションを使用することです。

ENABLE

キャッシュ・システムが有効かどうかを指定します。NO に設定するとキャッシュは無効になります。YES に設定するとキャッシュは有効になります。クエリー・キャッシュはデフォルトで有効になっています。

例：ENABLE = NO ;

DATA_STORAGE_PATHS

キャッシュされたクエリー結果のデータを格納し、キャッシュ・ヒットが発生した場合にアクセスするディレクトリ・パスを指定します（複数可）。最大容量は、バイト、KB、MB または GB で示します。各パスの最大容量は 4GB です。最適なパフォーマンスを得るには、パフォーマンスに優れたストレージ・システム上のディレクトリを指定します。

注意： クラスタ・サーバーとして定義されている Oracle Business Intelligence Server では、キャッシュ・データは共有されません。DATA_STORAGE_PATHS エントリは、クラスタ・サーバーとして定義されているサーバーごとに一意にする必要があります。

このパラメータには、実際に存在する、完全修飾された書込み可能なディレクトリのパス名を、二重引用符 (") で囲んで指定する必要があります。マップされたディレクトリのみを指定します。UNC パス名やネットワークにマップされたドライブは、修飾されたユーザー・アカウントでサービスが実行される場合にのみ指定できます。サービスを実行するアカウントを変更するには、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』の対応する項を参照してください。

複数のディレクトリを指定する場合は、それぞれのディレクトリをカンマで区切ります。複数のディレクトリを指定する場合、それぞれのディレクトリは異なる物理ドライブ上に存在する必要があります（同じ物理ディスクに解決される複数のキャッシュ・ディレクトリ・パスがあると、使用可能領域と使用済領域が二重にカウントされる場合があります）。

構文： DATA_STORAGE_PATHS = "<full_directory_path_1>" sz[, "<full_directory_path_2>" sz{, "<full_directory_path_n>" sz}];

例：DATA_STORAGE_PATHS = "d:¥OracleBI¥cache" 256MB, "f:¥OracleBI¥cache" 200MB ;

注意： 1 つのドライブで複数のディレクトリを指定してもパフォーマンスは改善されません。これは、それらのファイルの入出力 (I/O) が同じ I/O コントローラで処理されるためです。通常は、1 つのディスク・ドライブにディレクトリを 1 つだけ指定します。異なるドライブ上の複数のディレクトリを指定すると、I/O が複数のデバイスで分散されるため、Oracle Business Intelligence Server の全体的な I/O スループットが内部的に向上する場合があります。

キャッシュ・データのディスク領域の要件は、キャッシュ・エントリを生成するクエリー数と、そのクエリーの結果セットのサイズによって異なります。クエリーの結果セットのサイズは、行サイズ（または、結果セット内の全列の最大長の合計）に結果セットのカーディナリティ（つまり、結果セット内の行数）を掛けた値になります。予測される最大値が、必要な領域のガイドラインになります。

この計算で算出されるのは、キャッシュされる結果セット内の全レコードの平均サイズではなく、最大の予測値です。そのため、結果セットのサイズが可変長文字列に著しく影響され、これらの文字列の長さが正規分布を持つ場合、平均レコード・サイズは最大レコード・サイズの約半分になると予測されます。

注意： 4GB より小さい値を使用することをお勧めします。そうしないと、この値が符号なし 32 ビット整数の最大許容値を超える可能性があります。

MAX_ROWS_PER_CACHE_ENTRY

クエリー・キャッシュの記憶域に適する、クエリー結果セットの最大行数を指定します。行数を制限すると、多くの行数を返すリソース集中型のクエリーでキャッシュ領域が占有されることを防止できます。クエリーによって返される行数が MAX_ROWS_PER_CACHE_ENTRY パラメータで指定した値よりも大きい場合、そのクエリーはキャッシュされません。

0 に設定すると、キャッシュ・エン트리ごとの行数の制限はなくなります。

例: MAX_ROWS_PER_CACHE_ENTRY = 100000 ;

MAX_CACHE_ENTRY_SIZE

キャッシュ・エントリの最大サイズを指定します。このサイズを超えることが予測されるエント리는キャッシュされません。デフォルトのサイズは 1MB です。

ギガバイトでは GB、キロバイトでは KB、メガバイトでは MB を指定します。サイズをバイトで指定する場合は、単位を何も指定しません。

例: MAX_CACHE_ENTRY_SIZE = 1 MB ;

MAX_CACHE_ENTRIES

クエリー・キャッシュに格納できるキャッシュ・エントリの最大数を指定します。キャッシュ・エントリの合計数を制限することにより、キャッシュ領域を管理する別のパラメータが提供されます。キャッシュ・エントリの実際の制限値は、同時実行されるクエリーの数によって多少異なる場合があります。デフォルト値は 1000 です。

例: MAX_CACHE_ENTRIES = 1000 ;

POPULATE_AGGREGATE_ROLLUP_HITS

以前キャッシュしたクエリー結果セットからデータを集計して、キャッシュ・ヒットを増加させるために、その新しいエント리를クエリー・キャッシュに作成するかどうかを指定します。デフォルト値は NO です。

通常、以前実行されたクエリーでキャッシュ・ヒットが発生しても、その新しいクエリーはキャッシュに追加されません。たとえば、特定の詳細レベルの情報（郵便番号ごとの販売収入）を含む結果セットがキャッシュされている場合に、2 番目のクエリーで、より上位の詳細レベルの同じ情報（都道府県ごとの販売収入）が要求されることがあります。その際、POPULATE_AGGREGATE_ROLLUP_HITS パラメータを設定しておく、このデフォルトの動作が無効になり、キャッシュ・ヒットが発生した場合に、以前に実行されたクエリーからの集計がキャッシュでロールアップされます（この例では、キャッシュに格納されている最初の結果セットのデータが集計されます）。つまり、ある都道府県のすべての郵便番号に対する Oracle BI の販売収入を追加して、都道府県ごとの販売収入を取得できるようになります。この動作はロールアップ・キャッシュ・ヒットと呼ばれます。

通常、キャッシュ・ヒットの発生したクエリーに対して、新しいキャッシュ・エントリは作成されません。POPULATE_AGGREGATE_ROLLUP_HITS を YES に設定すると、特にキャッシュ・ヒットの増加を目的として、この動作を無効にできます。非ロールアップ・キャッシュ・ヒットは、このフラグの影響を受けません。クエリー結果がキャッシュから返される、つまりクエリーのキャッシュ・ヒットが発生しても、そのクエリーはキャッシュに追加されません。このパラメータが YES に設定されていて、クエリーで集計ロールアップ・ヒットが発生する（たとえば、"sales by region" が "sales by district, region" によって処理される）場合に、その結果がキャッシュに格納されます。このパラメータを TRUE に設定するとパフォーマンスが向上する可能性があります。ただし、より多くのエントリがキャッシュに追加されることになります。

例： POPULATE_AGGREGATE_ROLLUP_HITS = NO ;

USE_ADVANCED_HIT_DETECTION

キャッシュが有効である場合に、各クエリーを評価して、キャッシュ・ヒットに該当するかどうかを判断します。キャッシュ・ヒットとは、データベースに問い合わせることなく、サーバーでキャッシュを使用してクエリーを処理できることを意味します。Oracle BI Server では、クエリー・キャッシュを使用して、同レベルまたは上位レベルの集計によってクエリーを処理できます（Data Mart Automation）。

パラメータ USE_ADVANCED_HIT_DETECTION により、キャッシュ・ヒットの拡張検索が可能になります。拡張検索はパフォーマンスに影響しますが、要件が多様であるため、その影響を簡単に数値化することはできません。クエリー・キャッシュを頻繁に利用していてキャッシュ・エラーが発生している場合は、より正確なクエリーの一致と、高いユーザー負荷における全体的なパフォーマンスとの間のトレードオフをテストできます。パラメータ「MAX_SUBEXPR_SEARCH_DEPTH」および「クエリーがキャッシュに追加されない理由」も参照してください。

クエリーがキャッシュに追加されない理由

パフォーマンス KPI を満たすために Oracle BI Server のクエリー結果のキャッシュ機能を利用している場合は、キャッシュ・パラメータを使用してキャッシュ・ヒットが発生しない理由を特定できます。ロギング機能を使用すると、キャッシュを生成する SQL の論理クエリーがキャッシュに挿入されないなど、キャッシュ・エラーを発生させる一般的な原因を診断できます。このようなエラーを発生させる可能性のあるいくつかの要因を次に示します。

- キャッシュ不可能な SQL 要素。Current_Timestamp、Current_Time、Rand、Populate またはパラメータ・マーカーを含む SQL リクエストはキャッシュに追加されません。
- キャッシュ不可能なテーブル。Oracle BI Server リポジトリの物理テーブルは non-cacheable とマークされていることがあります。クエリーで non-cacheable とマークされているテーブルを参照している場合、そのクエリー結果はキャッシュに追加されません。
- キャッシュ・ヒット。通常、以前キャッシュされたクエリーでキャッシュ・ヒットが発生しても、その現行のクエリー結果はキャッシュに追加されません。
注意： 集計ロールアップ・ヒットであるクエリー・ヒットは例外です。NQSConfig.INI のパラメータ POPULATE_AGGREGATE_ROLLUP_HITS が YES に設定されている場合、これらのヒットはキャッシュに追加されます。
- 結果セットが大きすぎる。
- クエリーが取り消された。クエリーの取消しは、Oracle BI Presentation Services または Administration Tool で明示的に実行されるか、タイムアウトによって暗黙的に実行されます。

- Oracle BI Server がクラスタ化されている。キャッシュを生成するサーバーのグループに対するクエリは、そのクラスタ全体に伝播されますが、個々のサーバーに対するその他のクエリはローカルに継続して格納されます。したがって、Oracle BI Server のノード 1 でキャッシュされるクエリが、Oracle BI Server のノード 2 でキャッシュされないことがあります。

Oracle BI Server のコンパイラによって目的のエントリがクエリ結果のキャッシュに追加されるかどうかを診断するには、クエリのロギング・レベルを 4 に設定することをお勧めします。

MAX_SUBEXPR_SEARCH_DEPTH

パラメータ MAX_SUBEXPR_SEARCH_DEPTH を使用すると、ヒット・ディテクタがクエリの式内で不完全一致を探す深さを構成できます。デフォルトは 5 です。たとえば、デフォルト・レベルの 5 では、式 $\sin(\cos(\tan(\text{abs}(\text{round}(\text{trunc}(\text{profit}))))))$ に対するクエリがレベル 7 の Profit について失敗します。検索の深さを 7 に変更することで、Profit がヒットする可能性が高くなります。

GLOBAL_CACHE_STORAGE_PATH

クラスタ間で共有されるキャッシュ・エントリを格納する物理的な場所を指定します。クラスタ化されているすべてのノードで同じ場所を共有します。

例: GLOBAL_CACHE_STORAGE_PATH = "<directory name>" SIZE;

MAX_GLOBAL_CACHE_ENTRIES

GLOBAL_CACHE_STORAGE_PATH に指定された場所に格納されるキャッシュ・エントリの最大数を指定します。

例: MAX_GLOBAL_CACHE_ENTRIES = 1000;

CACHE_POLL_SECONDS

GLOBAL_CACHE_STORAGE_PATH に指定された共有の場所から各ノードにデータを取り込む間隔を指定します（秒単位）。

例: CACHE_POLL_SECONDS = 300;

CLUSTER_AWARE_CACHE_LOGGING

クラスタのキャッシュ機能のロギングをオンにします。トラブルシューティングのみに使用されます。デフォルトは NO です。

例: CLUSTER_AWARE_CACHE_LOGGING = NO;

構成ファイルの General セクションのパラメータ

General セクションのパラメータには、ローカライゼーションや国際化、一時領域およびメモリーの割当てなどに関連するサーバーの一般的なデフォルト・パラメータと、Oracle Business Intelligence Server からクライアントへのデータの送信方法を定義するその他のデフォルト・パラメータが含まれます。

注意： 次の各項で説明するパラメータ（LOCALE、SORT_ORDER_LOCALE、SORT_TYPE および CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON）の設定は相互に関連があります。これらのパラメータは、Oracle Business Intelligence Server のデータのソート方法を決定します。

LOCALE

サーバーから返されるデータのロケールを指定します。このパラメータによって、日や月のローカライズ名も決定されます。

Oracle BI を正常に実行するには、オペレーティング・システムで、アプリケーションを実行する言語の適切なロケールを構成します（場合によっては、ロケールをサポートするための追加のコンテンツをシステムにインストールする必要があります）。Oracle BI Server では、サーバーの起動時に C ランタイム・ロケールが設定されます。ロケールおよび言語に関する一部の設定は相互に関連があり、Oracle BI Server のデータのソート方法を決定します。次に示すパラメータの設定が連携して動作することを確認してください。

■ LOCALE

UNIX システムで LOCALE および SORT_ORDER_LOCALE に指定可能な値を「[UNIX でのロケール・パラメータの設定](#)」（209 ページ）に示します。

■ SORT_ORDER_LOCALE

■ SORT_TYPE

■ CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON

Oracle BI Catalog Manager と言語の拡張については、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

SORT_ORDER_LOCALE

Oracle Business Intelligence Server でリレーショナル・データベースに対して ORDER BY 句（ソート処理で使用）を機能シッパできるかどうかを決定します。

Server Administration Tool の「Physical」レイヤーで定義されているすべてのデータベースには、それぞれに関連付けられた機能テーブルがあります。特定の種類のリレーショナル・データベースに関連付けられている機能テーブルのデフォルト値を無効にする場合は、その値を「Physical」レイヤーですべて無効にする必要があります。

リレーショナル・データベースでサポートする機能を指定するには、Server Administration Tool で「Database」ダイアログ→「Features」タブ→「Features」テーブルを選択します。「Features」テーブルと NQSConfig.INI ファイルの SORT_ORDER_LOCALE の設定は、データベースと Oracle Business Intelligence Server でデータを同じ方法によってソートする場合にのみ一致させる必要があります。

リレーショナル・データベースと Oracle Business Intelligence Server でデータを同じ方法によってソートする場合は、174 ページの表 22 に示すパラメータを一致させる必要があります。

表 22. SORT_ORDER_LOCALE の重要なパラメータ

機能カテゴリ	パラメータ
基本言語	LOCALE
	SORT_ORDER_LOCALE 「Features」テーブルと NQSConfig.INI ファイルの SORT_ORDER_LOCALE のデフォルト値は、両方とも english-usa です。Oracle Business Intelligence Server とデータベースのデータのソート方法を別にする場合は、データベースの「Features」テーブルのエントリ SORT_ORDER_LOCALE に english-usa 以外の値を設定する必要があります。 注意： LOCALE および SORT_ORDER_LOCALE パラメータは、プラットフォームに依存しない名前のみを受け入れます。
大文字と小文字の区別	CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON
バイナリと言語の比較	SORT_TYPE

「Features」テーブルと NQSConfig.INI ファイルの SORT_ORDER_LOCALE エントリは、これらの領域でデータベースと Oracle Business Intelligence Server の設定が同じ場合にのみ一致します。設定が異なる場合は、マルチデータベースの結合で誤った結果が返されたり、バックエンド・サーバーと Oracle Business Intelligence Server のソート方法の一致に依存する Union、Intersect および Except 演算子を使用する場合にエラーが返されることがあります。

例： SORT_ORDER_LOCALE = "english-usa" ;

UNIX オペレーティング・システムでの SORT_ORDER_LOCALE

Oracle Business Intelligence Server では、サーバーの起動時に C ランタイム・ロケールが設定されます。この設定値は、NQSConfig.INI ファイルの SORT_ORDER_LOCALE エントリを使用して指定します。[「UNIXでのロケール・パラメータの設定」\(209 ページ\)](#) を参照してください。

SORT_TYPE

実行するソートの種類を指定します。デフォルト値は BINARY です。バイナリ・ソートは、非バイナリ・ソートよりも高速に処理されます。

有効な値は BINARY および DEFAULT です。DEFAULT を指定すると非バイナリ・ソートが実行されます。このソート方法は、アクセント記号を含むデータのソート処理に優れています。

例： SORT_TYPE = "BINARY" ;

CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON

Oracle Business Intelligence Server で比較操作を実行する際に大文字と小文字を区別するかどうかを指定します。

有効な値は ON および OFF です。OFF に設定すると大文字と小文字は区別されません。ON に設定すると、比較時に大文字と小文字が区別されます。バイナリ・ソートでは、サーバーとリレーショナル・データベースで、大文字と小文字の区別方法が一致している必要があります。

この設定は、Oracle Business Intelligence Server のキャッシュおよび集計での内部比較にのみ適用されます。大文字と小文字の区別はデータベース操作の 1 つの機能であり、データベース・レベルで設定されます。

CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON パラメータを使用すると、Oracle BI Server とバックエンド・データベースの機能を一致させることができます。影響を受ける演算子は次のとおりです。

- Order By
- Group By
- Distinct
- Join
- 比較演算子 (<, >, =, <=, >=, <>)

たとえば、次の 3 つの単語について考えます。

- ACME
- DELTA
- acme

CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON を ON に設定した Order By の結果では、行が前の例に示した順番になります。大文字と小文字を区別しない設定で Order By を実行すると、acme が ACME の直後になります。

単語の大文字と小文字が区別される場合に重複の削除 (Distinct) を実行すると、結果は 3 行になります。単語の大文字と小文字が区別されない場合、Distinct の実行結果は 2 行になります。

CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON は、バックエンド・データベースでの大文字と小文字の処理方法に応じて設定する必要があります。たとえば、バックエンド・データベースで大文字と小文字が区別されない場合、Oracle Business Intelligence Server でも大文字と小文字を区別しないように構成する必要があります。Oracle Business Intelligence Server とバックエンド・データベースで大文字と小文字の処理方法が異なる場合は、微妙な問題が発生することがあります。

CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON が集計に適用される例として、大文字と小文字を区別するように設定されたデータベースに次のデータがある場合を考えます。

リージョン	単位
WEST	1
west	1
west	1

CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON が ON に設定されている場合、前の表に示した同じ結果がクライアントに返されます。

CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON が OFF に設定されている場合も、前の表に示した同じ結果がクライアントに返されます。この現象は、Oracle BI Server で文字の比較が実行されないために発生します。

ただし、機能テーブルで SUM_SUPPORTED を OFF に設定すると、Oracle BI Server では強制的に文字比較が実行されます。この場合、クエリーの結果は次のようになります。

リージョン	単位
WEST	3

Oracle BI Server では大文字と小文字を区別する文字比較が無効になっているため、3つのデータが同じ値として処理および集計されて、このような結果になります。この場合は、WEST と West と west が同等に処理されます。ただし、リージョン列に対してフィルタ処理を実行すると、WEST、West および west が表示されます。CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON の設定は、バックエンド・データベースに対するフィルタ処理には影響しません。この集計例のロジックは、キャッシュにも同様に適用されます。

CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON は NQSConfig.INI ファイルで設定されるため、このパラメータはリポジトリ内のすべてのバックエンド・データベースに適用されます。そのため、この設定は、リポジトリの主要なバックエンド・データベースでの大文字と小文字の区別方法に一致する必要があります。

例: CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON = OFF ;

NULL_VALUES_SORT_FIRST

NULL 値のソートを、他の値の前に実行するか (ON)、後に実行するか (OFF) を指定します。有効な値は ON および OFF のみです。NULL_VALUES_SORT_FIRST の値は、基礎となるデータベースに一致させる必要があります。基礎となるデータベースが複数あり、それぞれのデータベースで NULL 値のソート方法が異なる場合は、クエリーで最も頻繁に使用されるデータベースの値に対応するように設定します。

例: NULL_VALUES_SORT_FIRST = OFF ;

DATE_TIME_DISPLAY_FORMAT

Oracle Business Intelligence Server で入出力される日付 / 時間スタンプのフォーマットを指定します。

例: DATE_TIME_DISPLAY_FORMAT = "yyyy/mm/dd hh:mi:ss" ;

DATE_DISPLAY_FORMAT

Oracle Business Intelligence Server で入出力される日付のフォーマットを指定します。

注意: 年は 2 桁 (yy) または 4 桁 (yyyy) で指定します。セパレータには、y、m、d を除く任意の文字を使用できます。

例: DATE_DISPLAY_FORMAT = "yyyy/mm/dd" ;

TIME_DISPLAY_FORMAT

Oracle Business Intelligence Server で入出力される時間のフォーマットを指定します。

例: TIME_DISPLAY_FORMAT = "hh:mi:ss" ;

WORK_DIRECTORY_PATHS

一時領域のディレクトリを指定します（複数可）。

この構文では、実際に存在する、完全修飾された書込み可能なディレクトリのパス名を、二重引用符（"）で囲んで指定する必要があります。マップされたディレクトリのみを指定します。UNC パス名やネットワークにマップされたドライブは、修飾されたユーザー・アカウントでサービスが実行される場合にのみ指定できます。サービスを実行するアカウントを変更するには、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』の対応する項を参照してください。

複数のディレクトリを指定する場合は、それぞれのディレクトリをカンマで区切ります。有効な値は、存在する、書込み可能なディレクトリの完全修飾されたパス名です。

最適なパフォーマンスを得るには、一時ディレクトリはパフォーマンスに優れたストレージ・デバイス上に存在する必要があります。複数のディレクトリを指定する場合、それぞれのディレクトリは異なるドライブ上に存在する必要があります

構文: WORK_DIRECTORY_PATHS = "<full_directory_path_1>" [, "<full_directory_path_2>" {, "<full_directory_path_n>" }];

例 1: WORK_DIRECTORY_PATHS = "C:¥Temp" ;

例 2: WORK_DIRECTORY_PATHS = "D:¥temp", "F:¥temp" ;

注意: 1つのドライブで複数のディレクトリを指定してもパフォーマンスは改善されません。これは、それらのファイル I/O が同じ I/O コントローラで処理されるためです。通常は、1つのディスク・ドライブにディレクトリを1つだけ指定します。異なるドライブ上の複数のディレクトリを指定すると、Oracle Business Intelligence Server の全体的な I/O スループットが内部的に向上する場合があります。これは、指定されたディスク・ドライブ間で I/O 負荷を分散するラウンドロビン・アルゴリズムを使用して処理ファイルが割り当てられるためです。

SORT_MEMORY_SIZE

各ソート操作で使用する最大メモリー量を指定します。複数の操作で、それぞれに指定された値までメモリーを使用できます。SORT_MEMORY_SIZE の上限値は、サーバー・マシンの物理メモリーと、同時に発生する可能性のあるソート操作の数によって決まります。キロバイトでは KB、メガバイトでは MB を指定します。サイズをバイトで指定する場合は、単位を何も指定しません。

例: SORT_MEMORY_SIZE = 4 MB ;

「Oracle Business Intelligence のパフォーマンスへの SIZE パラメータの影響」（178 ページ）を参照してください。

SORT_BUFFER_INCREMENT_SIZE

より多くのメモリーが必要な場合にソート・メモリー・サイズを増やす増分を指定します。より多くのメモリーが必要な場合は、そのサイズが SORT_MEMORY_SIZE の値に達するまで、指定した値ずつ増加します。

例: SORT_BUFFER_INCREMENT_SIZE = 256 KB ;

「Oracle Business Intelligence のパフォーマンスへの SIZE パラメータの影響」（178 ページ）を参照してください。

VIRTUAL_TABLE_PAGE_SIZE

Oracle Business Intelligence Server の内部処理に必要なメモリーのページ・サイズを指定します。高い値に設定すると I/O は減少しますが、特にマルチユーザー環境でメモリの使用率が増加します。

例: VIRTUAL_TABLE_PAGE_SIZE = 128 KB ;

「Oracle Business Intelligence のパフォーマンスへの SIZE パラメータの影響」(178 ページ) を参照してください。

Oracle Business Intelligence のパフォーマンスへの SIZE パラメータの影響

この項では、SIZE パラメータの相互関係と、それらのパラメータが Oracle Business Intelligence のパフォーマンスにどのように影響するかについて説明します。

■ SORT_MEMORY_SIZE

SORT_MEMORY_SIZE に指定されるサイズによって、Oracle Business Intelligence Server 内のソート・バッファの大きさの上限が設定されます。この制限値を超えると、SORT_MEMORY_SIZE に設定されたサイズの割合でデータがソートされ、ソートされたセットが 1 つにマージされます。たとえば、SORT_MEMORY_SIZE が 4MB に設定されており、ソート対象データのサイズが 32MB であるとします。この場合、サーバーでは 4MB ごとにデータのソートが実行されます。つまり、ソート操作が合計 8 回実行され、それらの結果が 1 つの結果セットとしてマージされます。この手法により、Oracle Business Intelligence Server でソートするデータ・サイズの制限がなくなります。

リソースの面からは、マージ処理自体は一般的にコストのかかる処理ではありませんが、一時ファイル内の結果セットごとに読み取りおよび書き込み処理が発生します。この処理に必要な時間を削減するには、SORT_MEMORY_SIZE の設定値を増やします。このパラメータの値は、クエリーのデータ・サイズや同時実行ユーザー数を考慮しながら、時間をかけて調整できます。

■ SORT_BUFFER_INCREMENT_SIZE

このパラメータは、SORT_MEMORY_SIZE に達するまでの増分を定義します。たとえば、SORT_MEMORY_SIZE が 4MB に設定されており、ソート対象データがちょうど 1MB であるとします。データがソート・ルーチンに送信されると、ソート・バッファのサイズが、SORT_MEMORY_SIZE の許容値いっぱいではなく、指定した増分サイズだけ増加します。このメカニズムにより、Oracle Business Intelligence Server では、より小さな結果セットをメモリを無駄に消費することなく効率的にソートできるようになります。

■ VIRTUAL_TABLE_PAGE_SIZE

ソート、結合、UNION およびデータベース・フェッチなどの操作によっては、Oracle Business Intelligence Server で使用可能なリソースよりも多くのメモリー・リソースが要求されることがあります。この状況を管理するには、サーバーで、これらの操作の処理に対してバッファ・スキームを提供する仮想テーブルの管理メカニズムを使用します。データ量が VIRTUAL_TABLE_PAGE_SIZE の値を超えると、残りのデータが一時ファイルにバッファされ、処理が継続する間、仮想テーブルに配置されます。このメカニズムによって動的メモリー・サイズがサポートされ、クエリーを処理するために、任意の行が動的に取得されます。

VIRTUAL_TABLE_PAGE_SIZE の値が増加すると、I/O 処理は減少します。複雑なクエリーでは 20 ~ 30 の仮想テーブルが使用されることがありますが、単純なクエリーでは仮想テーブルが使用されない場合もあります。デフォルト・サイズは 128KB です。これは、Windows NT の仮想ページングのサイズが 64KB であることを考えると適切なサイズです。このパラメータの値は、同時実行ユーザー数とクエリーの平均的な複雑さに応じて調整できます。一般的に、Windows NT のシステム・バッファのサイズが 64KB に制限されているため、このサイズを 256KB より大きく設定しても、それに伴ってスループットが増大することはありません。これは、各 I/O が引き続きシステム・バッファを経由するためです。

関連項目

この項で説明しているパフォーマンスに影響するパラメータについては、「[SORT_MEMORY_SIZE](#)」(177 ページ) を参照してください。

この項で説明しているパフォーマンスに影響するパラメータについては、「[SORT_BUFFER_INCREMENT_SIZE](#)」(177 ページ) を参照してください。

この項で説明しているパフォーマンスに影響するパラメータについては、「[VIRTUAL_TABLE_PAGE_SIZE](#)」(178 ページ) を参照してください。

USE_LONG_MONTH_NAMES

月の名前をフルネーム (JANUARY および FEBRUARY) で返すか、3 文字の短縮形 (JAN および FEB) で返すかを指定します。有効な値は YES および NO です。YES を指定すると月の名前がフルネームで返され、NO を指定すると 3 文字の短縮形で返されます。デフォルト値は NO です。

例: USE_LONG_MONTH_NAMES = NO ;

USE_LONG_DAY_NAMES

曜日の名前をフルネーム (MONDAY および TUESDAY) で返すか、3 文字の短縮形 (MON および TUE) で返すかを指定します。有効な値は YES および NO です。YES を指定すると曜日の名前がフルネームで返され、NO を指定すると 3 文字の短縮形で返されます。デフォルト値は NO です。

例: USE_LONG_DAY_NAMES = NO ;

UPPERCASE_USERNAME_FOR_INITBLOCK

大文字と小文字を区別してユーザーを認証するかどうかを指定します。デフォルト値は NO です (内部的には false)。YES に設定すると、SiebelAnalytics.rpd ファイル内のすべてのユーザー名が認証目的で大文字に変更されます。NO に設定すると、大文字と小文字はそのまま維持されます。

例: UPPERCASE_USERNAME_FOR_INITBLOCK = NO ;

AGGREGATE_PREFIX

集計を永続的に維持するドメイン・サーバー名を指定します。接頭辞には、特殊文字を含まない 1 ~ 8 文字の値を指定します (_ は指定可能)。

例: AGGREGATE_PREFIX = "SA_" ;

構成ファイルの Security セクションのパラメータ

セキュリティ・パラメータでは、Oracle Business Intelligence Server のセキュリティ機能のデフォルト値を指定します。セキュリティの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』のセキュリティに関する章と、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』の LDAP 認証の設定に関する項などを参照してください。

DEFAULT_PRIVILEGES

ユーザーおよびグループが最初に作成される際に割り当てられる値を指定します。

有効な値は NONE および READ です。デフォルト値は READ です。

例: DEFAULT_PRIVILEGES = READ ;

PROJECT_INACCESSIBLE_COLUMN_AS_NULL

PROJECT_INACCESSIBLE_COLUMN_AS_NULL のデフォルト値はインストール・タイプによって異なります。Oracle BI プラットフォームのみを実行している場合、この値は NO です。

SQL コマンドの CHOOSE を有効にするには、フラグ PROJECT_INACCESSIBLE_COLUMN_AS_NULL を TRUE に設定する必要があります。

次の SQL コマンドを考えます。

```
CHOOSE(expr1, expr2, .... exprn)
```

このコマンドでは、式の一覧から、有効な最初の式が選択されます。有効な式とは、すべての参照列が現行のクエリー・ユーザーによってアクセス可能である式のことを指します。

MINIMUM_PASSWORD_LENGTH

強力なパスワードを適用するために使用するセキュリティの尺度を指定します。ユーザーのログイン時は、この最小文字数を入力するように強制されます。たとえば、MINIMUM_PASSWORD_LENGTH が 8 に設定されている場合、8 文字より短いユーザー・パスワードは拒否されます。

このデフォルト値は、「Basic」インストール・タイプを使用してインストールする場合は 0、「Advanced」インストール・タイプを使用してインストールする場合は 8 になります。

例: MINIMUM_PASSWORD_LENGTH = 8 ;

SSL

次のパラメータを指定すると、Oracle BI Cluster (NQClusterConfig) と Oracle BI Server (NQSConfig) との間の Secure Socket Layer (SSL) 通信が可能になります。SSL 通信には、Oracle BI Server (クラスタを含む) および Scheduler が使用されます。

デフォルト設定は NO です。これらのコンポーネントで SSL 通信を有効にする場合は、SSL パラメータのコメントを解除して YES に設定し、SSL_CERTIFICATION_FILE パラメータを証明書ファイルのパスに指定します。

SSL および証明書ファイルの詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』に記載されている、最小および最大のセキュリティ・シナリオでの Oracle BI Cluster Controller の構成に関する項を参照してください。

SSL_CERTIFICATE_FILE

証明書ファイルのディレクトリ・パスを指定します。SSL サーバーとして機能するコンポーネント (BI Server や BI Scheduler など) では、これはサーバー証明書のファイル名になります。クライアント・コンポーネント (BI ODBC Client データソースなど) では、これはクライアント証明書のファイル名になります。

例 (サーバー) : SSL_CERTIFICATE_FILE = "servercert.pem" ;

例 (クライアント) : SSL_CERTIFICATE_FILE = "client-cert.pem" ;

SSL_PRIVATE_KEY_FILE

秘密鍵ファイルを指定します。サーバー・コンポーネントでは、これはサーバー秘密鍵ファイルの名前になります。クライアント・コンポーネントでは、これはクライアント秘密鍵ファイルの名前になります。

例 (サーバー) : SSL_PRIVATE_KEY_FILE = "serverkey.pem" ;

例 (クライアント) : SSL_PRIVATE_KEY_FILE = "client-key.pem" ;

SSL_PK_PASSPHRASE_FILE

秘密鍵の復号化に必要なパスフレーズの取得に使用されるファイルです。パスフレーズを出力する、パスフレーズを含むファイルを指定します。

例 : SSL_PK_PASSPHRASE_FILE = "serverpwd.txt" ;

SSL_PK_PASSPHRASE_PROGRAM

秘密鍵の復号化に必要なパスフレーズの取得に使用されるプログラムです。パスフレーズを出力するプログラムを指定します。

例 : SSL_PK_PASSPHRASE_PROGRAM = "sitepwd.exe" ;

SSL_VERIFY_PEER

サーバーがクライアント認証を必要とするかどうかを指定します。YES に設定すると、BI コンポーネントは、接続するもう一方のコンポーネントが有効な証明書を持っていることを検証します (相互認証)。デフォルト値は NO であり、任意のピアへの接続が許可されます。

例 : SSL_VERIFY_PEER = NO ;

SSL_CA_CERTIFICATE_DIR

信頼できる CA のハッシュ・バージョンを含みます。このパラメータは、クライアント認証が必要である場合にのみ有効になります。

例: `SSL_CA_CERTIFICATE_DIR = "CACertDIR" ;`

SSL_CA_CERTIFICATE_FILE

Verify Peer が true に設定されている場合にサーバーまたはクライアント証明書の検証に使用する、信頼できる CA 証明書の名前およびパスを指定します。クライアント認証が必要である場合にのみ有効になります。

例: `SSL_CA_CERTIFICATE_FILE = "CACertFile" ;`

SSL_TRUSTED_PEER_DNS

接続を許可された、識別名 (DN) による名前を持つ個々のクライアントを指定します。DN は、証明書の公開鍵と一致する秘密鍵を持つエンティティを識別します。

例: `SSL_TRUSTED_PEER_DNS = "" ;`

SSL_CERT_VERIFICATION_DEPTH

証明連鎖の深さを指定します。深さ 1 は、証明書が信頼できる CA の 1 つによって署名される必要があることを意味します。深さ 2 は、証明書が別の CA によって検証された CA によって署名されていることを意味します。デフォルトは 9 です。

例: `SSL_CERT_VERIFICATION_DEPTH = 9 ;`

SSL_CIPHER_LIST

サーバーで使用する、許可された暗号スイートのリストを指定します。デフォルトは空の文字列であり、これは ALL と同等です。脆弱な暗号化では、EXP で始まる暗号スイートのみが許可されます。

例: `SSL_CIPHER_LIST = "EXP-RC2-CBC-MD5" ;`

AUTHENTICATION_TYPE

Oracle Business Intelligence Server でユーザーを認証するために使用する認証の種類を指定します。

有効な値は NQS、DATABASE および BYPASS_NQS です。デフォルト値は NQS です。

表 23 に各認証の詳細を示します。

表 23. Oracle Business Intelligence Server の認証の種類

種類	説明
NQS	<p>Oracle Business Intelligence Server によって認証が実行されます。</p> <p>注意: Oracle BI アプリケーションでは、次に Microsoft ADSI、LDAP サーバーまたはデータベースを使用して認証を実行するように Oracle Business Intelligence Server を設定できます。『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。</p>
DATABASE	<p>データベースの認証に使用する、リポジトリの「Physical」レイヤーでのデータベース名を指定します。認証には、このデータベースの最初の接続プールが使用されます。</p> <p>ユーザーが Oracle Business Intelligence Server にログインすると、送信したログオン名とパスワードを使用してデータベースに接続されます。正常に接続された場合、このユーザーは正しく認証されたとみなされます。</p>
BYPASS_NQS	<p>認証が、送信したユーザー名とパスワードを使用して、ユーザーのクエリーが送信されるデータベースに対して実行されます。</p> <p>たとえば、ユーザー名およびパスワードが Test である場合に Oracle Business Intelligence Server に対してクエリー・ツールを実行すると、基礎となるデータベース・サーバーへの接続時に、このユーザー名とパスワードが使用されます。これによって基礎となるデータベースの有効なユーザーであることが示された場合、このユーザーは認証されたとみなされます。このユーザーの権限は、ログイン時に使用したユーザー名に基づいて、基礎となるデータベースによって適切に適用されます。</p>

例 1: AUTHENTICATION_TYPE = NQS ;

例 2: DATABASE = "Goldmine" ;

構成ファイルの Server セクションのパラメータ

Server セクションのパラメータは、Oracle Business Intelligence Server のデフォルト値および制限値を定義します。

SERVER_NAME

Oracle Business Intelligence Server を識別する論理名。

SERVER_THREAD_RANGE パラメータおよび MAX_SESSION_LIMIT パラメータについて

Oracle Business Intelligence Server の使用可能な接続数および物理クエリー処理で使用可能なスレッド数は、接続プールのサイズによって決まります。1 つの論理クエリーによって複数の物理クエリーが生成され、それぞれの物理クエリーによって異なる接続が使用されることがあります。

Oracle Business Intelligence Server では、パラメータ SERVER_THREAD_RANGE で指定した最大数のサーバー・スレッドが作成されます。すべてのスレッドは常に使用可能であり、1 つ以上のセッションからのクエリーを必要に応じて処理します。

一般的に、MAX_SESSION_LIMIT で指定されるセッション数は、SERVER_THREAD_RANGE で指定される使用可能なスレッド数よりも大きくなります。

要約：

- MAX_SESSION_LIMIT は、アクティブか非アクティブかにかかわらず、Oracle Business Intelligence Server に接続できるセッション数を指定します。セッションとその対応するクエリーは、スレッドが使用可能になった時点でスレッドのキューに格納され、処理されます。
- 接続プール・サイズは、物理クエリーを処理するスレッド数および接続数を指定します。
- SERVER_THREAD_RANGE は、論理クエリーを処理するスレッド数（Oracle Business Intelligence Server で常にアクティブにできるクエリー数）を指定します。

READ_ONLY_MODE

Oracle BI リポジトリ・ファイル (.rpd) のオンライン・モードでの変更を許可または禁止します。

デフォルトは NO です。つまり、リポジトリはオンラインで編集できます。

このパラメータが YES に設定されている場合、オンライン・モードの Oracle Business Intelligence Administration Tool ではリポジトリを何も変更できません。Administration Tool をオンライン・モードで接続すると、リポジトリが読み取り専用であることを示すメッセージが表示されます。このパラメータが NO に設定されている場合は、オンラインの Administration Tool でリポジトリを変更できます。

このパラメータの変更を有効にするには、Oracle BI Server を停止して再起動する必要があります。

MAX_SESSION_LIMIT

サーバーで使用可能な接続の最大数を指定します。この値を超えると、サーバーで接続リクエストが拒否されません。

上限値は 65,535 接続です。

例：MAX_SESSION_LIMIT = 2000 ;

MAX_REQUEST_PER_SESSION_LIMIT

セッションごとの論理リクエストの最大数を指定します。これは、セッションごとに同時実行されるリクエスト数を示します。

上限値は、1つのセッションにつき 65,535 論理リクエストです。

注意：通常、1人のユーザーが1つのセッションで同時に実行するリクエストは1つのみです。ただし、アプリケーション・プログラムおよび Oracle BI Presentation Services では、一般的に複数のリクエストが同時実行されます。通常、ほとんどの環境ではデフォルト値の 500 で十分ですが、この値はアプリケーション環境や使用しているクライアント・ツールに基づいて調整する必要があります。

例：MAX_REQUEST_PER_SESSION_LIMIT = 500 ;

SERVER_THREAD_RANGE

SERVER_THREAD_RANGE は、Oracle Business Intelligence Server の各リクエストに対してスレッド割当ての構成情報を指定します。この範囲の小さい方の値は内部的に割り当てられるスレッド数を示し、大きい方の値は割り当てられるスレッドの最大数を示します。スレッド・プールは、この範囲の上限値または下限値に達するまで、5 スレッド単位で増加または減少します。セッション数よりもスレッド数が少ない場合は、先着順で、使用可能な数のスレッドがセッション間で共有されます。

スレッド・プールの利点を最大限活用するには、両方に同じ値を設定します。

例：SERVER_THREAD_RANGE = 100-100 ;

SERVER_THREAD_STACK_SIZE

各サーバー・スレッドに割り当てるメモリーのスタック・サイズを指定します。0 を指定すると、サーバー・スレッドごとのスタック・サイズが 256KB に設定されます。

デフォルト値は 256KB です。

例：SERVER_THREAD_STACK_SIZE = 256 KB ;

DB_GATEWAY_THREAD_RANGE

SERVER_THREAD_RANGE の設定に従って、Oracle Business Intelligence Database Gateway スレッド・プールの最小および最大スレッド数を指定します。

デフォルトは 40-200 です。

例：DB_GATEWAY_THREAD_RANGE = 40-200

DB_GATEWAY_THREAD_STACK_SIZE

各 Oracle Business Intelligence Database Gateway スレッドに割り当てるメモリーのスタック・サイズを指定します。0 を指定すると、サーバー・スレッドごとのスタック・サイズが 256KB に設定されます。

デフォルト値は 256KB です。

例：DB_GATEWAY_THREAD_STACK_SIZE = 0 ;

MAX_EXPANDED_SUBQUERY_PREDICATES

サブクエリーによって移入される、IN 値リスト内の値の最大数を制御します。デフォルト値は 8,192 です。

例: MAX_EXPANDED_SUBQUERY_PREDICATES = 8192;

注意: 次のパラメータの値は、デフォルトで 1024 に設定されています。

MAX_QUERY_PLAN_CACHE_ENTRIES

MAX_DRILLDOWN_INFO_CACHE_ENTRIES

MAX_DRILLDOWN_QUERY_CACHE_ENTRIES

これらの値を高くする場合は、事前に Oracle サポート・サービスにお問い合わせください。

MAX_QUERY_PLAN_CACHE_ENTRIES

キャッシュに格納する論理クエリー・プランの数を制御します。クエリー・プランのキャッシュは内部的なパフォーマンスの機能です。これにより、最後に使用したクエリーのプランがキャッシュに格納され、クエリーの収集処理速度が向上します。

例: MAX_QUERY_PLAN_CACHE_ENTRIES = 1024 ;

MAX_DRILLDOWN_INFO_CACHE_ENTRIES

キャッシュに格納する、リポジトリごとのアクション・リンクのドリル・ダウン情報のエントリ数を制御します。これにより、最後に使用したクエリーのアクション・リンクの情報がキャッシュに格納され、アクション・リンク情報の処理速度が向上します。

例: MAX_DRILLDOWN_INFO_CACHE_ENTRIES = 1024 ;

MAX_DRILLDOWN_QUERY_CACHE_ENTRIES

キャッシュに格納する、リポジトリごとのアクション・リンクのクエリーのエントリ数を制御します。これにより、最後に使用したクエリーのアクション・リンクのドリル・ダウン結果がキャッシュに格納され、ドリル・ダウン速度が向上します。

例: MAX_DRILLDOWN_QUERY_CACHE_ENTRIES = 1024 ;

INIT_BLOCK_CACHE_ENTRIES

列ベクトルの初期化に関してキャッシュに格納する初期化ブロックの結果セットの数を制御します。キャッシュのキーは、完全にインスタンス化された初期化ブロック SQL です。

デフォルト値は 20 です。このパラメータは Oracle BI ソフトウェアのローカライズ・バージョンの内部操作に影響するため、指示されている場合を除き、この値は変更しないことをお勧めします。

例: INIT_BLOCK_CACHE_ENTRIES = 20 ;

CLIENT_MGMT_THREADS_MAX

Oracle Business Intelligence Server のクライアント / サーバー通信の管理用に割り当てる管理スレッド数を指定します。Oracle Business Intelligence Server で使用されるデフォルトのクライアント / サーバー通信メソッドは TCP/IP です。

Server Administration Tool とのサーバー通信で、主要なクライアント・プロセスが Oracle BI Presentation Services のみである場合は、デフォルト値の 5 で問題ありません。

このメソッドをサポートするため、Oracle Business Intelligence ODBC ウィザードの「Enter Logon Information」画面には「Port」フィールドが追加されています（Oracle BI D/COM のサポートは制限されています。TCP/IP をデフォルトで使用することをお勧めします）。

1 つのクライアント・プロセスによって 1 つの管理スレッドが消費されます。Oracle BI Presentation Services の複数のクライアント・インスタンス、またはサード・パーティの複数のクライアント・インスタンスを実行する場合は、クライアント・インスタンスの数にあわせて管理スレッドの数を増やします。実行しているクライアント・インスタンスの数が、割り当てられている管理スレッド数を超えた場合は、ワーカー・スレッドが消費されます。

例: CLIENT_MGMT_THREADS_MAX = 10 ;

RPC_SERVICE_OR_PORT

Oracle Business Intelligence Server のクライアント / サーバー通信に使用するリモート・プロシージャ・コール (RPC) サービスまたは TCP/IP ポートを指定します。

デフォルトは 9703 です。

注意: RPC サービスは無効にしないでください。RPC サービスまたはプロセスが稼動していないマシン上で Oracle Business Intelligence Server を起動しようとする、アプリケーションは起動されず、ログも出力されません。

Oracle BI ODBC インストーラを使用して Oracle Business Intelligence Server の ODBC データソースを設定する場合、「Enter Logon Information」画面の「Port」フィールドに指定するポート番号は、ここで指定するポート番号に一致する必要があります。構成ファイルのポート番号を変更する場合は、その新しいポート番号を使用するように、影響を受けるすべての ODBC データソースを再構成する必要があります。

例: RPC_SERVICE_OR_PORT = 9703 ;

SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES

このパラメータの値は、Cluster Controller が稼動する場所の名前または IP を示します。デフォルト値は ALLNICS です。パラメータ SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES は、パラメータ RPC_SERVICE_OR_PORT フィールドおよび環境変数 NQUIRE_PORT と関連しています。

SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES の値は、次の 2 つの場合に指定する必要があります。

- ホスト名の代わりに IP アドレスを使用する。
- マシンのホスト名が完全修飾された hostname.domain である。

ホスト名または IP を指定する場合、ポート番号の指定は任意です。

- ポート番号を指定すると、サーバーは、RPC_SERVICE_OR_PORT フィールドおよび NQUIRE_PORT 環境変数の設定を無効にして、指定されたポート番号をリスニングします。
- ポート番号を指定しない場合は、RPC_SERVICE_OR_PORT フィールドまたは NQUIRE_PORT 環境変数のポート番号をリスニングします。

クライアントでサーバーのホスト名を指定する場合（UNIX プラットフォームでは odbc.ini、Windows プラットフォームでは instanceconfig.xml）、BI Server はそのホスト名にバインドされたホスト名または IP アドレスをリスニングする必要があります。

次の表に、RPC_SERVICE_OR_PORT と SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES の値の関係を示します。

SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES	<ul style="list-style-type: none"> ■ このパラメータにポート番号が指定されている場合、フィールド RPC_SERVICE_OR_PORT に指定されているポート番号は無効になります。 ■ ホスト名または IP とともにポートが指定されていない場合は、フィールド RPC_SERVICE_OR_PORT に指定されているポート番号が使用されます。
RPC_SERVICE_OR_PORT	フィールド SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES にポート番号が指定されている場合、このポート番号は使用されません。

次の表に、Oracle BI Server のリスニング・メソッドとクライアント通信メソッドの関係を示します。

BI Server がホスト名、またはホスト名のセットをリスニングする	<p>クライアントはホスト名を使用してリクエストを送信できる</p> <hr/> <p>クライアントは、DNS でサーバーのホスト名にバインドされている IP を使用してリクエストを送信できる</p>
BI Server が特定の IP アドレス、または IP アドレスのセットをリスニングする	<p>クライアントは同じ IP を使用してリクエストを送信できる</p> <hr/> <p>クライアントは、バインドされた IP を持つサーバーのホスト名を使用してリクエストを送信できる</p>

例：

- SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES = "hostname.domain" ;
すべての NIC をリスニングします。
- SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES = "hostname.domain":9715 ;
ポート 9715 のすべての NIC をリスニングします。
- SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES = "IP1","IP2":port 9715 ;
ポート 9715 の IP1 および IP2 をリスニングします。
- SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES = "hostname.domain":9715,"IP":9717 ;
ポート 9715 のホスト名、ポート 9717 の IP アドレスをリスニングします。ホスト名と IP アドレスが対応する場合、サーバーは両方のポートをリスニングします。

ENABLE_DB_HINTS

Oracle データベースに対して、SQL 文とともにオプション・ヒントを渡すことができるかどうかを指定します。データベース・ヒントの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

デフォルトは YES です。

PREVENT_DIVIDE_BY_ZERO

0 による割算が発生した場合の動作を制御します。YES に設定すると NULL 値が返されます。NO に設定すると、クエリー処理が終了し、適切なエラーがユーザーに返されます。

CLUSTER_PARTICIPANT

この構成ファイルを使用している Oracle Business Intelligence Server が、Oracle Business Intelligence Server クラスターのメンバーであるかどうかを指定します。

有効な値は YES および NO です。デフォルト値は NO です。

サーバーを Oracle Business Intelligence Server クラスターのメンバーにする場合は、パラメータ「[REPOSITORY_PUBLISHING_DIRECTORY](#)」(189 ページ) および「[REQUIRE_PUBLISHING_DIRECTORY](#)」(190 ページ) のコメントを解除して、有効な値を指定します。

CLUSTER_PARTICIPANT を YES に設定する場合は、サブディレクトリ OracleBI_HOME¥server¥Config に、このサーバー用に構成された有効な NQClusterConfig.INI ファイルが必要です。詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』の NQClusterConfig.INI ファイルの参照に関する項を参照してください。

例: CLUSTER_PARTICIPANT = YES;

REPOSITORY_PUBLISHING_DIRECTORY

CLUSTER_PARTICIPANT が YES に設定されている場合、REPOSITORY_PUBLISHING_DIRECTORY は、クラスター内のすべての Oracle Business Intelligence Server で共有するリポジトリの公開ディレクトリの場所を指定します。このパラメータにデフォルト値はありません。

リポジトリがオンライン・モードで更新されると、そのリポジトリがこの場所に公開されます。すべてのクラスター・サーバーは、起動時にこの場所を調べてリポジトリの変更を確認します。オンライン・モードで更新されるリポジトリがないと予測される場合でも、このパラメータには、クラスター内のすべてのサーバーから参照できる有効な場所を指定する必要があります。

ディレクトリは共有ファイル・システム上に存在する必要があります。有効な、完全修飾されたディレクトリのパス名を、二重引用符 (") で囲んで指定します。UNC とマップされたディレクトリの両方がサポートされます。リポジトリ公開ディレクトリの場所には、相対パス名、または Repository サブディレクトリ (Oracle BI ソフトウェアのインストール・ディレクトリにある) を指定しないでください。

この REPOSITORY_PUBLISHING_DIRECTORY パラメータは、クラスタ内のすべての Oracle Business Intelligence Server に必要です。オンラインでのリポジトリ変更用のマスター・サーバーとして指定されている Oracle Business Intelligence Server (NQClusterConfig.INI ファイルの MASTER_SERVER パラメータで指定) には、このディレクトリに対する読取りおよび書込み権限が必要です。クラスタを構成する Oracle Business Intelligence Server (NQClusterConfig.INI ファイルの SERVERS パラメータで指定) にも、このディレクトリに対する読取りおよび書込み権限が必要です。ドライブのマッピングの違いに応じて異なる名前を指定することは可能ですが、すべてのエントリは同じ実際のディレクトリを参照する必要があります。

例 :

```
REPOSITORY_PUBLISHING_DIRECTORY = "z:¥OracleBI¥Publish" ;  
REPOSITORY_PUBLISHING_DIRECTORY = "¥¥ClusterSrv¥Publish" ;
```

REQUIRE_PUBLISHING_DIRECTORY

CLUSTER_PARTICIPANT が YES に設定されている場合、REQUIRE_PUBLISHING_DIRECTORY は、この Oracle Business Intelligence Server を起動してクラスタに追加するために、リポジトリの公開ディレクトリ (パラメータ REPOSITORY_PUBLISHING_DIRECTORY で指定) が使用可能である必要があるかどうかを指定します。

このパラメータはデフォルトでコメント・アウトされています。

YES に設定すると、起動時に公開ディレクトリが使用できない場合や、サーバーがそのディレクトリのファイルを読み取っている際にエラーが発生した場合、NQServer.log ファイルにエラー・メッセージが記録されてサーバーは停止します。

公開ディレクトリが使用できない場合でも、この Oracle Business Intelligence Server を起動してクラスタに追加できるようにするには、この値を NO に設定します。NO に設定すると、サーバーがクラスタに追加されて、警告メッセージが NQServer.log ファイルに記録されます。オンラインでのリポジトリの更新は、このサーバーの Repository ディレクトリ (Oracle BI ソフトウェアのインストール・ディレクトリにある) には反映されません。これにより、リクエスト処理の失敗、誤った結果の返送など、様々な問題が発生する可能性があります。ただし、オンラインでのリポジトリ更新がほとんど行われられない場合、またはクラスタの使用が目的であり、一部のサーバーで古いリポジトリを使用していても問題にならない場合は、この設定が有効なこともあります。

例 : REQUIRE_PUBLISHING_DIRECTORY = YES;

DISCONNECTED

Oracle Business Intelligence Server を Oracle BI Disconnected Client の一部として稼働する場合は、DISCONNECTED パラメータを YES に設定する必要があります。デフォルトは NO です。

DISCONNECTED を YES に設定すると、Mobile Oracle Business Intelligence Server と同じマシン上で稼働している Mobile Client のみが、このサーバーに接続できるようになります。異なるマシン上で稼働する Mobile Client は、この DISCONNECTED Oracle BI Server に接続できません。

例 : DISCONNECTED = NO ;

AUTOMATIC_RESTART

クラッシュが発生した場合に、Oracle Business Intelligence Server を自動的に再起動するかどうかを指定します。自動再起動の設定は、Oracle Business Intelligence Server プラットフォームにのみ適用されます。クラスタ化された Oracle BI Server 環境、または Oracle BI Disconnected Server には適用されません。デフォルトは YES です。

例: AUTOMATIC_RESTART = YES ;

構成ファイルの Dynamic Library セクションのパラメータ

このセクションには、Oracle Business Intelligence Server への接続に使用する動的リンク・ライブラリ (DLL) ごとに 1 つ設定するエントリが含まれます。

構文: <logical_name> = <dynamic_library> ;

変数の説明

logical_name 動的リンク・ライブラリの論理名。これらの論理名は「Connection Pool」ダイアログにも表示されます。

dynamic_library 関連付けられている動的ライブラリの名前。これらは Oracle BI ソフトウェアのインストール・ディレクトリにある Bin サブディレクトリにあります。

警告: Oracle サポート・サービスから指示されている場合を除き、このセクションの設定は変更しないでください。

今回のリリースに付属する動的リンク・ライブラリは次のとおりです。

- ODBC200 = nqsdbgatewayodbc ;
- ODBC350 = nqsdbgatewayodbc35 ;
- OCI7 = nqsdbgatewayoci7 ;
- OCI8 = nqsdbgatewayoci8 ;
- OCI8i = nqsdbgatewayoci8i ;
- OCI10g = nqsdbgatewayoci10g ;
- DB2CLI = nqsdbgatewaydb2cli ;
- DB2CLI35 = nqsdbgatewaydb2cli35 ;
- NQSXML = nqsdbgatewayodbc ;
- XMLA = nqsdbgatewayodbc ;

注意: Siebel Analytics の以前のバージョンからアップグレードする場合は、詳細について Oracle サポート・サービスにお問い合わせください。

構成ファイルの User Log セクションのパラメータ

ユーザー・ログ・ファイル（NQQuery.log）は、NQServer.log ファイルとともに OracleBI_HOME¥server¥Log ディレクトリに格納されています。ユーザーに対して有効に設定されている場合、このログにはクエリーに関するアクティビティが記録されます。エントリは、テキスト・エディタまたは nQLogViewer 実行可能プログラムを使用して確認できます。

NQQuery.log ファイルの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』のクエリー環境の管理に関する章を参照してください。

注意： NQServer.log ファイルには、Oracle Business Intelligence Server に関するアクティビティが自動的に記録されます。これには、サーバー起動時のエラー、および、Status Max Time または Status Max Rows オプションが Warn に設定されている場合にタイムアウトの発生したクエリーや行制限を超えたクエリーなどの情報が含まれます。install.log ファイルには、インストールに関するアクティビティが自動的に記録されます。これらのログ・ファイルの内容は、Windows のメモ帳などのテキスト・エディタを使用して確認できます。

USER_LOG_FILE_SIZE

NQQuery.log ファイルの増大可能な最大サイズを指定します。デフォルトのサイズは 10MB です。この制限サイズに達すると、現在のログ・ファイルは閉じられて名前が NQQuery.log.old に変更され、新しく作成される NQQuery.log ファイルに対してロギングが再開されます。

例： USER_LOG_FILE_SIZE = 10 MB ;

CODE_PAGE

使用するコード・ページの種類を指定します。デフォルトは UTF8 です。その他、ANSI、1252 などの有効なコード・ページを含む値を使用できます。値は二重引用符で囲んで指定します。

例： CODE_PAGE = "UTF8" ;

構成ファイルの Usage Tracking セクションのパラメータ

Usage Tracking セクションのパラメータは、Oracle Business Intelligence Server に送信される論理クエリーごとの、使用状況トラッキング統計の収集に関するデフォルト値を定義します。

次の表に、使用状況トラッキング・テーブル、およびスタンドアロンの使用状況トラッキング・リポジトリに追加された列の名前と説明を示します。

名前	データ型	説明	注意
SAW_DASHBOARD_PG	Varchar(150)	Oracle BI Presentation Services のダッシュボード内のページ	ダッシュボード・リクエストでない場合は NULL。
PRESENTATION_NAME	Varchar(128)	Oracle BI Server 内のプレゼンテーション・カタログ	

名前	データ型	説明	注意
ERROR_TEXT	Varchar(250)	キャッシュ・エントリを生成しないクエリーに関する、バックエンド・データベースからのエラー・フラグおよび説明テキスト	SUCCESS_FLG が 0 以外の場合にのみ適用されます。複数のメッセージを連結するため、アプリケーションで列のコンテンツを解析する必要があります。
RUNAS_USER_NAME	Varchar(128)	代理となるユーザー（このクエリーを実行したプロキシ・ユーザー）	リクエストが代理ユーザーとして実行されない場合は NULL。

使用状況トラッキングの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』のクエリー環境の管理に関する章を参照してください。

ENABLE

使用状況トラッキング統計の収集を有効または無効にします。

有効な値は YES および NO です。デフォルト値は NO です。NO に設定すると統計は累積されません。YES に設定すると、論理クエリーごとに統計が累積されます。

例：ENABLE = NO ;

DIRECT_INSERT

統計をデータベース・テーブルに直接挿入するか、ローカル・ファイルに書き込むかを指定します。

- DIRECT_INSERT を NO に設定すると、データはフラット・ファイルに書き込まれます。
- DIRECT_INSERT を YES に設定すると、データはテーブルに挿入されます。

注意：このパラメータの設定は、ENABLE = YES の場合にのみ有効です。

データベース・テーブルに直接挿入することをお勧めします。デフォルト値は YES です。

DIRECT_INSERT を YES または NO に設定することによって有効になるパラメータがいくつかあります。193 ページの表 24 にこれらのパラメータをまとめます。各パラメータの詳細は、後述の説明を参照してください。

表 24. DIRECT_INSERT の各設定で有効なパラメータ

DIRECT_INSERT 設定	使用するパラメータ	パラメータの設定
NO	STORAGE_DIRECTORY	"< フル・ディレクトリ・パス >"
	CHECKPOINT_INTERVAL_MINUTES	5
	FILE_ROLLOVER_INTERVAL_MINUTES	30
	CODE_PAGE	"ANSI"

表 24. DIRECT_INSERT の各設定で有効なパラメータ

DIRECT_INSERT 設定	使用するパラメータ	パラメータの設定
YES	PHYSICAL_TABLE_NAME	"< データベース >". "< カタログ >". "< スキーマ >". "< テーブル >" または "< データベース >". "< スキーマ >". "< テーブル >"
	CONNECTION_POOL	"< データベース >". "< 接続プール >"
	BUFFER_SIZE	10MB
	BUFFER_TIME_LIMIT_SECONDS	5
	NUM_INSERT_THREADS	5
	MAX_INSERTS_PER_TRANSACTION	1

STORAGE_DIRECTORY

使用状況トラッキング・ログ・ファイルを格納するディレクトリのフル・パスを指定します。このパラメータには、有効な、完全修飾された書込み可能なディレクトリのパス名を、二重引用符 (") で囲んで指定する必要があります。マップされたディレクトリのみを指定します。UNC パス名やネットワークにマップされたドライブは、修飾されたユーザー・アカウントでサービスが実行される場合にのみ指定できます。サービスを実行するアカウントを変更するには、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』の対応する項を参照してください。

有効な値は、存在する、書込み可能なディレクトリの完全修飾されたパス名です。

パラメータ STORAGE_DIRECTORY は、DIRECT_INSERT が NO に設定されている場合にのみ有効です。使用状況トラッキングが有効で、ログ・ファイルを格納するディレクトリが指定されていない場合、ファイルはサブディレクトリ OracleBI_HOME¥server¥Log に書き込まれます。

例: STORAGE_DIRECTORY = "C:¥Temp¥UsageTracking" ;

CHECKPOINT_INTERVAL_MINUTES

使用状況トラッキング・データをディスクにフラッシュする頻度を指定します。フラッシュ間隔を長く設定すると、サーバーが異常終了した場合に失われる可能性のあるデータ量が多くなります。フラッシュ間隔を短く設定すると、オーバーヘッドが増加します。

デフォルトは 5 分です。

注意: 間隔を 0 に設定すると、Oracle Business Intelligence Server で使用状況トラッキング・データのディスクへの書込みが最小間隔で試行されるようになります。これによりサーバー・パフォーマンスが低下する可能性があるため、この値は設定しないことを強くお勧めします。

例: CHECKPOINT_INTERVAL_MINUTES = 5 ;

FILE_ROLLOVER_INTERVAL_MINUTES

現在の使用状況トラッキング・ログ・ファイルを閉じて、新しいファイルを作成する時間間隔を分単位で指定します。たとえば、エントリを 60 分に設定すると、毎日 24 の使用状況トラッキング・ログ・ファイルが作成されます。

デフォルトは 30 分です。

チェックポイント間隔がロールオーバー間隔と等しいかそれより大きい場合は、ロールオーバーのみが明示的に行われます。チェックポイントは、古い使用状況トラッキング・ログ・ファイルが閉じられた場合にのみ暗黙的に発生します。

注意： チェックポイント間隔を 0 に設定すると、Oracle Business Intelligence Server で、現在の使用状況トラッキング・ログ・ファイルを閉じて新しいログ・ファイルを開く操作が最小間隔で試行されるようになります。これによりサーバー・パフォーマンスが低下し、多数の使用状況トラッキング・ログ・ファイルが指定ディレクトリに格納される可能性があります。この間隔は 0 に設定しないことを強くお勧めします。

例： FILE_ROLLOVER_INTERVAL_MINUTES = 240;

CODE_PAGE

多言語リポジトリにおいて統計をディスクに書き込む際に使用する出力コード・ページの種類を指定します。パラメータの値には、有効なコード・ページ番号（1252 など）、およびグローバルに認識されている出力コード・ページの種類を指定できます。

デフォルト値は ANSI です。コード・ページの種類は使用するデータベース・ローダーによって異なります。たとえば、Oracle および DB2 で使用されるデータベース・ローダーの多言語リポジトリをサポートするには、UTF8 を指定します。値は二重引用符で囲んで指定します。現在、USC-2 はサポートされていません。

例： CODE_PAGE = "ANSI";

PHYSICAL_TABLE_NAME

クエリ統計に対応するレコードを挿入するテーブルを指定します。テーブルの名前には、Server Administration Tool の物理レイヤーに表示される完全修飾された名前を指定します。

このパラメータの一般的な構造は、使用するデータベースの種類によって異なります。

■ SQL Server データベースでは、次の一般的な構造を使用します。

```
PHYSICAL_TABLE_NAME = "< データベース >".< カタログ >".< スキーマ >".< テーブル >";
```

例：

```
PHYSICAL_TABLE_NAME = "OracleBI Usage"."Catalog"."dbo"."S_NQ_ACCT";
```

この例の構造は次のとおりです

- "Oracle BI Usage" はデータベース・コンポーネントを示しています。
- "Catalog" はカタログ・コンポーネントを示しています。
- "dbo" はスキーマ・コンポーネントを示しています。
- "S_NQ_ACCT" はテーブルの名前を示しています。

- Oracle データベースでは、次の一般的な構造を使用します。

```
PHYSICAL_TABLE_NAME = "< データベース >".< スキーマ >".< テーブル >" ;
```

例：

```
PHYSICAL_TABLE_NAME = "OracleBI Usage"."S_NQ_SCHED"."S_NQ_ACCT" ;
```

この例の構造は次のとおりです

- "Oracle BI Usage" はデータベース・コンポーネントを示しています。
- "S_NQ_SCHED" はスキーマ・コンポーネントを示しています。
- "S_NQ_ACCT" はテーブルの名前を示しています。

CONNECTION_POOL

使用状況トラッキング・テーブルへのレコードの挿入に使用する接続プールを指定します。このパラメータには、Server Administration Tool の物理レイヤーに表示される完全修飾された名前を指定します。

例：CONNECTION_POOL = "OracleBI Usage"."Connection Pool" ;

BUFFER_SIZE

挿入文を一時的に格納するために使用するメモリー量を指定します。バッファを使用することにより、挿入対象の統計を生成するクエリーとは無関係に、挿入文を使用状況トラッキング・テーブルに対して発行できます。バッファに空きがなくなると、挿入スレッドによってバッファ・エントリが処理されるまで、後続のクエリーの統計は破棄されます。

例：BUFFER_SIZE = 10 MB ;

BUFFER_TIME_LIMIT_SECONDS

使用状況トラッキング・テーブルに対して発行するまで挿入文をバッファに保持する最大時間を指定します。この時間制限により、Oracle Business Intelligence Server が長い期間休止している場合でも、挿入文が適時に発行されるようになります。

例：BUFFER_TIME_LIMIT_SECONDS = 5 ;

NUM_INSERT_THREADS

挿入文をバッファから削除して使用状況トラッキング・テーブルに発行するスレッド数を指定します。このスレッド数には、接続プールに割り当てたスレッドの合計数よりも大きい値を指定しないでください。

例：NUM_INSERT_THREADS = 5 ;

MAX_INSERTS_PER_TRANSACTION

使用状況トラッキング・テーブルに挿入する際に、単一のトランザクションとしてグループ化するレコードの数を指定します。この値を大きくすると、パフォーマンスがわずかに向上することもあります。データベースのデッドロックによって拒否される可能性のある挿入数も増加します。

例：MAX_INSERTS_PER_TRANSACTION = 1 ;

構成ファイルの Optimization Flags セクションのパラメータ

Optimization Flags セクションのパラメータは 1 つです。これは、特定の場合に Oracle Business Intelligence Server の動作を無効にする特殊なパラメータです。

STRONG_DATETIME_TYPE_CHECKING

このパラメータを使用すると、強い型チェックを緩めて、互換性のない一部の日付 / 時間データ型によってクエリが拒否されることを防止できます。たとえば、date/time op string-literal という形式のクエリには技術的に互換性のない日付 / 時間データ型が含まれており、通常は Oracle Business Intelligence Server によって拒否されます。

有効な値は ON および OFF です。デフォルト値は ON です。これは、強い型チェックが有効であり、互換性のない日付 / 時間データ型を含むクエリが拒否されることを示します。この設定をお勧めします。

強い型チェックを緩和するには、この値を NO に設定します。NO に設定しても、無効なクエリや重大な日付 / 時間の非互換が存在するクエリは拒否されることに注意してください。また、たとえばリレーショナル・データベースに同様の強い型チェックが導入されている場合も、クエリが拒否される可能性があります。

例: STRONG_DATETIME_TYPE_CHECKING = ON ;

構成ファイルの Cube Views セクションのパラメータ

Oracle Business Intelligence CubeViews Generator はデータベースの OLAP 機能を強化します。これにより、データベース内のデータの論理関係に関するメタデータをデータベースに格納し、そのデータベースに対して作成されるクエリを最適化できるようになります。CubeViews Generator は、リポジトリの論理レイヤーを解析し、テーブル・ソースを抽出して、メタデータを DB2 DBMS 用のキューブ・モデルに変換します。

注意: IBM DB2 Cube Views は IBM 社の登録商標です。

Cube Views オプティマイザによって、マテリアライズ照会表 (MQT) を作成するスクリプトが生成されます。この MQT により、クエリのパフォーマンスが向上します。CubeViews Generator は、Oracle BI 独自のメタデータを IBM DB2 Cube Views で使用できる XML フォーマットに変換する、メタデータ・ブリッジのような役割を果たします。

Oracle Database を使用する場合は、「[構成ファイルの Oracle Dimension Export セクションのパラメータ](#) (200 ページ) で説明しているように、Oracle Database Metadata Generator を使用してください。構成ファイルの Cube Views セクションは、この機能の次の初期値を設定します。

DISTINCT_COUNT_SUPPORTED

推奨される設定およびデフォルト値は NO です。YES に設定すると、DISTINCT_COUNT 集計を含む測定値がエクスポートされます。

例：

```
DISTINCT_COUNT_SUPPORTED = NO ;
```

STATISTICAL_FUNCTIONS_SUPPORTED

推奨される設定およびデフォルト値は NO です。YES に設定すると、集計 STDDEV を含む測定値がエクスポートされます。

USE_SCHEMA_NAME

デフォルト値は YES です。

YES に設定すると、Cube Views のメタデータ属性にある、スキーマ名を持つテーブルの列がパラメータに指定されます。NO に設定すると、これらのテーブルのスキーマ名は空になります。

USE_SCHEMA_NAME_FROM_RPD

デフォルト値は YES です。YES に設定すると、リポジトリで使用される同じ名前がテーブルのスキーマ名として使用されます。

DEFAULT_SCHEMA_NAME

次のいずれかに該当する場合、この名前がテーブルのスキーマ名として使用されます。

- リポジトリのスキーマ名を判断できない。
- USE_SCHEMA_NAME_FROM_RPD の値が NO に設定されている。

例：

```
"ORACLE" ;
```

CUBE_VIEWS_SCHEMA_NAME

このスキーマを使用して Cube Views メタデータが作成されます。

例：

```
"ORACLE" ;
```

LOG_FAILURES

YES に設定すると、特定のルールにおいて無効化されたメタデータの一覧がログ・ファイルに記録されます。デフォルト値は YES です。

LOG_SUCCESS

YES に設定すると、それぞれのルールのチェックが問題なく実行されたメタデータの一覧がログ・ファイルに記録されます。デフォルト値は NO です。

LOG_FILE_NAME

有効なパスを指定する必要があります。無効なパスを指定するとエラーがスローされます。

例：

```
LOG_FILE_NAME = "C:¥OracleBI¥server¥Log¥CubeViews.Log" ;
```

構成ファイルの MDX Member Name Cache セクションのパラメータ

これは、リポジトリ内の全 SAP/BW キューブのメンバーの一意名とキャプションをマップするキャッシュ・サブシステムです。

ENABLE

この機能が有効かどうかを指定します。

この機能は SAP/BW キューブにのみ適用されるため、デフォルトは NO です。

DATA_STORAGE_PATH

キャッシュを保持する場所のパスを指定します。指定できるパスは 1 つのみです。

エントリの最後の数字は記憶域の容量を示します。この機能を有効にする場合は、"<full directory path>" を有効なパスに置き換える必要があります。

例：DATA_STORAGE_PATH = "C:¥OracleBI¥server¥Data¥Temp¥Cache" 500 MB ;

MAX_SIZE_PER_USER

各ユーザーの使用可能な最大ディスク領域を指定します。

例：MAX_SIZE_PER_USER = 100 MB ;

MAX_MEMBER_PER_LEVEL

レベルごとの最大メンバー数をディスクに保持できます。

例：MAX_MEMBER_PER_LEVEL = 1000 ;

MAX_CACHE_SIZE

個々のキャッシュ・エントリ・サイズの最大サイズを指定します。

例：MAX_CACHE_SIZE = 100 MB ;

構成ファイルの Oracle Dimension Export セクションのパラメータ

Oracle Database Metadata Generator はデータベースの OLAP 機能を強化します。これにより、データベース内のデータの論理関係に関するメタデータをデータベースに格納し、そのデータベースに対して作成されるクエリを最適化できるようになります。Oracle Database Metadata Generator は、リポジトリの論理レイヤーを解析し、テーブル・ソースを抽出して、メタデータを Oracle Database のマテリアライズド・ビューに変換します。これにより、クエリのパフォーマンスが向上します。

構成ファイルの ORA_DIM_EXPORT セクションは、この機能の次の初期値を設定します。

Oracle Database Metadata Generator は、Oracle BI 独自のメタデータを Oracle マテリアライズド・ビューで使用できる SQL フォーマットに変換する、メタデータ・ブリッジのような役割を果たします。IBM DB2 データベースを使用する場合は、「[構成ファイルの Cube Views セクションのパラメータ](#)」(197 ページ) で説明しているように、Oracle Business Intelligence CubeViews Generator を使用してください。

USE_SCHEMA_NAME_FROM_RPD

デフォルト値は YES です。YES に設定すると、リポジトリで使用される同じ名前がテーブルのスキーマ名として使用されます。

DEFAULT_SCHEMA_NAME

次のいずれかに該当する場合、この名前がテーブルのスキーマ名として使用されます。

- リポジトリのスキーマ名を判断できない。
- USE_SCHEMA_NAME_FROM_RPD の値が NO に設定されている。

例：

```
"ORACLE" ;
```

ORA_DIM_SCHEMA_NAME

このスキーマを使用して Oracle Database Metadata Generator のメタデータが作成されます。

例：

```
"ORACLE" ;
```

LOGGING

メタデータのエクスポート処理のログを維持するかどうかを指定します。デフォルト値は ON です。その他の値として、OFF および DEBUG を指定できます。

LOG_FILE_NAME

有効なパスを指定する必要があります。無効なパスを指定するとエラーがスローされます。

例：

```
LOG_FILE_NAME = "C:¥OracleBI¥server¥Log¥OraDimExp.Log" ;
```


B

Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ

Oracle Business Intelligence は、適切な言語設定項目とロケール設定項目をユーザーが動的に変更できるように設計されています。この付録では、英語以外の 1 つ以上の言語に対応する環境にデプロイメントができるように、Oracle Business Intelligence を構成する方法について説明します。

複数の言語をサポートするためには、Oracle Business Intelligence Server を適切に設定する必要があります。NQSSConfig.INI ファイルの General セクションには、ローカライズと国際化を行うために必要なこれらのパラメータだけでなく、データが Oracle BI Server からクライアントに渡される方法を決めるために使用するその他のデフォルト・パラメータが格納されます。

次に示す各項では、すべてのインストール・タイプに対し、Oracle Business Intelligence Server のローカライズに必要なタスクについて説明します。

- 「Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ」 (203 ページ)
- 「Oracle BI チャート用 Unicode サポートの構成」 (205 ページ)
- 「Oracle BI 用ローライゼーション変数の変更」 (209 ページ)
- 「UNIX でのロケール・パラメータの設定」 (209 ページ)
- 「同一言語の表示のための Oracle BI と業務系アプリケーションの構成について」 (211 ページ)
- 「AIX で日本語ローライゼーションを行うための構成ファイル設定の変更」 (212 ページ)
- 「Oracle BI 用翻訳テーブルのメンテナンスのプロセス」 (213 ページ)

Oracle BI Server コンポーネントのローカライズ

Oracle Business Intelligence Presentation Services のユーザー・インタフェースは様々な言語で動作しますが、デフォルトのエラー・メッセージ言語は英語です。エラー・メッセージや警告メッセージは英語で表示されます。ローカライズされた Oracle BI Server メッセージ（エラー・メッセージ、警告メッセージおよび情報メッセージなど）を受信するためには、「[Windows での Oracle BI インストーラの実行](#)」（51 ページ）および「[UNIX での Oracle BI インストーラの実行](#)」（57 ページ）の説明に従って、プラットフォームのインストールを実行しているときに、「Error Message Language」画面でロケールを設定する必要があります。

ローカライズされたテーブルと列の名前を表示する主要な仕組みは、Externalize Metadata Strings です。ローカライズされるテーブルと列の名前を調べるには、「[ローカライゼーション用 Externalize Strings ユーティリティの使用](#)」（213 ページ）を参照してください。

ローカライズ対象となる Oracle BI コンポーネント

- Web インタフェース
- Oracle BI Presentation Services メッセージ
 - エラー
 - 警告
 - 情報
- Oracle BI Server 関数
 - DayName
 - MonthName

注意： DayName 関数や MonthName 関数を使用してクエリーが発行されたが、発行した関数がバックエンド・データベースに対応していない場合、ローカライズされた言語で日や月の名前が返されますが、列の名前は英語のままになります（または、その他のローカライズ制御の影響を受ける場合があります）。この状況の例として、LOCALE パラメータがドイツ語に設定されている場合、MonthName のクエリーでは Mai という文字列が返されますが、列のヘッダーは Name of Month のままになります。

- Oracle BI Server と Scheduler のメッセージ
 - エラー
 - 警告
 - 情報
- ログ・ファイル
 - Oracle BI Server 用 nQServer.log
 - Oracle BI Server 用 nqQuery.log
 - クラスタ化が有効にされている場合、Oracle BI Server Cluster 用 nQCluster.log

- メタデータ
 - Oracle BI Presentation Services ダッシュボードとレポート (Oracle BI Catalog)
 - Presentation テーブルと列の名前 (.rpd ファイル)
 - Informatica (ENU と JPN のロケールのみ)
- Disconnected Client インタフェース

ローカライズ対象外の Oracle BI コンポーネント

- Server Administration Tool インタフェース
- Scheduler Job Manager インタフェース
- ODBC クライアント・ツール
 - nqcmd (UNIX)
 - nQCmd.exe (Windows)
 - nQClient.exe (Windows)
- インストーラ
- ODBC 設定 ([「UNIX での Oracle BI の ODBC データソースの構成」](#) (112 ページ) を参照)

Oracle BI チャート用 Unicode サポートの構成

このプロセスは、[「Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ」](#) プロセスの一部です。

Oracle Business Intelligence 自体では、Unicode がサポートされています。ただし、サード・パーティ製品とプラットフォームによっては、Unicode が完全にサポートされない場合があります。たとえば、チャートを Oracle Business Intelligence Presentation Services で表示するチャート・イメージ・サーバーでは、東アジア系言語の文字は標準モードでは表示できません。アジア系言語の文字を Oracle BI Presentation Services チャートで表示する前に、いくつかのチャート・テンプレートを構成してフォントを変換する必要があります。

これらのタスクは次の各項で説明します。

- [「チャート・フォントの変換」](#) (205 ページ)
- [「チャート・イメージ・サーバーへの変換済フォントの追加」](#) (206 ページ)

チャート・フォントの変換

この項は、[「Oracle BI チャート用 Unicode サポートの構成」](#) プロセスの一部です。

このタスクでは、チャート・イメージ・サーバーで使用するために Unicode フォントを変換する方法について示します。チャート・サーバーの Font Converter 5.0 を使用して、適切な TrueType フォント (TTF) を Corda.fsd ファイルに変換します。

Corda Font Converter を使用してフォントを変換するには

- 1 CordaFontConverter.exe を実行します。

注意：このコンバータは、Windows では OracleBI_HOME¥Corda50¥bin フォルダにあります。

- 2 「Fonts」 ウィンドウで、変換するフォントを選択します。変換オプションを選択し、デフォルトの表示名のままにするか、独自の名前にします。

たとえば、Arial です。

注意：選択した表示名は、「[チャート・イメージ・サーバーへの変換済フォントの追加](#)」（206 ページ）のタスクで指定する表示名です。

- 3 「convert」 をクリックします。

変換処理は数分かかる場合があります。

- 4 「Exit」 をクリックします。

アジア系言語のフォントが表示されるように Web チャート・イメージ・サーバーを構成する処理を続行するには、「[チャート・イメージ・サーバーへの変換済フォントの追加](#)」（206 ページ）を参照してください。

チャート・イメージ・サーバーへの変換済フォントの追加

この項は、「[Oracle BI チャート用 Unicode サポートの構成](#)」プロセスの一部です。

この項では、フォントをチャート・イメージ・サーバーに追加する方法について示します。Oracle Business Intelligence のローカライズ済デプロイメントにおいてさらに別の変換済フォントでチャートを使用する場合、次のタスクを行う必要があります。

- 「[チャート・テンプレート・ファイルへのフォントの追加](#)」（206 ページ）
- 「[チャート・イメージ・サーバーへの変換済追加フォントの追加](#)」（207 ページ）

チャート・テンプレート・ファイルへのフォントの追加

Corda チャート・テンプレート（pcxml）ファイルでは、様々なチャート・タイプを記述します。これらのファイルではデフォルトで、フォント名は参照されませんが、フォントのサイズは参照されます。pcxml ファイルを編集して、「[チャート・フォントの変換](#)」（205 ページ）タスクで新たに変換したフォントを参照するようにします。pcxml ファイルの編集では任意のテキスト・エディタを使用できます。

Corda チャート・テンプレート・ファイルは、チャート・サーバーのファイルがある次の Windows ディレクトリにあります。

- OracleBI_HOME¥web¥app¥res¥s_oracle10¥popbin
- OracleBI_HOME¥web¥app¥res¥s_Siebel77¥PopBin

警告：pcxml ファイルを編集する前に、これらのディレクトリをバックアップします。

フォントをイメージ・サーバー・テンプレートに追加するには

- 1 pcxml ファイル（たとえば、pie.pcxml）をテキスト・エディタで開きます。
- 2 ファイルで、Font という単語を検索します。
- 3 フォントを変換する際に指定したフォントの表示名を追加します。

たとえば、Arial フォントを pie.pcxml に追加するには、Font という単語を検索します。

```
<Properties TransparentFill='True' BorderType='None' Font='Size:11; Style:Bold;'/>
```

フォント表示名属性を追加します。次の行のようになります。

```
<Properties TransparentFill='True' BorderType='None' Font='Name:Arial; Size:11; Style:Bold;'/>
```

- 4 pcxml ファイルを保存して閉じます。
注意：各 pcxml ファイルに対して、手順 1 ~ 4 を繰り返します。
- 5 変更内容を表示するには、Oracle BI Presentation Services と Oracle BI JavaHost サービスの停止と再起動を行います。

チャート・イメージ・サーバーへの変換済追加フォントの追加

ここでは、追加フォントをチャート処理のために有効にする方法について示します。

OracleBI_HOME\web\config\chartfontmapping.xml ファイルでは、指定したロケール用に選択したチャート・フォントの名前を指定します。このファイルの構造を次に示します。

```
<fontMapping name="[display name]">
  <choose>
    <when locale="en*"><font name="[font name]"/></when>
  </choose>
</fontMapping>
```

chartfontmapping.xml ファイルのパラメータは、次のように定義します。

- locale: 引用符で囲まれたロケール・コード（パラメータ「[LOCALE](#)」（173 ページ）の説明を参照）
- font name: 「Corda Font Converter を使用してフォントを変換するには」の手順で指定した名前
- fontMapping name: フォント・ファミリの表示名（たとえば、Arial）

次の例では、このファイルの使用方法を示します。

```
<fontMapping name="Arial">
  <choose>
    <when locale="en*"><font name="Helvetica"/></when>
  </choose>
</fontMapping>

<fontMapping name="Courier New">
  <choose>
    <when locale="en*"><font name="Courier"/></when>
  </choose>
</fontMapping>

<fontMapping name="Garamond">
  <choose>
    <when locale="en*"><font name="Lucida Bright"/></when>
  </choose>
</fontMapping>
```

ワイルド・カードを使用すると、複数の fontMapping name または locale を指定できます。次に例を示します。

```
<fontMapping name="*">
  <choose>
    <when locale="en*"><font name="Helvetica"/></when>
    <when locale="zh-tw"><font name="Albany WT TC"/></when>
    <when locale="zh*"><font name="Albany WT SC"/></when>
    <when locale="ja*"><font name="Albany WT J"/></when>
    <when locale="ko*"><font name="Albany WT K"/></when>
    <when locale="*"><font name="Albany WT"/></when>
  </choose>
</fontMapping>
```

前述の例では、任意の fontMapping name に対し、最初に記載された 5 つのロケールのいずれかにロケールが設定される場合、指定したフォントがデフォルトに設定されます。それ以外のロケールの場合、デフォルトのフォントは Albany WT になります。

特定のフォントを特定のロケールに対して指定する別の例を次に示します。

```
<fontMapping name="*">
  <choose>
    <when locale="en*"><font name="Helvetica"/></when>
    <when locale="ja"><font name="JPNFont"/></when>
    <when locale="*"><font name="Unicode"/></when>
  </choose>
</fontMapping>
```

次の手順では、chartfontmapping.xml を修正して、特定のロケール用に特定のチャート・フォントを追加する方法について説明します。

変換されたフォントをイメージ・サーバーに追加するには

- 1 テキスト・エディタまたは XML エディタで、chartfontmapping.xml ファイルを開きます。
- 2 前述の例で示すように、ロケール・コード、フォント名およびフォント・マッピング名を追加します。
- 3 chartfontmapping.xml ファイルを保存して閉じます。
- 4 変更内容を表示するには、Oracle BI Presentation Services と Oracle BI JavaHost サービスの停止と再起動を行います。

Oracle BI 用ローライゼーション変数の変更

このプロセスは、「[Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ](#)」プロセスの一部です。

次の各項では、Oracle Business Intelligence のローカライズ対象となる変数の変更方法について説明します。

- 「[UNIX でのロケール・パラメータの設定](#)」(209 ページ)
- 「[同一言語の表示のための Oracle BI と業務系アプリケーションの構成について](#)」(211 ページ)
- 「[AIX で日本語ローライゼーションを行うための構成ファイル設定の変更](#)」(212 ページ)

Oracle Business Intelligence を英語以外の 1 つ以上の言語でローカライズした場合、Oracle BI Presentation Catalog にあるこれらのローライゼーション変数も構成する必要があります。

- 詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』で、変数を使用して値をダッシュボードと iBot に表示する方法に関する項を参照してください。
- 詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』で、Presentation Catalog のキャプションをローカライズする方法に関する項を参照してください。

UNIX でのロケール・パラメータの設定

オペレーティング・システム: UNIX のみ

Oracle Business Intelligence のデプロイメントをローカライズする場合、この項は「[Oracle BI プロセスの構成](#)」プロセスの一部です。

UNIX システムで Oracle BI を正常に実行するには、オペレーティング・システムで、アプリケーションを実行する言語の適切なロケールを構成します。ロケールおよび言語に関する一部の設定は相互に関連があり、Oracle BI Server のデータのソート方法を決定します。次に示すパラメータの設定が連携して動作することを確認してください。

- LOCALE
- SORT_ORDER_LOCALE
- SORT_TYPE
- CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON

注意: すべてのロケール設定については、「[構成ファイルの General セクションのパラメータ](#)」(173 ページ) を参照してください。

表 25 に、プラットフォームに依存しない名前と、サポートされる各 UNIX プラットフォームに固有の名前の言語マッピングを示します。たとえば、Chinese-simplified は、HP-UX または Linux オペレーティング・システムでは設定 zh_CN.utf8 を使用します。

注意： zh_CN.utf8 および fr-FR-UTF-8 などの名前文字列はロケール・コンポーネントのプラットフォーム固有の名前であり、システム管理者がインストールする必要があります。NQSConfig.INI ファイルでは、chinese-simplified や french など、プラットフォームに依存しない名前を使用します（名前の大文字と小文字は区別されません）。

表 25. UNIX プラットフォームでの LOCALE 設定

ロケール（プラットフォームに依存しない名前）	言語コード	プラットフォームに依存する名前：		
		Solaris	AIX	HP-UX / Linux
Chinese-simplified	CHS	zh_CN.UTF-8	ZH_CN.UTF-8	zh_CN.utf8
Chinese-traditional	CHT	zh_TW.UTF-8	ZH_TW.UTF-8	zh_TW.utf8
Czech	CSY	cs_CZ.UTF-8	CS_CZ.UTF-8	cs_CZ.utf8
Danish	DAN	da_DK.UTF-8	DA_DK.UTF-8	da_DK.utf8
Dutch	NLD	nl_NL.UTF-8	NL_NL.UTF-8	nl_NL.utf8
English-USA	ENU	en_US.UTF-8	EN_US.UTF-8	en_US.utf8
Finnish	FIN	fi_FI.UTF-8	FI_FI.UTF-8	fi_FI.utf8
French	FRA	fr_FR.UTF-8	FR_FR.UTF-8	fr_FR.utf8
German	DEU	de_DE.UTF-8	DE_DE.UTF-8	de_DE.utf8
Italian	ITA	it_IT.UTF-8	IT_IT.UTF-8	it_IT.utf8
Japanese	JPN	ja_JP.UTF-8	JA_JP.UTF-8	ja_JP.utf8
Korean	KOR	ko_KR.UTF-8	KO_KR.UTF-8	ko_KR.utf8
Portuguese	PTB	pt_PT.UTF-8	PT_PT.UTF-8	pt_PT.utf8
Portuguese-Brazilian	PTG	pt_BR.UTF-8	PT_BR.UTF-8	pt_BR.utf8
Spanish	ESN	es_ES.UTF-8	ES_ES.UTF-8	es_ES.utf8
Swedish	SVE	sv_SE.UTF-8	SV_SE.UTF-8	sv_SE.utf8

サーバー起動時の C ランタイム・ロケールの値は、NQSConfig.INI ファイルの SORT_ORDER_LOCALE パラメータを使用して指定します。このパラメータは通常 Oracle BI Server によって設定されます。この設定を調整する必要がある場合は、次の手順を使用します。

UNIX で LOCALE パラメータを設定するには

- 1 Oracle Business Intelligence Server を停止します。
- 2 テキスト・エディタを使用して、NQSSConfig.INI ファイルを開きます。
NQSSConfig.INI ファイルは、フォルダ OracleBI_HOME/server/Config にあります。
- 3 General セクションで LOCALE および SORT_ORDER_LOCALE パラメータを設定し、210 ページの表 25 のロケール列に示しているプラットフォームに依存しない名前を入力します。
- 4 NQSSConfig.INI ファイルを保存して閉じます。
- 5 Oracle Business Intelligence Server を再起動します。

注意： Oracle Application Server を使用している組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお勧めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用している組織では、JConsole を使用することをお勧めします。詳細は、「Oracle Application Server のツールを使用した構成設定の更新」（100 ページ）を参照してください。

NLS ロケールがサポートされていないことを示すエラー・メッセージ

適切なロケールがインストールされていない場合、Oracle BI Server が起動せずに、NQSServer.log ファイルに次のエラーが出力されます。

```
[47013] NLS locale xxx is not supported by the operating system.
```

このエラー・メッセージにおいて xxx は、NQSSConfig.INI ファイルの SORT_ORDER_LOCALE パラメータで指定されたロケールを示します。このエラーの対処方法を次に示します。

- **UNIX** の場合：210 ページの表 25 に示す、要求された言語のロケールをインストールします。
- **Windows** の場合：「地域のオプション」ダイアログ・ボックスを使用して、対応する言語パックを追加します。

同一言語の表示のための Oracle BI と業務系アプリケーションの構成について

Oracle BI では、アプリケーションのユーザー・インタフェースで複数の言語がサポートされます。正常に言語を変更するには、ユーザーの操作介入が必要です。この操作介入は、Oracle BI Presentation Services のログオン・ページで言語を選択するか、ログオン後に「My Account」ページで言語を変更することにより行います。

統合された Oracle BI 実装で言語表示の一貫性を保つには、URL パラメータをプロファイル属性として定義する必要があります。これを実行すると、Oracle BI Presentation Services Dashboards とレポートの言語が動的に設定され、業務系アプリケーションの言語設定との一貫性が保たれます。

業務系アプリケーションではシンボリック URL を使用して、Oracle BI Dashboards とレポートを統合環境に組み込みます。Oracle BI Presentation Services の場合、Web ページがレンダリングする言語を URL パラメータの Lang で指定します。

Lang パラメータは、Oracle BI に接続する業務系アプリケーションで定義されたシンボリック URL に含めることができます。Lang パラメータはプロファイル属性として定義されますが、シンボリック URL は実行時に作成されると、値は LanguageCode プロファイル属性として設定されます。次の表に、Lang が含まれている、シンボリック URL パラメータ・アプレットにおけるパラメータ設定の例を示します。

たとえば、次の URL があるとします。

`http://<サーバー名>:<ポート番号>/analytics/saw.dll?Dashboard&Lang=fr`

前述の URL では、Oracle BI Presentation Services ログオン・ページがフランス語で表示されます。

表 26. シンボリック URL パラメータ・アプレットにおける設定の例

名前	種類	パス引数値	追加可否	順序番号
Cmd	定数	Go	Y	1
Path	定数	/shared/Sales/Pipeline/Overview/Top 10 Deals	Y	2
nQUser	コマンド	UseLoginId	Y	3
nQPassword	コマンド	UseLoginPassword	Y	4
PostRequest	コマンド	PostRequest	Y	5
Lang	プロファイル属性	LanguageCode	Y	6

AIX で日本語ローカライゼーションを行うための構成ファイル設定の変更

オペレーティング・システム：IBM AIX のみ

このプロセスは、「Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ」プロセスの一部です。

AIX プラットフォームの日本語ローカライゼーションでは、Oracle BI Server が起動しないことがあります。次の手順の実行が必要になる場合があります。

日本語ローカライゼーション用に構成設定を変更するには

- 1 ローカル JA_JP.UTF-8 がインストールされていることを確認します。インストールされていない場合は、インストールします。
- 2 NQConfig.INI ファイルを開いて、次のように変更します。
 - LOCALE = "Japanese";
 - SORT_ORDER_LOCALE = "Japanese";

注意：これらの設定では、大文字と小文字が区別されます。
- 3 NQConfig.INI ファイルを保存して閉じ、Oracle BI Server を再起動します。

関連項目

[「UNIX でのロケール・パラメータの設定」\(209 ページ\)](#)

[「Web Catalog 文字列の翻訳について」\(214 ページ\)](#)

Oracle BI 用翻訳テーブルのメンテナンスのプロセス

このプロセスは、「Oracle Business Intelligence デプロイメントのローカライズ」プロセスの一部です。

Oracle Business Intelligence Server Administration Tool のプレゼンテーション・レイヤーでは、任意の列名に対して複数の翻訳がサポートされています。Oracle Answers と連動するときやダッシュボードをレンダリングするとき、英語を話すユーザーとフランス語を話すユーザーは、それぞれのローカル言語でレポートに文字列を表示できます。たとえば、Oracle BI では翻訳が必要なアプリケーション文字列は、次の 2 種類あります。

■ メタデータ

メタデータ文字列は、Oracle BI が Oracle Business Intelligence リポジトリに作成したオブジェクトで、Subject Area、Metrics および Dimensions などがあります。デプロイメントに CRM アプリケーションが含まれている場合、ローカライゼーションを行うにはさらにタスクを行う必要があります。『Oracle Business Intelligence Applications Installation and Administration Guide』のローカライゼーションに関する項を参照してください。

■ Web Catalog

Web Catalog オブジェクトは、エンド・ユーザーが作成したオブジェクトで、Reports、Dashboards および Pages などがあります。Web Catalog 文字列の翻訳データは、OracleBIData_HOME¥web¥catalog ディレクトリに格納されます。これらの文字列にアクセスして翻訳データを変更する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

このプロセスには、Oracle Business Intelligence のスタンドアロン・デプロイメントを行うための次のタスクが含まれます。

■ 「ローカライゼーション用 Externalize Strings ユーティリティの使用」(213 ページ)

ローカライゼーション用 Externalize Strings ユーティリティの使用

このタスクは、「Oracle BI 用翻訳テーブルのメンテナンスのプロセス」の一部です。

Server Administration Tool の Externalize Strings ユーティリティは、主に翻訳担当者か Oracle Business Intelligence リポジトリ管理者が使用するものです。米国英語以外の言語を使用する場合、カタログ、テーブルおよび列の名前、さらに存在する場合は説明も、その言語で表示するには、Externalize Strings を使用する必要があります。

注意： Externalize Strings ユーティリティを使用する前に、翻訳担当者は Oracle サポート・サービスの Siebel 技術担当者にお問い合わせください。

Externalize Strings を使用して文字列翻訳プロセスを実行するには

- 1 Oracle BI Administration Tool を使用して、リポジトリ・ファイルを開きます。
- 2 リポジトリのプレゼンテーション・レイヤーで、「Catalog Folder」を右クリックします。
- 3 「Externalize Display Names」オプションと「Externalize Descriptions」オプションを選択します。
- 4 ツールバーから、「Tools」→「Utilities」→「Externalize Strings」を選択してから、「Execute」ボタンをクリックします。
- 5 左ペインで「Catalog Folders」をクリックします。
右ペインに、翻訳された値と元の文字列（名前）が表示されます。これらの翻訳された値はセッション変数に格納され、Oracle BI Presentation Services で使用されます。
- 6 「Save」ボタンをクリックして、文字列を適切なフォーマットで保存します。
- 7 「Close」ボタンをクリックしてユーティリティを終了します。

Web Catalog 文字列の翻訳について

この項では、Oracle BI デプロイメントのローカライズに関する追加情報について説明します。

Web Catalog オブジェクト（レポートやページの名前など）の翻訳データは、OracleBIData_HOME¥web¥catalog ディレクトリに格納されます。複数言語デプロイメント・モードでは、さらに別の Web Catalog オブジェクト（レポートや新規ダッシュボード・ページなど）を追加する場合、適切な翻訳データも追加する必要があります。Catalog Manager ツールを使用して、これらの翻訳データを追加します。このユーティリティを使用する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』を参照してください。

WEBLANGUAGE セッション変数について

この項では、Oracle BI デプロイメントのローカライズに関する追加情報について説明します。

WEBLANGUAGE セッション変数は、Oracle BI Presentation Services から Oracle BI Server に渡されます。統合された Oracle BI アプリケーション環境では、WEBLANGUAGE 変数の値によって、外部化された表示名に対応する LOCALE 変数の値が決定されます。

WEBLANGUAGE は、統合された Oracle BI アプリケーションにユーザーが最初にログオンしたときにユーザーのブラウザで使用されている言語に設定されます。たとえば、ブラウザ言語がフランス語であるユーザーが Answers に最初にログオンした場合、WEBLANGUAGE の値はフランス語で、メタデータはフランス語に翻訳されます。

Oracle Business Intelligence Infrastructure では、ユーザーがログオン・ウィンドウで言語を選択することによって WEBLANGUAGE が設定されます。最初のログオン後は、Oracle BI Presentation Services の「My Account」ページで WEBLANGUAGE をリセットまたは変更します。

索引

A

AIX

日本語ローカライゼーションのための構成設定の変更 212

B

Briefing Book Reader

概要 75

C

Cube Views セクションのパラメータ (NQSCONFIG.INI ファイル)

Cube Views のパラメータ、概要 197
CUBE_VIEWS_SCHEMA_NAME 198
DEFAULT_SCHEMA_NAME 198
DISTINCT_COUNT_SUPPORTED 198
LOG_FAILURES 198
LOG_FILE_NAME 199
LOG_SUCCESS 199
STATISTICAL_FUNCTIONS_SUPPORTED 198
USE_SCHEMA_NAME 198
USE_SCHEMA_NAME_FROM_RPD 198

D

DDL

Dynamic Library セクションのパラメータ、概要 191

Disconnected Client

概要 147
サイレント・モード、実行 74

Dynamic Library セクション (NQSCONFIG.INI ファイル)

パラメータ、概要 191

G

General セクションのパラメータ (NQSCONFIG.INI ファイル)

AGGREGATE_PREFIX 180
CASE_SENSITIVE_CHARACTER_COMPARISON 175
DATE_DISPLAY_FORMAT 176
DATE_TIME_DISPLAY_FORMAT 176
LOCALE 173
NULL_VALUES_SORT_FIRST 176

SORT_BUFFER_INCREMENT_SIZE 177
SORT_MEMORY_SIZE 177
SORT_ORDER_LOCALE 173
SORT_TYPE 174
TIME_DISPLAY_FORMAT 176
UNIX での SORT_ORDER_LOCALE 174
UPPERCASE_USERNAME_FOR_INITBLOCK 179
VIRTUAL_TABLE_PAGE_SIZE 178
WORK_DIRECTORY_PATHS 177
概要 173

H

HP-UX

Oracle クライアント、構成 115
インストールの前提条件 45

I

IBM AIX

32 ビット版 Oracle BI 46
64 ビット版 Oracle BI 47
環境変数について 46

IBM DB2

Connect、UNIX 用のクエリーの構成 117

IIS (Web サーバー)

Oracle BI のデプロイ 28

instanceconfig.xml

構成 99

ISAPI Web 拡張機能、構成 126

ISAPI Web 拡張機能、使用 121, 122

J

J2EE アプリケーション・サーバー

Oracle BI のデプロイ 28

L

Linux

Korn、Bourne および bash シェル・スクリプト 88, 89
Oracle BI のスクリプト 88, 89
インストールの前提条件 47
データベース設定スクリプト、検出 107

M

MDAC

「Microsoft Data Access Components」を参照
MDX Member Name Cache セクションのパラメータ (NQConfig.INI ファイル)

DATA_STORAGE_PATH 199
 ENABLE 199
 MAX_MEMBER_PER_LEVEL 199
 MAX_SIZE_PER_USER 199

Microsoft Data Access Components

Windows、インストール 39

N

NQClusterConfig.INI ファイル

SSL_CA_CERTIFICATE_DIR 182
 SSL_CA_CERTIFICATE_FILE 182
 SSL_CERT_VERIFICATION_DEPTH 182
 SSL_CERTIFICATE_FILE 181
 SSL_CIPHER_LIST 182
 SSL_PK_PASSPHRASE_FILE 181
 SSL_PK_PASSPHRASE_PROGRAM 181
 SSL_PRIVATE_KEY_FILE 181
 SSL_TRUSTED_PEER_DNS 182
 SSL_VERIFY_PEER 181

NQConfig.INI

構成 100

NQConfig.INI ファイル

Cube Views セクションのパラメータ 197
 Dynamic Library セクションのパラメータ 191
 General セクション、概要 173
 Optimization Flags セクションのパラメータ 197
 Query Result Cache セクション、パラメータ 168
 Repository セクション、パラメータ 168
 Security セクション、パラメータ 180
 SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES 187
 Server セクションのパラメータ 183
 SIZE パラメータ、パフォーマンスへの影響 178
 Usage Tracking セクションのパラメータ 192
 User Log セクションのパラメータ 192
 概要 166
 構成ファイルのパラメータのエントリ、変更 166
 構成ファイルのパラメータのエントリ、ルール 166
 コメント、追加 167
 パラメータと構文、概要 167
 ルールの解析 166

O

ODBC データソース

UNIX での構成 112

Optimization Flags セクションのパラメータ

(NQConfig.INI ファイル)

STRONG_DATETIME_TYPE_CHECKING 197
 パラメータ、概要 197

Oracle Application Server

Oracle BI のデプロイ 27

Oracle BI

Oracle Application Server へのデプロイ 27
 サイレント・モード、実行 65
 その他の Web サーバーへのデプロイ 28

Oracle BI Disconnected Client

インストール 71
 追加の構成要件 71

Oracle BI Office Plug-In

インストール 77

Oracle BI Open Intelligence Interface

インストール 78

Oracle BI Presentation Services

Web Application Archive ファイル、Web サーバーへのデプロイ 125
 構成について 99

Oracle BI Publisher

構成 148

Oracle BI Publisher Desktop

インストール 81

Oracle BI Server

Linux、起動または再起動 91
 UNIX、起動または再起動 91
 Windows、起動または再起動 87
 Windows、停止 87
 構成について 100

Oracle BI、アンインストール 82

UNIX OS 84

Windows OS 84

ファイルのバックアップ 82

Oracle BI インストーラ

Windows での実行 51
 インストール・タイプの選択 26
 設定タイプ 50

Oracle BI、構成

Oracle BI プロセスの起動 86
 Oracle BI プロセスの再起動 86
 Oracle BI プロセスの停止 86

Oracle BI のインストール・ウィザード

インストール・プロンプト、UNIX グラフィック・モード 58
 インストール・プロンプト、UNIX コンソール・モード 58, 61
 インストール・プロンプト、Windows グラフィック・モード 52
 インストール・プロンプト、Windows コンソール・モード 56

Oracle BI のインストール・タイプ

Advanced 27

Basic 26

Oracle BI プラットフォーム、アンインストール
30, 82

Oracle Business Intelligence Infrastructure
概要 22

Oracle Business Intelligence インストーラ
コンポーネントのインストール・オプション 22

Oracle Dimension Export セクションのパラメータ (NQSConfig.INI ファイル)
DEFAULT_SCHEMA_NAME 200
LOG_FILE_NAME 201
LOGGING 200
MAX_CACHE_SIZE 199
ORA_DIM_SCHEMA_NAME 200
USE_SCHEMA_NAME_FROM_RPD 200

ORACLE_HOME 変数、Solaris 用の設定 114

OracleBI Scheduler のスクリプト
UNIX インストールの前提条件 44

OracleBI Server
Oracle データベース、設定 114

OracleBI、構成
データベース接続プール、変更 111

OracleBI リポジトリ
データベース接続プール、変更 111

Oracle クライアント
HP-UX 構成 115

Oracle データベース
OracleBI Server、設定 114
Windows、データベースとテーブルの作成 134

Q

Query Result Cache セクションのパラメータ (NQSConfig.INI ファイル) 168
CACHE_POLL_SECONDS 172
CLUSTER_AWARE_CACHE_LOGGING 172
DATA_STORAGE_PATHS 169
ENABLE 169
GLOBAL_CACHE_STORAGE_PATH 172
MAX_CACHE_ENTRIES 170
MAX_CACHE_ENTRY_SIZE 170
MAX_GLOBAL_CACHE_ENTRIES 172
MAX_ROWS_PER_CACHE_ENTRY 170
MAX_SUBEXPR_SEARCH_DEPTH 172
POPULATE_AGGREGATE_ROLLUP_HITS 170
USE_ADVANCED_HIT_DETECTION 171

R

Repository セクションのパラメータ (NQSConfig.INI ファイル)
概要 168

S

Scheduler
Scheduler テーブル、データベース・サポートの

概要 132
データベースとテーブルの作成 134

Scheduler テーブル

概要 132
作成するデータベースとテーブル 134

Security セクションのパラメータ (NQSConfig.INI ファイル)

AUTHENTICATION_TYPE 182
DEFAULT_PRIVILEGES 180
MINIMUM_PASSWORD_LENGTH 180
PROJECT_INACCESSIBLE_COLUMN_AS_NULL 180
SSL 181
SSL_CA_CERTIFICATE_DIR 182
SSL_CA_CERTIFICATE_FILE 182
SSL_CERT_VERIFICATION_DEPTH 182
SSL_CERTIFICATE_FILE 181
SSL_CIPHER_LIST 182
SSL_PK_PASSPHRASE_FILE 181
SSL_PK_PASSPHRASE_PROGRAM 181
SSL_PRIVATE_KEY_FILE 181
SSL_TRUSTED_PEER_DNS 182
SSL_VERIFY_PEER 181
パラメータ、概要 180

Server セクションのパラメータ (NQSConfig.INI ファイル)

AUTOMATIC_RESTART 191
CLIENT_MGMT_THREADS_MAX 186
CLUSTER_PARTICIPANT 189
DB_GATEWAY_THREAD_RANGE 185
DB_GATEWAY_THREAD_STACK_SIZE 185
DISCONNECTED 190
ENABLE_DB_HINTS 189
INIT_BLOCK_CACHE_ENTRIES 186
MAX_DRILLDOWN_INFO_CACHE_ENTRIES 186
MAX_DRILLDOWN_QUERY_CACHE_ENTRIES 186
MAX_EXPANDED_SUBQUERY_PREDICATES 186
MAX_QUERY_PLAN_CACHE_ENTRIES 186
MAX_REQUEST_PER_SESSION_LIMIT 184
MAX_SESSION_LIMIT 184
PREVENT_DIVIDE_BY_ZERO 189
REPOSITORY_PUBLISHING_DIRECTORY 189
REQUIRE_PUBLISHING_DIRECTORY 190
RPC_SERVICE_OR_PORT 187
SERVER_HOSTNAME_OR_IP_ADDRESSES 187
SERVER_NAME 183
SERVER_THREAD_RANGE 185
SERVER_THREAD_STACK_SIZE 185
パラメータ、概要 183

SIZE パラメータ (NQConfig.INI ファイル)

USE_LONG_DAY_NAMES 179
 USE_LONG_MONTH_NAMES 179
 パフォーマンス 178

Solaris

ORACLE_HOME 変数設定 114
 インストールの前提条件 45

U**UNIX**

HP-UX、インストールの前提条件 45
 HP-UX プラットフォーム、Oracle クライアントでの構成 115
 IBM AIX、32 ビット版 Oracle BI 46
 IBM AIX、64 ビット版 Oracle BI 47
 IBM AIX、環境変数について 46
 ODBC データソース、構成 112
 Oracle BI のスクリプト 88
 ORACLE_HOME 変数、Solaris 用の設定 114
 Oracle データベース、OracleBI Server の設定 114
 Solaris、インストールの前提条件 45
 SORT_ORDER_LOCALE パラメータ 209
 SORT_ORDER_LOCALE パラメータ (NQConfig.INI ファイル) 174
 Web サーバーの一時ディレクトリ、サブレット・コンテナ用の設定 126
 インストールの前提条件 41
 クエリー用の IBM DB2 Connect、構成 117
 シェル・スクリプト 88
 ネイティブ・データベース、行数の更新について 120

Usage Tracking セクションのパラメータ (NQConfig.INI ファイル)

BUFFER_SIZE 196
 BUFFER_TIME_LIMIT_SECONDS 196
 CHECKPOINT_INTERVAL_MINUTES 194
 CODE_PAGE 195
 CONNECTION_POOL 196
 DIRECT_INSERT 193
 ENABLE 193
 FILE_ROLLOVER_INTERVAL_MINUTES 195
 MAX_INSERTS_PER_TRANSACTION 196
 NUM_INSERT_THREADS 196
 PHYSICAL_TABLE_NAME 195
 STORAGE_DIRECTORY 194
 パラメータ、概要 192

User Log セクションのパラメータ**(NQConfig.INI ファイル)**

CODE_PAGE 192
 USER_LOG_FILE_SIZE 192
 パラメータ、概要 192

W**Web Application Archive ファイル、デプロイ**

125

WebArchive ファイルのデプロイ

125

Web サーバー

一時ディレクトリ、サブレット・コンテナ用の設定 126

Windows

Microsoft Data Access Components、インスト
 トール 39
 Oracle データベース、データベースとテーブルの
 作成 134
 Scheduler テーブル、概要 132
 Scheduler、データベース・サポートの概要
 132
 リレーショナル・データベース、データベースと
 テーブルの作成 134

あ**アンインストール**

Oracle BI 82
 ファイルのバックアップ 82
 『Oracle Business Intelligence Infrastructure
 アップグレード・ガイド』を参照

インストーラ

Windows での実行 51

インストール

計画するためのロードマップ 31
 権限の取得 34
 サード・パーティ・ソフトウェア 35
 要件、決定 34

インストール・タイプ

Oracle BI インストーラでの意味 26

インストールの前提条件

Linux 47

か**行数**

ネイティブ・データベース、更新について 120

構成

計画するためのロードマップ 31

さ**サイレント・モード**

Disconnected Client の実行 74
 Oracle BI の実行 65

新規の構成、更新**スクリプト**

Korn、Bourne および bash シェル・スクリ
 プト 88, 89
 シェル・スクリプト 88

- た**
データベース
データベース接続プール、変更 111
ドキュメント、追加、リスト 20
- は**
フォント
チャート・イメージ・サーバー、変換されたフォントの追加 206
- ら**
リポジトリ
Oracle BI プロセス、起動 86
Oracle BI プロセス、再起動 86
Oracle BI プロセス、停止 86
- リレーショナル・データベース**
データベースとテーブル、作成 134
- ローカライゼーション**
UNIX での SORT_ORDER_LOCALE 設定 209
日本語のための構成設定の変更 212
- ローカライゼーション・パック**
AIX での日本語ローカライゼーション、構成設定の変更 212

